

やってみる、たちどまる、そしてまたはじめる

小金井アートフル・アクション！(小金井市芸術文化振興計画推進事業) 2009-2017 活動記録

- i モノとコトをつくる
- ii 街のなかに、外に出て行くこと、街のなかのきざしをつかむ
- iii コトを育む人、場が生まれてコトが生まれる、こと



やってみる、たちどまる、そしてまたはじめる

小金井アートフル・アクション！(小金井市芸術文化振興計画推進事業) 2009-2017 活動記録

ARTS
COUNCIL
TOKYO



やってみる、

たちどまる、

そしてまたはじめる

小金井アートフル・アクション！(小金井市芸術文化振興計画推進事業) 2009-2017 活動記録

はじめに

小金井市芸術文化振興計画とは

小金井市では、二〇〇八年度に小金井市芸術文化振興条例を制定しました。その条例の目的をふまえた最初の計画となるのが、小金井市芸術文化振興計画（小金井アートフル・アクション！）です。この計画では、計画期間の一〇年間の理念として、「誰もが芸術文化を楽しめるまちへ、芸術文化の振興で人とまちを豊かに」を掲げています。さまざまなライフスタイルをもつ市民の方々の誰もが望めば芸術文化を楽しむことができるような機会・環境の整備を通して、市民一人ひとりが芸術文化によって心を豊かにできること、それが地域に波及してまち全体を元気あるものとしていくこと、そうした地域の活性化がまた市民に還元されて個々の暮らしも豊かになること、そのような芸術文化の振興をめざしています。

計画の期間

本計画は、平成二二（二〇〇九）年四月から一〇年間かけ、計画期間を大きく三つに分けて実施します。

第一期：市民による実施主体立ち上げの準備

平成二二（二〇〇九）―平成二三（二〇一〇）年度・一―三年目

第二期：市民主体の推進体制開始

平成二四（二〇一〇）―平成二六（二〇一四）年度・四―六年目

第三期：次の一〇年間の計画を市民と市の協働で検討

平成二七（二〇一五）―平成三〇（二〇一八）年度・七―一〇年目

計画の内容

この事業では市民が芸術文化活動へ参加することで、地域や芸術文化そのものへの新たな見方を発見していくことをテーマとして掲げています。芸術文化との出会いは時として非日常的な経験となり、日常生活において固定化しがちな価値観やものの見方へ変化をもたらすきっかけを与えます。事業を通じて市民が芸術文化活動に出会い、市民一人ひとりが日常生活において地域の新たな見方を発見していくことは、まち全体の魅力を発見していくことへもつながっていくと考えます。また、計画の理念では

「誰もが芸術文化を楽しめるまちへ」を掲げ、「すべての人が芸術文化に出会う機会をつくること」を目指す姿としていますが、小金井市の現状では課題も存在し、理念を具現化するためには、芸術文化そのものの価値や魅力を発見する機会が必要となります。芸術文化活動へ参加したことがある人もない人も、事業を通じて芸術文化そのものへ新たな見方を発見していくことは、これまでの活動を見直すことや新たな楽しみ方を見つけていくことへつながります。このようにテーマは事業全体の目指す方向性を示し、事業を通じて計画の理念をより具体的に実現していくために設定されています。

この事業は次の三つの事業で構成されています。また、三つの事業を推し進めていくための施策を体系図に示します。

事業一：市民とアーティストが協働した作品の制作

事業二：芸術文化と市民をつなぐ機会の整備

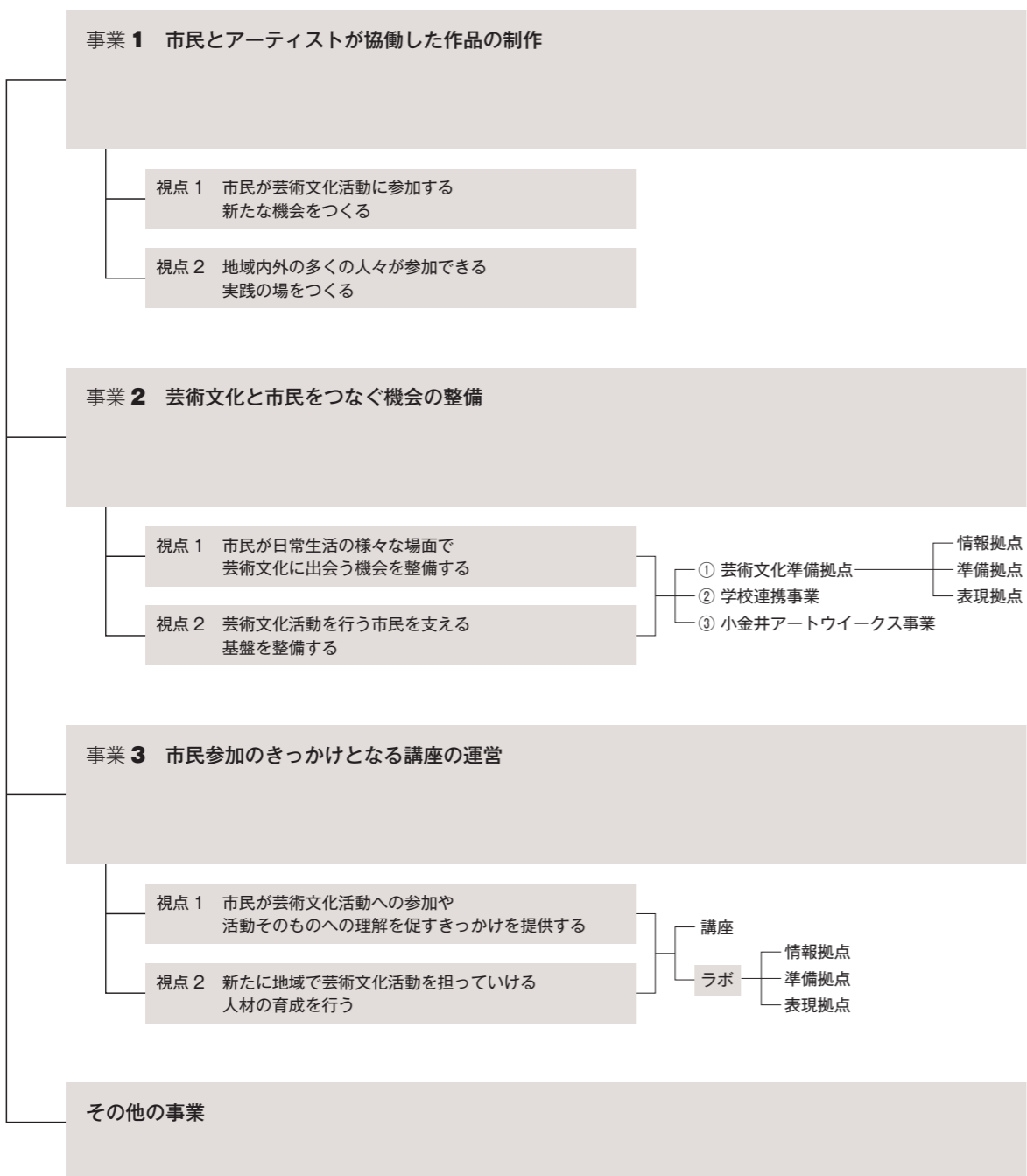
事業三：市民参加のきっかけとなる講座の運営

実施主体

計画では、市の芸術文化振興を考える市民が担い手としての力をつけ、小金井市の芸術文化振興を推進していく実施主体となっていくことも位置付けられています。また、市民だけでなく、小金井市全体の芸術文化振興を進めていくためには、市内外のさまざまなネットワークを活かすことで多様性を高めることが重要です。そのため、市民主体の芸術文化振興を基本としながら、ゆるやかに隣接大学、NPO、企業、福祉施設等のみならずと協働しながら継続的に事業を進めています。

また、平成二三年度からは東京都、アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）と共催した「東京アートポイント計画」の一環としても事業を実施しています。

小金井市芸術文化振興計画：
<https://www.city.koganei.jp/kankobunka/453/geijyubunkasinkou/geijyubunkasinkouchakaku.files/sinko-kekakupdf>



計画の進捗

	第1期： 市民による実施主体立ち上げの準備 (2009年度から2011年度)			第2期： 市民主体の推進体制開始 (2012年度から2014年度)			第3期： 次の10年間の計画を市民と市の協働で検討 (2015年度から2018年度)		
年度	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017
事業1 市民とアーティストが協働した作品の制作		○アーティスト招聘事業 ・ニューカマーズ・ヴュー 2011 a: 岩井成昭 ・ほうほう堂@小金井 a: ほうほう堂 ・植物になった白線 a: 浅井裕介	○アーティスト招聘事業 ・ニューカマーズ・ヴュー 2012 a: 岩井成昭 ・ほうほう堂@小金井 a: ほうほう堂 ・植物になった白線 a: 浅井裕介	○アーティスト招聘事業 ・ニューカマーズ・ヴュー 2013 a: 岩井成昭 ○保育園アートプロジェクト ・さくら保育園 さくら保育園卒園記念壁画制作 a: RIE	○保育園アートプロジェクト ・さくら保育園卒園制作 こどもたちの作る宇宙 a: 中島崇 ・くりのみ保育園 魔界アドベンチャー劇場～魔物を退治して宝をgetせよ! a: 藤塚陽子+学習懇談会	○保育園アートプロジェクト ・わかたけ保育園 わかたけこどもミュージアム a: 武政朋子 ・小金井保育園 小金井保育園卒園記念壁画制作 a: 井上ヤスミチ ・さくら保育園 親子で描く子どもの等身大の姿(フォローアッププログラム) 小金井市立さくら保育園/父母会役員会	○保育園アートプロジェクト ・けやき保育園 けやきまつりプロジェクト a: 亀田奈美子他 ・さくら保育園 親子で描くみんなの手(フォローアッププログラム) 小金井市立さくら保育園/父母会役員会	・愛の園保育園 ぼくの、わたしの、「あきのようにせいで」みつけたい! a: 松村拓海他	・Hi-Blood Pressure展 キュレーター: Karol Kaczorowski (カロール・カチョロフスキ)
事業2 芸術文化と市民をつなぐ機会の整備	○芸術文化拠点事業 ・空っぽオープニング ○学校連携事業 ・今、子ども達にとって必要な文化環境とは? 小金井アートフル・アクション! 実行委員会主催 ○アートウィークス事業 ・小金井アートフル・ジャック!	○アートウィークス事業 ・初冬のシャトー ・アートフル・ジャック! レディース・アンド・ジェントルメン	○アートウィークス事業 ・アートむすび@小金井	○学校連携事業 ・本町小学校 ドキュメンツ/カメラと箸と雑巾と a: 岩井優 ・南小学校 植物になった白線@南小学校 a: 浅井裕介	○学校連携事業 ・本町小学校 いっぽんみちをあるいていたら a: 多田淳之介 ・前原小学校 森を動かす——困難なもの、固いものに向き合う a: 菅野麻衣子	○学校連携事業 ・本町小学校 ドラマチック図工時間 a: 藤塚陽子、澤和幸、松村拓海 ・前原小学校 野川フィールドミュージアム(学校創設50周年事業)	○学校連携事業 ・本町小学校 本町写し絵劇場 結城座他 ・前原小学校+第四小学校 音の贈りもの	○学校連携事業 ・第四小学校 草や布をねじる、組む、そして空間を編む a: 下中菜穂 ・前原小学校 前原たてもの園をつくらう! ・本町小学校 六年生のわたし本町小自画像展 a: いちむらみさこ	○学校連携事業 ・第四小学校 見ないでおぼえましょう a: アーサー・ファン ・緑小学校 森の中に風景をつくる ・本町小学校 想起の遠足 本町小学校編 a: アサダワタル
事業3 市民参加のきっかけとなる講座の運営	○講座 ・月例リレートーク ○地域ラボ ・みんなが見つけたまちのドキドキやわくわくをマップにしよう! ・まちの宝物を探そう! —フィールドミュージアムをめざして、マップを作ろう— ○発信ラボ ・メディアラボ【編集デザイン編】 / 【映像編】 ○歴史ラボ ・現代美術の流れを知る ○表現ラボ ・アートで「からだ」と自然をつなぐインプロ・ダンス ワークショップ ・映画フィルムの魅力、発見・再見! ・小金井に咲く100人の初恋	○講座 ・月例リレートーク ○地域ラボ・発信ラボ ・小金井110人のストーリー		○講座 ・市民による現代アート入門講座 全6回 ・あたりまえを描き直すところみ展	・コミュニティとアートプロジェクト 相互の成長につなげるためのスパイラル講座(アートプロジェクトの現場から文化政策の課題解決に向けて)	・地域プロジェクトのしくみ研究会 全4回	・小金井と私 秘かな表現 a: アサダワタル	・小金井と私 秘かな表現 想起のボタン a: アサダワタル	・小金井と私 秘かな表現 想起の遠足 a: アサダワタル ・まちはみんなのミュージアム かがわ工房編 トークゲスト: 渡邊知樹
その他の事業			・芸術文化振興のための基盤づくり		・市制施行55周年事業 コガネイの地上絵 ・多摩島しょ子ども体験塾 5市共同事業 タマのカーニバル				

※ a: は参加アーティストを示す。

報告書の構成

本報告書は、計画目標の実現に向けて事業実施を担ったNPOが、多くの活動に参加してくださった市民のみなさん、学校の授業での活動に参加した子どもたち、担当してくださった先生方、アーティストとともに、この活動がどのようなものであったかを振り返りつつ作成したものです。

行政の計画の実現は、ともすると目標へ向かって敷かれたレールに乗って規則正しく階段を登り、想定されたゴールに至ることが成果であると考えられる傾向にあります。しかし、この計画の対象となっている市民のみなさんの日々の営みは、定規で引かれた線の上を同じピッチで行軍するようなものではありません。一人ひとりの暮らしの中の喜びや悲しみ、さまざまな出来事によって、多様に豊かに営まれているものです。そのみなさんの営みに沿いながら、トップダウンではなく、関わる人たちに新たな対話が育まれる

ことを目指して繰り返し広げられた活動の多様さを可能な限りお伝えすることを目指しています。したがって、一つの活動を一つの価値に縛られないように参加した人たちの多様な声を並置し、多面的に見ることができるよう構成しています。

本文中、過去の報告書や事業実施時のブログやツイッター、各事業の振り返りの会の記録などから活動の躍動感や時には混迷を伝えるものを掲載しています。これらについては、再掲であることや出典を明記しています。掲載しているインタビュは、概ね二〇一七年九月から二〇一八年三月に行いました。また、煩雑さをさけるため、NPO法人アートフル・アクションをAAと記載している部分があります。特に断りのない場合、インタビュはNPOスタッフの宮下が行いました。

目次

はじめに

001 計画の体系図

002 計画の進捗

008 i モノとコトをつくる——小学校の活動を例にしながら

1 物語と出会う、自分の物語をつくる

010 いっぱんみちをあるいていたら

本町小学校二二〇一三年度

015 森を動かす——困難なもの、固いものに向き合う

前原小学校二二〇一三年度

020 本町写し絵劇場

本町小学校二二〇一五年度

2 フィールドと交感する

029 野川フィールドミュージアム

前原小学校二二〇一四年度

032 草や布をねじる、組む、そして空間を編む

第四小学校二二〇一六年度

038 見ないでおぼえましょう

第四小学校二二〇一七年度

042 森の中に風景をつくる

緑小学校二二〇一七年度

046 想起の遠足本町小学校編

本町小学校二二〇一七年度

3 モノとコトをつくる

051 植物になった白線@本町小学校

本町小学校二二〇一一年度

053 植物になった白線@南小学校

南小学校二二〇一二年度

053 音の贈りもの

前原小学校+第四小学校二二〇一五年度

058 前原たてもの園をつくらう！

前原小学校二二〇一六年度

064 ドキュメント／カメラと箒と雑巾と

本町小学校二二〇一二年度

066 ドラマチック図工時間

本町小学校二二〇一四年度

❖関係者インタビュー

014 日下美和

022 相澤陽子

043 鈴木容子

052 鈴木佳子

058 西村德行

062 井上麻衣子

063 河野路

070 菊地順子

074 日下美和

4 みること、描くこと

069 六年生のわたし本町小自画像展

本町小学校二二〇一六年度

102 保育園でのこころみ

108 酒井桃子

112 開催記録

ii 街のなかに、外に出て行くこと、街のなかのきざしをつかむ

——振り返りつつ、未来を展望する

●街ってなんだろう？ そして、街は誰のもの？

◆関係者インタビュー

116 ほうほう堂@小金井のあちこちの窓ができるまで

125 鈴木雅子

128 誰もが表現者として存在できるような、市民を巻き込む作品の制作を目指す——植物になった白線@小金井

133 宮下美穂

149 瀧本多加志

●越境すること、アートにしかできないこと、アートにできること

139 その後のイミグレーション・ミュージアム・東京——岩井成昭

145 H-Blood Pressure ハイブラッド・プレッシャー展

●まちに暮らす人と出会うこと、街そのものと出会うこと

152 小金井と私 秘かな表現——須藤正樹・長澤麻紀・荒田詩乃・河村宏・環笑子・石川明代・平田絵美子・アサダワタル

166 「市民企画」まちはみんなのミュージアム かがわ工房編

176 「インタビュー」大川直志—ヒエラルキーはなくて、可能性があった

iii コトを育む人、場が生まれてコトが生まれる、こと

180 「インタビュー」鉄矢悦朗—揺れながら、つづけていく

184 「インタビュー」小川希—わがままであることを厭わずに

187 「インタビュー」長島確—日常とのつきあい方

192 「わたしたち」という主体の問題——戸館正史

◆関係者インタビュー

180 須藤みどり

188 鈴木祐輔

193 鈴木幹雄

195 マスター（村松真文）

198 本報告書で取りあげた活動に参加したアーティスト

200 小金井市芸術文化振興計画事業にかかる 補助・助成・共催・事業委託一覧

i モノとコトをつくる

小学校の活動を例にしながら

年度

2009

2010

2011

2012

2013

2014

2015

2016

2017

1

物語と出会う、自分の物語をつくる

幼い頃、私たちは物語の世界といわゆる現実の世界を自由に行ったり来たりすることができました。その頃は、こんなことはあるはずはない、こんなことはできないなど思わずに無限にあちこちをさすらう能力がありました。好奇心に裏打ちされたその力は、長じて人が困難に遭遇した時に物の見方を変えたり裏返して見たり、笑い飛ばしたりする生きる技術にもつながっていきます。

旅に出るといふ物語を想定しながら舟を作ったらどうなるでしょう？ 心の中にたくさんの物語を描きながらの造形となるはずです。また、小学校では国語の時間にたくさんの物語に接します。読む経験を漢字の習得や文字や文章の「理解」に留めず、出会った物語を実際に手を動かして描いてみたり歌ってみたり、友達と語らいながら一人ひとりの身体全体で受け止め、描写される痛みや重さを感じながら物語の経験をその子なりの新しい表現につなげていくことを目指しました。

2

フィールドと交感する

遠い昔の人たちが収穫のお祝いや冠婚葬祭に用いた仮面や踊り、季節ごとの風習にはその地域の風土に根付いた表現が存在します。その表現には草や木々、川の流れや小さな生き物に心を通わせ自分を生かしてくれる風土に対する畏敬の気持ちが込められています。

私たちも、先入観や面倒臭い気持ちを追い払い、見慣れた風景を新しい気持ちで見直してみると、立ち止まって眺めた野川の水面が光ること、当然のように見過ごしてしまう紙漉り（こより）をつくることの楽しさ、校庭に出て匂いや音に心を澄ませると普段は見えてこない世界と出会うことができる、など、豊かなフィールドとの対話が生まれます。そこにはその時そこにしか生まれない時間が存在します。造形するというプログラムを通して、フィールドと心を通わせることで新しいものの見方を発見したり、新しい世界と出会うことができました。

3

モノとコトをつくる

図工の時間は一見すると「モノ」を作る時間に思えます。木工作をしたり絵を描いたり、牛乳パックで街をつくったり。でも、図工室の様子をじっくり観察したらどうでしょう？ モノを作っていますが、たとえば太い木を切る時に支えてくれるお友達と今までなかった交流が生まれたり、竹のささくれを削る作業の中で、竹で遊ぶ低学年の子どもたちが怪我をしないといいなという気持ちだったり、他校のお友達と、手作りの楽器をはさんで初めて出会う時、緊張しながらひたすら相手のことを想像する時間だったりします。図工の時間には、モノをつくるだけではないさまざまなできごとが満ちています。ものづくりだけでなく、そこで生まれる「コト」は、造形だけでない成果として丁寧に考えることが必要です。

4

みること、描くこと

描くことは見ること、そこで求められる「見ること」は、ただ、表面を眺めるだけではなく、このものは一体何？ と、「観る」ことも必要になります。真似る、トレースする、上書きするだけであっても、そのものを、心の中で見なければなりません。少なくとも向き合うことは求められます。自画像を描くためには、似ている、似ていない、を超えて、ここにいる私は誰なのだろう？ ということを強く意識することになりました。

描く過程は物事を理解することでもあります。喜びや悲しみなどの感情を持った私は、どのようなものとしてそこに存在しているのでしょうか？ 描く時間は自問自答の時間でもありました。また、出来上がった誰とも同じでない自画像が並んだことは、子どもたちにとってもかけがえのない自分と遭遇する時間となりました。

年度

2009

2010

2011

2012

2013

2014

2015

2016

2017

いっぼんみちをあるいていたら
本町小学校 2014年1月～3月

森を動かす ―― 困難なもの、固いものに向き合う
前原小学校 2014年1月～2月

本町 写し絵劇場
本町小学校 2015年11月～12月

野川フィールドミュージアム
前原小学校 2015年1月～3月

草や布をねじる、組む、そして空間を編む
第四小学校 2017年1月～2月

見ないでおぼえましょう
第四小学校 2017年10月～11月

森の中に風景をつくる
緑小学校 2017年12月

想起の遠足 本町小学校編
本町小学校 2017年12月

植物になった白線@本町小学校
本町小学校 2011年12月

植物になった白線@南小学校
南小学校 2012年11月

音の贈りもの
前原小学校+第四小学校 2015年12月～2016年1月

前原たてもんをのこる！
前原小学校 2017年2月

ドキュメンツ／カメラと箒と雑巾と
本町小学校 2012年12月～2013年1月

ドラマチック図工時間
本町小学校 2014年11月～12月

六年生のわたし 本町小自画像展
本町小学校 2017年2月～3月

1

物語と出会う、自分の物語をつくる

いっぼんみちをあるいていたら—本町小学校—二〇一三年度

●こころみ

劇作家、演出家の多田淳之介さんを招き、本町小学校の六年生全員を対象とし、校内でのワークショップ（全五回）と、小学校から小金井市宮地楽器ホールまでのパレードを行いました。ワークショップでは、絵本『いっぼんみちをあるいていたら』（市居みか）を読み、参考にしながらグループごとに自分たちなりの物語をつくり、具体的なパフォーマンスやダンスなどの身体表現に落とし込み、パレードのための衣装や持ち物、プレゼントなどを創作する造形活動を行いました。テーマは「びっくりして、ちょっと嬉しい」。街を歩き交う人たちに、ちょっとびっくりして少し嬉しい体験してもらうために、見知らぬ人にどのような働きかけができるのかさまざまな方法で考えました。

授業では、見知らぬ街の人たちとのコミュニケーションをこころみることを通じ、他者への想像力をもち、豊かな関係性を形成するための子どもたち自身の表現の可能性について考えました。

●内容

初回の授業では、自己紹介として、多田淳之介さんが二人の役者とともに「演じること」についてのプレゼンテーションを行いました。身体を使うことで、怒りや喜びの感情をはじめ、親密さといった気配や、重さ、軽さなどの体で感じる感覚を他者にイメージしてもらうことができるなど、たくさんのお話を伝えることができることに子どもたちは少し気づいた様子でした。そのあと、体育館に移動し、身体を動かすウォーミングアップや、身体を使って友だち同士で空間に何かをかたちづくること、何かを想像しながら身体を動かすワークショップなどを行いました。

二回目の授業では、絵本『いっぼんみちをあるいていたら』に描かれている内容をグループごとに読み下し、自分たちの表現を目指しました。大きなおばあさんや小さな人、体の長い猫など奇想天外な人や動物に次々出ていく絵本です。この本のあとがきには、「いろんな人に出会いながら、みんな今日も、何が先に待っているかわからない自分一人の一本道を歩いている」とあります。道で大きなおばあさんに出会ってしまったら、どのように迂回する？ 内容を読み取り、解釈し、自分たちが感じ取ったものを表現することを目指しました。しかし、この時点で、この授業のゴールが見えないことへの戸惑いが子どもたちの間に生まれました。それに対し、多田さんは子どもたちに手紙を書き、配布しました。

本町小学校六年生のみんなへ

今日は学校に行けずに残念ですが、日下先生と大人たちに今日やることをお願いしているの
で、皆で力を合わせて「パレード」をつくってください。

自分がつくった物を人に見せるということは、これまでも授業や行事でみんなもやってきた
と思いますが、今回の「パレード」では知らない人に見せたり、話し
かけたりもするでしょう。これまで知らない人に何かを見せたり、何
かをしたりすることはほとんどなかったと思います。それは、みんな
がまだ小学生だからです。これからみんなは中学生になりますが、知
らない人に何かをするようになるのは、実はもっと大人になって仕事
をするようになってからです。でも大人になるまで、そういうことを
学校ではあまり教えてくれません。だから、大人でも知らない人に何
かをするのが苦手で困っている人もいます。

それはどうしてかという、どうなるかわからない、からです。
「パレード」もやってみるまでどうなるかわかりません。どういうリ
アクションされるかわからないし、こうやったら絶対こうなるよ、と
いうことは誰にもわかりません。僕にもわかりません。でも、どう
なるかわかっていることをやるのは、僕はおもしろくないと思っ
ています。どうなるかわからないことには、無限の可能性あります。
なにしろワクワクします。実は勉強だってスポーツだって、こうやれ
ば上手くなるって本当はありません。人生はそういうものです。だ
からおもしろいんだと思います。

みんなの四月からの中学校生活だって、どうなるかわからないから
ワクワクできるわけで、いまから中学の成績や、いつ何が起きるかわ
かってたら、ワクワクしないでしょ？

「パレード」は、ビックリと嬉しいがテーマです。

ビックリしてくれるか、嬉しいと思ってくれるか、どうなるかわか
りません。でもみんなで色々なアイデアを出してパレードをつくっ
て下さい。そして、どうなるかわワクワクしながら知らない人のところ
へ行きましょう。

やってみれば、どうなるかわかります。そういうことを「発見」
と言います。このパレードには失敗はありません。あるのは「発見」
だけです。このパレードで何かを「発見」したら、終わった後に教え
て下さい。

みんなが何を「発見」するのか、わからないから、楽しみです。



ちなみに、僕がいちばんビックリして嬉しいのは、みんなが色々な「発見」をしてくれることです。ぜひ僕のこともビックリさせて、嬉しくさせてください。よろしく。 多田淳之介

三回目の授業では、グループに分かれ、街で出会った人が「ちょっとびっくりして嬉しい」と感じてくれるためのアイデアを考えました。このアイデアごとに（均一人数などにはこだわらず）グループをつくりました。以下、一〇のグループができました。

- 一 ぴよんぴよん跳ねながらクイズを出し、当たったらプレゼントを渡す
- 二 七人の不良が出会った人にじゃんけんをしてもらおう
- 三 幸せになるキャンディーをプレゼント
- 四 チューチュートレイン(その一、二)
- 五 マフネコ 出会った人に五秒間ぬくもりをマフラーする
- 六 一列に並んで一〇カ国語でこんにちはという
- 七 ありがとうと言ってメダルをかける
- 八 アルゴリズム体操をする
- 九 自作のプロペラ機のリモコンを歩行人に渡して動かしてもらう
- 一〇 怪しげな格好をした女子が突然開んでほめまくる

四回目、五回目の授業では、パレードのアイデアを考えながら、衣装やプラカードなどを制作しました。

最終日は、二クラス合同で市民スタッフ、担任、NPOスタッフと小学校から小金井市宮地楽器ホールまでパレードを行いました。子どもたちにとって、初めて会う人に声をかけるなど想像もできないことだったでしょう。工夫を凝らし、出会った人がどのように感じるか、思いかを想像し、出会う人に準備した働きかけをしながら街を歩きました。

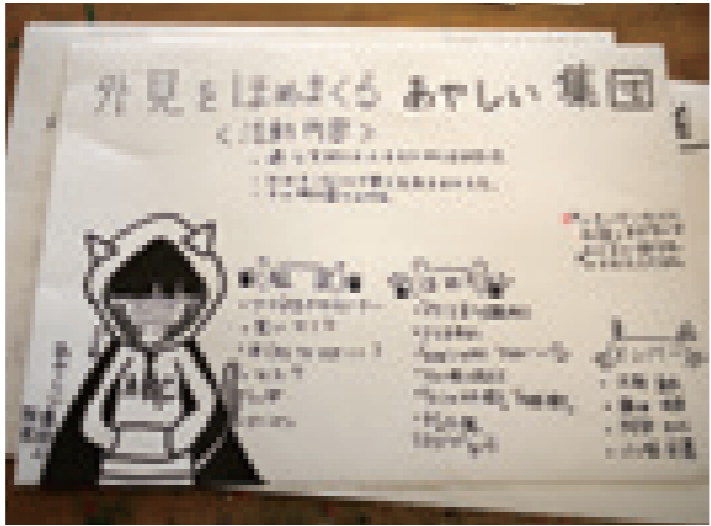
各授業にあたっては、子どもたちのグループそれぞれに地域の市民や学生などの大人が入り、パレード当日の地元商店街や近隣住宅への挨拶なども含め、子どもたち

と歩きました。

●子どもたちの声

以下に子どもたちの感想を記します。

- ▼予想外だったことはサラリーマンもアメ(らしきもの)を受け取り、笑顔になってくれたことです。どんな人でも優しい心は持っているんだなと思った。
- ▼知らない人がぼくに「ボンジュール」と返してくれた。その時はとても嬉しかった。
- ▼僕は一つみつけたことがありました。地域の人たちから白い目で見られたとしても、それにくじけずパレードをすることで、みんな自分をみつめました。
- ▼自分自身の課題だった「自分を越える」ことができたのが予想外で、自然にできたのだと思うとよほど楽しんでいたので分かった。
- ▼いざ声をかけてもほめるところが見つからず、少し沈黙があっってしまったことが悪かったことです。
- ▼もとをたどれば、一冊の絵本を読んだことで表現することの楽しさや喜びが味わえたことに私は驚いています。最初はこんなにすごい体験をするとは思ってなかったことだからです。
- ▼キャンディを渡す時に「はいどうぞ」と言っておわたと「ニセモノか」「たべられないの?」と言わ



れ少し残念でした。「願いが

叶うキャンディですよ」と

言ってわたすとみなさんと

も喜んでもらってくれました。

▼キャンディを配っているときに、配っている人の中でだんだんと歌ができてきて、その歌がおもしろくて、キャンディを配るのがとてもたのしかったです。

▼パレードをやっている中でお年寄りの方々は挨拶を返してくるけれど、二〇代から三〇代の人は素通りという感じで「ああ、やっぱりそうなのか」という気持ちになりました。これまで多田さんの授業では主にイメージすることや習っていたので、メダルをわたす時、わたされた相手のようすを想像していました。そのとき、相手が快く受けとってくれるようすを想像していたけれど、断る人もいたのでショックでした。他の人には首にかけてあげようとしたらよけられていた人もいたので可哀想だと思いました。

図工専科の担当の日下先生からは、「感想を読んで実施してよかったと思いました。感想の中で一番多かったのは『ひとが嬉しくなると自分も嬉しくなる』というコメントです。自分がしたこと

人が笑ってくれると気分がいいなと知ったというコメントが多くありました。多田さんについてのおべっか等はありません。自分たちの活動について書いています」というコメントが寄せられました。

森を動かす——困難なもの、固いものに向き合う——前原小学校——二〇一三年度

●こころみ

前原小学校のすぐ脇には野川が流れています。少し歩くと武蔵野公園や野川公園もあり、市内でも外遊びができる自然に恵まれた学校です。

この学校の五年生三クラスを対象にして、自然素材を使って造形をし、その造形物を用いて野川と触れ合うプログラムを実施しました。

造形のプログラムでは、取り扱いが困難な素材をあえて用いました。日頃触れることの少ない自然素材、重たいもの、取り扱いが技術的に難しかったり、厄介だったりするものを扱う作業を通して、子どもたちがさまざまな工夫を学んだり、難しそうに見えても立ち向かうことができると、という心のあり方を体験してほしいと考えたのです。その背景には、危険だからという理由で、多様な道具を手渡さずに、キット化された教材や工夫を要しないホットボンド（接着剤）などが利用されるという、一般的な図工の授業を取り巻く環境がありました。この授業では、キット化された材料が提供するような、あらかじめ決められた完成形はありません。言わば解答の見えないものに、子どもが持つそれぞれの力で向き合えることが課題でした。

野川と触れ合うプログラムでは、働きかけ次第で遊び慣れた場所や風景を、ふだん見慣れたものから違うものに変えていくことができることを実感してほしいと考えました。

●内容

1 事前準備——実験

授業では、舟を造形することにしました。事前に図工専科の先生と私たちは、舟をつくるためにどのような材料が適しているのか、どの程度の難易度であれば、定められた時間の中で子どもたちが思う存分に造形することができるのか、何度かにわたる実験を行いました。実験では、材料として、杉などの針葉樹は柔らかいが木の繊維が一方向であるために造形の多様性が得にくいということがわかり、硬いけれど手応えがある桜の木を用いることにしました。表情豊かなさまざまな種類の立派な桜の原木、長い



◆連

携授業は子どもたちが普段出会わない人と出会うことができるのが一番いい点でした。宮下さんたちは連携授業の時出会う子どもたちを見ているわけなのですが、普通、他の勉強や私の授業は「学校にいる僕たち私たち」というようなスタンスでみんな学習しています。でも、連携授業のときには学校という入れ物にいなながら、「素である私たち、僕たち」になっている瞬間が見られるのが面白かったですね。だから、そういう風なリラックス、リラックスという言い方は変だなあ……、開放されるという感じなのかな？ どちらかというと心が開放される感じの姿に子どもたちがなれる時間と空間だったなあ。それを学校という箱の中でできたことにやはり価値があったなあと思っています。

いろんなゲストティーチャーが来るのだけど、だいたいパターン化されているんですね。キット的な授業を持って来て、やって「はい、終わり」というものなのですが、アートフル・アクションとの連携は毎回、今年の子どもの様子を話したりしながら、ではどのような内容にしますか？ というところから始められるので、本当にパッケージ型ではない子どもたちに合ったことができた。それはアートフルの方がおもしろいと思ったことを子どもたちに提供してくれるわけですが、人間教育という部分でズレていない。相談しながら進めているのが一番大きいとは思いますが、本当の芯の部分というのがブレていなくて、単純にああ、楽しかったというよりも深い学びができていた。

私が、こういう人が来てくれて、子どもたちがこう変容したんだというのを目の当たりにしたのは、岩井優さんの時です。「こんなことしちゃって、まあ」みたいな。それを、子どもたちが面白かったというのが一番大きな驚きでした。自分もここまでできるんだというのが、最初は強かった。自分もそれを「やっていいんだ」というと変だけど、これは学校教育の中でちゃんと位置付けられた活動で「やっていいんだ」というところに、ちゃんと落ちるところで印象深かったというか。マタギを招いた時は国語の授業と図工を連携させ、担任の先生とも、ちゃんと打ち合わせもさせていた。担任の先生は振り返り会も来てくださって、亡くなったお子さんの話もしてくださったりして良かったなあと思いました。だから、学校の中で図工から学級まで広がっていくことができたしたら面白かったなあという感じはしますね。

前に何度か高学年を持っていて、連携授業を体験している学級担任が一昨年、国語の宮沢賢治のところと図工をリンクさせる提案に、「できる」と言ってくれました。担任の先生も繰り返すことで、「ここ使えるかも？」という気持ちになって、他教科に広げていくことはできるんだなと思いました。活動を通じた子どもたちの変容を、繰り返した先生は見ているから、やっぱり興味を持ったのではないかな。だからみんな続けたいと思ったし、担任の先生もいい活動だったなあというふうには……。あのときの子どもたち、ものすごい影響を受けて。ちよつと難しい子たちがいたけど、その子たちが軒並み夢中になっていましたよね。やっぱりその子たちのその姿を見て、担任も変わるし、私も「ああ」と思う。やはり学校は子どもの変容で評価するか、そういう価値があった活動だったから、みんなが「ああ、面白かったな、良かったな」と思ったと思うんです。

*くさか・みわ——本町小学校・図工専科。平成一六年の「はげの森美術館」の立ち上げに関わったことをきっかけに、市の「コミュニティ文化課」よりお話を頂き、平成三年より小金井市立本町小学校においてアートフル・アクションや学芸大との連携授業を始める。初めての連携授業において、アーティストと関わることで大きく変容する子どもたちを目の当たりにし、是非こういつた機会を翌年からも続けたいと希望。その後も機会に恵まれ毎年六年生に授業を行うことが出来ている。普段出会うチャンスのない「アーティスト」と個性豊かに、子どもたちの育ちを見守ってくれる「スタッフ」との関わりは、素の子どもたちの心にすつとり込み、豊かな成長につながっている。是非、今後もしっかりと子どもたちと関わって欲しいと願っている。



日下美和

ものは二メートルを超えるもの、直径も二〇センチメートル程度、節があったりねじ曲がっていたり、苔が生えているものも含めて用意しました。

2 一道具のこと

よく切れない刃物は不要な力をかけてしまい、暴走することがあります。刃物はよく切れるほうが扱いやすく、怪我も少ないことから、ひとクラス分の丸ノミをよく切れるよう研ぎ出し、鋸、木槌、金槌、錐、鉋、釘、木工用ボンドなどともに用意しました。参加した大人は、インパクトなどの電動工具を用意しましたが、基本的に子どもたちは電動工具は使わないことにしました。

3 一授業のすすめかた

一クラスを六、七名の班に分け、大人が班ごとに一人の割合でサポートに入りました。サポートである大人の役目は、刃物の使い方、混雑する図工室の中で刃物の向きなどに留意し、子どもたちが道具の安全な使い方を見つけていくような支援です。また、硬く、切ることも釘などを打つことも難しい大きい木の節を選んだ子どもには、むしろそこを生かして造形することに一緒にアイデアを出し合うなど、「教える大人、教えられる子ども」という構造にはまらない関与をこころみました。

この授業では、小学校でのワークショップ経験のない彫刻家をあえて参加アーティストとして招きました。これはワークショップの経験よりも、彫刻という領域の専門性をアーティストに求めたためです。さらに図工を担当する先生の現場への理解、課題認識をもっとも重視し、アーティスト主導型のワークショップにしないという狙いがありました。アーティストは材料の選定、加工方法、道具の使い方、道具の手入れなどに注

力して指導にあたりました。

初回の授業では、アーティストの紹介、授業の概説、スケジュールの説明、また舟に関するイメージを広げるため、ヨット競技の全日本チームに参加していた市民が舟の仕組みや可能性、魅力について語る時間を設けました。

二回目の授業では、山積みの中から自分が使いたい材料をおもいおもいに選び、鋸を使って切り出し、大人の力を借りて鉋で半裁しました。子どもたちからは「かてー」「おもてー」という声が聞かれたり、木の皮が付いたままの木材同士を接着しようとするもうまくいかず、皮を剥いでみたり、ボンドが効くように削り出したりという姿が見られました。鋸や鉋を使うことが初めての子どもも多く、体の向きと刃物の向き、力加減などの助言はとて大切でした。また、どうしたら思いどおりの形ができるのか、子どもたちは一つひとつをやりながら考え、ときに思いどおりに刃物が動かなかったからこそ意図しない形が生まれ、それをきっかけとした次の形への想像力が生まれるという体験もしました。

三回目の授業では帆、オールや装飾などを施しました。ここでも、ホットボンドなどで簡単に接着できる材料は使いませんでした。和紙と木材をつなげるため、和紙を針と糸で縫ったり、持ち寄った金属を釘を使って木に止めるなど、多様なアイデアが生まれました。

授業のあと、ふだん身近に感じている野川につくった舟を流しました。子どもたちはこの舟に自分たちが乗って舟出をし、その行き先を想像しました。帆をつくる、オールをつくる、それだけでなく、旅の同伴者として楽しい仲間、想像の船出の中にはたくさんの物語が生まれていきました。この体験は、図工の時間を子どもの個人的な体験としてより深いものにしたのではないかと思います。

図工専科の先生は、常々「子どもたちを地域に返す」と話していますが、学校の授業が塀に囲まれた中だけで完結するのではなく、学校を取り巻く環境との相互作用で成り立つことはとても豊かな可能性をもつものでした。





●授業を終えて

参加した大人と図工専科の担当した先生との振り返りの際にもっとも話題になったのは、どの段階で大人が子どもの作業に手を出すかという点でした。ほぼすべての児童が丸ノミや鉋に触れるのは初めて、また図工室全体を使って危険な道具を使用するという状況の中で、子どもたちがどの程度、危険を認識しているのか、どの段階で大人が介入することが妥当であるのか、議論されました。たんなる危険回避ではなく、授業の意図に即した危険の度合いも焦点となりました。



●こころみたこと

この年の小学校六年生の国語の教科書には宮沢賢治の『やまなし』が載っていました。この物語がもっているイメージの喚起力はとても深いものがあり、読み手に思索的であることを求めます。

そこで、宮沢賢治を読んだ子どもたちの体験をもとに、図工と国語の授業時間を連携し、国語での体験を図工の授業を使って深めることをこころみしました。六年生全員が写し絵を使って、それぞれがもっている宮沢賢治の世界を表現してみることにしました。

教科書の連携にあたって意図したことは以下のとおりです。

- ① 国語で学んだ宮沢賢治の体験を下敷きにして、それぞれの子どもたちの心の奥深くにある、その子どもにしかない世界観を、写し絵という表現の技術を使って引き出す。
- ② 子どもたち一人ひとりの表現を深めながらもグループでの制作や発表を行うことで、表現やアイデアが他者の目に触れ、表現が相対化される。また、ひとりの表現がみんなの表現と混じり合うことで複合的な物語経験が生まれ、その過程を通して、それぞれの子どもたちの思索の過程を深める。
- ③ 描くことを通して、物語の読解をより深める。
- ④ 図工に国語の要素を強く取り込むことで、全体的な体験としての子どもへの学び、経験の深まりを生む。
- ⑤ 子どもたちが自分の身体全体を使って表現をする経験が減っている。小さい画面に描いてみる不自由さ、写し絵の投影にあたって自分自身の動きによって画像がつけられることをとおして、体の動きを取り込む。

●授業の内容

1—授業の主題について

本町小学校では、国語の授業でとりあげた作家の図書を図書館から移し、廊下に小さな文庫として設置し、子どもたちが自由に読むことができるようにしています。また、それぞれの児童が作品の一つを選び、調べ学習として発表することもあるようです。

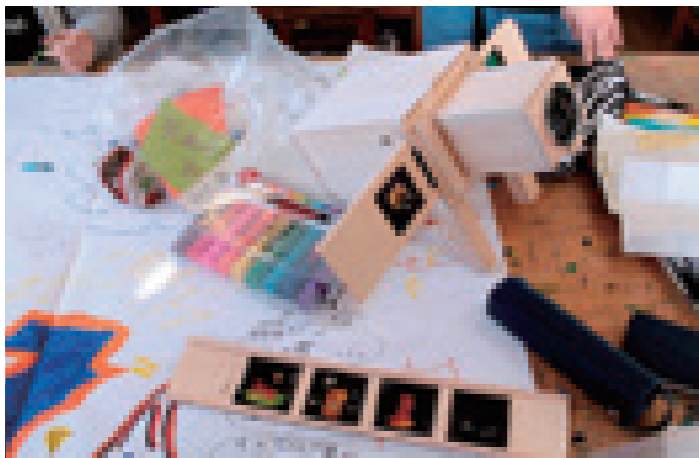
宮沢賢治の作品がとり上げられた際も、クラスの前の廊下に小さな文庫が設置され、子どもたちにはさまざまな宮沢賢治経験が積み重なっていきました。そこで国語と連携し、宮沢賢治を題材に図工の授業を行うことにしました。とりあげたのは『なめとこやまの熊』です。子どもたちが教材

書で読んでいない宮沢賢治の物語をあえて選びました。

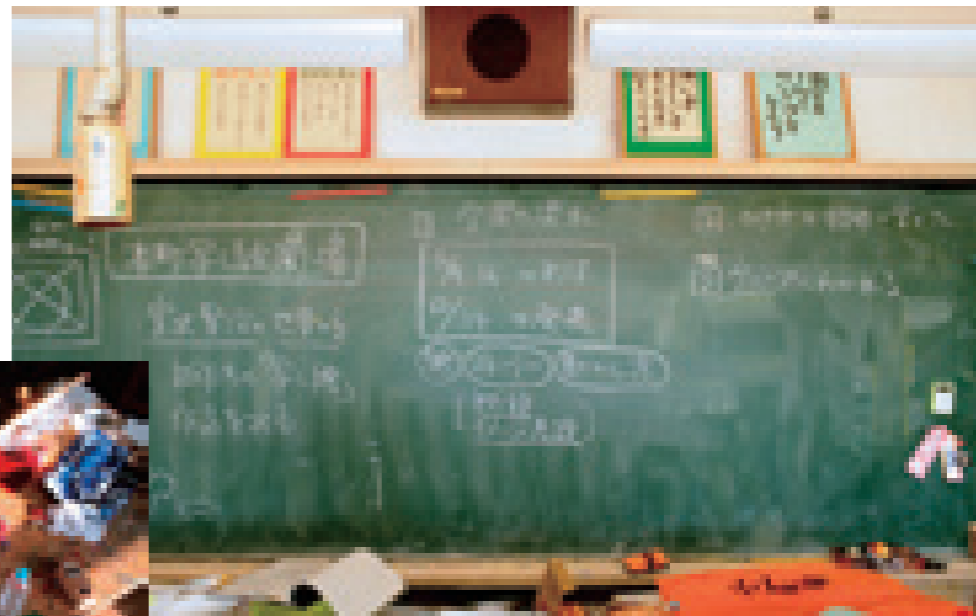
2—表現の技法のこと

① 写し絵のこと——先に挙げた五つの意図のもとでこの授業を進めるために、もっとも適切な方法はなんだろうか？ 宮沢賢治が描き出す時間、空間の奥行き、豊かな色彩、水や光の描写を、子どもたちが自分の身体の中で深くとらえるには「写し絵」が適していると思ったのです。

写し絵とは、江戸時代に生まれた表現技術で、光源の前に着色された絵を置き、レンズを通してその絵を投影するというものです。描かれた絵が大きくなったり、歪んだり、小さくなったり、不意に消えたりする様子は、画用紙への描画と異なります。ごくごくゆっくり動く時間やさっと鋭角的に変化する画像、ほかの画像と重なり合うことなどで空間的な深みや奥行きを表現することができます。子どもたちは描いた絵を枠（種板）に貼り、その枠を光源の前に設置し、絵を送っていきます。



今回は五枚の絵を貼り付けることのできる種板を用意し、一つのグループが二つの風呂（投影する道具）を使うことができるようにしました（五枚の種板に絵を描いていくことは、当初、出来事と出来事の関係を把握し、物語を分解し理解するために有効ではないかと考えました。この点に関しては、反省があり



ます。物語を分節化するには紙芝居のようなもののほうがよく、写し絵にはリアな一方向の時間軸だけでなく、奥行き、物事の重なり合いにより別な世界が生まれるといった可能性に、子どもたちの活動を見る中で大人が気づいていきました。

②音楽のこと——物語と「音」という要素も考えてみました。そこで、前年度の授業で子どもたちがつくった音のさまざまなガジェット（手づくりのレインスティックやタンバリンのように叩くと音の出るもの、段ボールに穴を開けて、風圧で音が鳴る鞆のようなもの）を用意してもらいました。それらの楽器に、参加した大人から手づくりの音の出るものが追加されました。音づくりにミュージシャンも参加し、できあがった楽器をあてがうのではなく、たんなる「効果」を超えた音の表現が生まれることを意図しながら、全体の物語性などについても相談にのったり、一緒に音について考えることができるようにしました。

③子どもたちに並走するスタッフのこと——小金井アートフル・アクション!の事業では、人材育成プログラムとして、さまざまな市民がプログラムに参加しています。この日も、市民の方々が授業のサポートに参加しました。参加にあたっては、この場は子どもを「教える」場ではないこと、大人は正解をもっていて、子どもはもっていないという位置関係にならないことを確認しました。

また各回の授業ごとにある主題に対して、どのようなサポートが考えられるのか、事前に準備も重ねました。この授業の狙いについて多方面からディスカッションし、また、写し絵でどのようなことが可能になるのかを確かむために、劇団が行った写し絵の公演映像を借りてきて全編を見ました。「なめとこ山の熊」や「やまなし」を読むことはもちろん、『詩的思考の目覚め』（阿部公彦）など、『なめとこ山の熊』をめぐるテキストなどを読み、授業をサポートする大人もその世界にあるものを一人ひとり考えました。しかし、そこで見つけた大人のイメージを決して子どもに押し付けてはいけないということも、忘れずに共有することになりました。

④物語の体験を深めること——『なめとこ山の熊』にはマタギが描かれています。そこで秋田県からマタギの鈴木さんに来ていただき、自分が生きるために生き物を殺すことで成り立つマタギの暮らしについてお話を聞きました。チームで行う狩猟や熊と対峙した経験、射止めた熊の解体や山深い地域での暮らしの様子は、ほとんどの子どもが聞いたことがありませんでした。また、熊の胆、足や熊の食べ物、熊を授かったあと、解体するときを用いた刀などを見せてもらいました。鈴木さんと同行していらしたマタギ見習いをしている青年は、スーパーマーケットでパックに詰められて売っている肉や魚に疑問を感じたこと、そのことをきちんと考えてみようと大学を休学し、マタギ見習いをしていることを話してくれました。



うになったんだというのが、まずあります。実は五月にこの子たちはクラスメートを一人亡くしています。その時に、命が終わってしまったということをもとに、そこから這い上がってきたという過程があって、死生観というのをものすごく強烈に感じながら、一年間だったのです。宮沢賢治の『やまなし』を勉強し、最終的に感想文、解説文を書いたのですが、たとえば、『やまなし』を通して、死の陰には生、喜びがあり、生の裏には死があるということから、命は命に助けられて生きているという命の大切さを賢治は伝えたかったのではないかと、逆をやまなしのほうは一生を全うし、また周りに与える喜びが酒となって出てきている。五月と二月の情景には一つだけ共通点があり、それは食である。食という観点から見ると、どちらも同じだ」というようなことを学んでいきました。『やまなし』を通して死生観、命のこと、食のつながりみたいなものを漠然と感じていたところへマタギの方がいらしてくださって、熊を捕って命をいただくという話を聞きました。マタギの方に二歳の大学生の方が一緒にいてきて、平気で命をもらって食べているのに、殺されることに関して嫌悪感を持っていない自分がすごく嫌というか、それってどうなのだろう、傲慢なのではないかと思つて、マタギの方にくつついて生活しているという話を、子どもたちは聞きました。それをものすごくまともに受け止めて、授業が終わった後の感想文では、その大学生の方の命の大切さということについて書いている子どももいます。



◆私

たちが二年間学級担任をしているこの子たちは、例えば五年生の時に社会の時間で自動車会社を立ち上げて新車のプレゼンテーションをするという取り組みでは、どうしても自分のつくりたい車を譲れなくて会社が分裂したグループが二グループあって、一人になつても自分のやりたいことを貫くという人たちでした。グループで何かをするのが非常に難しい集団だったのですが、きのう見た感じでは、このわずかな時間に集まって、何をつくるか相談して決めてやるという、この人たちにとっては非常に困難な課題にちゃんと打ち勝つてみんなをやっているところに、私はとても成長を感じました。「まあ、いいか」と言えるよ



相澤陽子



て、大切な経験だということも思ってきました。それと同時に、野生的な子たちでもあるのでマタギの人にすぐくらくらいついて、熊が食べる木の实とか、熊の胃や血を乾かしたものを持つてきて食べさせてくださったのですが、ものすごく目がキラキラ輝いていました。

*あいざわ・ようこ——前本町小学校・六年生学級担任



3 一進め方

子どもたちは写し絵の技術を経験し、マタギの話を知りたがり、自分たちの物語を表現することに臨みました。まずは一人ひとりが表現したいことを決めてから、自分たちの物語づくりにとりかかるグループや、グループごとに主題を決めてから物語づくりにとりかかるグループ、どちらもうまくいかず、なかなか方針が定まらずに混乱するグループなど、アプローチはさまざまでした。このプロセスをマップをつくることで表現した子どももいました。各グループは自分たちの物語の主題を決め、主題を伝えるための絵と言葉を選び、音をつけるなどで表現の幅を広げました。

途中、グループ内でテーマが決まらない、役割分担ができない、表現したいことに技術が追いつかないといった迷走もありましたが、グループに並走する大人の助言やグループ内でのさまざまなバランスで発表に至る姿が見られました。

授業の最終日には、多目的室で成果を発表しました。保護者や担任、ほかのクラスの先生方を招き、二クラスで一〇グループ、グループごとに五分から八分程度で発表し、終了後にはスクリーンの前で挨拶をし、質問にも応じました。授業のあとに子どもたちが書いた作文では、多くの子が発表の時間を振り返り、「ホッとしました」「もっと頑張ればよかった」「グループワークによって達成できた」などと述べています。また、ほかのクラスの子どもの発表を見ることで、自分たちでは思いつかなかった方法や内容に触れ、感嘆する記述もありました。

発表では、写し絵を教えにきた劇団結城座のスタッフも参加し、子どもたちの公演にコメントを寄せました。

●授業を終えて

授業のあとに書いた子どもたちの作文を見ましましょう。マタギの話や写し絵の体験を経て、実際に自分たちがつくってみるとい段階のグループワークの困難さがうかがえました。

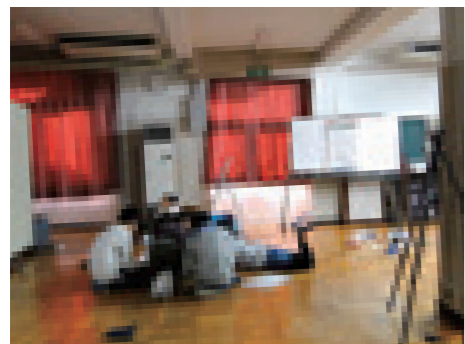
▼写し絵の上映・準備をやってみて、それぞれの人がしっかりと自分の役割を果たさなければ一つの作品が完成しないことを学びました。準備をしているときになかなかできないことや、上映中にあわててしまい物をたくさん落としたり、とても大変で、効率よく進めることが少しむずかしかったです。

▼私たちのグループはうまくできませんでした。直前まで、もめ合いをしていたので、できるのかとても不安でした。でも、一つだけグループのよかったところがありました。それは、誰も終わって文句を言ったり、人のせいにしなかったことです。

この段階で見られたことは、どうしたらいいの？ という戸惑いにどう立ち向かうか、大袈裟に言う「格闘」です。役割分担という名の逃避や、合議ではなく自分の意見をおしたいという意志も子どもたちの中に見られはしたものの、多くはアウトプットのイメージもわからないところにとどまり、進んでいくのかという戸惑いだったように思います。

▼人と物語を考えてものをつくりあげることが楽しいと感じた。「ふる」はきれいに映すのが難しかった。最初は全然アイデアが浮かばなかった。紙に絵を描いているうちに話がまとまってきた。まずは書き出してみることが大事だと思った。最初の絵は大きく書いた。フィルムに小さく書くのが難しかった。昔の人は上手に「ふる」を使って映していたのだろうと思った。また、「ふる」をつくられた人たちはとてもすごいと思った。採めたりした班もあったけれど、よい作品をつくることのできて良かった。人と話し合うことや行動をしてみるこの大切さを学んだ。これからは生かしていきたい。

「解答のない問い」にグループで議論しながら立ち向かう経験を、どのくらいの子どもたちが学校の中でしているのかわかりませんが、大きな模造紙を敷き、言葉だけでは通じにくいアイデアを視覚化するという議論のスキームが多少は機能したように思います。子どもたちは一つのアイデアをめぐって仮説や代替案を出してくるというより、一つのアイデアを否定するか採用するか、採用したらそのアイデアを頼りにどの程度まで展開できるかというところではあったようですが、議論のスキームの経験はアイデアを具現化するために役に立ちま





した。

▼写し絵は昔からのもので、今で言う映画とはまた違うことを知った。自分以外のグループは、音や動かし方を変えるという感じが生まれて、とても面白かったです。自分のグループでは、足音やキラキラ光る感じを鈴やトライアングルで表現しました。風呂を追いかけるときはぐるぐる回したり、工夫しました。でも少し安心したこととは、ナレーションは風呂の人に合わせないといけないということ。自分のナレーションのときに風呂の人を見ていなくて、先々進んでしまいました。また機会があったら気をつけたいです。

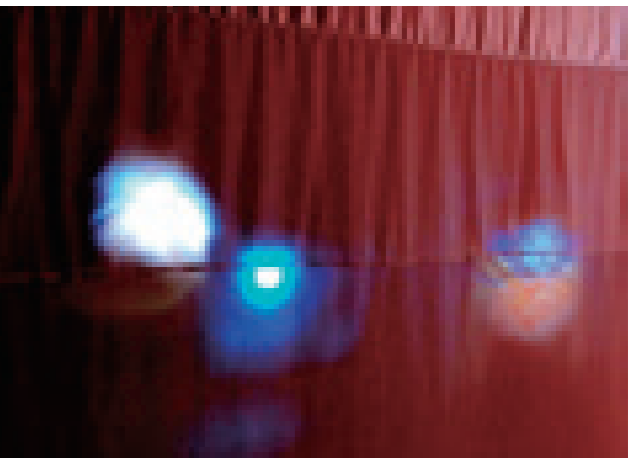
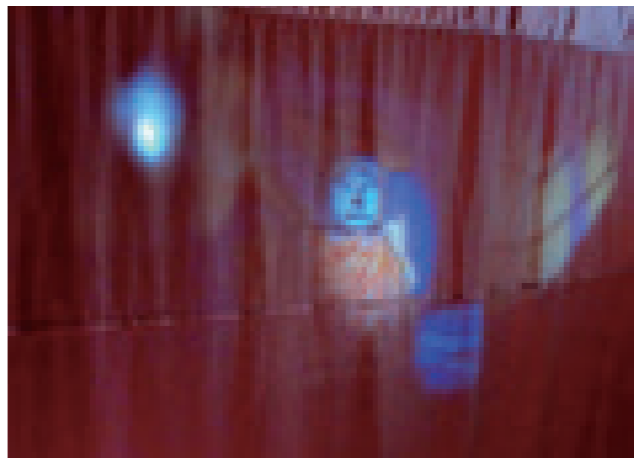
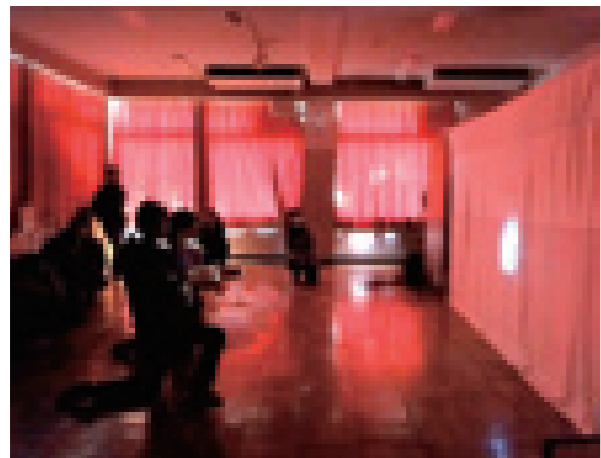
▼大変なこともあったけど発見もありました。それは一つにつきフィルム五枚だったので、映写機二台とフィルム十枚の中でどう物語をつくるかを考えました。このように大変なこともあったけど発見もありました。それは一つにつきフィルム五枚だったので、映写機二台とフィルム十枚の中でどう物語をつくるかを考えました。このように大変なこともあったけど発見もありました。それは一つにつきフィルム五枚だったので、映写機二台とフィルム十枚の中でどう物語をつくるかを考えました。このように

▼自分たちのグループでは、絵の大きさを意識しました。また、絵に合った音響をつけることもしました。音響と絵を合わせるのが大変でした。私は、フローをしました。大きさを変えると、絵がぼけるので合わせるのがとても大変でした。話を決めるとき、みんなの話がばらばらだったから時間がかりました。みんなで作ったなら、自分自身すごいのができたのでとてもうれしかったです。▼写し絵で学んだことは二つあります。一つ目は、一つの機械でいろいろなことができるといことです。横にフィルムをずらすと綺麗に映ったり、大きさが変えられてすごいと思いました。二つ目は、物語は絵を変えるだけでいろいろな話にできると思いました。写し絵の発表時に、同じ道具でも全然話が違って面白かったです。

▼反省点として「話の内容が少し重すぎたかな」と感じた。昔からある文化に触れ、自分で体験する、それはとても大切なことだと思うので、この貴重な経験を忘れず、また新たなことに挑戦するきっかけとしたい。それから写し絵の感想をいろいろな人と交流したい。

▼今回この学習で学んだことは、主に二つあります。一つ目は「またぎ」についてです。今までは、「またぎ」と言われても、ピンとこなかったのですが、この学習では「またぎ」のことについてや熊の食べ物や住む場所が分かり、とても勉強になりました。

▼今回「本町小、写し絵劇場」をして昔の人々もすばらしい技術があったのだと思った。私達は現在、テレビやスピーカーなどを使って物語を表現しているが、昔の人々は今みたいな「技術」にた





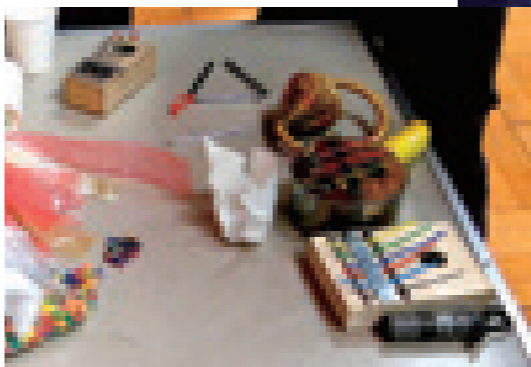
よらずに現代にはないような広い想像力を使って物語をつくっているのがとてもすごいと思った。また昔の人々は、写し絵を見る側にもすごいところがある。写し絵は声や背景などが少なくて周りの様子が分からなかったりすることがある。しかし見ている側が想像しているのがいなと思った。また『なめとこ山の熊』の中に出る、マタギの方に話しをしてもなかったことや、熊のこと、地方の方言などが知れて楽しかった。発表会で、他の班の人たちがおもしろい話や、悲しい話をつくっているのを見て、とても楽しかった。

5 一次につなげるために

いかに物語を読解するか、また読解した世界と自分の表現との往復の体験も、この授業で目指したことのひとつです。今回は物語、描画、音、投影とたくさんの要素が入った授業でした。

国語と図工を連携することで、教科で分断されない総体としての経験が子どもたちに生まれるという意味では、宮沢賢治と写し絵は適切な組み合わせでした。しかし一方で、どちらかというとき系列の表現、主体間の関係性に引張られ、写し絵という技術がもつ奥行きや時間表現が生かせなかった感もあります。これは授業当初に写し絵の可能性についての解説が不足していたことによります。本来、写し絵には前後したり、ゆっくり動かしたり、早く動かしたり、という動作が表現に直結するものですが、子どもたちからも体を動かすということについて、感想の中でも類する言及があったことは興味深いことと言えます。

国語の授業の典型である書き手がいて（作品があつて）、読み手がいる読書経験のプロセスに造形を加えることで、読み手にはより深い読解の過程が生まれる可能性があるように思います。「いかに読解するか」をめぐって絵を描いたり、グループで芝居をつくってみるこのプログラムは、とても意義のあるものとなりました。



2

フィールドと交感する

野川フィールドミュージアム—前原小学校—二〇一四年度

●こころみ

前原小学校の子どもたちにとって、学校のすぐ近くに流れる野川は、毎日の遊び場としても、教材としても、とても身近で大切な場所です。

この年、学校の創設五〇周年を迎える前原小学校の六年生を対象とした授業として、学外と学内をつなぐことをめざした前原のがわミュージアムをつくりました。展示は、周年事業を機に学校が地域にひらかれていく可能性を模索した結果でもありました。

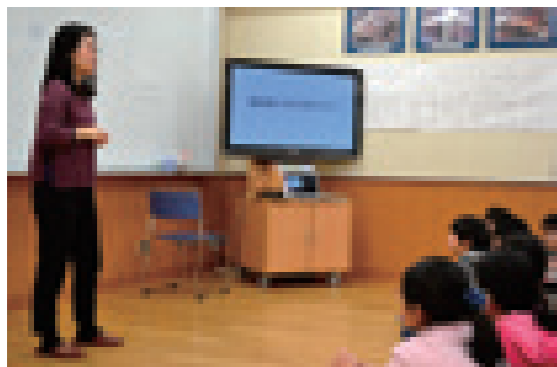
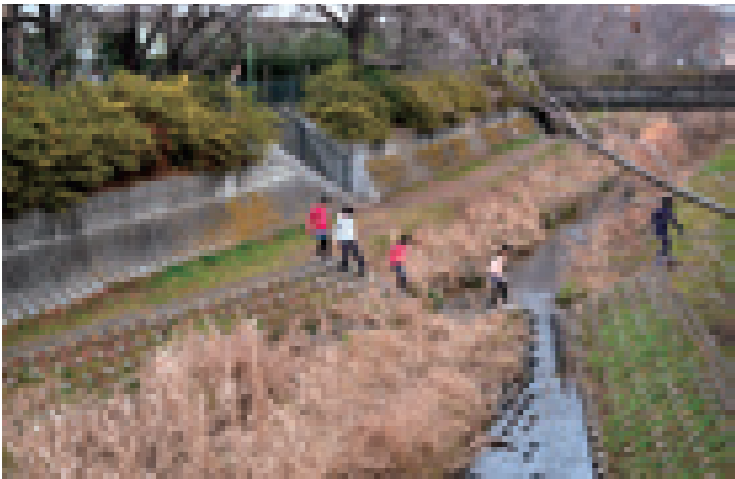
授業では野川をリサーチし、野川の楽しさや野川から触発されたアイデアを、ミュージアムに展示していきます。リサーチでは、日頃、見慣れた場所を新しい眼差しでとらえることをこころみました。

また、人に物事を伝える仕組みとしての美術館がどのように成り立っているのかも学び、制作に生かしました。地域の歴史、地域の資源とつながるための回路としての表現について探求するプログラムとなり、作品は開校五〇周年記念作品展「マエハラミュージアム」であり、ふれあい、ひびきあい」として学内外で展示し、近隣住民、保護者を招き、鑑賞する機会にしました。

●おこなったこと

三回の交流授業のうち、一回は武蔵野美術大学の杉浦幸子先生と大学美術館のスタッフの方、世田谷美術館の学芸員にもお越しいただき、作品を通じて人に何かを伝える術について学びました。

また図工の先生が、当たり前だと思い込んで見過ごしてしまったりさまざまな出来事や物事について、考え方や見方を変えることで、見え方が変わることや質感、色、素材、サイズなどの事例で写真を使って説明し、既成概念にとらわ





れずに出来事や物事を見ることについて学びました。

そのあと野川に出かけ、橋の上を人が通ったときの鉄板の振動や、水面に映える光、枯れ草、水中のゴミ、走る人、植物や石などに注目しました。教室に戻ると発見の結果を一人ひとり発表し、全員で意見を聞きまし
た。キーワードを板書し、素材、アイデア、展示場所などを軸にしなが
らグループごとに分かれ、作品づくりを行いました。

二回目、三回目の授業では、グループごとに制作をしました。映像制
作、クレイアニメ、近隣公園へのインスタレーションなど、野川から触発
されたことをいったんそれぞれが身の内に入れ、そのあと、共同しなが
らアウトプットしていきました。中にはアイデアがなかなか固まらず、苦
心する子もいましたが、最終的には野川をジョギングしていた人をめぐ
るディスプレイの中から、「進撃の野川おばさん」が生まれ、ジョギ
ングしている女性を、五メートル近いプラ板に描画しました。アイデアが出ない段階ではなかなかやる
気も生まれなかったグループですが、一度アイデアが固まると色やその人物が履いていたジョギング
シューズなどの細部に注力する子どももいて、とても生き生きとした作品が生まれました。

最終日はできあがった作品を校内、学校に隣接する公園に展示しました。

●ふりかえり

一つつくることを通して場所を見直すきっかけ

長年、親しんできた場所
で、自分が表現したい
テーマの素材やアイデア
探しを行う、ことを通し
て、より注意深く場所や
出来事を眺め、「さがす」
というスタンスで能動的
に臨むことができました。

授業は雪や雨などの荒
天の日もあり、ふだん目
にしない野川の風景に接
する中から川面の光の反
射、冬芽、ゴミ、広い面
積の壁面といった発見が

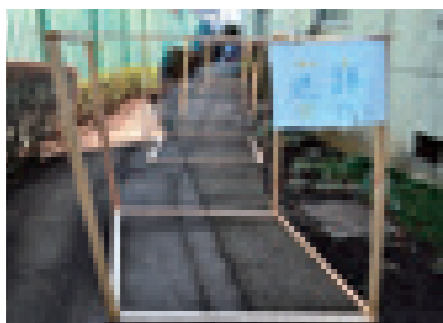
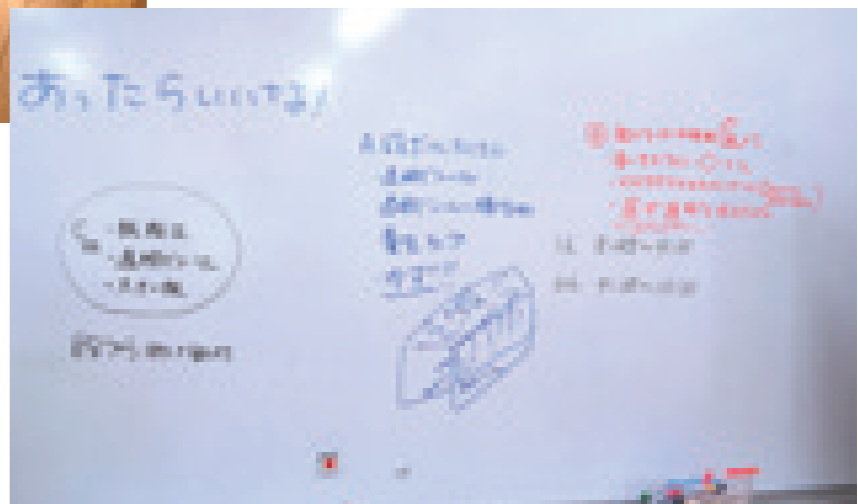
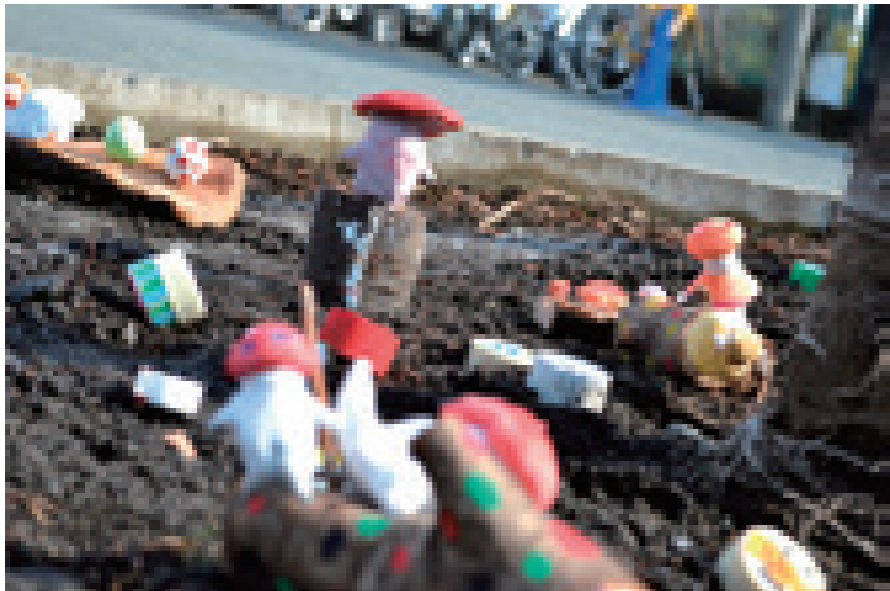


生まれ、色、形、植物素
材、振動、光を抽出し、
作品、壁面になりました。
また、これまでの遊
びの経験などから、公園
に向けた遊具の提案、参
加型のインスタレーショ
ンに展開したグループも
生まれました。環境に働
きかけるインスタレシ
ョンは、授業の最初に物の見方を少し変えて見る、より多様な表現についての

2 伝えるための工夫——見る人を想定した制作

ミュージアムに「展示する」という課題が出
されたことで、自分たちの作品を見てくれる人
がいること、ミュージアムに訪れた人がどのよ
うに自分たちがつくったものを見るのかを考え
ながら制作ができ、作品の幅を
広げることになりました。他者
を想定することは、伝えたいこ
と、表現したいことの絞り込み
も必要となり、よい影響をもた
らしたと言えます。制作物のタ
イトルは以下のとおりです。

- 一 迷路
- 二 川と橋
- 三 ザ・ライトミュージアム
- 四 けやきの森の中
- 五 キノパラ
- 六 けやきの五〇川
- 七 仲良し五人ぐみ
- 八 まわしてまわってとんでいけ



- 九 小金井市をおもてなし
- 一〇 電線と線路とロケット
- 一一 進撃の野川おばさん

3 大人の参加

グループに一人、造形経験のある大人が参加しました。当初、想定した大人の役割としては、子どもたちのアイデアを実現させることに伴走すること、グループ運営の補助をすることでしたが、子ども同士議論に大人が加わることで、提案を受け止めて次につなげるなど、造形技術だけではなく、コミュニケーションの円滑化、創造的なコミュニケーションづくりにも貢献しました。

草や布をねじる、組む、そして空間を編む―第四小学校―二〇一六年度

●こころみ

ECフィルム（エンサイクロペディア・シネマトグラフィカ。世界各国の風俗や生活習慣を記録した映像）を見ながらその土地に伝わる紐づくりの仕組みを読み解き、その知識をもって実際に紐を編み、編んだ紐で子どもたちがふだん遊んでいる近所の公園にインスタレーションとして展示しました。この授業で講師として呼び出したのは、下中菜穂さんです。

ある行為を言葉や図などによる「説明や解説」で読み解くのではなく、映し出される画像を見ながら手順も含めて再現するという過程をとおし、日常の中に何気なく存在する「紐」をさまざまな角度から丁寧に見て、考えることができました。これは、紐を編むという目的のために映像を食い入るように見る、物事を能動的に見ることにつながりました。シンブルな目的を設定することで、無音の映像を何気なく見るのではなく、積極的に見るようになったのです。

もう一つ、「紐」は、紐としての美しさとともに、体を使って何かをつくること、思いがけない造形や色合いに驚いたり、周りの人たちと知恵を出し合いながら展示をつくっていく楽しさを味わうことにつながりました。

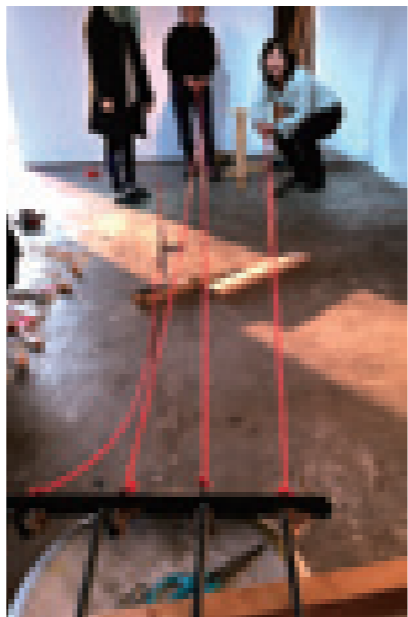
●やったこと

映像を見たあと班に分かれて、紐をつくる材料にするために子ども



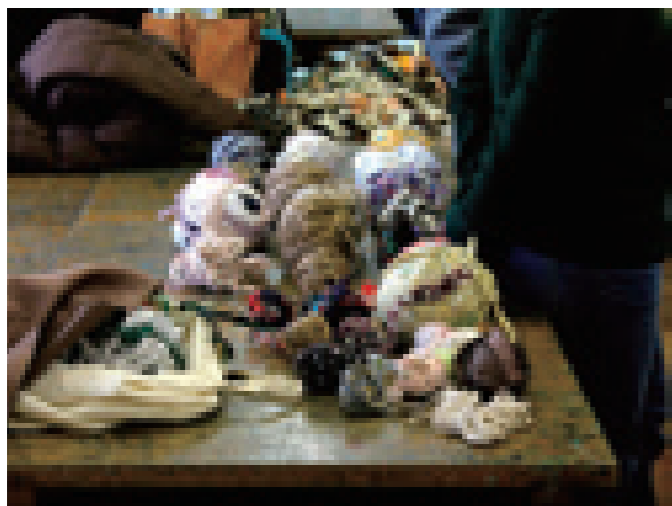
もたちが家庭から持ち寄った古くなった衣類やシャツを割き、紐玉をつくりました。紐玉づくりも大切な活動で、体を使って大きなシートを割く、縛るを繰り返し、鮮やかな色、くぐもった色など、さまざまな太さや色の予期せぬ紐玉が生まれました。これらが次からの授業の材料となります。

二日目にはそれらの玉を、ECフィルムを見ながら再現した器具を使って、グループや一人ひとりで、それぞれ紐を編みました。初回の授業から一週間、クラスで一本、大きな紐を編み上げました。なかには紙漉り（こより）に熱中する子どもも出現しました。大掛かりな紐から、紙漉りのような小さな紐まで、「燃る」「ねじる」「編む」といったキーワードを浮かべながら、材料



や技法を自分たちで工夫して、さまざまな種類の紐をつくって見ました。藁で編んだ紐もありました。

三回目の授業は、学校に隣接する三楽公園に出かけ、一反の着物をクラスのみんなで一本の大きな紐にしました。その後、グループに分かれ、公園内にグループ作品をインストールしました。遠目には樹木に紐が引っ掛かっているだけのように見えるものが、近くに寄ると非常に丁寧で、可愛らしくつくられており、私たちの想像以上に子どもたちが素材やディテールを楽しんでいたことがわかる展示となりました。紐の登場で空間が変わることに、その変化のプロセス自体が作品といえるものになっていました。中には竜舌蘭（リュウゼツラン）から一人黙々と繊維を取り出していた子もいました。この竜舌蘭は、私たちがECフィルムの映像で見て触発され、子どもたちに見せるために用意したものでした。初回授業で体育館で一緒に映像を見る中で強く印象に残ったのでしょり、やってみたいという気持ちが生まれたことは大切なことでした。



子どもと一緒にあって、未知なコトに挑戦したい—— 下中菜穂（アーティスト）

◎疑似体験として、映像を能動的に「見る」ということ

「紐を編む、組む、そして空間を編む」に参加させていただきました。その冒頭に見てもらったECフィルムはモノクロームで解説もない映像で、分かりやすさを第一に考えてつくられているような現代の映像とは、まったく違った映像体験を与えてくれたのではないかと思います。図工の授業の最初に映像を見るという経験も、おそらく初めてだったでしょう。そういう見慣れない映像を、目を皿のようにして前のめりに、「なんだろう」と見るところに、「能動的に見る」ということがわき起こってくるように感じられました。

私たちが子どもの頃には、映像ではなく、生活の中にモノづくりと出会うナマの体験がありました。例えば街を歩けば畳屋さんが戸を開けひろげて作業していて、怒られながらもそれをじっと見ていたり、家の中でも親がなにかをつくらせている姿が日常的にあったわけです。みんなで作った中国の撚り機は、私がフィールドワークをしていたときにたまたま出会ったもので、お正月に人がたくさん集まったから、なにが普段ではできないことをやるうって突然始まったコトでした。

太いヒモを撚りあげるの一人ではできないことです。だから村人が総出でやる。その素材は、普段の暮らしの中で少しずつ用意してあったようで、みんながそうした素材をそれぞれ持ち寄って、手づくりの機械で撚るんですね。私にはその光景自体が美しく見えたし、でき上がった紐もとても美しいものでした。もちろん彼らも、美しい紐をつくりたいという意識はもって取り組んでいる。

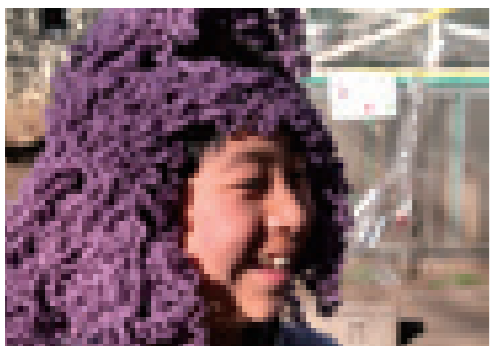
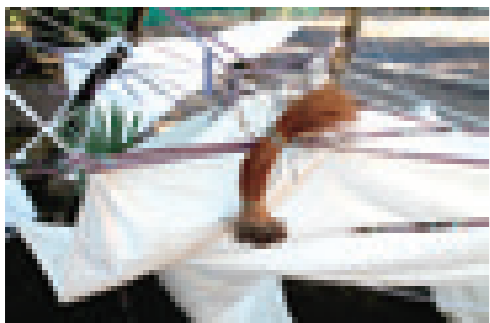
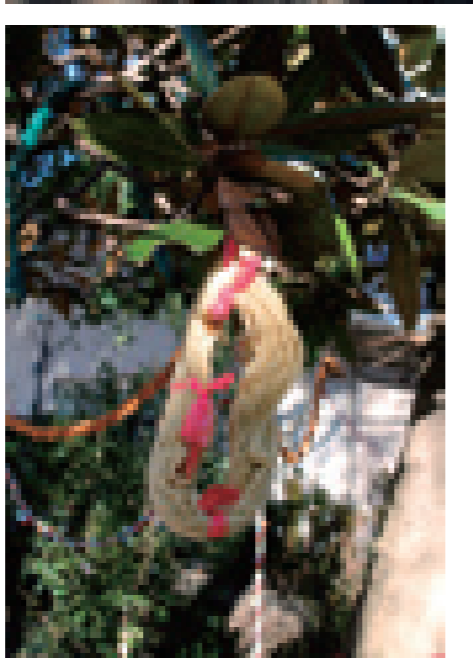
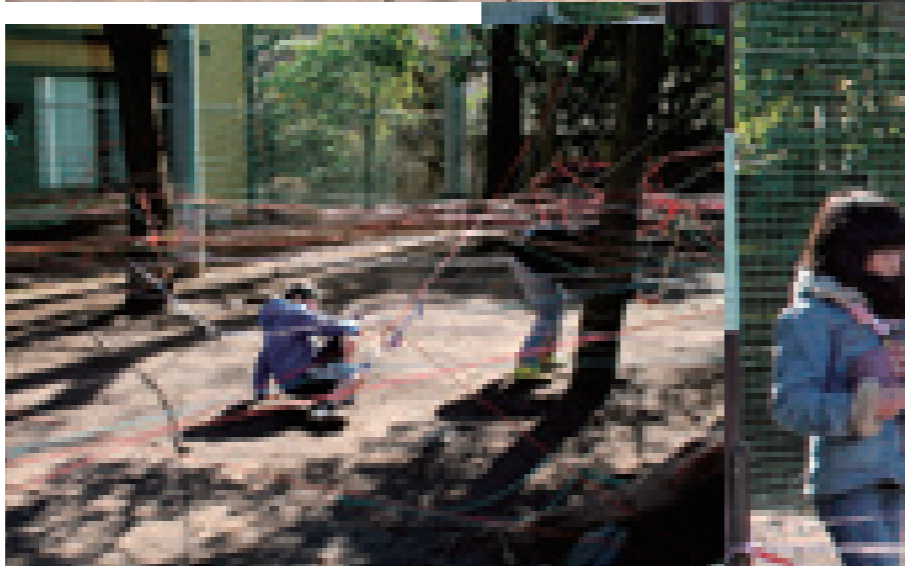
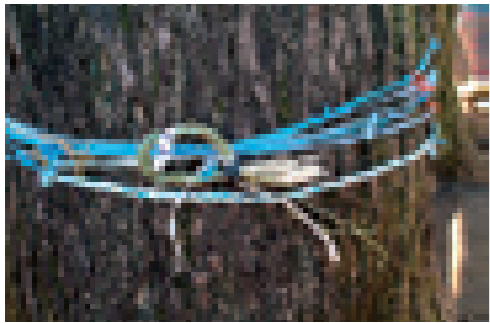
かつての日本にも普通にあったモノづくりの風景、そしてそれを見ながら子どもが育つという状況が、今の暮らしには失われていると感じました。ECフィルムを見て紐をつくるこのプログラムは、その代替として構想したものでした。こうした不親切な映像をいっしょけんめい能動的に見ることで、その中から何かを汲み取っていくという疑似体験ができたのかな、と思います。

◎自分で発見していくことが、大きな喜びにつながる

これは大人にとってもすごいワークショップでした。ここにいらっしやるみなさん（スタッフとして参加した大人たち）と中国の撚り機と一緒につくったのですが、映像を見ながら、たぶんこうだろうとつくってはみるけれど、どうもうまく稼働しない。何度も映像を見返して、初めて後ろにいたおばさんの動作に重要な意味があったことがわかる、といった具合でした（笑）。

「できないのはなぜ？」と映像を見て、「ああ、なるほど、方向が違っていったのか……」と発見をしていく過程は、よく知っている「名人」に教えられながらモノをつくることは、また違ったおもしろさがあったと思います。大人たちのその試行錯誤は、子どもたちにも伝わったと思います。大人たちの「失敗」をそのまま見せるということも、その意味では、かえって良いことだったのではないのでしょうか。







また、私自身にとって良かったことは、このワークショップを通してこよりがつくれるようになったことでした。私は昔からまっすぐピンと立つこよりをつくることができなくて、それに憧れをもっていました。今回子どもたちにもこよりづくりを教えたくて、二晩かけてできるようになった(笑)。それは努力の結果だけではなく、紐をつくる原理が、機械を使って擦るような大きくて太い紐も、こよりのような小さな紐も、じつは同じだということに気がついたからです。夜中でしたが、それに気がついたときの喜びは、すぐにも誰かに電話したくなるような、久しぶりにワクワクした気分にならせてくれました。

子どもたちには、つい教えてしまいうことで、自分で発見する喜びを奪ってしまっているのではないかと。だからなるべく教えない。その喜びの瞬間に、そういう出会いが準備できるようなワークショップにしたいと考えていました。簡単にいえば、「子どもと一緒に未知のことに挑戦する」ワークショップでありたいと考えたわけです。

見ないでおぼえましょうー第四小学校 二〇一七年度

●こころみ

造形表現を通じた、小学四年生にふさわしい抽象的な思考をこころみました。自分以外の人や出来事へ心を寄せ共感すること、物事の成り立ちに好奇心をもって向き合ってみることは多くの部分で豊かな想像力や抽象的な思考を必要とします。また、「もし、〜だったら?」と、一つの仮定に基づき論を成り立たせてみる、あるいは自分の状況を相対化してみる「どういう関係性の中で自分は怒っているんだろう? 喜んでいるんだろう?」という作業は、物事を多角的に見ることのできる力を必要とします。自分の置かれている状況や起こっていることを相対化し、複眼的に検証し課題解決につなげていくためにはそれぞれの年齢に適した思考の過程が大切です。やってきたボールを打ち返すだけのようなコミュニケーションや、気に入らないから排除するといった短絡ではなく、複合的に物事を判断する抽象的な思考を育てる過程は今日ではとても重要なこととなっています。そこで、今年度は、造形表現の過程を通じて、抽象的に思考してみることをこころみました。この抽象的な思



考は、机の上で腕組みをして念仏を唱えるように考えることによつてのみ得られるものではなく、まずはもっとも直接的な身体センサーを使いその抽象的な思考がつながるのではないかと考えました。私たちの暮らしは、視覚に特化しているように思われがちです。しかし、嗅覚、味覚、聴覚は、視覚に見る感覚よりはるかに直接的な強度で、より具体的な知覚や記憶を呼び起こすきっかけになるように思います。そこで視覚以外の感覚、匂いと音の感覚に焦点を当てることにしました。体が感じる匂いや音、光の体験がどのような知覚や記憶を形成、想起させ、それが表現になるのか、あるいは表現を目指すことで匂いや音、光の体験がどのように定置されるのか、ワークショップを通して子どもたちと体験しました。例えば調理室からカレーの匂いがしてきたので、カレーライスの絵を描くのではなく、その匂いから想起される「美味しさ」の経験を画像化する、匂いに色をつけてみるといったことを通じ、造形表現と抽象的な思考について考えました。

●やったこと

ワークショップの初日、アーティストのアーサー・ファンさんが彼自身のアートワークの一端である日常的な記憶と表現の関係について紹介しました。そのあと二クラス、七八人の子どもたちは一〇グループに分かれ、オーディオレコーダーを携えてふだん遊び慣れた校庭をまわり、風の音、遊具の音、木々が風にそよぐ音、子どもたちの話し声などを録音しました。この間、生徒は見た色、匂いについて考えるよう促されました。歩きながらのほかの生徒との対話も大切にしました。その途中、すべての生徒が同時に約二分間、目を閉じ、立ち止まり、音や匂いを感じる時間を設けました。

図工室に戻り、校庭で経験したそれぞれの色、音、匂いの記憶を「地図」として一人一枚、画用紙に描きました。描画では、抽象的な体験を具現化することを目指すので、通常の絵筆は用いず、スポンジや布、拾ってきた枝や葉などを使用しました。透明水彩の絵の具を使い、力まずに自由に手を動かしました。アーティストからは、次のような問いかけがなされました。



音はどんな形になりますか？
匂いはどんな形になりますか？
音と匂いに色を感じますか？

I want you to pay attention to three things: color, sound, and smell.
今日のワークショップのためにみなさんは色、音、匂いの三つに
注意を払います。

During the walk, you can go wherever you want on the school grounds
in a group and talk about anything.

However, I want you to pay attention to three things - color, sound,
and smell.

でも今日のワークショップのためにみなさんは色や音や匂いに注
意を払います。

After the walk and a break, we will talk a little bit about what you felt
when you were thinking about color, sound, and smell.

休憩のあとで私たちは一緒に相談します。色や音や匂いに注意を払う時に何を感じますか？

And then you will each make a drawing of your memories of color, sound, and smell.
そしてみなさんは一人ひとりで色や匂いや音の記憶の絵を描きます。

二回目のワークショップでは、一・五×二メートルサイズの紙を八名ほどのグループごとに一枚用意
しました。描画ツールは、一回目の個人で描いたときに利用したものをさらに拡張させ、段ボールやタ
オル地で作った筆、ボール、枝や葉を追加しました。また、校庭で録音した音はグループ全員で聴き、
前回のワークショップで感じた音や光を想起しました。グループで制作する際も、個人で描いた絵を参
照できるようにしました。

授業の中でアーティストは、「音と匂いに形や色をつけよう」と話しました。その際、子どもたちに
対しては、視覚的な例を提供しませんでした。

子どもたちが音と匂いについて、抽象的に考えるようになるのは難しいことでした。すぐに空（青
色）と校庭の芝生（緑色）に真ん中（太陽）の黄色の円が描かれた、大きな「風景画」を描くグルー
プも生まれました。アーティストは子どもたちの机を周り、位置を変えながら絵の構成を転換する提案を
しましたが、同じ絵を描き続けるケースもありました。

また、二回目のワークショップは二クラス合同で実施したため、クラスごとに教室を用意しました。
用紙は一・五×二メートルの紙サイズになるため、一つのクラスは生徒全員が床に座り取り組みまし
た。もう一つのクラスは四つのグループがテーブルで作業し、一つのグループが床で作業するように並



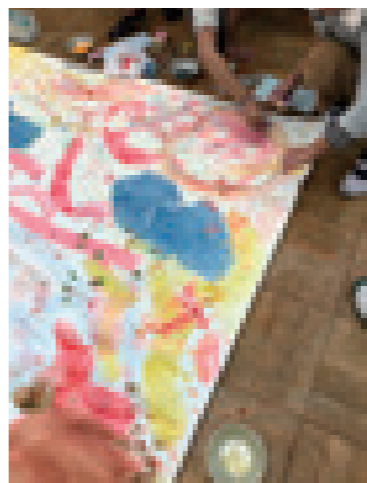
べ替えられました。テーブルで作業しているグループと床で
作業しているグループで、絵画に向き合う関係性が変わって
くることもありました。前者のグループは、遊びが少ない絵
画のようでした。テーブルの上に紙を置くことは子どもたち
の動きを制限し、紙の中央に到達することを困難にしていま
した。後者のグループにはよりダイナミックな動きがあり、
紙の中心に達するために這うようにこころみ、紙の全体に取
り組んでいました。これは、絵画のプロセスにおける予期せ
ぬ発見でした。テーブルの幾つかのグループを廊下の床に移
動するように誘い、絵画へのアプロ
チが変わるかどうかを確認しました。
より多くの交流とコミュニケーション
が生まれたことは明らかでした。

三回目のワークショップでは、グ
ループで描いた大きな絵と一人で描い
た作品の関係を考えることも子どもた
ちに伝えました。グループで描いたも
のと個人の作品との関係も、人の思考の中では大切な要素と考えられるでしょう。
最終的には、個人の作品をグループで描いた大きな作品と対置させて展示する
ために、個人個人の記憶を大切にしながら、また匂いや音の形、風の強かった初
日のワークショップを思い浮かべながら引き裂き、モビールにしました。音や匂
いの記憶を表現するために絵を裂く、そのためにアーティストは幅広い可能性が
あることを例示し、それぞれが特定の音や匂いと関連づけることができるように
しました。

●授業を終えて

大きな絵を描く途中、手に絵の具を塗って手形のスタンプをしたり、太陽や芝
生といった具体的な形を描きこむ子どもがいました。グループ内ではその是非を
めぐって、議論が交わされていました。「モノをそのまま描くのではないよ」と
言う声が聞こえてきました。五年生という成長過程においては、もう少し時間を
かけて、例えば音を描いてみると言う要素だけを抽出したり、それを元に人と話
してみるといった多層な過程があることが有効であるように思えました。

また、今回は透明水彩の絵具、ロールの和紙と日頃の絵画の時間には用いるこ
とのない画材を用意しました。筆もつかわず、ハンドメイドのダンボールの筆、
タオルのボール、スポンジ、枝などです。感じたことを表現するために、絵筆な



どの道具の段階で抽象的な思考過程にブレイキがかからないように、あるいは、筆でなければ絵は描けないと思っ...

今回の授業では、サポートの大人たちも、「カレーの匂いがしたからカレージャンケット、カレーの匂いから感じる色は？」などと、働きかけに苦慮する場面もありました。

そんな中、さまざまな過程を経て多くの子どもたちが迷わず色や形を構成していきました。出来上がった大きな作品は校内の展示会に展示されました。初日に制作した個々の作品をモビールにする際には、初日の風が強い校庭を思い出し、風を暗示させる作品も多く生まれました。

森の中に風景をつくる ― 緑小学校 ― 二〇一七年度

●こころみ

はげの森美術館と連携して、毎年、小金井市の小学校の子どもたちに美術鑑賞教室を行っています。美術館の展示に合わせて学芸員が学校を訪問して行前学習と、子どもたちが美術館を訪問して学芸員の解説を聞きながら鑑賞をするプログラムです。

この年、緑小学校の四年生は、児島善三郎が国分寺界隈を描いた風景画を鑑賞しました。児島善三郎の絵画は、樹木や田んぼが抽象化された描写でありつつ、樹木は樹木として、田んぼは田んぼとして全体の風景をかたちづくりながら迫ってくるものがあります。

「森の中に風景をつくる」は、児島善三郎の鑑賞体験からアイデアを得たワークショップです。描くという行為を通して風景もろとも体験する画家同様に、鑑賞者も身体全体で風景を体験しながら風景画を見る、迫るといふことが大切なのではないか？ と考えたのです。より深く能動的に体験する鑑賞と聞いていいでしょう。

同時に、外遊びの機会が減っている子どもたちに、自然素材を使つてのびのびと屋外で全身で造形をすること、鋸や金槌、釘など、普段使い慣れない道具を使って身体的な体験を拡張することも目指しました。そこでグループで行動しながらテーマを決め、相談しながら造形の過程を辿り、学外の公園に展示をすることにしました。

子どもたちの造形のために集めた材料は、サクラ、イチヨウ、クス、サザンカ、ケヤキ、キンモクセイなど、樹種も単調にならないように七、八種としました。長いものでは四メートルを超えるもの、太さも直径が一五センチメートルを超えるもの、細枝がたくさん残ったもの、葉がついたままのもの、蔓がまいたものなどおおよそ二トントラックに一台を用意しました。樹形や木肌も大切なマテリアルになりました。

●やったこと

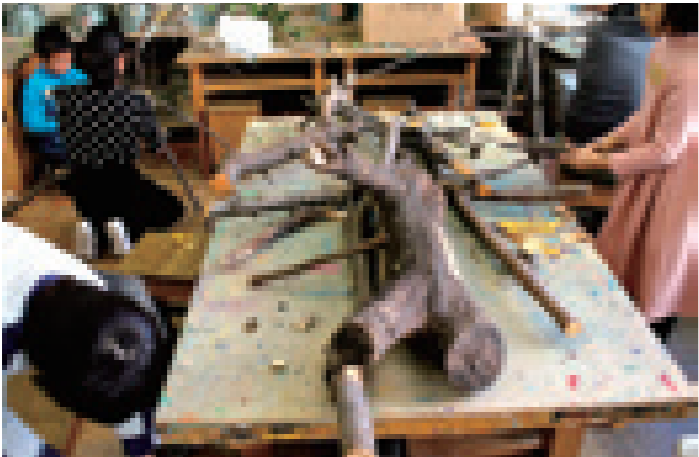
初日の前半は、一クラス六グループになって、展示場所となる浴恩館公園に出かけ、展示のアイデア

や展示場所を探しました。子どもたちはただ観察するのではなく、公園の中を走り回り、落葉や枝で遊びながら、全身で場所を体験しながら観察していました。

初日の後半と二日目は、教室に戻ってから、用意された大量の枝葉を見ながら、公園の様子を思い起こし、どんなものをつくつたらいいか、自分のアイデアを提案したり、お友だちのアイデアを聞いたりというやりとりをしながら、造形を始めました。道具の不自由さや大きな材料の硬さや素材の扱いにくさなどは、頭でひねり出すのではない新しいアイデアにつながり、思いもよらない新しい発見につながる場面もありました。

三日目はできたものを公園に運び、決めた場所に据え付けました。公園につくったものを運び込んだことで、「もっとこんなことができる」「こうしたい」

「あ、こんなことしたらおもしろい」を噴出させながら、自分たちの風景をつくりました。ひと段落したら、ほかのグループの作品をめぐり、「えっ！こんなアイデアがあるんだ！」と発見。大量の落ち葉を積み上げたり、川に見立てたりと、図らずも足元の落



◆本町小学校の目下先生がずっと連携授業をやられていたので、すごいなとは思っていたのですが、はたで見ているときはちよつときついかなど思っていました。今年度は、浴恩館の公園で造形遊び的なものはやりたいなど思っていたので、せっかくだから自然素材、枝などを使つてできるといいなと漠然と思っていました。

今年連携授業を行なった学年は、グループ活動というのなかなかむずかしくて、個人でつくることが多かったので、「グループでつくりよう」というのもこの機会にやってみることにしました。振り返りの作文にも、グループで活動することで、「普段話せなかった人と話せた」とか、「〇〇くんが何をしてくれた」とか「分担して作業するとすごいのができるんだなと思った」とか書かれていたので、それもよかつたと思います。



鈴木容子

連携授業では、やはりなんといつても、大人がグループに一人付いてくれて良かったです。「いろいろありがどうございました」「いろいろなアイデアも出してくれたので」と書かれた子どもの振り返り作文もたくさんありました。良かったですね。紐の結び方を習ったり、すごく楽しかったです。最近よく、ゲストティーチャーを招いて授業をすることがありますが、アトフル・アクションとの連携授業は、お任せじゃないし、一緒にやっていけるし、それぞれの大人が仕切ってくれる。造形に長けている人が付いてくれるというところがあります。それ以上に、授業のサポートに来てくださるみなさんはほかの学校でもやっているの、手慣れているというのか、子どもとの付き合いが

ち葉は絶好のマテリアルになりました。アルになりました。体を動かし、その結果として対象がさまざまな形を提示してくれること、それに触発されて新しいアイデアが生まれ、形が進化する、子どもたちにとっては、自分たちの動きと環境が呼応し変化を続ける得難い経験となりました。



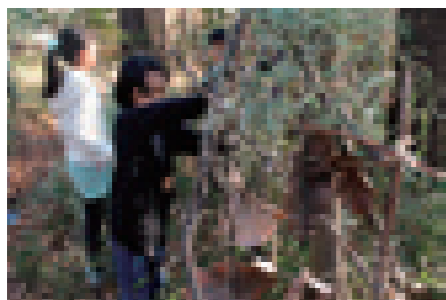
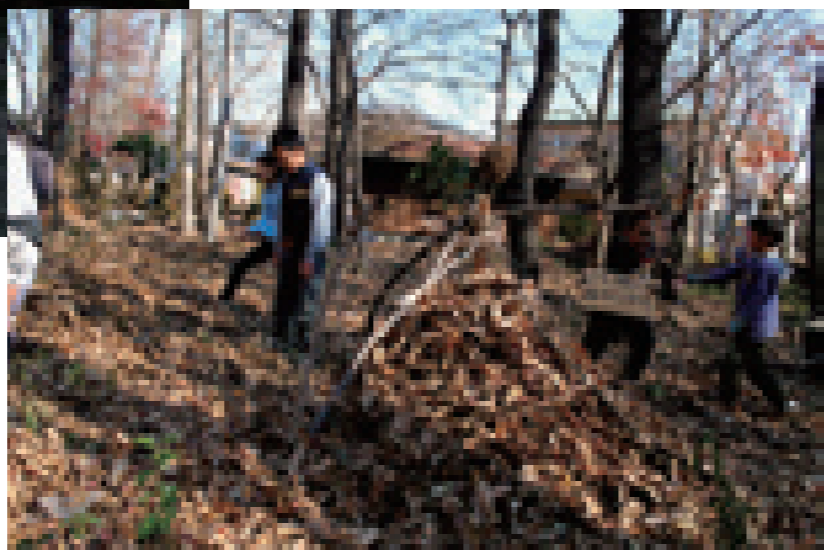
●授業を終えて
終了後、子どもたちから作文が寄せられました。作文には、共同してものを作ったこと、自然素材を用いたこと、自分のアイデアを聞いてくれたことに対する喜びなどが素直に綴られていました。

分かってきていらっしやるので、対応がとてもいい感じですが。適度な距離感。親だと、親子でやるうという場合や授業参観でも手を出してしまうこともある。なんていうのかな、やり過ぎちゃう、言い過ぎちゃう。やはりやらせてあげて、ちょっと困ったときに少しアドバイスしてくれたりだとか手助けをしてくれたり、「こうやるとどう？」という声掛けと距離感がすごく素敵だなと思いましたね。

大人の関わり、距離感と同じように、子どもの自主性の問題として図工ではずっと見本についても議論になりますね。あったほうがいい、ないほうがいいという。ただケースバイケースというか、その題材にもよるので。まったくある必要がないものもあれば、やはり何かの手立てとして、別に完成品でなくてもいいわけなので、ヒントになるようなものとか、それをヒントに「じゃあ先生、こんなふうにしてもいいの」という、広がるようなものであれば必要になってくる。そうなるのと、やはり対話ですね。見本というものがあるって、一方通行ではなくて、これが投げかけられたことによって、子どもたちからレスポンス、そして対話が生まれたらいいですね。私も長年教えることをやってきて、やはり子どもから学ぶことというのはすごく大きいですよ。子どもってすごいなというか、まだまだ大人みたいに固くない。

もう一つ、今回の授業で私がおもしろいなと思ったのは、森の中に展示する作品はつくっていくのだけど、公園に行つて落ち葉を見つけると、子どもたちは落ち葉で大きな山や川を作り始めました。その場その場にあるものを使って遊ぶ、造形するみたいなことがどんどん展開したのはすばらしかった。体を動かしながら、葉っぱの山の動きを見て、どんな形が変化するか。子どもたちの環境への働きかけに対して、葉っぱの山からレスポンスがあり、子どもたちの主体性が発揮され、どんどん能動的になっていく姿はとても魅力的に思えました。

※すずき・ようこ——緑小学校・図工専科。第四小学校と前原小学校の連携の際にも、図工専科の担当として、連携授業を行なった。二〇一七年度は、緑小学校で「森で風景を描く」を実施した。



▼作品を作っている間、色々つくりたいものを思いついたが、じっさいつくってみるとまくできなかつた。自然のものを使って体を動かしながらやれたので、とても楽しかった。
▼いっしょに活動してじっさいにつくって、本当に楽しかったです（ずっと浴おんかんに置いておきたかった）。

印象深いのは、以下のように、作りながら考える、手を動かすことでアイデアが育まれることを自覚したことが記されています。

▼最初はアイデアが浮かばなかつたけれど、作っているうちにどんどんアイデアが浮かんで来て楽しかった。

この活動を契機として、新しい風景に出会った記述もありました。

▼落ち葉のふかふかベッドを三つつくって、寝転がって上を見た時の風景がすごくきれいだったので、つくってよかったです。

▼まっつさんと活動して自然が好きになった。

友だちの作品を素直に認め、感嘆する声も聞かれました。これは自分自身も一生懸命制作したからこそ聞こえてくる声かもしれません。

▼ほかのはんの場所に行った時、ブランコやハンモックみたいなものに乗っても壊れなかつたからすごいなと思いました。おち葉で川をつくった時すごい発想だなと思いました。

▼最後に川を山に変えてしまいうちの発想もよかつた。

想起の遠足本町小学校編—本町小学校—二〇一七年度

◎こころみ

卒業を数ヶ月後に控えた六年生。毎日、通った通学路を新しい目で見つめ直してみると、いままで六年間の学校生活のこと、この街のこと、家族のことがどのように心に浮かんでくるでしょうか。

実際に街を歩いて見ることや造形することとおして、思いもよらない新しい発見や、折々に付随する色々な感情を思い起こす時間となりました。

また、家に帰ってお父さんやお母さん、保護者に子どもの頃の通学路



にまつわる思い出をインタビューするという宿題を出し、その結果を授業で発表するという機会もつくりました。同じテーマについて世代を超えて考えてみることで、描写される風景に時代の差を感じたり、暮らしの移り変わり（畑の肥溜めなど）に思いを馳せることとなったり、自分の日常をとらえ返す機会になりました。

◎やったこと

一回目のワークショップでは、通学路別のグループになって、自分たちの通学路を地図で表現してみました。地図は家にあった新聞広告の裏紙、学校の授業で使った模造紙など、生活にあふれている紙を使いました。紙のサイズは最初から大きなものではなく、描きたい内容に合わせて継ぎ足していく方式にしました。そうすることで、定めた用紙サイズの中に現実を詰め込むのではなく、必要に合

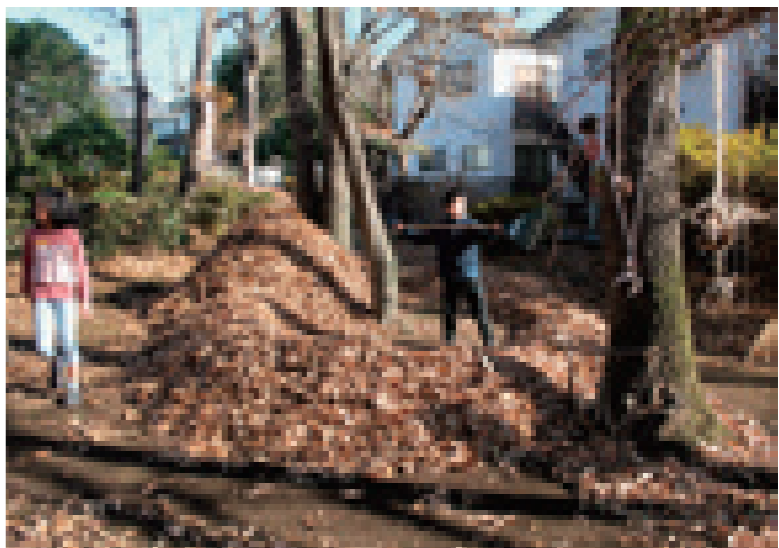


わせて拡張していくことができました。

地図の起点を学校に据え、行き帰りの道程で楽しかった場所や気になる場所、六年間見ている謎の場所などを、授業のゲストとして来ていただいたアサダワタルさんに説明するように書き出していきました。なかにはスケールをきちんと考えて、定規を使って描くグループもありました。本来、通学路ではないけれど、子どもたちだけが知っている、内緒の裏道を描き出す子どももいました。

ひとしきり描き終わると、今度は絵解きとして、その通学路での発見や楽しみ、謎、自慢したこと、通学途中の友だちとの会話などについて、リズムよくみんなに発表していきました。いつも学校で会う友だちの、知っているようで知らなかつた通学路の発表に、クラス全体で盛り上がりました。子どもたちが描いた地図は、モノとモノ、場所と場所の配置関係だけでなく、ビルを立体化して見たり、目印となる建物を詳述したりと造形的にも工夫が凝らされました。

二日目のワークショップでは、一回目のワークショップで友だちが描いた通学路の地図を片手





に、別の通学路を使っている子どもたちが歩いてみます。さほど広くない学区です。また、友だちの家に遊びに行くこともあるので、未知の場所ではありません。しかし、改めて友だちの家を見たり、前回の絵解きの際に語られた会話をトレースしたり（ああ、扉を超えたほうが学校に近いって言ったよね……）、数年前の記憶（二年生のときに栗畑で栗を拾って帰ったけどあれは時効かな……）が反芻したりする中で、風景を新たに眼差しました。

散策後、学校に戻ってから見つけたコト、モノをお友だちが描いた通学路の地図に書き足していきました。一回目と同様にお友だちの通学路の地図を絵解きでプレゼンテーションをしたところ、自分の道をプレゼンテーションしたときの盛り上がりとはまったく違った絵解きになり、親しんだ場所とそうでない場所を紹介する際の差がはっきりとわかりました。最後に、三日目のワークショップに向けて、一つ宿題が出されました。家に帰って、お父さんやお母さんに通学路の思い出を尋ねてくる、というものです。

最終日は、一人ひとりが仮設の舞台上に登り、宿題で聞いてきた通学路にまつわる思い出を話し、みんなで共有しました。発表の際は、ゲストのアサダさんと、ミュージシャンの松村さんが奏でる音楽に合わせてリズムよく発表していききました。子どもたちがお父さん、お母さん、おじちゃんや身近な人から聞いた通学路を遊びながら帰った思い出は、子どもたちと同じように感じました。また笑いを誘うアクシデントや、今となっては街で見かけなくなったモノ、コトの風景も発表され、家庭での対話の様子が目に浮かぶようでした。この発表を経て、発見したこと、触発されたこと、拾ってきたものなどを使って、これまでの地図をより立体的に編成していきました。自分の記憶、保護者の方々の記憶、お友だちの記憶などが合わり、今を生きる子どもたちを包むさまざまな層が結果として表現されることになりました。

●授業を終えて

多くの子どもたちは、通学路を何気なく通っていて、今回の取り組みで改めて見てみることで見過ごしていたことが



たくさんあったことを書いていました。また、保護者との対話を楽しんだ、知らないことがたくさんあったと書いていた子どもも多かったです。

▼いつも当たり前前のこと、他の人から見たら、当たり前ではなく、他の人の当たり前も自分から見ると当たり前じゃないから、通学路の新たな発見があって新鮮だった。

▼最初はなんて通学路なんか書いたり、たんけんしたりするのだろうと思っていました。でも、給食の時「子どもたちがどんな世界を見ているのか知れたかった」といわれて、なるほどなと思った。

保護者へのヒアリング結果についても、楽しく聞くことができたようです。これは思いもかけずなくなってしまったものをあげる保護者も多く、子どもたちは驚きとともにそのことを聞きました。

▼父や母の話を聞いて、小学校の頃の通学路の思い出は記憶に残るものだなと感じました。……同じ通学路でも注意してみるといつもと違う発見がありました。

▼二回目の他の人の通学路を通ってみよう、では、他の道を通ること、新しい発見がありました。こんなところにこんなものがあったんだ、と思うようになると、自分の発見があり、その場所にもう一度行って確かめようと思えました。

▼三回目は、自分の通学路の思い出を柱に立てたり上から吊るしたりしました。芋虫などが上から落ちてくるという話が多くて驚きました。

▼大きい紙に書くのは初めてだったのでとてもびびり描けてよかったです。

▼一回目の図工では、みんなの学校から家まで調べた帰り道は、色々な、内緒の裏道などの、先生に言えない秘密がわかりました。

▼自分の町なのに、自分の知らないことがたくさんあった。その町の発見を紙に書くことで、その発見が心にずっと残ると思う。

▼地図を書いているうちに、一年生の時の思い出がたくさん出て来ました。

アーティストへの関心を持った子どもたちもたくさんいました。

▼アサダさんがギターをひいていて、とてもかっこよかったです。ぼくもひいてみたいです。

3

モノとコトをつくる

植物になった白線@本町小学校 ―本町小学校―二〇二一年度

●やったこと

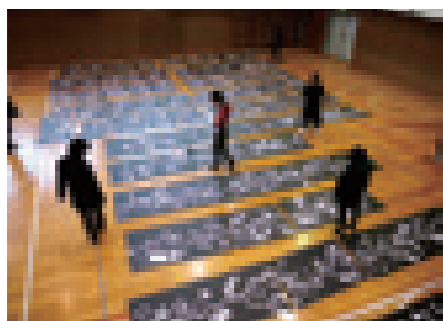
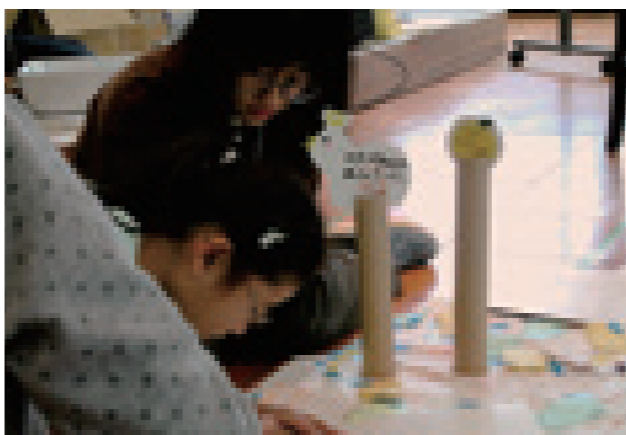
小金井アートフル・アクション！事業のアーティスト招聘事業で参加していた浅井裕介さんをゲストに、六年生の子どもたちと道路の横断歩道の白線の素材を使って植物の絵を描き、それをパーナーで路面に焼き付ける活動をしました。

授業では、「個人」と「クラスごと」の作品がつけられました。切り出しのワークショップを平日の授業で行い、焼き付けは休日などの二日間で行われました。一回目の焼き付けは、休日に公開制作の形で市民や近隣大学の学生などさまざまな参加者によって行いました。作品はどの教室からいつでも見える絶好の位置に配置され、また裏口の駐車場スペースの外から見るところにも作品が生まれました。

二回目の作品の焼き付けは年末のとても忙しい時期（そして寒い）にもかかわらず、担当の日下先生たちのご協力もあり、たくさんの方が集まりました。一回目の公開制作を見て興味をもった低学年の子どもたち、近隣の別の小学校の図工の先生方、スタッフの子どもや友人、六年生の家族などたくさんの人たちの手を借りて大きな作品に心を注ぎ込めていき、結果、本町小学校六年生の子どもたちとの卒業制作として、校庭の二辺にぐるりとそれぞれ一〇〇メートル近くの大作が完成しました。たくさんさんの生き物がひしめく生命力にあふれた植物が完成しました。

『森になった白線@小金井』より ―日下美和（本町小学校図工専科）

子どもたちは「描くことに真剣に取り組む人」である浅井さんに出会い「何か」を感じ取ったようです。その様子は、子ども感想からもうかがえます。浅井さんが描いた感想用紙に触発され、それぞれが工夫した絵画的な表現に挑戦しています。





白線の焼き付けは休日でしたが、たくさん子どもたちが訪れました。浅井さんだけでなくボランティアの方たちと触れ合いながら、楽しんでいました。焼き付けは二回ありましたが、両日も訪れた子どもたちもいました。

自分のつくったものが焼き付けられているのを見つければ、「やったー！自分の子どもが本町に入学したら自慢できる！」と喜んでいたり、サインをもらったり、一緒に遠慮しながら写真を撮ったりと、触れ合い楽しむ様子も見られました。それから兄弟姉妹を連れて一緒に制作したり、親を連れてきたりした子もいて、この活動が子ども本人だけでなく家族の中でも広がっていった様子うかがえました。二回目の焼き付けにはほかの学年の子どもたちもやってきました。校庭に焼きつけられた白線を見て興味をもったようです。ボランティアの方たちや、初めて知り合った子どもたちも作品を通して親しくなっていました。浅井さんと六年生の子どもの出合いが、「植物になった白線」を通してさまざまな広がり、人と人をまた結びつけていく……そんな活動でした。これからもどんどん植物は成長しているいろんな人を結びつけていくのですね。

植物になった白線@南小学校 二〇二二年度

● やったこと

本町小学校での制作をへて、二〇二二年には南小学校でも「植物になった白線」プロジェクトを実施しました。焼き付けを行う場所は、ひろく市民のみなさんも参加してもらえるようにしようと、校内を横切る市道に、子どもたちが切り出した植物を焼き付けました。子どもたちの制作は、本町小学校の制作時と同様に自分の作品を一人で切り出しましたが、途中、お隣の友だちと交換をするなどで、「自分の作品」というより「自分」と「みんな」が意識される機会となりました。また、個人の作品だけでなく、クラスで一つの大きな作品を切り出し、体育館での学年全員のパーツづくりも実現しました。この経験は、「私の経験」を超えて、大きな広がりの中で自分自身の作品を意識することにもつながりました。

焼き付けは休日に行い、学校の授業というより、学校を舞台としたアートイベントさながら、地域の活動となりました。このときに初めて浅井さんの作品に出会った人や、小金井アートフル・アクションの活動に出会った人もたくさんいました。焼き付けの日には雨が降ったので、濡れたアスファルトに雑巾がけをするなど、子どもたちにはもちろん、大人たちもずいぶん頑張って制作に取り組みました。

南小学校の焼き付けは、その後、小金井の市政五五周年事業の「未来の小金井へ！コガネイの地上絵制作プロジェクト」に展開し、小金井中に地上絵を描こうという活動に展開していきました。

音の贈りもの 一前原小学校+第四小学校 二〇二二年度

● こころみ

次から次へと大量にものを使い捨てられていく今日の消費社会、親と子どもが世代を超えて、一つのを修繕しながら使い継いでいくという行為はほとんど見かけなくなりました。住宅ですら三〇年程度で建て替わっていく中で、私たちは使い継ぐに値する大切なものを身の回りから失ってしまったのかもしれない。また今日、インターネットやゲームなどのバーチャルな要素が生活の中に占める割合が年々増し、モノそのものもつ風合いや存在感と向き合う時間が加工されていない素材から自分で発想してモノをつくる機会が少なくなっています。このようなことを背景に、「人に伝え継ぐこと」「時間をかけて育てられたもの、生の素材」を用いることを主題として造形活動を行い

コガネイの地上絵のとき、

誰かに言われたんだけど、「コガネイの地上絵」の制作にはたくさんの方が参加したけれど、「これって結局は浅井さんの作品だよ



鈴木佳子

ね」って。ああ、そういう見方の人もいるんだなと、私も思ったの。参加した市民の人たちが作ったものなんだけど、結局、総指揮をとっているのは浅井さんなので、浅井さんの作品らしいものになっていく。その中で、例えばさっきの順子さんが言った、子どもたちの絵に手を加えてはいけなかったという話を考えると、子どもたちだけで描いたりつくったりしたら、ああいう形にはならないし、「すごい！」ということにはならないじゃん。何かいっぱい集まったぐらいのものになっちゃうと思うんだけど、浅井さんが指揮をとっていることによって、自分もその一部になって、いいものが出来上がった感じが生まれる。自分たちのテンションも上がることになるわけよ。自分たちだけでやったら「うーん、こんなもんか」ってなったところを、浅井さんが指揮をとってくれたことによって、テンションが上がるようになるというのは、私はそれでいいんじゃないかなって、ちょっとその意見にアンチとして思ったのね。

作家と一緒に制作することが一つの経験となって、じゃあ次は自分でやってみようみたいな風になることもある。自分はまた浅井さんと違う何かができるかもしれないと思ったりとかすることも、ある種経験なんじゃないかなと思う。結局、個人でやれることと、団体でやれることの違いなのかもしれないけど。何が言いたかったって言うと、順子さんが大人が手を出すことについて話したけれど、大人が描いちゃいけないわけじゃなくて、順子さんが手を加えたことによって、私の作品がすごい素敵になったと思う人がいるかもしれないってこともあるよねって。学校のワークショップもね、大人と子どもの関係を考えたとき、私が

参加することが果たして良いのだろうか、ずいぶん自問自答したうえで参加したの。本町小の写し絵をつくるプログラム。グループに大人が入って、子どもたちをまとめていかなければならない責任感を必要以上に背負ってしまっただけで、それができないから、心の中では常に「ごめんね」と謝り続けているような状態になってしまった。

でも昨年度の振り返りの会で、「責任を負おう」と考えるのは私のエゴイズムにすぎないと反省したの。というのも、子どもたちは自由な発想ができるのに、それに対して私が何か方針を決めてしまうのは勝手な思い込みなんだよね。だから今年度の第四小学校のワークショップは、ゆるやかに、みんながやっていることを良く見ながら進められた気がしています。

アーティストとかスタッフとか大人とか子どもとか、自分の立場に縛られることはなくて、どのようそこに関わっていきたくてことなのか、なにかと思っています。そういうものを作ったら合格とか、人に褒めてもらえるとか、そういう活動ではないということがわかるまでにだいぶ時間がかかりました(笑)

*すずき・よしこ——出版社にて少女漫画雑誌や俳句・短歌の書籍の編集をしていたが、震災を機に地域で働くことを決意し退社。現在フリーの編集者。立川から大田区まで続く河岸段丘である国分寺崖線（通称はけ）周辺の自然やカルチャーを伝える情報誌「き・ま・ま」を発行するリュエル・スタジオ代表。一児の母。はけの文化を残す「はけの学校」や、夫の「はけの道学習室」の広報なども行っている。NPO法人アートフル・アクション市民スタッフ。



ました。

授業では、自分が大切に作ったモノを人に手渡したり、人が大切に作ったモノを託されたりすることを通して、自分自身の存在や人の存在を意識すること。そのことが生きていくよすがになるのかもしれないということ。そして、長い時代の流れの中の今を自分たちが生きているということ。親や祖母の時代の延長に自分があること。また未来に向かってまだ見ぬ他者との出会いを想像することで、社会や世界の広がりを意識するといったことです。

ただし小学生が多世代に渡ることをイメージすることは難しいだろうと想定し、近隣の小学校で中学校区が同じ第四小学校と前原小学校の連携授業としました。まだ見ぬお友達同士でそれぞれが作った楽器の音を贈り合うという行為を通して、まだ見ぬ他者に使い継ぐということを心に留めてもらいたいと思いました。

●進め方

1ー技法、材料をめぐる

楽器の素材は、加工していない生な素材を可能な範囲で収集しました。自然素材の形だけでも新鮮味や驚きがあり、造形の意欲につながりました。オニグルミ(秋田県)、ひょうたん(群馬県)、切り出したままの板材、直径一〇センチメートル以上の枝など(長野県)、小枝(埼玉県)、竹(東京都)、銅材(埼玉県)、足場材の廃材(広島県)、サンゴの死骸(与那国島)などの素材を日本各地から調達しました。音を描くプログラムでは、日本画の画材を用いました。自然素材のもつ風合い、水の配合、膠にかわの配合などで変わる繊細な道具で「音」を描きました。



これらは同じものが一つとしてないこと、多様な形が造形のきっかけになること、なによりも、子どもたちが生まれる以前から存在していた樹木、使い継がれた板材、新しい世代の元となる種子である植物の実など、長い時間について考えてみることでできるものを選びました。

2ー授業の進め方

スタッフは事前に、子どもたちが材料の加工するにはどの道具が適しているのかという実験を行い、それをもとに素材の扱い、児童へのサポートの方法、授業の進め方などを話し合いました。また音が出る仕組みについて学んでおき、そのうえで素材をもとに大人が助言しまし

た。

電動工具類は扱いに慣れた大人が担当し、それ以外の鋸のこぎり、鉋かま、金槌、錐きり、小刀などは積極的に子どもたちに使ってもらいました。各グループに一人の大人が伴走することで、怪我なく造形が進むようになりました。ホットボンドやガムテープなどは極力、使用しないことにし、つながらないモノをどうやってつなぐのか、すぐには答えのない問いかけを、モノを前にして展開しました。



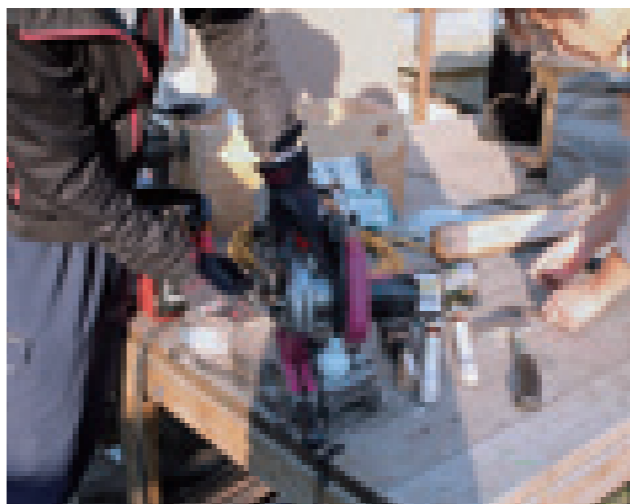
また、自分の楽器が奏でる

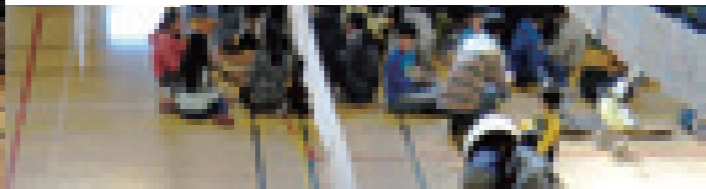
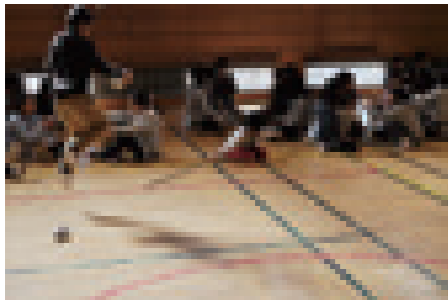
音を描くというころみは、音という、本来、留め置くことのできないものを感じた心のありようを、もう一度、絵画として表現するという過程として設定しました。子どもたちは音のまえて立ち止まり、自分の楽器が生み出す音を心に留め、それがどんな世界なのかを熟慮し、描きました。美しい絵がたくさん生まれました。

発表会の日、相互の学校で自分たちがつくった楽器で演奏を行いました。子どもたちには初めて出会う人たちに遠慮と戸惑いの様子も見られましたが、神経を張りめぐらせて、むしろ前のめりに、秘めた関心とお互いに楽器をつくった経験から来る共感を感じている様子うかがうことができました。

●授業を終えて

子どもたちの感想の中に「音を絵で表せば、耳の聞こえない人でも、その音がなんとなく分かるから、いいなと





思いました」という一文がありました。モノをつくるということは、その過程にさまざまなコトが生まれます。お友だちとのやりとりやアクシデンツの解決、さらに、この感想からうかがい知れるような他者への想像がこの授業を通して生まれたとしたら、とても興味深い経験であったと言えるでしょう。

楽器の造形の際にも、音を描く際にも、「それ、おもしろそう！」というアイデアをほかの形で展開している子どもたちがい었습니다。図工専科の先生からは、「今回の授業の趣旨である『伝える』ということとは、大事にして引き渡すという意味だと思う。モノをつくるるとき、色々な刺激を外から受けているわけで、まったくのオリジナルなんていうことはあるのかなという疑問がある。よい部分、うまくいかなかった部分ともに次の人が引き継ぎ、次の発想や創造につなげて、それをみんなが楽しみ、いいものができたことを喜べるというようあり方にもついでいけるといい」というコメントもありました。

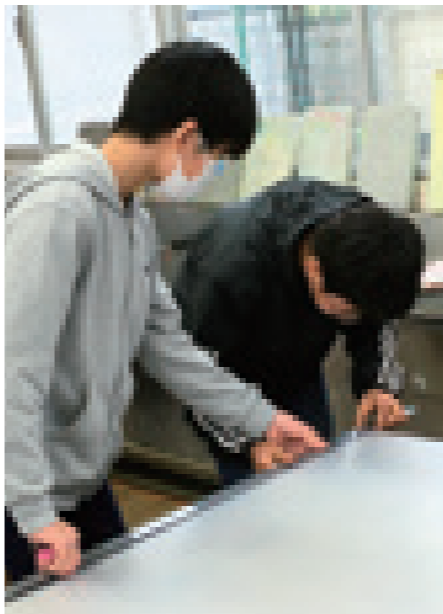
前原たてももの園をつくらう！—前原小学校 二〇一六年度

◎こころみ

六年生の二クラスを二名のグループに分け、それぞれのグループのメンバーが三日間で小屋を建てました。このワークショップに招いたのは、建築家の前田幸則さんと藁の造形などを研究されている瀧本広子さんです。

意のままにならない、扱いにくい大きな材料、柔らかすぎて切りにくい材料を使って、それぞれが協力しなければ先に進まない工法など、不自由さが課される中で、それぞれの子どもたちが解決策や妥協策を見つけていくプログラムとなりました。

この授業の大きな特徴は、白紙の状態から形を立ち上げるのではなく、プロトタイプとして与えられた材料を組み立てるということです。一見すると創造性が



西村徳行

連携授業の可能性——「接続」と「断絶」より

◆**学**校との連携の問題。これには二つあって、普通学校で行われていることとどう「連携していくか」という問題が一つ。当然学校ですべてを行うことはできませんから、「モノとの関わりをもう少し深めたい」という時には、こうした学外のプログラムを導入することはとても良いことだと思います。今一つは逆に、学校とどう「連携しないか」という部分ですね。たとえば強風で壊れてしまった小屋は、まさに学校の普段の勉強とは連携しない体験だったろうと思います。

学校では充実感や成功体験が大切にされています。けれども実際の世界には不条理なことはしばしばあって、あれだけ一生懸命つくった小屋なのに強風に煽られて潰れてしまった。これは普通の学校教育ではなかなか体験できないことです。学校では、むしろ「失敗」はなるべく体験させないようにしているんです。ただそれでも図工の時間では、一生懸命やってもできなかった子と、いいかげんにやってもできちゃった子が同時に見えてしまう時があって、これはとても大切な時間だと僕は考えています。今回のプログラムは、そうした不条理なことが起こりやすいプログラムだった。あの強風の中でも中止しないであえて続行したように、学校教育では予想され得るマイナスイメージの結果に対してどうしてもブレーキをかけがち

求められないように思われるのですが、枠／制限の中で何かを追求することで、ゼロから考える過程より気づいた点に留まり、深めることができると考えました。

大きな空間の中で、プロトタイプとして与えられた材料を用いてグループでつくるとき、必要となった作業は、一八〇〇×九〇〇ミリの柔らかい素材を正確に切る、四メートルの竹を竹割り機で裂き、面取りをする、同じサイズの角材を数十本切り出し、同じビッチで穴を開けるといった地味な作業の積み重ねが求められるものでした。その際、鉋や鋭利な小刀を使うなど、通常の図工の授業の枠も超えているものでした。これらの作業を通した経験は、プロトタイプがあるからこそ有無を言わず必要になることとです。自由に発想していたら、面倒なことは避けておろすこともできるし、そもそもそのようなことが必要になることに出会うこともありませ

ん。その点でも、プロトタイプの導入は新しい可能性を示していました。

課題としてあったのはグループワークでした。グルー



かなと思います。

そこにはアートフル・アクションのような、あるいは外部から参加しているアーティストのような、何人かの適切な「翻訳者」も必要かもしれません。図工に対する学内での理解度は非常に低くて、もしかすると社会との連携の方が簡単ではないかと感じるほどです。けれども子どもたちが、学校の中でいろんなことを試しながら何かを表現していく場所を確保していくことは、やはりとても重要だと思えます。

意味が伝わらないことはやめましょう、ちゃんと項目立てて、根拠をもって語れないことはやめましょうという今の風潮の中では、図工の旗色はますます悪くなっています。実は今度の新しい学習指導要領でも「考えてつくる」ということを強調しています。そうするとゴールイメージを持った制作しかできなくなり、先ほどのスズランテープで遊んでいるような子どもたちは、学校教育から外へはじき出されてしまう。しかし学校は、そういう感性をもった子どもたちが生きられる場所でもあってほしい。そのためには学校の中だけではなく、外部からいろんな方々に参加してもらいながら、誰もが生きられる場所としての学校教育をつくっていく

たらな、と考えています。

◎プログラムに見る「モノづくり」と「コト起こし」
僕は前原小学校の「小屋を作ろう 前原たてももの園」を見学させていただきました。その日はすごい大風で、もう中止になっているのではないかとドキドキしながら会場に向かうと、なんとやってくるんですね（笑）。子どもたちがすごい顔をしながら、風の中で小屋を建てていました。女子たちが中に入って指示を出し、男子たちが外で材木を切るといったグループもあれば、一棟一四人と人数が少し多かつ



井上麻衣子

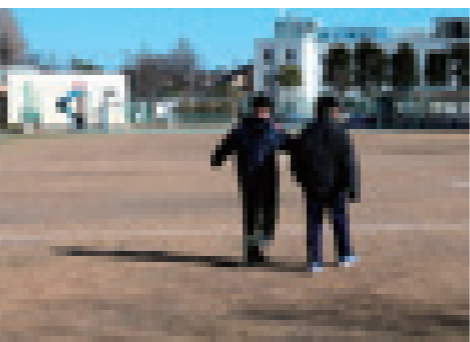


❖ ス
ズランテープの男の子の、風になびくテープがどんどん長くなっていったのが印象的でした。そうやって様子を見ながら、本当は小屋の組み立てにも参加したいんだろうなって感じました。本当に初めてアートと街が組み合わさってるのを実感して、その作品自体、つくって終わりじゃなくて、本当に生きてる、生き続けている感じとか、ものによって風化しているとか、外にも内にも広がっているというのを実感してるところが大きいかな。いわゆる美術館やギャラリーに見に行くアートじゃない、アートを体感して現在進行形みたいな感じ。一緒に生きてる。同じ焼き付けされてるものも、違う自分で見てるから、時間の経過もおもしろいし、そのなかで新たな出会いがあったり、またべつなこと結びついたり、色々派生してつなげてみたいなのがおもしろいかな。

家族も、とにかく私がはまって、子どももおもしろくなったので、巻き込むしかない、この楽しさを共に感じたい。もうこれは！という感じで、ちょっとずつタイミングを見ながら、引き合わせて体験させたいという感じですかね。五五周年のときは夫も巻き込んで。やっぱり、実際に自分も動く、目に見える形になると楽しいですよ。普段あまりアートという感じじゃない人も。五五周年の時には新聞をつくったけど、一般の街の人、市民みたいな一般的な話を聞きたい要素が欲しくて、ちょっとついたりして。そういうのは参考にはなるかな。逆に全然関係ない人だから、参考になりましたね。

私はこのチームのサポートを担当していて、その子には「風が見えるね」と話しかけたりしていたのですが、小屋ができあがったときに屋根の窓から二人の女の子が顔を出して、その子に「おーい、そのテープここに持ってきて」と声をかけたんですね。で、その子と一緒にスズランテープを女の子たちにつなげてあげたときに、テープの男の子がとてもいい表情を見せてくれた。それが忘れられません。

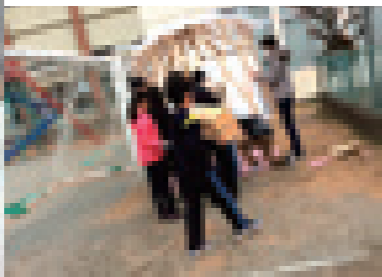
*いのうえ・まいこ——私は週に二回森へゆく。寂しい時はアイスを食べる自他共に認めるヘナチョコ。いつも周りに助けられている。そこから生まれる人と人、こと、もの、自然とのつながりが廻りゆくのを感ずるのをおもしろい。人を含めた自然愛をもち続けていきたい。不自然なことはしたくない。滞りをほぐし間に良い流れをつくるの好き。人を笑顔にできると嬉しい。自分はどんな存在で何がしたいのか、ぐるぐる考える。ひとりひとりが心の中で大切にしていることを大切にできたいいなと思う。



河野路



❖ 工の時間は、多かれ少なかれ何かを
つくりだす時間ではあるわけですが、連携授業はそれとは違う。普段学校の中にな
ない人との出会いや、自分たちの身近にある自然
物などでも、学校にいない人がそこで関わること
でいつもとは違う側面をその中に見たりしてい
る。それがいつもとは違う、何らかの新しい出会
いになる。材料、素材も野川の周辺にごろごろ落っ
ただけども、普段何気なく見ていたものであっても、それとガツツリ向かい合っ
てつくるという方法でやってみると、あ、こういう材料だったんだ、素材だったんだとい
うことがわかる。それは関わっている人たちがいて、その魅力を知っている人たちが
いて、一緒に関わる中で知ること
ができた。



子どもたちが日常に触れる人
というのは、ある程度限られて
いて、どんなにその範囲が
広い子であっても、家庭・学
校・塾だったり、習い事だつた
り、ちょっとスポーツ系のこと
をやっていたりというところま
でがほとんどで、限られている
中で過ごしている子も多い。け
れども、それがまったく日常に
はいないはずの人たちが一緒に
活動して、そして「おもしろい
ね」と言ってくれることはすこ
く大きいことじゃないかな。
絵画教室にしたって、スポー
ツだって大人は「先生」。先生
じゃない人と関わるんだよね。
ここでやっている活動は、先生
と教わるという公式じゃない。
外部連携といっても、ほかは

●ここらみ

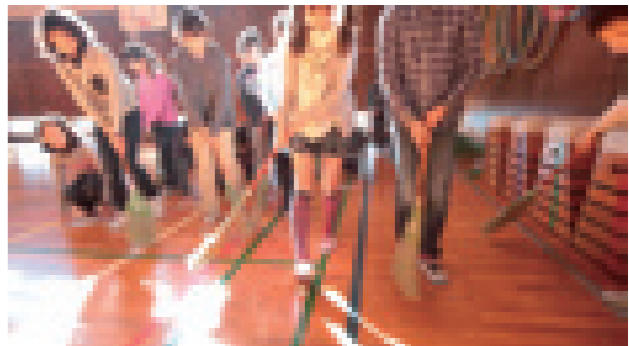
このワークショップのゲストはアーティストの岩井優さんでした。岩井さんは、日常の行為である清掃や浄化に注目し、それらがエスカレートしていく様子を「クリーナーズハイ」と名付け、これを主題に世界各地で作品を制作・発表しているアーティストです。国内外のさまざまな地域コミュニティに入り込んでそこに住む人々の行為に参加し、ともに実践する「参与的手法」を特徴としています。

この年は岩井さんと本町小学校の六年生がパフォーマンスをつくりました。アーティストとしての岩井優さん、制作過程を記録するドキュメント班二名が参加し、岩井さんは制作とともに撮影を行いました。パフォーマンスは、子どもたちが竹ぼうきで一列になって教室を掃く、雑巾がけをするといった掃除をモチーフにしたダンスですが、途中、子どもたちのクラブ活動や生活についてのインタビューをし、その様子を撮影したり、子どもたち自身がカメラを持って、この状況を撮影するという入れ子の構造が形づくられました。最終日には掃除のパフォーマンスをしながら校外にて行き、パフォーマンスを続けながら、そこに大きなバブルマシンの泡が吹き出され、その泡と熱狂的に戯れ、授業が終わるといったものでした。

通常の授業ではあり得ない時間となりました。五年経って高校生になった当時の学生は、事後のインタビューの中で、いまだにあの出来事が何であつたかわからないと話していました。他の事例に見るように、学校の中の明確な問題意識によってプログラムされたというより、子どもたちが体験したことのないことを日常に持ち込んだということについて、子どもたちが成長した時に、不可解さや答えのないことを、いわば白昼堂々と学校が実施したということとして想起されるのではないかと思います。それがあるときには、学校という自明の正しさの世界に大きな疑問が投げ込まれても良いということとして、子どもたちの中にメッセージとして残っていくことになればと思います。

●やったこと

子どもたちのクラブ活動をグループ分けの基本に据えて、ほうき班、雑巾班などに分かれ、体育館、廊下、教室で掃除のダンスを行いました。最終日にはパフォーマンスしながら校外に出て、路上で大き



している。

私は小金井に来て子どもを地域に返したいと思ってアートフル・アクションとつながろうと思いました。教員は異動してしまいましたが、子どもと地域がつながつていれば、教員がいなくなつたとしても、何らか、そこにつながりは残っていくだろうと思います。でも、マニュアルだつたらそれはないだろうなと思う。授業をゼロから立ち上げる大変さを感じる人は多いと思うけれど、それをやるからこそ、よさというのが出てくるんだらうと思うんですね。子どもが卒業したとしても、小学校でああいう出会いがあつた、この土地にはこういうものがあつて、そういうものを使って僕たちはこういうことをしたと、何か記憶が残るだらうし、その子たちが卒業してしまつても、学校と地域の人たちがやったとい

うことがあれば、何らか、そのあとでまたつながるといふ可能性も残していくんじゃないかなと思う。

*このころの、みち―前前原小学校、現東村山市南台小学校・図工専科教諭



なバブルマンシンの泡を身に受けて、踊りました。

次項(〇七八頁)に、この全五回の授業を観察したドキュメントを掲載しました。岩井さんの発話と子どもたちの反応を、観察者の主観ではありつつ、可能な限り価値化せず描写しています。また、同じ時間に同席した参加者の意見も取り上げました。全方位ではありませんが、出来事をどのように記述するか、興味ぶかい実験であると同時に、映像などとは異なる現場感を見て取ることができます。

ドラマチック図工時間—本町小学校—二〇一四年度

●こころみ

本町小学校六年生の図工の時間を利用し、「箱」というテーマから触発された「題名」をもとに、二〇分程度で発表する演劇作品をグループでつくりました。演出家、藤塚陽子さんをまねき、全三回の授業のうち、二回を準備期間、三回目を発表会とし、保護者も招待し、多目的室につくられた簡易ステージで披露しました。

演劇には、図工だけでなく、音楽や国語の要素が求められます。子どもたちの体験を「教科」で区切らず、枠のない一人の人として発想したり、創造したりする経験を得ることを考えました。また、本当に表現したいことを突き詰めてみるために、説明的な起承転結やリニアな時間軸をとる必要はなく、一瞬の出来事を表現してもいいし、時間軸が歪んでいてもいいということを伝えました。「箱」という一見して目的が定かではないテーマを選ぶことも、子どもたちの自由な解釈と、自分たちの表現を押し広げていくことを意図して設定しました。さらに、脚本、音響、照明、出演、衣装、小道具、大道具など、演劇に必要な役割とその内容を自分たちで決め、舞台に要求されるさまざまな役割を子どもたちが担うことにしました。それぞれの得意分野や興味が発揮される場をつくるという目的でした。

二回の準備期間と発表会前日に急遽行われたリハーサルで、演劇を完成させなくてはならないという状況では、大人が指導するのではなく、あくまで子どもたちと併走しながら、自分たちの持っている経験値やスキルを提供することで子どもたちのアイデアを引き出しながら、「それぞれの完成形」に至りました。

授業のサポーターは、音楽づくりをサポートするミュージシャンや図工が得意な方など多彩で、関わり方も一緒に舞台上に登る人、裏方として造形を手伝う人などさまざまでした。

●やったこと

授業の最初に演出家、ミュージシャン、NPOのスタッフが段ボール箱を使った短いパフォーマンス

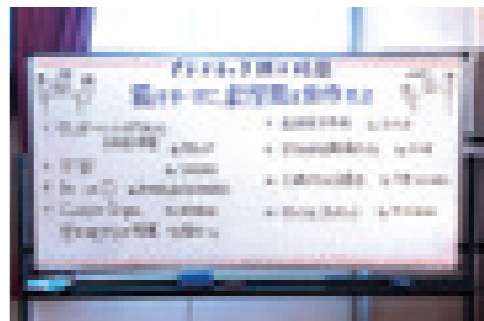
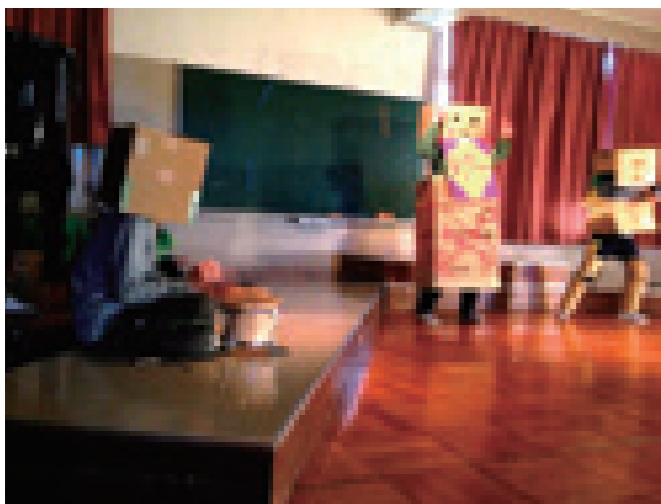
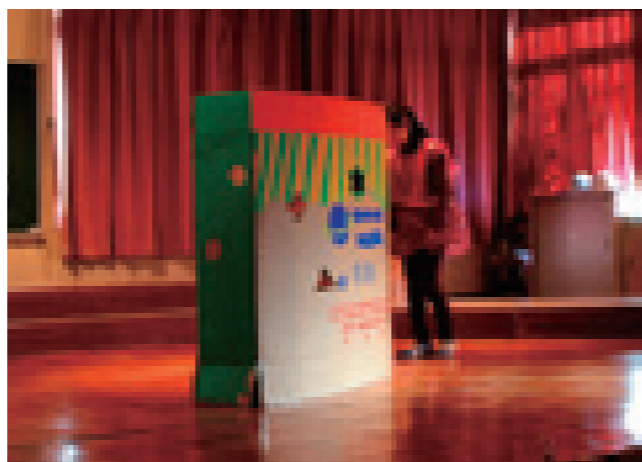
を披露し、子どもたちは、言葉のないパフォーマンス、起承転結や落ちのない表現など、型にはまらない演劇を体験しました。その後、子どもたち一人ひとりに「箱」をテーマにやってみようという演劇のアイデアを書いてももらいました。それを元に一クラス三つ程度のグループテーマをあらかじめつくり、その中からやりたいテーマを選び、グループごとに子どもたちに分かれてもらいました。先生がテーマを決めるのではなく、純粹に自分だけがやりたいテーマではないけれど、どこかに自分のテーマがすくい上げられているというテーマとグループの構成になっていました。

六年一組が五グループ、二組が四グループの九つのグループに分かれ、大人が一人ずつ、伴走しま

した。まず、

お芝居を成り立たせるための役割分担を大事にし、前に出てセリフ言うことだけが芝居ではなく、裏方さんもおもしろいですよと説明しました。子どもたちそれぞれの個性に合わせて選択肢があることが大事でした。

演劇に必要な役割があるということとは、図工、国語、音楽を下敷きにして演劇をつくるという活動に幅をもたせることができました。より細分化され、自分の得意分野を追求することができるようになる一方で、一グループに一人の役割では足りなくなってきたところ、特に照明などは、クラス全体の照明係が自主的に生まれ、ほかのグループ



に手伝いに行くようになりました。このことはハリハールを通して子どもたち自身でこうしたらいいんじゃないか、ああしたらいいんじゃないかとアイデアを出し合い、補強し合って、流れるように動き始めました。

本番には主役の女の子が急遽、欠席する場面もありました。台本も分かっている大人が「私がやってあげようか？」との申し出に、「いえ、大丈夫です」と自分たちでやったグループもありました。徐々に大人の手を離れていく、価値がある活動でした。このようなことは「形」のある演劇では実現が難しかったでしょう。劇の音楽も、学校の授業では音符をなぞる再現芸術系が多いので、一二音階にとらわれずに音が出せるよう、楽器にも工夫しました。音と音楽が豊かに展開していました。

●授業を終えて

子どもたちの感想を抜粋します。

▼「今日は、照明だけだったけど、LEDライトとオレンジ色のライトが綺麗に見えるように使い分けられることができてよかったです。ダンスのときには、ライトを全部点けたり消したりして、(劇が)たのしく盛り上がるようにも工夫して、攻撃される場面では赤などで表現することもできました。

▼アルミホイルを照明に巻きつけて光を反射させるようなことができました。自分でライトを持って、しゃべっている人にライトをあてて、聞きやすくなるような工夫もやることができました。ライトの種類を見やすくするように使えました。例えば、床にライトを置いて(人が)近くなっているときだけついたり床だけを明るくしたりするようにやれました。

▼ぼくは今まで図工は、楽しいという気持ちもなにもなくやっていたんですが、今回の活動では、図工は楽しいからやるような気がして、ふだんよりも一生懸命に、楽しくやることができました。また図工に必要なものとして、アイデアをたくさん考え、積極的に何事にも取り組み、チャレンジするということも学びました。

▼ぼくは、今回、演じて、どろぼうが土偶をぬすんで、妖精に土偶に変えられてしまう場面や、土偶が踊り出すなどの、とてもさん新でおもしろいアイデアを考えることができました。これからは図工がとて楽しくなるような気がしていて、最後に今回の活動はとても大切だと思ったので、また機会があればもう一回やりたいです。

感想を通して、担当の図工の先生より「ある生徒が自分の言葉で自分を表現したのを初めて聞いた。自ら工夫して、それをきちんと言葉で表現できたことは、この子にとって、私にとってもものすごい収穫でした」とコメントをいただきました。「教科」ではなく、その子自身の経験に全体として刺激となり、ささやかであっても変化が生まれる可能性を感じました。作文にこのように表現されましたが、それぞれの子どもたちの中に新しい出会いが生まれていることと思います。

4 みること、描くこと

六年生のわたし本町小自画像展 ―本町小学校―二〇一六年度

●こころみ

小学校高学年から中学に入る時期、子どもの心と体には大きな変化が起こり、自我との向き合いが始まると一般的に言われています。図工専科の先生と授業の打ち合わせを続ける中で子どもたちがつくった「自分の大切なものを使って、自分を表現する」という作品を見る機会がありました。そこに「大切なもの」として表現されたものは、ペット、スポーツ、アニメ、ゲームなどでした。身の回りの「モノ」を紙面に配置させることを通して自分を表現する作品から、社会的な記号を駆使して自分を表現したり、あるグループへの所属を記号を介して表明する、子どもたちのコミュニケーションの現状が見えるようでした。このことの是非をこの授業で問うことはありませんし、微妙に変化する年齢によることも大きいでしょう。しかし、もう少しこうした記号を用いずに自分を表現しながら心の中で自分とは？と問い返し、高らかに今の自分を皆の前に表現することを自分自身が肯定することができたら、記号に逃げこまずにいられる時間が確保されるかもしれないと思いました。

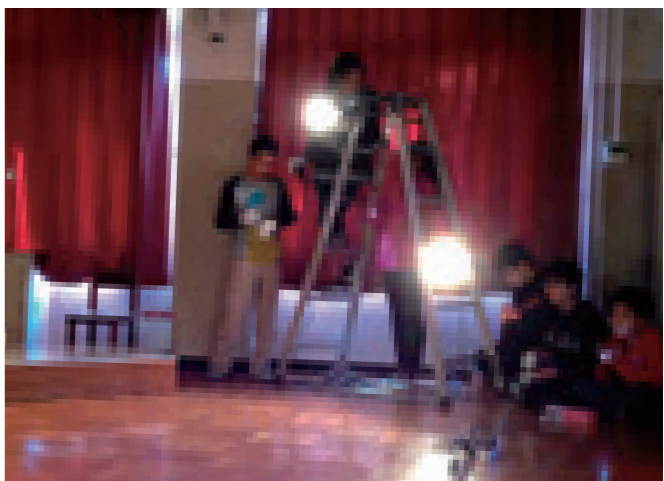
小学校の六年間の中、「自画像」というテーマは、何度か出あう課題でしょう。多くの場合、鏡を見ながら描き写す、似ている、似ていないが楽しい課題かもしれません。しかし今回の授業では鏡は使わず、「自分ってなんだろう」と考えること、そこにある「自問」が鏡でした。考えて出てきた自分、あるいは絵筆を動かす中で現れ出てくる自分、描く過程の内省がとて大切な時間であると考えました。半ば描く課題を通じて、内省せざるを得ない状況に落とし込まれてしまうという側面もありました。

この授業のゲストアーティストに、いちむらみさこさんをお招きしました。みさこさんはテント村に住み、社会の中のさまざまな状況に置かれた人たちとともに、その状況に対して表現を通して立ち向かっているアーティストです。

●やったこと

0 一準備 体験してみる、実験してみる

自画像を描くとはどのような行為なのか、子どもたちの授業を行う前に参加する大人





たちと「描くということ」について考える機会を設けました。参加した大人からは、正解（自分に似た自画像）に到達できないことで、自分は描くことが苦手だという発言が多くありました。似ていること＝上手なこと、という呪縛からどのように解放されたいのでしょうか？

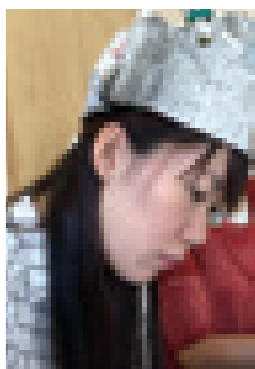
1 一心と体をほぐす
自画像を描くには、体だけではなく、自分自身と向き合うことになりまます。そこで、観念的になりすぎないように、リラクセスし、力まないで自分自信を表現することができるよう、授業は体操から始めました。腕を振ったり首を回したりするだけでなく、自分の顔や頭、体、足など、ふだんは意識しない自分を確認するために触れてみました。こうした体操はたんなるリラクセスのためだけではなく、絵を描くため、自分自身を知るための大切なエクスプレスでした。初回では、全員で描く予定になっていた10メートルのロール紙を肩より高く持ち上げ、そのトンネルをみんなで順番に潜りながら、紙の大きさも体感しました。

2 1だんだんと向き合う
一回目の授業では、幅1.2メートル、長さ10メートルの大きな紙にクラス全員で自分自身を描きました。描画にあたっては、普段の授業で使っている筆や絵具ではなく、スポンジやローラー、大きな刷毛、手や足、全身を使いました。パレットも使わず、ボールに直接、絵具を置き、色や形をおして自分の感情や自分に触れたときの感触などを思い出しながら描きました。スポンジやローラーなどを使うことは、自画像につきまとう「似ている、似ていない」＝「上手、下手」という概念や既成の自画像観にとらわれない子どもたちのアプローチにつながりました。また、大きな紙を使うことは、否応なしに身体全体を使い描くことになります。ふだんは矩形の描いの用紙に向けて自分とは何かを考えるような枷に嵌められた行為を解きほぐしていくことを意図しました。



制作をする場所は図工室や教室の机ではなく、多目的室という大きな部屋で、床におもいおもいに、ランダムに紙を広げました。一人ひとりのゾーンが決められるのではなく、左右や前に座る友だちの腕や足に触れたり、絵具が混じり合ったりすることを通して、一般的な矩形の紙に二次元的自分を描き出すことは違う感覚が生まれていくように見えました。スポンジやローラー、手や足で描く目や鼻と、まさしく顔貌が「似ている、似ていない」から飛び出して感情や感覚が露出し、紙に投影されていきます。それは、形態として「顔」的ではないものの、その子ども自身の反応や感覚が生じた状態で表現されました。

二日目と三日目は一人ひとりに手渡した画用紙にそれぞれ自画像を書きました。紙は短辺が七五センチ、長辺は九〇センチ以上と、六年間の中でも大きいサイズです。紙は必ずしも白ではなく、水色や黒色なども用意しました。描画のための絵具などは、前回と同様にボールに絵具を出し、筆は自分



菊地順子

◆大 学生の時から自分一人で制作して、美術館やギャラリーで発表して、それだけがアートだ、みたいに思っていたけど、ここにかかわって、アサダさんたちと色んなことをやってみて、こういうこともひっくるめてアートなんだ、クリエイティブなことなんだ、人と人をつなげることもクリエイティブ、自分の思い入れを人に語っていくことも、それも表現することなんだなど知った気がする。この活動で、本当にそういうひらめき、そうだったんだったと思うことが、すごくいっぱいあって、自分の表現活動にも影響があったり。

さつき佳子さんが言ったとおり、本当はゴールはない。でも、過程を楽しむというのが自分にはなかったなと思っていた。作品を仕上げなきゃいけないって思ってきた。でも自分の作品もどこまでが完成というのとは分らないはずなのに自分の中でこれで完成みたいに決めつけちゃっていた。小学校の制作では、別に完成されてなくてもいい、その過程が大事なんですよね。自分もそうだったか思った。

大学時代に絵画教室でバイトをしていて、教えることをずっとやっていて、小学校での活動はそのちよつと延長上という意識もあった。最初に前原小学校のプロジェクトに植木さんと参加したときも自分でグループを担当して、何かをつくってかきやいけなくていいときに、すごい迷いもあって、どう引き出していくんだろうと思った。見本がない子どもたちのアイデアを形にしていくのを、教えるんじゃなくて、引き出していくのはどうしていくんだろうというのはすごく考えた。

「想起のボタン」のときも子どもたちと子どもたちが見た街を描いたんです。でも、何か腑に落ちない部分もあって、私。この子たちと何をしたらいいんだろうって。今になったら、「あっ」って思うかもしれないことはすごくあるんだけど。何だろ。もつと話を聞いて、彼女たちの思っていることとかを導いてつくり上げていかなきゃいけないかったけれども、そのときは、自分も一緒にやっていくというのが最優先に出ちゃって、自分も描き加えていった。そこに一緒に子どもたちも混ざっていくという感じだったんです。でも、何か違うなと思って、もつと話を聞いてあげることだったのかな。ああ、いけないんだって、つい一緒に描いちゃうと、私の作品になってしまふって思ってた。宮下さんに描かなくていいよと言ってもらったことにあっそうだと思っただけです。二枚描いて展示しましたが、一枚目は結構私を手を加えちゃった。展示にきてくれた人から一枚目すごくいいねみたい言われて。ああこれは違ってた。すごくあのとき、反省、じゃないけど考えました。

*きうち・じゅんこ——アートとは表現するとは何かを考え、絵を描いたりつくったりする毎日を通しています。個展やグループ展等で作品発表しながら、アートフル・アクションでの活動を通して、絵を描くこと、つくること、表現するということは誰もができて、何も特別なことではないんだよ、ということを私自身でも何らかの形で誰かに伝えていけたらと模索中。人とカエルとりんごピアノが好きです。

の道具を使いました。

多目的室では、教室よりずっと伸びやかに筆を動かして集中する子ども、描けないと腕を組んで唸る子ども、周りを気にしながらお友だちと相似形のような自分を描く子どもなどさまざまでした。

工程を通して、並走する大人のサポーターは、床に座って描いている子どもたちを上から見下ろさず、隣に座って話をすること、上手という言葉で評価しないことなどを事前に話し合いました。

初日には、「どうしても描けない」と白い紙のままで九〇分を過ぎた子どもがいました。振り返りの会の際、参加した大人の中には最終回の展示をまえに、描けないという事はかわいそうなので、なんとか描かせてあげたいという意見と、描けないという事を肯定的にとらえ、いまの自分として堂々と展示をしたらいいのではないかと、いった意見が聞かれました。

また、顔を構成する目、鼻、口、髪型などがほとんど相似形の表現をするグループが、特に女の子の中に現れました。このことについても、良し悪しではなく、「二つの今」として受け止め、最終日の展示に持っていくことにしました。

3 一公園での展示

最終回となる四日目は、小学校の近くの団地内の公園を借り、本町小ミュージアムとして、展示を行いました。

描いたらクラスごとに積まれて評価されて家に持ち帰っておしまいではなく、自分が描いた自分自身を自分以外の人たちにも明らかにするためでした。そして、学内にとどめるのではなく、卒業を間近にした彼らの前途をひらいていくイメージと重ねることを願い、子どもたちが遊び、暮らす街に出て展示を行うことにしました。

展示は、二クラス作品をシャッフルし、いちむらさんとグループ分けをしました。相似形の自画像を描いたグループは、バラバラのグループに分けて展示しました。

学校から展示会場までは、大きな絵をおもいおもいに掲げて歩きました。二クラスの合同授業で、グループごとに公園のおもいおもいの場所を選び、ブランコ周辺、鉄棒などの遊具、樹木、地面などを使い展示しました。展示のために、シンプルな木のフレーム、紐類を用意し、裏打ちした自画像を展示しやすい最低限の部材を用意しました。あとはできるだけ子どもたちが、現場で工夫することを前提としました。

子どもたちは、今ここに生きている自分自身を外に掲げ、照れや困惑とともに受け入れたことが、授業を終えて書いた子どもたちの言葉からうかがえます。

●授業を終えて

子どもたちは大人の想定を超えて、鏡がないことや外に展示することを抵抗なく実現していたように見えました。事後の作文では、大きな紙を難しいとらえる子どもがいる一方で、今まで嫌いだっただが大きな紙だから描けたという記述もありました。二クラス合同で展示をすることで、もう一方のクラスの抽象的な表現に驚く様子が見えたりと、一クラス、一つの画用紙、決められた画材などを超えるだけ

で、子どもたちが感知することが変わることを見え、ちんととらえることは大切なことのように思えます。

▼僕は、今までに描いたことのないほど大きな紙に絵を描いてみて、絵で自分らしさを表現することは難しいことなんだなと思った。

▼今まで「自画像」は、鏡を見ながら描くものだと思っていたけれど、自分で自分を触ってみることでもっと自分がわかりやすくなり、描きやすくなった。そして自分のことを今よりもっと知ることができた。そして、その自画像を公園に飾ることで、大人の人とかにも見てもらうこととかができ、視界も広がったと思います。

▼今回、自画像を描くときのアドバイスだけではなく、心持ちなどといったこともよくわかりました。絵を描くというのは技術が必要だとばかり思っていたのですが、描くときに心境、感情をもって描くことの大切さが実感できました。

▼私は絵を描くのがキライだし、下手でした。ですが大きな紙に書いてしまえばそれほど目立たなくて、逆に静かな絵になってしまいました。なので自分がやっている習慣ごと、好きなことを書きました。そうすることで自画像自身が明るくなり、楽しさが増しました。(……)色、背景だけでも絵の雰囲気が変わることを知りました。

▼絵を描くことは手を使って描くのではなく、体全体で自分のことを考えて描かないといけないことを知った。絵を描くときに一つのパーツだけ書いて全体を完成させるのではなく、全体を考えてから一つのパーツをはめていかないと、いきなり知ってびっくりしたこと





は、美術のときにあんなに大きい紙に描くことです。自分の顔でその人の感情や伝えたいことがわかると思えます。

▼自分の描いた絵を公園に飾ると、自分の絵を客観的に見て楽しむことができました。

▼芸術や美術は、考えて描いたり表現するのではなく、感じたことや思ったことをそのまま表現すればいいんだというところが、この活動を通してわかりました。そのまま自分を描くのではなく、あらゆる角度から見ると、感じて、描くことで、今の自分を越えていけるのではないかと思えます。また、それぞれ一人ひとりの絵を見て、信じられなかったり、ありえないと思うところもありましたが、でも、それは一人ひとりの個性が出ていてすごくよかったです。

▼僕は最初、大きな紙を見て、簡単そうだなと思っていました。けれど、描いていくうちに、自分は周りからどう思われて、どういうオーラを出しているのかとかを考えていくと意外に難しかったです。

▼今回、自分を描いてみて知ったことは、失敗は失敗じゃないということ。絵を描いているときに、間違えたところが何個かあって、書き直そうとしたときに、スタッフが「これは失敗じゃないよ」と言ってくれたおかげで、間違えたところが嘘のようによくなりました。

▼自画像を描くとき、どう描けばいいのかなと思っていたけれど、自分が思ったことをそのまま描けばいいんだなということが学べました。

▼二組では、顔を描かないで、模様で心の中を表現していた人もいて、模様のほうが人に伝わることもあるということも学びました。

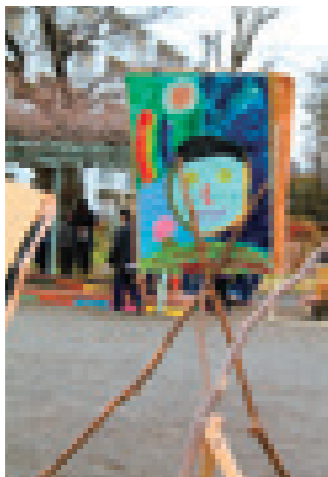


も、今、この子、というふうを受け止めるのであろうかという気がしたんです。みんなが違わなければいけないというはある意味パッケージだし、あれはあれで、あの子たちの今の姿という感じで、それはダメよと思わない。たくさんの方が関わることで、ダメだと思えるかもしれないけど、良いと思う人もいます。いろんな意見が出て、子どもの中の多様な要素を認め合えるというのはあるかもしれない。

大抵一人じゃないですか、先生って。それに対して生徒が三〇人なり四〇人なりがいると、苦しんでいる子がいたとしても、そこまで行ってあげられなかったりするし、関わってあげられないので、たくさんの方が入ってくると、子どもはすごく楽しそう、やっぱり。「先生って呼んでも来てくれなかったんだもの」「ごめんね、行ってあげられなかった」みたいなことだったのが、いっぱい人がいることで、この人も来てくれる、この人も来てくれるという、そういう環境がいいなと思います。

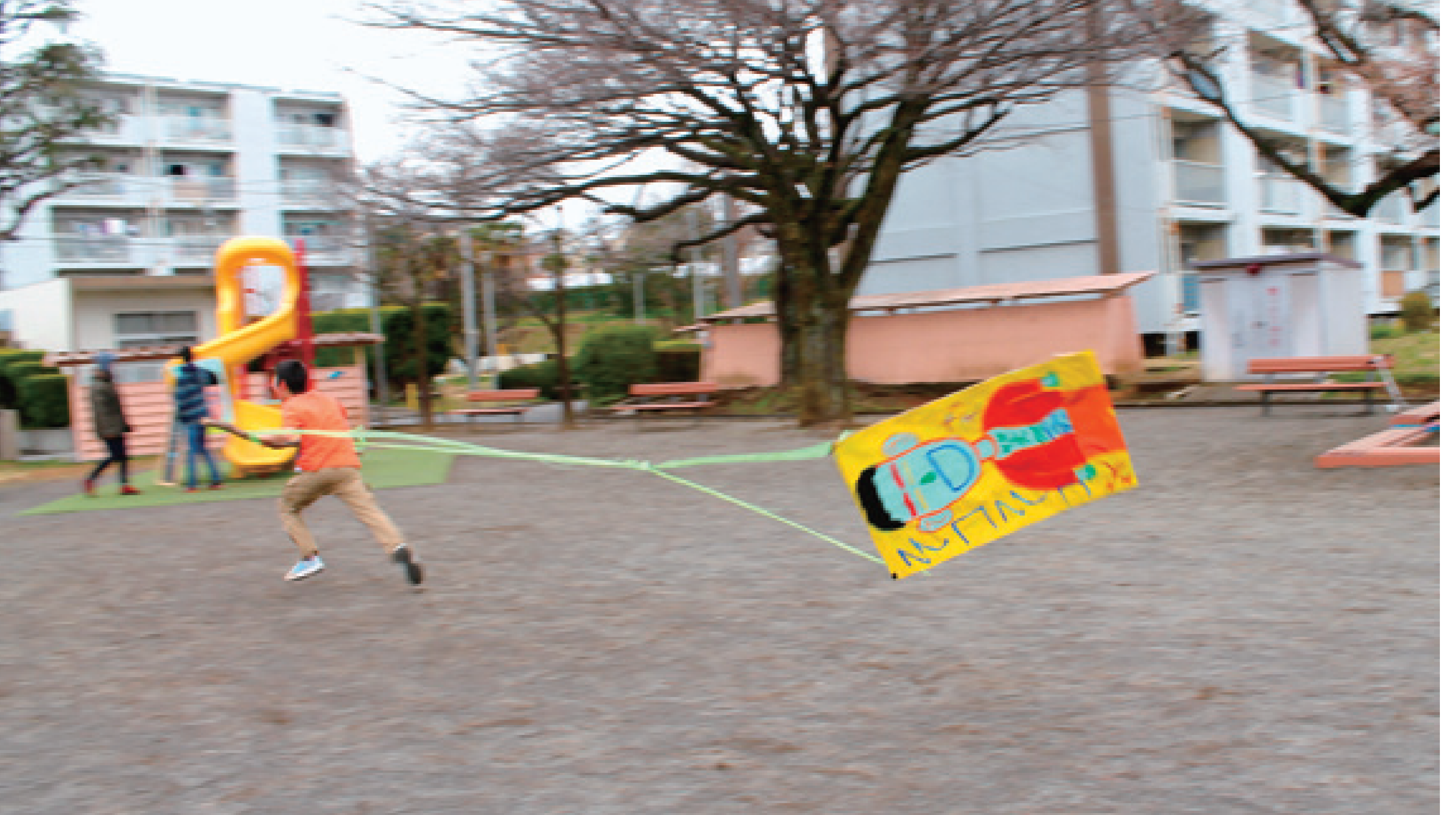
それから私以外の人の意見が授業の中にあるというのがすごくいい。授業を管理していると、やっぱり私の感性になってしまう。でも、それ常々疑問に思わない？ 私の感性だけで教えていいのかなど。そして、子どもは「日下先生の言うことだから」と受け入れる。子どもたちに委ねている感じで授業をやっていたとしても、どことなく、ずっと子どもたちと私という関係

が出来上がってくる。けれども、ほかの人と関わることで、別の価値観みたいなものもそこに入ってくるんだろうなと思うし……。つまり自分が教えていると自分の意図に沿った作品に最後はなっちゃう。何年もそこにいるとね。閉鎖空間になってしまいうことですね。それを広げてもらえるのがうれしいし、そこで「よかった」と思える人もいると思うよ。平たく言えばいろんな価値観があつて、自分らしく活動できるということよね。(※執筆者プロフィールは〇一五頁を参照ください)



◆ 本町小の二〇一六年度 の自画像を描く活動 日下美和

で、そつくりの自画像が三、四グループ出てきました。でも、それがこの自画像を描こうというコンセプトから外れているかという点ではなくて、六年生の、非常にセンシティブで、ナイーブなときに、仲良しの中でみんなと同じにしている安心みたいなものを、今、この子が心地よいと思っ



本町小での活動は、当初から明確な完成図が存在せず、アーティスト、学校スタッフ、NPOスタッフがミーティングを重ね、さらにアーティストは事前に授業の見学を行いプログラム化をすめた。参加した児童にも完成イメージやゴールのイメージが存在せず、授業回数を重ねる中で児童自身が主題や課題を発見していった。このプロセスは、アートを学校に取り入れる際の児童の変化やアーティストの役割を考える上で重要なものだった。そこで、授業見学をのぞく全てのプロセスを記述し、児童の変化を複数の視点からとらえるこころみを行った。

時系列の記述は一人の担当者が行い、同じ授業に参加した他のスタッフが異なる眼差しで経緯をとらえた。この行程を通じ、アーティストとの交流、交感の意味や意義、課題をとらえ、次の企画にいかしていききたい。

記録者の視点

本町小学校六年生プロジェクト活動導入

▼視聴覚室にて、六年生全員の前でアーティストの岩井さんの紹介をする。すでに、岩井さんはそれ以前に図工の授業を見学しに来たり、一緒に給食を食べ、掃除の様子を見学したりしているのので、初対面ではない。しかし、岩井さんがどんな人なのか、作品の話聞くのは、初めてとなる。

岩井 「はじめまして、岩井優です、こんにちは。僕は美術作家、美術家という職業をしています。映像だったり、立体だったりとか絵を描くことを仕事にしているんですけど、今回本町小学校のみんなと映像というものを、映画でもなく、テレビでもない、ビデオでもない、映像というものを使って作品をつくっていききたいな、と思います。」

ここで、映画でもなく、テレビでもない、ビデオでもないという「映像」の説明がとてわかりやすかった。確かに、スクリーンに映される「動画」であっても美術館やギャラリーに展示されるものは「映像作品」という。これで、子どもたちの中で図工(美術)の中での一つのジャンルとして「映像」というものがあるということが理解されたように思われる。

説明を受けて「映像」という言葉はインプットされたかもしれないがこの時点でまだ「理解」までは出来ていないのではないだろうか。(志田)

岩井 「それで、僕は基本的に掃除が好きなんです。」
 児童 (笑)
 岩井 「汚いものだったりをどのように美術にしているのか、まず見てもらえたらいいな、と思います。」
 岩井 「今まで家で食器洗ったことない人っていますか？」
 (誰も手を挙げない)
 児童 「家庭科とかでも洗うよね」
 岩井 「いないんですね。」

▼ここで、岩井さん、自身の映像作品を見せ始める。まずはじめに作品『Galaxy wash』(二〇〇八)。大きな透明水槽の中で、洗剤水が張られ、あたりまえの食器から、だんだん野菜、おもちや、本肉など、本来水に入れないと思われるものなどさまざまなものが水槽の中に放り込まれる。洗う。映像作品を見せる。

岩井 「これは三十四年前にとった作品で、今これ、見えているのが泡です。」
 児童 「泡？」
 岩井 「みなさんが食器とか洗う時にスポンジにつけて使う泡」
 (ざわざわし始める)
 児童 「え？ ジャがいも？」
 岩井 「きれい好きだからさ(笑)」
 児童 「え、ジャがいもは水で洗うでしょ」
 児童 「あ、またなんか来た」(コップを洗っている様子が出る)
 岩井 「これは洗剤で洗うでしょ？」
 児童 「うん」
 児童 「あ、またなんか来た」「え、人参？」「えー!!」「パン?」「りんごだ!」
 児童 「あ、またなんか来た」「えーっ!!」「あーっ!!」「本破れないのか」「バチがあるよー」「うわーやだー!!」「あ、豆腐、これは柔らかすぎて洗えないでしょ」「あーっ」「リラックマのぬいぐるみ!」「きゃー!!」「靴?!」「きゃー!!」

(鯉が泳いで登場の場面などで児童のテンションは最高潮に)
 児童 「なんでだよー!!」
 岩井 「これで僕がきれい好きだとわかったでしょ？」
 児童 「えー!!」
 岩井 「でも、これ、鯉はちゃんとあとで食べて、野菜もカレーにして食べたんだよ。」
 児童 「えー!! 鯉食べるの?」「本は? 乾いたの?」

記録作成…
清水寛子(AAインターン、当時)

参与者…
志田康宏(AAインターン、当時)
宮下美穂(AAスタッフ)

参与者の視点

この時点でも子どもたちの中には「ここはこういう反応をしておいたほうがいい」というような対外的な体裁を判断して周りに合わせて反応していた子もいたのではないかと考えています。みんなが悲鳴上げてるけど「私は普通のことだと思っただけだな」みたいなの。つまりこの時点で子どもたちの中に価値観の相違

岩井 「本もちゃんとおるよ」

「で、みんな最初のシーン覚えてる？ 水がきれいだったでしょ？」

児童 「うん、でだんだん汚くなってく」

岩井 「これ、鯉はこのままだと死んじゃってたでしょ、でも考えてみてもみんなの食べている魚は死んでいるわけじゃない？」

児童 「うん」

「あと、この水は、どうなんだろう？ けっこう…」

岩井 「汚い」

児童 「でもこれ、流すよね、僕ら」

岩井 「流す」「汚染！」

児童 「でも、これ難しくて、何がきれいで、汚いのかって…」

岩井 「すごく僕は、そこに焦点を当てたいというか、興味があります。」

先生 「みなさん、最初と最後の水の様子、これ岩井さんが言っている何がきれいか汚いかということがわからない、という投げかけ、ここがポイントですからね。『きゃー』とかなら一年生でも言えるからね、みんなは考えないと。」

いわゆる美術でいわれる『鑑賞教育』の観点から見ると、作品を見た時の子どもたちの盛り上がり、歓声、自由な発言… 見ているこちらも驚き・喜びを感じる瞬間だった。最近の鑑賞教育は、作品をスライドなどで投影し、子どもたちに見えるものや感じるものを次々に言ってもらうような形式であるが、今回のように、歓声があがったり、一人ひとりがついつい声を発したくなったたりしてしまう作品選びをすることで大きな効果がある、ということが示されたように思った。授業でいえば、単元などの最初の『導入』は子どもたちの興味をひきつけるためにとっても重要だとされているが、今回はまさに大成功といえる。最初のこの作品でのつかみは、活動全体にとっても良い影響を与えたように思う。

岩井

「そうですね、きれいで、またないということ、汚い顔、汚い服？ とかこれがきれい。これがないって僕がここでいえることじゃないですよ、いろんな場所だったり、環境ですよ。ここに例えば犬の糞があったら嫌でしょ、でも動物園に動物の糞があったら、まあ普通かなって思うでしょ？」

児童 「あー…」「うん」

岩井 「そう、だから置かれてる場所とか、環境にもよるよね。人にもよるよね。すごくきれいな人とか、いると思いますが。」

▼ここで岩井さん二作目映像作品、糞の上にボディソープやシャンプーをかけ、更にきれいなビーズをのつけるなど『装飾』して、バーナーで焼くというパフォーマンス映像作品を見せる。

児童

「うわぁー」「うー」「気持ち悪い」「あー…」（顔をしかめる子も）

岩井

「これは、ドイツで撮った作品です。で、ちょっと時間もあまりなくなってきてしまったので、僕がみなさんと何をやりたいのか、ということをお話したいです。」

「僕が小学校を卒業したのはだいぶ前なので、今も同じかよくわからないのですが、HRの前か後に教室で掃除をしたりしますよね。その掃除というモチーフで映像作品をつくりようと思っています。今見せた映像は、僕一人でやったものなんです。ちょっと次見せるのは二、三人でやったものと二〇〇人くらいでやったものです。こんなんつくりますよ、というよりは、こんなこともやっています、という参考にしてください。」

▼ここで、岩井さん、自身の作品二点を見せる。まず、『Wash house -洗濯場-』（二〇一三）プールでみんなで洗濯をする姿を水中から撮影している映像作品を見せる。この時は、児童たちはざわざわせず、静かに見ている。だんだん、多くの作品を見て疲れが出てきたのか、だんだん全体の意味を理解しようと考えているのか、急に見る姿勢が変わったところが興味深い。次に『Dancing Cleansing』（二〇一三）横浜若葉町で大人数で街中を掃除（ダンス）したパフォーマンス作品を見せる。この作品は、今回本町小の活動に一番近い、企画段階で参考作品として見せていただいたものである。子どもたち、おもしろい動き（本当にダンスをするように掃除をしている人）を見て、笑いがおこる。

岩井

「はい、こんな感じで今日は僕の自己紹介でした。これから、活動が始まっていって、再来週からですね、各クラスごとにやっていきます。みなさん、よろしく願ひします。」

児童

「よろしく願ひします。」

先生

「今日は岩井さんのビデオ作品を見せていただきました。今までにあまり見たことのないものだったと思います。これからみなさんには、岩井さんと一緒に考えながら、映像の中の人になってもらいます。岩井さんと一緒につくる映像の芸術作品、どんなものになるか楽しみにしててください。」

「ありがとうございます。」とあいさつ・号令をして終わる。

本授業、岩井さんが、自分個人の過激な作品を見せてから、今後のやっていくものの参考作品を見せたという順番が良かったように思う。日常的な感覚を一度崩してから活動に

への気づきみたいな体験が起こっていったんじゃないだろうか。という蓋然性を検討すると、岩井さんと出会う前には一〇〇人近い子どもたちが全員同じ価値観で同じ反応をしていたと前提して考察を進めるのは危険なのではないかとも思う。（志田）

↓同じ反応をしているというような前提にするつもりはもちろんないです。

ただ、子どもたちが自分の価値観の再認識をする機会になったという考え方はとても興味深い。（清水）

振りかえりの作文にも、この時の驚きの体験が描かれています。これはいったい何だ？ と、突き動かされた子どももいたはず。（宮下）

振りかえりの作文では具体的な言及無し。ほぼ、言っただけじゃないこと？ になったのか。（宮下）

入っていくという流れがつけられていた。テーマとしても、何がきれいか・汚いか」ということ、これは学校では保健や家庭科で「教える」ことである。それを、そう簡単に人がどちらか決めることはできないよ、という問いかけを投げかけることは普段の学校生活ではなかなかできることではない。『美術家』という立場の人が言うことの意味というのが大きかったように思う。

第一回授業（一二月三日、四日）

初回は各クラス教室で行われた。そのため、三回同じ内容をやっており、進め方もほぼ同じであったことから、三クラス分の発言を織り交ぜて授業を再構築して記している。事実そのままの記録ではないが、ここでの目標である授業の流れ、子どもたちの発言・様子を全体的に掴むためにこのように書いている。

ひと通りあいさつなどする。クラスは少し落ち着きがない。みんな何をするのかわからないということもあり、少し緊張と期待が入り交じっている感じ。担任の先生は早々に教室を出て行ってしまつて、非日常感が強調されている。

岩井 「みんながどんな学校生活送ってるのかなって、みなさんのこともっと知りたいな、

と思います。みんなどんなクラブに入っているかお聞きしたいです。サッカーとか？」

児童 「サッカーは消えた。」

岩井 「消えた？」

「そうか、僕はちなみにずっと帰宅部でした。」

児童 「えーそれはニートって言うんだよ（笑）」

NPOスタッフが黒板に模造紙を貼る。スタッフ宮下さんの「メディア地獄」Tシャツに反応して（ざわざわ）。ちよつと活発な男子数人を中心に細かい岩井さんの言葉づかいや話しにちよつかいを出すなどして、ちよつと生意気を言つて岩井さんを「試す」というような、子どもたちは新しい大人たちの様子をうかがっているように感じられた。女子はより慎重な感じで、静かに様子うかがっているようであった。

岩井 「じゃ、端から、なに部か教えてください。」

一人一人自分の所属しているクラブを言っていく。

児童 「ボール運動クラブ」

岩井 「ボール運動クラブ？ なにそれ？」

児童 「サッカーとか野球とかいろいろやるの。」

岩井 「なるほどー体育会系が多いね」

児童 「体育会系（笑）」

岩井 「それでみんなどんな活動しているの？」

この問いが大きなポイントである。この初回の授業は主に外部の人が子どもたちから学校の中の様子を聞き出すということがメインとなっているのだが、子どもたちにとっては、慣れた活動であったり、習慣であったりする。それを改めて言葉で「説明して」と求められるのはとても新鮮だったのではないだろうか。

何個かの運動系のクラブに聞くことで出てきた「準備運動、整理運動」に興味を持つ岩井さん、前に出て実際にやって下さいと頼む。「えーっ」「なんでこんなことやのー？」最初のバトミントン部は嫌々前に出た。二人が前に、残りの人も席で立って一緒に「一、二、三、四」「二、二、三、四」とひと通りの準備運動を行う。岩井さんはカメラを回す。

岩井 「掛け声がおもしろいね！」「なんで二―二とか三―三って言うの？」

児童 「えーなんでだろう…」

次にボール運動クラブ、一つ目のグループを見ているので、出てきた二人組男子は、カメラを意識して、ボール運動クラブの紹介をします」という一言からはじまり、自分の部活の紹介ビデオのように準備運動を見せる。女子と一緒に声を出していなかったということで、次に女子が出てきて整理運動してもらうことに。

岩井 「準備体操と整理体操の違いは？」

児童 「両方体をやわらくして、ケガをしないようにするため」

「しっかりと自分の答えて明確に答えていた。」

岩井 「卓球部は？ 準備運動、整理運動の他には？」

児童 ラケットを振ってみせて、「こんなの！」と。席に座っている時は、とてもやりたそうだったが、前に出ると急に恥ずかしがってしまった。岩井さんがボールを出すふりをしてあげて、それを打つような仕草を見せる。

▼他のクラスでの同じ活動の様子

三つのクラスに関して、クラブ活動の様子を聞き出した。どのクラスも共通して前に出ると恥ずかしくなり、身じろいだりする様子が見られた。一方どのクラスでも『無関心』な態度の子はほとんどおらず、他のクラブの活動を聞いたり、前に出た人の発表後は拍手を

「学校では」ね。家庭や社会、友達と遊ぶ中とかでも「学べ」はするよね。（志田）

↓そうですね、学校に限定した場合であると思います。（清水）

うわ、やばっ。という感じがまずは大事／効果的だった。（宮下）

岩井さんの京都弁が効果的だったと思います。ユニフォームも。（宮下）

クラブ活動って「当然のような活動・習慣」かな？ 岩井さんの言うように普段のクラスとは違うちよつとした非日常だと思うしその非日常性も今回のひとつのキーポイントかなと思う。（志田）
↓クラブ活動というものや、その活動の内容は、学校生活の中の一つのルーティーン化されているものではないでしょうか。（清水）

岩井さんが繰り返し返す「なんで？」「どんなん？」が子どもたちの思考と発言を促したのかなど。（志田）
↓同様に思います。（清水）
↓本当ですね、この人に何かを教えずなくては、と駆られた様子もあり。（宮下）

したりしていた。

特定の子が多く発言する、全体的にみんながぼんぼん意見を言うクラス、これはクラスの個性が出ていた。また、クラブ紹介に関しては、どのクラブの子も自分たちの活動をしっかりと言語化できていて、岩井さんの「なんで？」という質問に答えていた。また、クラブを嫌々やっているというような否定的な発言が一つも出なかったことも印象的であった。好きだから・楽しいからやっているという様子が感じられた。

発言例〈科学クラブに関して〉

岩井 「どんなことやってるの？」

児童 「べっこうあめつくったり」

岩井 「え、なんだべっこうあめを科学部でやるの？」

児童 「砂糖の変化を観察するの」

岩井 「なるほどー！」

児童 「なんで科学クラブ入ったの？」

「家にはない道具が使えるから」「調べるのが好きだから」「お兄ちゃんも科学クラブだったから、家族の中で仲間外れになりたくないから」「なんとなく」

このようにひと通り各クラブの活動内容などを児童に説明してもらった後、休憩時間となった。

（休憩中）…岩井さん、前に出た子どもたちへお礼を言う。褒めるではなく、お礼というところがまた教員と違うところである。

準備運動や整理体操なんて自分でさえ高校までを考えると一二年間もやってきたけれど、一体そのものの意味なんて何かと、掛け声がなぜそのようになってるのか、なぜ掛け声の人とみんなと交互に言いながらやるのか、もう形式化されてしまっていて意識しなことがなかった。

しかし、岩井さんは、あたかもそんな準備体操や整理体操の定型化されたものを知らないかのように、新鮮なものであるかのように、子どもたちにいろいろな質問をする。一種の習慣をわざわざ前に出てやってもらったりして特別なものであるかのように演出する。これは、後に「掃除」というテーマでパフォーマンスをやるための子どもたちの意識を広げる意図もあったのではないだろうか。

▼休憩後

岩井 「これからひと月外に出て掃除していきたくんだけど、掃除嫌いな人ー？ 正直に

言っついでいよ(笑)」

（児童、八割がた手を挙げる）

児童 「なんで掃除？」

岩井 「なんでだろうね、だんだんわかるかも。掃除をよく撮影しているんだよね」

児童 「掃除好きなの？」

「掃除、好きでも嫌いでもないんだけど、おもしろいんだよね。だから、みんなの掃除のこと教えてもらおうと思います。今からNPOスタッフの人がみんなに質問するので、教えてください。」

児童 「家の掃除？」

岩井 「いや、学校の。細かいことでもいいよ。」

鈴木 （A A スタッフ）「じゃ、みなさんまず掃除場所教えてくれる？」

児童 「あそこに書いてあるよ」と後ろの掲示板を指す。

鈴木 「うん、でもみんなに説明してもらいたいんだ」

児童 「教室、廊下、アップル室、P C ルーム：」（全部で六ヶ所）

鈴木 「なるほどー、どうやって掃除するの？」

児童 「ほうきと雑巾で：」「雑巾は乾拭き」「机を移動して：」

「椅子は机の上にあげないよ」

（黒板に貼ってある模造紙に子どもたちの発言を書いていく。）

鈴木 「それで、みんなどこが一番好き？」

児童 「P C ルーム！ 夏は涼しい。カーペットだし。」

「P C ルーム前の廊下、楽だから！」

鈴木 「P C ルームはごみ、ガムテープでとったり？」

児童 「いや、ガムテープなんてムダだよ」

鈴木 「そうか、そうか(笑)」

いろいろ挙げられるが、理由は楽であるからが主であった。ひと通り聞いたところで…

岩井 「では、みなさんの教室掃除の時の机を動かすのをやってみたいと思います。ただし、ルールは、声を出さないこと、音を出さないこと。」

児童 「えー!!」(ざわざわ)

岩井 「できなかつたら、もう一回ね、ドラマのNGはそりですよ。」

児童 「音消せばいいんじゃないの？」

岩井 「いやいやむりむり(笑)」

外部の人がたくさんいる場で嫌いなものを嫌いということは難しいだろう。全員が好きだと断定するのは難しいのでは？ (志田)

↓確かにそうなのかもしれない。必ずクラスには、そのような子はいるはずで、もう少し注目して見たかった点である。この部活紹介に限らず、岩井さんとの活動全体に対して否定的な反応・発言があまり見られなかった点は、私も気になっていました。(清水)

「教員はお礼ではなく褒める」というのは清水さん個人の教員像かと。

〈志田〉

↓なるほど。一般的に現場を見ているとそのように見えます。特に授業中の発言に関してお礼はあまりないです。また、生徒が何か行った場合も「お疲れさま」ではなく「ご苦労さま」と言います。(清水)
↓ご苦労様で良いのかな？ 教室内の力学だね(宮下)

同意。岩井さんの「知らない」「教えて」「新鮮」といった“演技”がその後の活動に様々な意味と効果をもたらしたと思う(志田)

「五秒前、四、三、二、一スタート！」で撮り始め「はいカットー!!」で撮り終わる。まず机を前に……。そーっと立ち上がり、机を動かす……。が笑い出してしまいう子がいて何度もやり直し。次に机を後ろに……。今度は表情も笑ってはだめというルールが足される。クラスによっては三回ほどできることもある。クラスによっては五回くらいやり直すところも。岩井「では、次にボール運動クラブだけ後ろに。ほうきもってゆっくりスローモーションで掃除をしてみて。」

クラスによってほうき掃除のやり方が違う。一番驚きであったのは、一列になつてはじから掃いていくクラスである。いつも先生にそのように指導されているそう。

▼二時間目、後半は集中力が切れてくる場面も。

先生「緊張感が足りない!! ゲストで来てくださっているのだから真剣にやりなさい。はいしやがんで三秒目を閉じて気持ち落ち着かせてください。」と介入する場面もあった。

各クラブ、順番に掃除を少ししてみるところを岩井さんが撮影する。「もうちよつとゆっくり」「ちりとりでごみ集めてください」などと少しずつ指示する。撮って、止めて「お疲れさまです。」と、各グループを撮影していく。

各クラブ撮影終わったら、また、はじめのように、声・音を出さずに、机を元に戻す。二回目は子どもたちも慣れて、すぐ静かにできるようになっていた。

岩井「はい、みなさんお疲れさまでした。これから、掃除のようで掃除じゃないようなことを来週とかもしていきます。来週は、教室の外に出っていきます。最終的には、六年生全員でやるので、もっと難しくなっていくと思います。」

あいさつ号令をして、授業終わる。

いよいよ、後半の部分で岩井さんの世界観が出た活動がはじまった。

急に声を出さずに、音を立てずに机を動かしてください、というのに子どもたちは驚いた様子であった。しかも、なんどもやり直しする中で明らかに嫌気がさしていた子もいた。

しかし、それでも全体としては、岩井さんの指示通り取り組もうとしている様子であった。なんでこんなことやるの? という疑問がでるのではないかと思ったが、そのように言い出す人はいなかった。

学校生活で言われたことをやるという習慣がついているのと、いつもと違う外部の人、岩井が言うことだから、きっとなんかあるんだろう、という期待感や特別感があったのだろうか。

この授業では、日常生活の中で習慣化されているクラブ活動や掃除の動作を改めて問いなおし、特別なルールでやってみるということ。いつもと違う、がなんとなくではあるが、子どもたちに伝わったのではないだろうか。

この回終了。

クラスごとの活動二回目（二月一日、一日）

ひと通りあいさつをする。前回のようクラブごとで座ってもらう。

岩井 「今日の一時間目は外に出てみて、二時間目は撮った映像を見てみます」

児童 「二、二時間掃除するの?」

岩井 「いや、ちがうちがう。今日はみんなにカメラを持ってもらいます。各クラブ一つです。」

児童 「いいなー」

まず、カメラを三台後ろまで回して、簡単に○(○)の操作性などを確認してもらう。子どもたちは、隣の人同士二人で確認しあっていた。

岩井 「掃除って給食終わったらだっけ?」

児童 「いや、昼休み終わってから」

岩井 「あれ、今週掃除どこだっけー」

児童 「なるほどー」

岩井 「それで、今回のためにほうきを大量に買いました。」

児童 「わぁーっ!!」「えーもらえるの?」

岩井 「え、欲しいの?」

児童 「欲しい!! ボロボロだもん!」

岩井 「そーかー」

「それで今日は、外に出るのですが、他のクラスは授業やっているんで、できるだけ静かにしてください。うるさくなったら教室に戻るからね。笑いたくなったらトイレ行くのね。」

児童 「トイレで笑いの?!

岩井 「そー。はい、では、クラブ内で三〇秒でだれがカメラマンになるか決めてください。」

男子はやりたいと立候補する者が多かったが、女子同士は譲り合いをして決まった。ちょっとした男女の違いが垣間見える。そこで、カメラ担当にカメラが渡される。

岩井

「じゃ、カメラマン立ってください。カメラの撮り方ね。これは、今回に限らず、家族の写真を撮る時とかも同じです。ブレないように。まず、両手使うこと。脇をしめて、手、指をし字にして添えて。足も片足少し前に出して。そー、こーすると安定し

一列になつて掃除することは実は僕にとって驚きではありませんでした。僕も小学校でいつもそのようにやっていたから。むしろそれが驚きであることに驚き。(志田)

↓いろいろな学校文化があつて、その思い出が社会のスタンダードと信じていることはありますよね。細かく聞いてみると、小さなことでみんな違うルールで育ってきたのかもしれないですね。(清水)

三〇秒という設定の妙。(志田)

ます。赤いボタン押すと動画撮れます。」(お手本見せる)

岩井 「友達がわぁーと来るかもしれないけど、動じず撮ってくださいね。」

児童 「やんねーよ。」「おまえやるだろう。」

岩井 「やっちゃだめだよ(笑)」

「では、ぞうきんの人はそれぞれ三人くらい。」

ぞうきんじゃんけんがはじまる(ぞうきんは人気ない)

岩井 「はいー、では、ぞうきんの人ー。ぞうきんが一番かっこいいと思うけどな」

「で、何も決まってる人はいらほうきね。」

児童 「ほうき二本持ちたい人いる？」

「え、二本？(笑)」

岩井 「二本持ったら二倍の仕事しなきゃだめだよ」

「カメラの人はただ、掃除をしている人を追いかけるだけじゃなく、動きすぎたりしないように気をつけてください。後で見た時酔ってしまいますから。」

「では、大人は一旦外へ。」前回とルールは同じ。声を出さずに、静かにそれぞれのグループ立ち上がりカメラ↓ほうき↓ぞうきんと教室を出て、全員出たところでッカット。

岩井 「カメラマンの人は脇しめてね」

出終わったグループは撮れたビデオを見合う。うるさくなると「静かにしろよ」と声をかけあっている。クラス全員が出たところで、体育館へ移動。カメラ担当は、いろいろな角度から階段を降りていく様子など、掃除担当の子を撮影し、撮り方を探っている様子。

▼朝の光が差し込む体育館はとても幻想的な雰囲気であった。

岩井 「雑巾部隊かっこよかったですね。…そうですね、ちょっと雑巾レースしてみましようか。」

その他、大きく掃いてみるなど、体育館の広い空間を使って子どもたちいろいろな動きをしてみよう。雑巾担当のレース、ほうきで掃きながら競争：カメラ担当の子は床腹ばいで撮るなどいろいろ工夫していた。子どもたちはみな広いところで、のびのび掃除のようないろいろな動きを試すことができていた。

掃除、という行為をパフォーマンス・遊びに変えていく瞬間ともいえる。すでに、掃除本来の「きれいにする」という目的から、例えば競争をするということでは、早く雑巾を滑らせる、ほうきを早く動かすといったところや一列で並ぶ・追い越すというところに意識が移り、ゲーム性を持ち始めている。

▼休憩時間になって終わる。二時間目

岩井 「まず、前回撮ったビデオを少し見たいと思います。」

教室の大型テレビにPCをつなげて、前回岩井さんが撮った映像、スローモーションに編集したものをまず見せよう。自分の姿、しかも「ちょっと不思議なこと」をやっている姿を見るのはおもしろいのではないだろうかクラス全体で笑いがおきる。ここではみんなテレビに注目、「あ、○○じゃん」「○○おもしろいって笑ってるじゃん」などと言いながら鑑賞。岩井さん、は今後の動き方に活かされるよう、コメントをはさむ。

岩井 「ほうきの掃き方、ちゃんと掃いている人とそうでない人もよくわかっちゃいますね。この、掃いている姿はきれいですよね。」

先生 「今、岩井さんが掃いている姿がきれいと言っていましたね、その感覚では、みなさんばかりづらいかもしれませんが、そこをちょっと意識できるといいですね。」

他のクラスの机を動かすパフォーマンスの部分の映像も少し見せる。ひと通り見たあと、続いて岩井さん、本番に使う泡の話に。イビザクラブで使われている模様の映像を見せる。

岩井 「それで、今回の活動は、最後一月にね、泡を使いたいと思います。ちょっと見て下さい。」

児童 「えー何が楽しいの？」「超盛り上がりってるじゃん」「なんで上半身裸なの？」

岩井 「ねー大人ってばかでしょ!!(笑)で、まあ、これをね、やりたいと思います。」

児童 「後処理どうするんですか？」「怒られたらどうするんですか？」

岩井 「怒られたら、みんなで謝ろうか」

児童 「えー!!!」

児童 「これみたいにYoutubeに出たらどうするの？」

岩井 「そうしたら日本初ですね！こんなことを小学校でやるのは。」

小さなやり取りだが、ほうきは一本でなくてもいいというものも、このことが普通の掃除とは違うと認識するために大事な情報だと思う。(宮下)

ゲームフィクションですか、なるほど。(志田)

かなり多くの児童が嫌がらずに参加していた。不本意？ ではないのか？(宮下)

この活動で、本番前の計四回の授業で一番印象に残っているのが、このやりとりである。授業でクラブのシーンを見せるといふ所も、とても新鮮に見えた上、子どもたちの二

後片付けの心配までするのが六年生。自分がやると思ったのかな。大人は学校がやってくれてあたりまえのこと、ルールは大人がつくる。学校のなかの暗黙の役割分担？ Youtubeの心配までしている(宮下)

言目に、こんなことやっているの？という問いかけ、が学校での「教育」の結果の象徴的な反応であり、小・中・高とたぶんそんなことはやってはいけない・できないという固定観念がどんどんつくられていくのかな、という印象をもった。もちろんそれはいい意味では「社会化」されていくことではあるが、同時になかなか常識というものから外れることができないことも示している。そのような常識を問い直すということ、それがまさに現代美術の一つの役割なのではないだろうか。

▼移動

岩井 「はい、では、また体育館に行きたいのですが、注意点として、埃がけっこう舞っているので、授業が終わったら風邪引かないように手洗いうがいしてくださいね。」

岩井 「カメラの人はずっと同じ場所じゃなくて、いろいろなところから撮ってみてください。」

児童 「二階ギャラリーから撮りたい。」

先生 「ギャラリーはちょっと難しいかな。」「上からだて撮影者の影もでちゃうし」

児童 「しゃがめば大丈夫。」

岩井 「とりあえず、行ってみましょう。」

児童 「カメラマン変りたい」

岩井 「カメラマン、これ一回終わったら変えようか。」(前回同様に体育館に移動)

「ここでカメラマン変えようか。」

児童 (カメラマン)「えー」

新しいカメラマンをじゃんけん決めて。その後、体育館からそのまま、外に出てみることに。校庭周りの道路のうえを掃いたり、雑巾担当の子は窓ガラスを拭いたり、子どもたちは、それぞれ自由に動いてもらう。岩井さんは、さまざまな角度から撮影。「はい、おしまいっ！」最後はそのまま教室にみんなで戻る。最後に次回のお話を少し、あいさつをして終わり。

子どもたちが「体育館は二階のギャラリーから撮りたい」という提案をする部分は評価すべき点である。どのように撮影したらおもしろいか、ということ自分たちで考え始めている証拠であり、このような部分で、子どもたちが参加している。といえ、最終的な映像作品の出来上りを自分なりにイメージしているともいえる。この活動二回目で次第に子どもたちの作品に対する出来上りをイメージし、行動する・発言する姿勢が増えてきたように思う。それをすべてここで記することはできないが、そのような発言に対して、岩井さんが、対応するような場面こそ、作家と子どもたちが一緒につくっている瞬間といえる。

この回終了。

途中の振りかえりと撮影を学ぶ(二月二日)

あいさつをし、最初に日下先生の話からはじまる。急遽決まったプラスの図工の一時間、岩井さんが編集した映像を見て、本番の活動に活かしてもらうため、という主旨を説明します。

先生 「今日はどうな風に自分たちの活動が映っているかといったことを考えながら見て下さい。みなさんは、岩井さんが撮影しているところに映っているだけというのは違うよね。自分たちも表現者として、体を使って表現していますよね。その辺りも次どのように参加して表現していけば良いのか考えてみてください。」

続けて日下先生、児童が書いた感想文をいくつか紹介する。「みなさん本当にいろいろ考えてすごいです、びっくりしてしまいました。」と褒め、「ちょっと難しいかと思いましたが、心で感じ取っている人がいますね。」と七名ほどの感想を読み上げた。

先生 「それでは、これから映像を見ますが、友達の顔が映っておもしろくなってしまいうこともあるかもしれませんが、どんな動きしているのかなどを考えながら見てくださいね。」

岩井 「それでは、ちょっと端折りながら見せますね。」

(二本目の映像を流す)

先生が、考えることを強調したからか、たまに笑いがこぼれるものの、みんな静かに見ている。「次に全く違うものをお見せするんですけど、ちょっと違います。」と無音・ゆったりとしたBGM・ラップのトラックのようなBGMの三つの動画を見せる。

岩井 「これで、わかるように、音によって雰囲気が全然変わりますよね。また、作品にどんな音を入れるか決めてないんですけど、ジブリにならないのは確かです。ただ、こりやって音によって全然違うという感覚を覚えておいてください。」

「次にみなさんがつくってくれた映像を流します。とてもよく撮れていました。あまり手ブレもしていませんね。」

岩井さんの映像より笑い声が増える。ついつい友人が撮っている作品だと笑ってしまうのでしょうか。ありのまま撮った子どもたちの映像には、また岩井さんが撮影している目線とは違う視点で撮影されていることがよくわかる。

▼映像を見せる

興味深いし、ここの分析はこのWSの肝になる部分だと思うのでさらに掘り下げていいと思う。(志田)

教員や大人の期待に応えねば、という気持ちも、すべてが悪い訳ではなく、そのために、これは自分にとつてどのようなことなのだろうか？と一生懸命考えた軌跡は感じます。(宮下)

岩井

「本当に良い映像が撮れていました。そして、本番でも、カメラやりたい人によってもうのだけど、そうすると全員にカメラ使ってもらうことは残念ながらできません。ただ、掃除することも作品を構成するために重要。みなさんがんばってもらえたらと思います。」

岩井

「今日は、みんなに撮ることを体験してもらいたいです。」

白い厚紙でできたフレームが渡される。それをカメラ撮影画面フレームと思って、撮影してもらおうという。口の字にした机の真ん中で岩井さん自身がほうきを持って、踊る。それを児童が、フレームで追う。終わって、児童一人ひとりにどこを撮っていたかを聞く。何人かをあてるのではなく、全員一人ひとりに近づいて聞いていく。足をとっていた人が多数。その他手とかほうき、残りは全体を撮っていたよう。

岩井

「みんないろいろですが、好きなところを撮ってください。今、このよう四角の中に僕がいますが、四角の外にも大人はいます。この空間全体もあります。視点を固定するのも、柱でも、いいかもしれない。僕が動けば動くほど、そっちに引張られてしまいうちもあると思いますが、全然違うものを撮っている人がいてもいいんです。では、もう一度やってみます。どこを撮るかちょっと考えてみてください。」

岩井

岩井さんの動きはさらに激しくなったが、今回は、一人ひとり撮ったところも多様に。机を撮ってた人も天井を撮ってた人も……
「今、僕はかなり激しく動いたんですけど、その中で自分の意志でフレームを決めて撮影するのはすごく大事です。一月に撮影するときは野外に出ます。囲われた空間ではありません。だからいろんな出来事がおこったりとかします。なので、自分でフレームングを決めていく必要があります。自分が興味をもったことは、人と違ってても良いし、好きなところを撮ってください。」

「ちなみにカメラやりたい人？」という問に対して、半分くらい手が挙がる。どちらでも良いという人も数人。

岩井

「それでは、一月には、掃除する人も、今僕が掃除したのに負けないくらいに元気よくやってください。」

この回は出席できず、ビデオ記録の文字起こしであるが、終わった後も、この一回増やした回のおかげで企画全体がうまくいったという見方が多い。子どもたちは、岩井さんの撮影をしている様子はずっと見てきているが、掃除をする様子を見たのはこの時が初めてであった。圧倒的に飛んでいるパフォーマンスは、子どもたちに強い印象を与えたのだ

ろう。

また、カメラ撮影体験を全員ができないことが気がかりに感じていたので、ここでの岩井さんの配慮はとても良かったように思う。また、カメラを全員がやりたいのだからと思うっていたが、実際やりたいというのは（手を上げづらい子もいたとして）半分くらいであったのが個人的には意外であった。ただ、絶対撮影したくないという子は一人もいなかったのだ、どちらも良いという子どもたちがどのような考えなのかも少し知りたいと感じた。

最終回五回目（二〇一三年一月二日）

当日は多目的室で事前説明してから活動に入るという予定。視聴覚室にA A スタッフが椅子を配置。席はクラスごとではなくクラブごとに。学年集会などでは絶対ないような席順である。

児童入室、まだ少しモチベーションは低い様子、前回の活動から年末年始を挟んでしまったことも一つの理由かもしれない。雑談したり、教室全体ががやがやしている。担任の先生も一緒に来ている。（クラスごとでの活動では、どのクラスも担任は不在、または途中から退出の先生が多かった。）

▼全員が席についてから、日下先生から注意事項などのお話。

先生

「少し寒いかもしれませんが、分厚い上着は脱いでいってください。ケガをしないように、みなさんの今までの経験で、やっつけてはいけないことはやらぬようにして下さい。事故があったら、活動全部がなくなってしまいますからね。」

岩井

「各クラブカメラマンのみなさん手を挙げてください。」

「ほら〇〇くんもそうでしょ、手を挙げて」と担任が介入する場面も。

岩井

「はい、では、おはようございます。今日は二チームつくって、まず学校内をまわってから外に出ます。一チームは僕とまわり、もう一チームは各クラブのカメラマンの指示に従ってまわってください。カメラ担当の人はカメラ渡しますので前に出てきてください。」

岩井さん、カメラ担当の子どもたちを周りに集め、「ちゃんと指示出してくださいね。うるさくなったりしたら中止になっちゃうのね。おねがいます！」

児童「おねがいます！」

この時の岩井さんの狂気を感じるくらいに激しい動きには、仲よくなり始めた・わかりかけてきた岩井さんと子どもたちの仲を一気に突き放し、強い緊張感を生み出したという効果があったと思います。岩井さんが主導権をドンと見せつけたというか。上下関係みたいなものを明確にしたというか。そういう、馴れ合いを断ち切って緊張を生み出す強い効果があったと思います。（志田）

↓なるほど。この回もこのプロジェクト全体の一つのポイントでしたね。
↓アーティストと児童の距離の取り方も大事ですね。（宮下）

「活動がなくなってしまう」「中止になっちゃう」等は学校活動的な事情か？ それを子どもたちに注意する意図は？（志田）
↓言われてみれば、そうですね。これ、ある大人のイベントでもルールを守らないと中止になっちゃうので、つて言うの聞いたことありますが、よくあることなんでしょうか。（清水）

細かいことであるけれども、この挨拶でなんとなく「始まり」が意識されてカメラ担当児童の気がひきしまったのではないだろうか。授業のはじめの号令的役割と「任せるよ!」という信頼のジェスチャーでもあった。子どもたちが撮る映像がともおもしろかったという岩井さん、今回は自分で指示するだけでなく、子どもたちに任せることで撮れる映像も大切にしたいと考えたという。個人的に活動全体を通して撮影・指示者の岩井さんに従って演技をする児童という関係ができてしまっていたことが気になっていた。しかし、子どもたちに撮影を任せることで出来上がった関係性が変わるかもしれない意味ある決定といえる。

途中で二つのグループの役割を入れ替えるなどして、岩井さんについて回るグループとも一方のグループ両方が同じ経験をできたら更に良かったのではないかと思っただ。アートにおいて鑑賞者がそれぞれ別の体験をすることにおもしろさがあるが、教育に関してはなるべく、すべての生徒が同じ経験ができるようにすることが大切であるように個人的に思っただ。

▼コースが決まったところで、ほうき担当を決める。卓球クラブ・バドミントンクラブ・工作クラブ・漫画イラストクラブがほうきを持つことに。ほうき担当児童は「わぁーい!」と喜ぶ場面も。ほうきはこのプロジェクトの当初から人気。雑巾は敬遠され、ほうきが毎度とても人気。動きが楽だからか、掃除をしている感があるからだろうか。少し興味深い。

校内で回るコースは工作室・六年・玄関↓多目的室に戻るということに。

▼岩井チーム先に出発する。

まだ子どもたちの参加意識が低い感じで、教室から出るときもがやがやうるさい。「静かにしてください! 授業中です!!」と担任の先生方が注意する場面も。教室に残った児童だけで回るチームに最後、日下先生がひとことを加えます。

先生 「君たちのリーダーはカメラを持っている人たち（児童）です。作品をつくっている意識を持ってください。もちろんパフォーマンスをする人たちの資質も問われます。今まで学んできたことを活かしましょう。」

カメラ持つ子どもたち前に出てもらう（七人）
（カメラ担当の児童に向かって）

「岩井さんと同じ立場ですからね。」
「前から撮る、後ろから撮る、どうしましょいかね。考えてみてくださいいね。」
「ほうき持っている人は掃く、雑巾は拭くように。」

カメラ担当の子どもたちが先に廊下へ、続いて残りの子どもたちが廊下へ。

日下先生が言った言葉がとも印象深い。絵や立体作品の制作については作品を作っているという意識や感覚があるが、パフォーマンス作品となるとその意識を保つのが大きな課題となる。「自分が一人くらい適当にやっても大丈夫かもしれない」や「恥ずかしさ」といった意識が働く。そのような所で先生がどのような言葉がけをするかという所がポイントとなってくるだろう。今回はリーダー（カメラ担当）への責任を意識させるよう言葉がけとなっている。

岩井さん率いるチームと子どもたちのみのチームの対照的な様子も興味深かった。そして、校内での撮影から始めるということは、昨年末から行なってきた授業の積み重ねの「復習」的な役割となっていた。

▼落ち着きがなかった子どもたちも、廊下に出ると静かにパフォーマンスに集中している様子。列となって掃除していくパフォーマンス側とその列の前後左右に分かれて撮影していくカメラ。カメラ担当の撮影法の工夫がともおもしろかった。

・床につけるようにしてローアングルで撮影
・頭上を持ち上げてハイアングルで撮影
・すこくひいて後ろから撮影
・掃除をする手を撮影
・図工室においては、机にカメラを置き定点的な撮影
・六年教室周辺では、クラス標識・壁の掲示物など掃除している人以外のものも撮影
・廊下に引かれているライン、廊下の鏡越しに撮影

多目的室での「作品をつくっている意識をもつように」という言葉が響いているのか、どのカメラ担当もこだわって撮っていて、作品的なおもしろさを強く意識しているようであった。掃除をしている側の児童は「集団で」というより一人ひとり「個人的」に動き「掃除」しているようであった。動きの工夫という点では雑巾担当の方が自由度が高く、拭くものを床だけではなく、階段の手すりや壁、図工室ではドアや机とさまざまな動きが見られた点がおもしろかった。

「こんなことをしたらおもしろいのではないか?」という意識を持って撮影したり、動いたりしていた点でパフォーマンス作品への意識というものが高まっていたといえる。

一方で、掃除をしている児童が「個人的」な動きであったようにカメラ担当も撮影に夢中で、動きに関する指示やコースの回り方の指示が一切ないままなんとなくコースを回ったという感じがあった。

▼対照的である岩井さんチームの図工室での場面

「五、四、三、二、「スタート!」という掛け声ではじまり「はい、OKです!」という掛け声で撮影

僕もそう思います。

「子どもたちの撮る映像がおもしろい」という発見をした岩井さん自身の変化か（志田）

アート体験の個人性と教育の共有のあるべき姿についてなぜそう考えるのか説明とか根拠を提示して欲しい（志田）

↓これは個人的な感覚かもしれないです。ただし、同じ経験を提供するのは今のところ学校の一つの性質かな、と考えています。（清水）

撮影する画角やフレームの切り方については岩井さんからの補講が一度ありましたがそれが功を奏したということだろうか

（志田）
↓それもありそうですね。（清水）

を終えるということが、撮影中の児童たちの集中力と緊張感を高めていた。

児童だけのグループに比べて「集団性」が活かされていて図工室の掃除といっても、列
同じ方向で動くといったマスメディア的な動きが自然と発生していた。途中「もっと掃いて
ください！」と岩井さんが具体的に指示する場面もあった。緊張感というのが、さきほど
の子どもたちのみのチームとは、違っていているように感じた。生徒同士の間係と大人（先生
的な役割）と生徒の間係というのが大きいのではないか。ちよつと数人の児童に「けつこ
う岩井さんから指示されたりしたの？」と聞いたところ「いや、そんなことないっす。」
という。緊張感ある雰囲気も整然としたような動きも岩井さんが言葉で指示したというよ
り岩井さんの存在自体が無言に働きかけるようなものだったのだろう。児童のみのグルー
プが「おもしろさ」を追求したのとは違った「演技すること」といったような意識が高まっ
たと考えることができる。

▼多目的室に戻って。

先生 「グループ二（児童のみの）グループ、ふざけているようにしか見えない人がいます。
残念ながら、二期期やったことを忘れてしまった人がいるようです。一生にたった一
度しか外に出てこのようなことできないかもしれないんですよ。」

「表現活動なんですよ!!」
「真剣にやったものしか人の心に響きません。一人ふざけていても台無しです。」

児童のみのグループについていた目下先生、岩井さんが指示する時の整然とした雰囲気
まったくなかった児童のみのグループがまとまりなく真剣さが足りない部分が目立ったの
だろう。語気を強めて「表現活動なんです」といった一言、児童にはどのように響いたの
だろうか。パフォーマンスとは大人でさえその意味を見いだせない人が多いだろう。一言
で表現活動と言う明確さ・力強さに心動かされた。

雑巾担当であつた児童から、ほうきをやりたいとの要望が多く、残りのほうきを配る。

▼トイレ休憩

岩井 「みなさん外に出る時が来ました!!」

児童 「いえーい!!」

岩井 「旅立ちの時が来ました!!」

児童 「いえーい!!」

岩井 「さっき壁を雑巾がけしている人がいて、おもしろいな、かっこいいな、と思いまし
た。みんないろいろ試してみてください。」

「今日はクラブで分けました。なんでかという、僕はサッカーしていたんですけど、
こんなよくな時、たぶん僕も騒いでいるよくなタイプだったと思います。でも、だん
だん真剣に遊ぶことがおもしろいってわかってきたんです。みなさんこれから中学生
になっていって、もっと真剣に「遊ぶ」こととしていってほしいので、みんなが「やり
たい」って選んだクラブで分けました。」

「それでまじで一年に一度しかありません。今日は天気もね、神がかってますし。み
んな協力してやりましょう。よろしくお願いします!!」

児童 「よろしくお願いします!!」

▼出発

先生 「それではみなさん靴履いてください。校門に行きます。そこからパフォーマンスが
はじまります。」

「泡が出ているところは戯れるでも、なんでも、自分の思いのままに真剣に楽しんで
ください!」

児童 「泡だ」「そうそう泡」（とざわざわする）

多目的室を出て、下駄箱に向かう。やはり落ち着かない子どもたちも。「誰だ、喋ってるのは!!
まじめにやれ!!」と目下先生が叱る場面も。

▼校門

六年生全員が校門前に並ぶ。子どもたちもだんだん心が高まっている様子が感じられる。卒業式や
入学式の入場場面のような緊張感が漂う。児童同士で「静かに!」と声を掛け合う。

「カメラ担当の人は先に出て撮っても良いよ。」
「スタンバイ!」

みんな静かになり。一人ひとり順に列になって校門を出て行く。
本番となるとみんな真剣、一列になって静かにほうきで掃く。

通行止めしている道路に入り、一旦泡噴射器前に岩井さん中心に集まる。

岩井 「まず泡なしで掃除してみよう」

清水さんが「岩井さんの指示」の有
無を重視しているのは何故? 「指示
されたの?」という質問をしたのは
なぜ? 〈志田〉

↓この活動の当初から、岩井さんは
小さな指示により、自分が描く撮り
たい形に近づけているように思いま
す。この図工室でのシーンの場合、
子どもたちだけのチームと岩井さん
チームは動きがまったく違った。そ
れは、岩井さんの指示が影響してい
るのかな、と考えたからです。〈清
水〉

「おもしろい、かっこいい」という
形容詞を投げることで子どもたちの
どんな気づきや変化を期待したか
〈志田〉
↓確かに。興味深いです。はじめか
ら雑巾担当が人気なかったのを、
ずつと雑巾かっこいいよと言いつけ
てる岩井さん、子どもたちの意識を
変えるために意図的なのだろうな、
と考えていました。〈清水〉

泡を使うということは忘れていたん
でしょうか。〈志田〉
↓やはりまだイメージできてないん
でしょうね。どんなものなのか。

〈清水〉

「ケトハレ」のハレか 〈志田〉

子どもたちは辺りを掃きはじめる。
そこで…泡を噴射

「わああああああああ!!」
「きやあああー!!」

大きな歓声があがります。

岩井 「もっと泡ほしい？」
児童 「いええええーい！」 「ほしいっ!!」
「くるぞおお!!」
岩井 「掃除しろよー!!」

自然と泡を受けとりたくて、子どもたちはほうきを上に上げている。

・ほうきで泡をキヤッチ
・泡を友達同士つけあう
・噴射口にほうきをあてる

おもいおもいに楽しんでる様子。

二階の窓から見ている近所の方も一軒。楽しそうね、というような顔をされていた。

一旦泡を止め、もう一度岩井さんを中心に集合する。気持ちが高ぶってしまった児童を落ち着かせ効果も。

岩井 「これだけは守ってくださいね。人をたたかない、泡をかけられると嫌いな人もいるので注意すること、ケンカにならないようにすること。みんなできますか？」
児童 「はぁーい！」

岩井さん「それでは、もう一回いきます。掃除をはじめてください、泡出るようにします。」

一旦止めてはまた泡を出すことを四回ほど繰り返した。泡は道路のアスファルト上で潰すと白くべったりする。

・潰れた泡で円を描く
・潰れた泡で文字、ENDを描き、映像の最後に使って欲しいと提案する子どもも
・潰れた泡を雪にぬりつけてみる
など潰れた泡を楽しむ子どもたちもいた。

騒ぎすぎてびしょびしょに濡れてしまったり、この瞬間子どもたちは演技者であることを完全に忘

れていただろうし、いい意味で自然体であったように思われる。

服が濡れるのを気にしている女の子や、はじめる前はあまり乗り気でなかった児童もいたが、実際やってみると、楽しかったのか、今までにないような体験だったのか、全体的に楽しんでいるように見えた。地域の人も何人か通ると、立ち止まってなにをしているのかスタッフに聞いたり、写メ撮ったりしていた。概ね、楽しそうね」といった風で、嫌な顔をするような人はいなかった。

「これ掃除じゃないでしょ、もう。」、「逆に汚しているようだ！」
といった、「掃除ってなんだろう？」と考え直すことにつながりそうな感想を抱いたような児童もいた。

泡が出る瞬間まで実際子どもたちはどのようなことが起こるのかイメージできていなかったかもしれない。想像した以上に楽しかったのだろう、六年生とは思えないほど思いつき、童心に返っていて、作品の完成度云々より、岩井さんも子どもたちの笑顔にほっとして、嬉しそうだった。

観察者の総括——泡噴射マシンを使って泡に埋もれるように掃除するという様子は視覚的にとても美しい映像画が撮れていた。しかし、それがどんな意味があったのか、子どもたちにどのような思考が生まれたら、成功だったのかということが、まだわからないままである。出来上がった作品を見るとまた変わるのかもしれない。

このプロジェクトを通して岩井さんや日下先生が伝えた言葉というのは現代アート作品、参加型アート作品、映像作品というものの見方を伝えるようなものであった。それを理解するのはまだ難しいにしても、世の中にはこのような作品をつくっている人がいる、こんなアートというものがある、ことを知るのには強烈な印象として残ったのではないだろうか。

また、学校という場所は集団で行うものがたくさんあるが、(行事や式典、毎日の給食や掃除の活動、クラブ)多くの場合、様々な制約やルールに縛られている。そのような中で、今回のプロジェクトは、真面目に遊ぶ、という言葉が岩井さんがおっしゃっていたが、ルールの中で、真面目に取り組む中で実はいろいろなことができてしまうんだよ、というメッセージがあったように思う。教室で初回の授業で「最後は学校を出た道路で泡を使ってやる」ということに関して「そんなことやっついでいいの？」というように言った子どもがいたが、成長するにつれて増えていく固定観念をほぐすようなきっかけになったらこのプロジェクトは成功であったといえるのではないだろうか。

現場で実際にケンカのようなたたき合いが起こっていたがそのことほどう捉えるべきだろうか(志田)
↓小学生は騒ぐとだいたいそんな感じになるようなイメージですが。ケンカと言ってもじゃれ合いのようなものなんではないでしょうか。(清水)

何度かに分けていたことが、仕切り直し”や”区切り”を意味していたのだと清水さんのこの文章でわかりました(志田)

汚れたくないからと終始離れて見ていた子もいましたね。(志田)

宅配便の配達員がトラックが入れな

くて困ってたワンシーンはありました。(志田)

自分たちの日常を相対視する、良い気づきだと思います。(志田)

想定された特定の思考が生まれたら”成功”ということではないように思います。また子どもたちの変化は今だけでなく数年後数十年後に通底して、あるいは突如として気づきや思い出しとして機能するのではないのでしょうか。子どもたちへの教育的効果ももちろんですが、アーティスト・教諭陣・学校・地域・NPOなど多方面の大人たちにも発見や影響のあるプロジェクトなのだと思います。(志田)

↓その通りだと思います。ただ、ある部分に関して成功であったかどうかということは言えると思います。

(清水)

二〇一二年度、本町小学校のワークショップに参加した学生に、当時のことをどう感じていたかを、インド旅行中の

岩井優さんを時折交えながらインタビューした。

（二〇一八年二月三日実施）

壽：壽と申します。

岩井：お久しぶりです。

壽：あの時は不思議なことするなあと思いました。「何をしているのかな？」みたいな。最初に作品の紹介ビデオを見せていたでいて、いろいろ洗っている動画があつて、何やっているのかなと。今まで感じたことがなかったです。ああいうのは。本とか洗つてたのが印象に残っています。

岩井：僕は、学校の中という「制約」が逆におもしろかったです。あの後、海外のコレオグラフィアーにみんなが掃除をしていたり泡の中で暴れているのを見せる機会が多くあつて、けっこう皆おもしろがっていました。僕は振付をしているわけではないけれど子どもたちの中にも規律が入り込んでいる。それがダンスのように見える瞬間があつて、日本の社会制度みたいなものが反映されている感じがすると言つてました。

壽：そうですね。刷り込まれていますね。

岩井：とにかく僕は予算をいっぱい使つてみんなで遊べたらなと思つていたので、泡だらけになるという（笑）、それが一番楽しかったですね。その泡だらけに至るまでの、みんなが「これはいいたい何なんだ？」と思ひながらほうきでダンスしていたときはどんな感じでしたか？

壽：「何をしているんだらうな？」と、それしかなかったですけど。そのときぐらいから感じていたのは「掃除」という何気ない普段の行為でも感覚の違う人がいろいろ考えてやると全然違うんだなと。あとは動画を編集して実際にみると「掃除」が普段見るような感覚とは違つて見えた。それは初めてでした。普段見ている面とは別の面から切り取つたものごとを見てるのはすごいなと思いました。僕みたいな感覚だとかめないですよ。衝撃でした。

岩井：ありがとう、嬉しいです。最後のみんなが泡の中で暴れ出してから僕も含めてみんなのコントロールが手の届

かないところになつていたことがおもしろかったです。

壽：学校っていう括りで見るとあんなことは全くないです。あそこまで遊べるというのは。あと、六年生になるとああいうふうに男女ではっちゃけるっていうのかな、ああいうことをしない人もいるじゃないですか。そういう子も一緒に遊んでいるというのは稀ですよ。

岩井：泡の後、親御さん大丈夫だったかなとかいろいろ思いましたけど（笑）。

壽：子どもが楽しんでいれば親にマイナスな説明の仕方はしないから「まあいいかな」と思うんじゃないでしょうか。みんな僕より楽しんでました。最初に掃除はしますが、だんだん指定されたものから自由になつていったので、その時もけっこう遊んでいたんですけど、最後の泡はすごく楽しかった。

最初は、こうしてくれ、これはしてくれるな、といった感じで指示されてその通りにやる、みたいな感じでしたが、最後は自由でした。泡を人にかけてもいいし、ほうきで泡が出るのを塞いでもいいし。最後は全然、掃除している感じがしなかったです。床掃いで雑巾かけて…とやつていたときは一応、掃除なのかなと考てました。掃除なんだけど、何かが違うけどまだ掃除かなと思つていました。まあ僕の感覚ですけど。カメラを渡されて撮つていよいよつて言われたあたりから掃除じゃなくて遊びになつた。

宮下（アートフル・アクション）：そのタイミングがおもしろいね。初日が終わったときはみんな何て言つていたの？

壽：最初の場面はほとんど記憶がないんですけど、結局何やつてるんだらう、みたいな。やつていることが異質すぎて。普通に掃除しろつて言われたらやらされてる感じがするけど、異質なことをしているから…映像も撮つていましたし、何をやつているんだらうと思いました。そんなことをしているので、やらされている掃除つて感じがしなかったですね。

二回目くらいですかね、友たちと話題になつたのは岩井

時期とこの活動の時期が近かつたというのもあるんですけど、けっこうおもしろかつたので書きましたけれど、けっきょく先生がいろいろ脚色して形にしましたけれど、相当修正されました。いまになつて読んでみると出来すぎているなと。書けるわけないこんなの（笑）。

宮下：どちらかの担任の先生が「六年生になつたら、大人にもいろいろな大人がいるんだな、価値観つていろいろあるんだな。つてことに気づきはじめないといけないと思います」[学校内だとしても接する大人が限られてしまうので]つて言われてました。

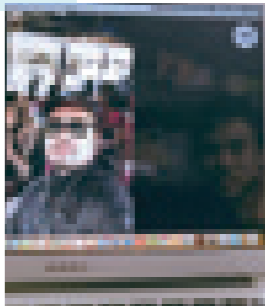
壽：いろんな大人がいるつていうのは言われてみればつて感じですね。学校の先生つて堅いじゃないですか。そういう人としか接しないつていうのは、とくに本町小だとそういう人が多いから言わんとしていることはわかります…いまならつかめます。たぶん、その時は何言つているんだらうつて感じだつたと思います。

宮下：担任の先生は「今回、私たちは何も知らなかつたから良かったんだと思います」つて。たぶん知らされていたら先生方も板挟みになつてしまつたかもしれませぬ。

壽：だめと言うか、こんなことしますつてネタバラシをしちゃうんじゃないですか。そうすると新鮮味がなくなりますよね、そうしたらマイナスだったんじゃないでしょうか。六年生だと人によつては反抗期だつたりもしますから、小学校の先生は毎日接しているで、そういう人に「こういうことするよ」と言われるだけで反抗したいという感情を抱く人がいるかもしれない。ボンと出て来た岩井さんだつたからできたのかな。先生が言っちゃうとつまんないと思う、男子の話ですけどね。女子はちよつとつかめな

宮下：いまでもこれは非日常だよ。

壽：僕の場合ですけど、高専に行つたらここから先、クリエイティブなことに接することがないですよね…まだわからなくて。中学校三年十高校二年の経験からしても無いので、かなり貴重な体験をさせてもらったと思えます。自分から能動的に情報を得ようと思ないと知れないことだつたので。学校だつたから自分の興味のない分野のこともやらされる、それで受け入れる形で行うことができた。高専に来てからはそういう活動はない。だから、いま振り返ると貴重な体験だつたと思います。今後、僕が積極的に



岩井さんへのインタビューはスカイプを使って行われた。写真右はインタビュー時の壽 龍治（ことぶき・りゅうじ）くん。

さんが芸大の博士課程の卒業だつていうこと。それで持ちきりでした。まず会えないじゃないですかそんな人と、普通に生きていて。僕ら東京高専なんて。芸術。みたいなことしないので。美術もない音楽もなくなりません。書道もないですから。旋盤でゴリゴリ金属削るわけですよ、岩井さんのようにクリエイティブなことを人には高専にいると合わないで、会えて嬉しかつたです。びっくりしました。たぶんもう会わないんじゃないかと思います。だから六年生のとき僕の周りはその話で盛り上がりました。「あの人すごいんだ！」と思つてやつていたというのはあります。

宮下：岩井さんの文脈では、掃除、というところからバブルマシンに行くことは違和感ないと思うんですけど、みんなの中ではどうでしたか。

壽：初回の頃の揃つてしゃべらずにほうきで掃いて列になつて…というところ、最後をつなげる全然違いますけど、だんだん自由になつていった感じがします。さすがにどのタイミングでどんなふうになるということは覚えていないのですが。だんだん自由になつていって最後は好き放題になつていったということはそんなに不自然ではなかつたです。

宮下：カメラを渡されてみてどうでしたか。

壽：カメラはおもしろかつたです。僕に限つて言えば機械を触るのは好きなので、カメラに触れるというだけで嬉しかつたですね。自分でカメラに触つて、運が良ければ自分が撮つたものが作品にも映るんじゃないかなと思つたりして。実際、作品に映つていたかは覚えていないのですが、振り返つてみると子どもが撮つた映像をいっぱい分割した画面に、ちょこちょこちょこ切り取つて映していたの

そういう活動をするかと言われたらわからないですけど、だからより意味があるのかもしれない。

宮下：また岩井さんに会いたいですか。

壽：チャンスがあればいろいろ聞いてみたい。どうやつたら芸大に行けるのか、出られるのか、そこが不思議でしょうがないです。あとは、昔は思わなかつたんですけど、どうやつて生計を立てているのかなとか。普通の…小学校出て、中学校出て、都立の高校行つて、私立の大学行つて、リクルートスーツを着て就職する。そういう流れが僕に捉えている。普通。なんでですけど、芸大つていう段階で既にそういう道じゃない。芸大を出てクリエイティブな活動をしているというのの僕とは真逆の人生なので、どうやつて生きているのか不思議ですね。うらやましくはないけれど…でも、聞いてみると、もしかしたらうらやましくなるかもしれない。触れないと自分の中ではわからないですから。

宮下：本当に異質なものに出会つたつてことだよ。

壽：そうですね、僕にしてみれば。

岩井：生計が成り立っているのは世界七不思議。

宮下：でも理由や道理がなくなつて成り立っているつていうのはいいと思いませんか。

壽：そうですね、そこも違いますね。理由があつてやつているつていうのが僕の言う、普通、なので。

宮下：不思議でもできちゃうつてことですよ。

壽：僕が思うに、それはやつぱり岩井さんのすごいところだと思えます。センスというか。僕は逆立ちしても出来ないです。

壽：いま何でインドに行かれてるんですか。旅行ですか。

岩井：旅行。本当にバケーション。

壽：インドつてバケーションなんですか。テレビ番組の珍獣ハンターが行つているイメージしかありません。

岩井：三週間。冬の夏休み（笑）。

で、もしかしたら映つていたかもしれないですね。

宮下：学校の中にああいう活動が入り込むということはどうでしたか。

壽：おもしろかつたです、そういうこと学校ではほしないですから。ふだん勉強メインでやつている場所で全く違うことをするというのは違和感あつたけど興味深かつたです。

バブルマシンの翌日は、ああいう非日常的なことは終わつちやつたんだなと思いました。泡になつてあつという間に消えてしまつた。泡をバブルマシンで飛ばした後DVDをもらったんですけど、そこにタイムラグがあつたじゃないですか、その後に見るとこんなことしていったんだなと。完成した映像を見たのは後ですよ。切り取つてあるのを見ると全然違うから、それはそれでギャップを感じました。自分が感じているのと切り取つて作つた作品は全然雰囲気違いました。

宮下：交流センターでの展示もみんなで見に来ていましたよね。

壽：映像を見ながら、「あいつ変なことしてるー」みたいなそんな感じでした。泡のところとか。『みんなのカメラ』の展示もありましたよね。ひとりひとりカメラを渡されると、みんな変な顔したりおもしろいことするじゃないですか。そういうのを見て「あいつ変なことしてるな」みたいなことで盛り上がっていました。

宮下：日下先生はどうでしたか。

壽：活動自体には干渉しなかつたのであまり印象は無いです。

宮下：やつてみて、もつとこんな変なことできるんだなと思つたことはありますか。こまでやつてもいいんだ、みたいなこと。

壽：その時は、大人の力でやらせてもらえる。みたいな感じがあつた。大人になつてから一生懸命いろいろやる、こういう環境も作れるんだなと思つていました。道路の閉鎖とかやつて初めてああいう状況が作れるわけですよ。自分がちよつとやつたくらいではできないけれど、ああいうこともできるんだなと思いました。おもしろい活動でした。僕、卒業文集にこの話を書いたんです。卒業文集を書く

保育園でのこころみ

活動の記録

二〇二二年

さくら保育園

参加アーティスト：RME
タイトル：さくら保育園二〇二二年度卒園制作

実施期間：二〇一三年一月一九日、一月二六日

会場：小金井市立さくら保育園

参加者：卒園児二〇名

●運営主体と役割

実行委員会の組織

保育園児の保護者、保育園スタッフ、行政、NPOによる実行委員会を設け企画運営を行った。

①企画②主旨を踏まえ、アーティストを選定する③スケジュール、プログラムを決める④広報⑤当日の運営⑥反省会、アンケート等の実施の調整

二〇二三年

さくら保育園

参加アーティスト：中島崇

タイトル：卒業制作で宇宙人を作る

実施期間：二〇一三年二月一日、

二〇一四年一月一八日

会場：小金井市立さくら保育園（園内ホール、教室）

参加者：年長園児二二名

●運営主体と役割

年長父母有志と園職員による「卒園制作実行委員会」+ NPO

①企画②スケジュール、プログラムを決める③広報④当日の運営⑤反省会、アンケート等の実施の調整



小金井アートフル・アクション！事業では、就学前の子どもたちとともに、市内の公立、私立の保育園九園で活動しました。教科や習得目標といった学校のプログラムに移行する前の子どもたちに、全身をつかり、出会ったことのない素材や音楽に触れるといった原初的な体験を通じ、子どもたち一人ひとりの表現活動を通じた自発的なコミュニケーションの機会をつくることを重視しました。そのためには保育者や保護者とともに、発見や驚きや喜びに満ちた創造的なコミュニケーションを日々の保育の中に広げていくことが重要であると考えています。そこで、NPO、アーティスト、保護者の役割やどのような機能を持つことが必要なかを考えながら、できるだけ園の実情にあった活動を、保護者や保育園、NPOや行政が共同し、持続的に展開することができるようになることを目標としました。

また、保育園では、保護者のみなさんが自分の子どもだけでなく、たくさんの子どもたちとともに活動すること、保育士と保育以外の場面で出会うこと、アーティストやNPOのスタッフ、行政の担当者との出会うことなど、これまでになかった出会いを生む機会と考えました。保育者にとっても保護者の様々な面に触れること、他分野の人たちとの関わりが日常の保育に新しい可能性を見いだすこともあるでしょう。

九回の活動では、終了時に保護者、園、アーティスト、NPOによる振り返りの活動、アンケートを行ってきました。それらを元に課題を整理します。

誰がどのように事業を進めるのか？

九回の活動に共通しているのは、深度の差こそあれ、NPOが一方的に保育園で事業を行うのではなく、市の計画の意図を説明し、園の特色や要望、立地上の条件などをヒアリングし、一緒にプログラムを作ったことです。その際、園の意向とともに、大切なのは保護者の関わりの方でした。それは保護者会、卒園児のための種々の活動を行う会、学習研究会など様々でしたが、九園それぞれに、事業を進める実行委員会のような会を作り、園、NPOの三者がミーティングを重ねながら実施しました。特にすべての回で留意したことは、この事業を運営する会が、ほかの保護者のみなさんに開かれていることでした。「勝手に決めて」、「やらされている」という意見、「何かよくわからなかった」という、初回のさくら保育園での振り返りのアンケートなどからの反省です。また、開いていくことは同時に、分担や担当ではない保護者の方からの自主的な参加や意見が得られることにもつながりました。

また、三者、時にアーティストを交えた四者がワークショップやイベントを実施していくた

めの意思疎通や意思決定のあり方を巡っては、それぞれの回ごとに課題がありました。特に、園と保護者会、NPOの共催（けやき保育園）という設定の場合、その三者の役割の分担、立ち位置がわかりにくいという意見も聞かれました。けやき保育園のけやき祭のように、卒園児対象ではなく、乳幼児から就学前までの全員を対象とする場合には、よりきめの細かい対応が必要になることから、役割と役割に応じた意思決定と告知、広報のルートの明確化も必要となりました。これは大なり小なりどの園においても指摘された点です。

そんな中で、保護者の方々はメールや連絡網などを通して連絡事項や相談事を進めました。特に小金井保育園では新聞、けやき保育園では広報や告知、場合によっては意見を聞くための広報ツールを開発しました。これらはおおむね好評でよく機能しました。

子どもたちの様子から

保育園は〇歳から就学前までと年齢差はとても大きなものです。子どもたちの様子を振り返るコメントの中にも、どの年齢を対象にしたら良いのかを迷う意見も寄せられました。すべての子どもたちを対象とした場合にはプログラムの幅がとて広くなり、園だけで行うには負荷が大き

く保護者の参加や協力がとても重要になります。けやき保育園のように、低年齢のクラスの子どもたちが保護者と参加しやすいプログラムを一日の活動の中に入れて込むことも一つの方法でした。また、さくら保育園のように、卒園児の活動の成果を展示することに合わせて、

くりのみ保育園

講師：藤塚陽子（脚本家、演出家）
 タイトル：野川の怪獣退治（確認）
 実施期間：二〇一三年一月一日～四日
 会場：金井市立くりのみ保育園
 参加者：大人三二名、子ども四一名
 運営：園職員、学習会担当役員

●運営主体と役割

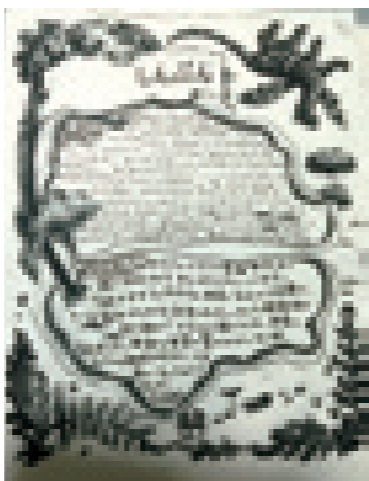
「学習会」の枠組みの中で行えるよう、「学習会担当役員」が運営の主体
 ①企画②主旨を踏まえ、アーティストを選定する③スケジュール、プログラムを決める④広報⑤当日の運営⑥反省会、アンケート等の実施の調整

小金井保育園

参加アーティスト：井上ヤスミチ
 プログラム内容：小金井保育園卒園記念壁画制作
 実施期間：二月四日～二〇一五年一月三十一日
 会場：小金井市立小金井保育園、五歳クラス
 ラスの園児二六人及びその保護者（保護者は本番のみ参加）
 日時：二〇一五年一月三十一日
 プレWS：二〇一四年二月四日、一日、一八日、二〇一五年一月五日

●運営主体と役割

卒園児イベント担当保護者



①企画②主旨を踏まえ、アーティストを選定する③スケジュール、プログラムを決める④広報⑤当日の運営、当日保護者の立会い⑥反省会、アンケート等の実施の調整

わかたけ保育園

参加アーティスト：武政朋子、サポートスタッフ、園の職員、地域の造形作家
 プログラム：わかたけこどもミュージアム
 実施期間：二月一日～三日（土）、二月五日（月）、



具体的な内容について検討し、保育園とつなぎます。希望を反映し実施した活動は壁画、劇、造形、音楽、絵画、インスタレーションなど様々でした。事後のインタビューを見ると企画の内容については、好みの問題も反映して、様々な意見や具体的な希望も見られました。運営に関して、アーティストが当日だけ、あるいは二、三回だけやってくるのではコミュニケーションの機会が少ない、イベント当日だけでなく、園の保育の中にワークショップのように入ることが望ましいのではないかと意見や、ものづくりなどの経験の少ない保護者に対して準備を一緒にすることができるとの意見があったという声も聞かれました。

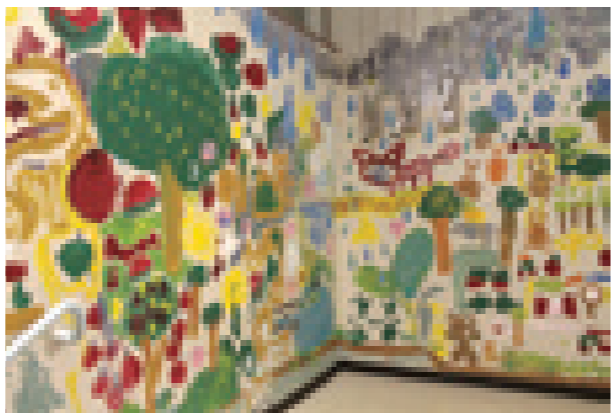
全園児とその家族に開かれたコンサートを開催する。またわかたけ保育園のように、園庭をミュージアムとして、制作した作品の展示と遊びのイベントをすべての年齢層、近隣の方に開くといったこともありました。

子どもたちの制作について、「子どもが自信を持って、自分の作品を説明するのがよかったです。また、わかたけの特長である園庭と野川をテーマにするという事はしっかりとおぼれずに完遂できた」という意見があり、ミッションが明確であることは保護者へのメッセージとしても有効であることがわかりました。また、「これまで楽しそうに絵の具を使って壁に絵を描くという機会が無かったので、本当に子どもには良い経験ができたと思う。当日の子どもたちの反応が一番素直で良かった」（さくら保育園）というコメントもありました。



市内在住の劇作家を招いたくりのみ保育園では、保護者の意見を聞いたり具体的にプログラムをつくる段階をゲストの演出家と並走し、当日もたくさん保護者と子どもたちの賑やかな会になったというケースもありました。

さくら保育園（二〇一三、二〇一五）、わかたけ保育園、小金井保育園、けやき保育園では、一日だけの活動ではなく、いくつかのステップを設けて、園の日常の保育との協働を目指しました。わかたけ保育園では、（一）各家庭にワークシートを配布し、保護者との対話を促し、それをもとにして宝物を探す。（二）宝物の、ワークシートを持ち寄り、子どもたち同士、子どもたちと市民アーティストが対話を重ねながら作品の制作。（三）クラスごとに分かれてアーティストの声かけで大きなビニールシートにカラフルな絵の具を用いて思い切り体を使って絵を描く。（四）上記の二、三で制作した作品をフィールドミュージアムとして展示し、近隣のみなさん、保護者の方も自由に見にこられるようにしました。（二）、（三）の活動は市内に在住する造形の専門家もゲストに引き複合的な活動にしました。



子どもと造形という面では、二〇一三年度のさくら保育園では、中島崇さんを招き、ウォーミングアップとして宇宙人をイメージして体を動かす、絵を描いた後、粘土で造形し、園内に展示しました。このように「宇宙」という一つのテーマのもと多様な活動を持ち込めることは、のちの保育の時間にも参考になったと記されています。

小金井保育園では、プログラムの当初からアーティストに参加を願

い、打ち合わせにも事前の会場設営、当日の養生や撤収などにも立ち会ってもらいました。アーティストからは、「保育」に対してどこまで踏み込んで良いのかわからなかった、予想以上に負担がかかったとの意見もありました。



園の立地条件や特色、家庭の日常を反映させること

わかたけ保育園では、子どもたちが毎日遊ぶ野川という立地を生かすこと、保護者が子どもと一緒に過ごす時間を大切にしたいという意見から、家庭に持ち帰り記入するワークシートを作成し、野川や園庭をイメージした宝物について、保護者と語り合う時間をつくることを促しました。くりのみ保育園では、活動内容を検討する会の中で、子どもとのスキップの方法がわからないという意見が聞かれました。また園からは、保護者と園が一緒に活動したいという希望もありました。これらの要望をプログラムに反映させました。二〇一四年度のさくら保育園の等身大の絵を描いた活動も、保護者から親子で楽しめるプログラムという要望に添ったものでした。

卒園児イベント担当保護者

①企画②主旨を踏まえ、アーティストを選定する③スケジュール、プログラムを決める④広報⑤当日の運営、当日保護者の立会い⑥反省会、アンケート等の実施の調整

さくら保育園

プログラム内容：親子で描く子どもの等身大すがた

日時：二〇一五年一月一六日

場所：小金井市立本町小学校体育館

実施体制：運営一〇名（保護者）、WS参加親子五五組職員三名

●運営主体と役割

保護者会＋園

①企画②スケジュール、プログラムを決める③広報④当日の運営⑤反省会

二〇一五年

けやき保育園

出演者：亀田奈美子、松村拓海、やまぐちみえ、清水達生、猪股桃絵、鎌田尚子

プログラム名：けやきまつり「大きな『き』」に集まる仲間たちに変身して、けやきランドの音楽隊とパレードしよう！

内容：

プレワークショップ（五歳児対象）

第一回：けやきランドの音楽隊との交流、「き」のつくことばがし、み

なで歌う

第二回：大きな「き」にはっぱをつける、横断幕の作成

第三回：オリジナルソング

「けやきの（き）」を歌う、みんなで振り付けを考える、プチパレード

親子衣装制作：自由参加

会場：けやき保育園

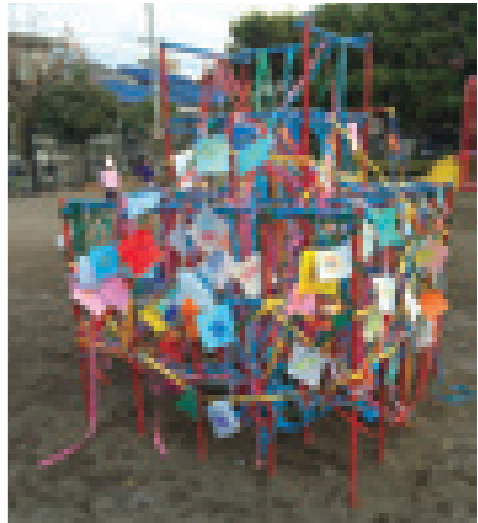
入場者数：約二八〇人（園児、保護者、および近隣の方々）

実施体制：（運営）保護者会担当、ボランティア＋園＋NPO

●運営主体と役割

毎年父母会主催で行われている「けやきまつり」を父母会、保育園、NPOが合同で、全園児と保護者、地域の方を対象として実施。担当する保護者、園、NPO、イベント担当ではない保護者を巻き込んで複数回のミーティング及びメールなどを用いたミーティングや意思確認などが行われた。当日の演者、写真撮影も保護者からのボランティアが複数参加した。

①企画②主旨を踏まえ、アーティストを選定する③スケジュール、プログラムを決める④広報⑤当日の運営、当日



結果的には、前年度の他園の実績などの情報を参考にしながら打ち合わせを進める中で埋められた点と最後まで未消化に終わった点が指摘されています。特に、ゴールは何か？ 目的は何か？ なぜ子どもの保育にアートが必要なのかという、事業の根幹に関わる問いには十分に納得を得られなかった回もありました。わかたけ保育園では、振り返りの会においても、ゴールを明確に設定し、可能な限り効率的にするのがよい、という意見が聞かれました。

小金井保育園では打ち合わせ当初は何ができるかわからないという意見もありましたが、卒園児が毎年実施しているお泊まり保育、日常の保育の中で読み込んでいる「エルマーの冒険」と造形活動をつなげることを保育士自らの発案で決めることができ、方向性が共有されるようになりました。けやき保育園では、保育園が転居したことで失った櫻の木思い出をテーマにしました。このテーマが得られたことで、保護者や保育士からプロジェクトの骨格が随分と見えやすくなったとの意見が聞かれました。

その一方で、忙しい保護者がすべてを決めることは難しい、ある程度選択肢を出して欲しい。保育園や保護者はそれを選ぶ方が合理的であるという意見も聞かれます。これは当初の、保護者の経験も重視するところからずれていきます。しかし、多忙な保護者にとって半年以上時間をかけるようなイベントは負担であることは間違いありません。けやき保育園の例に見るように（別項インタビュー参照）、保護者会の会長のリーダーシップや保育園の園長の協力などにより充実

した時間を持つことができた回もありますが、中心的に運営に関わる保護者の負荷のかがり方は課題です。

NPOスタッフの気づきや学び

さくら保育園では、初年度のアナキートで、NPOが勝手に進めていて、意図がよくわからない、説明が足りない、保護者や子どもたちの気持ちを反映していないといった意見が聞かれました。そのためには保育園という場、行政の計画を市民に落としこむための手続きやわかりやすさ、実際の活動の質を高める必要があります。

また、保育園側にとっても「意思の疎通、相互理解、共通認識など他の団体と行う難しさを感じた取り組みであった反面、知らない世界が見られて楽しいこともあった」という振り返りからみられるように、日常の中にイレギュラーなものが入り込みにくい保育園で、相互に理解と共感を形成していくためには問題意識を共有する時間も重要だと考えています。

NPOが必ずしも高い専門性を有しているわけではありません。園内外の子どもたちの状況をよく見ること、保護者の理解、保育園の持つ専門性やゲストアーティストの個性を尊重しながら、同時に何が必要かを話し合える場や技術を育てることなど、能力向上も大きな課題です。

園の独自の活動にそ

だつこと
さくら保育園の初年度活動の振り返りの際、保護者の方が「参加」ではなく、「主体」だとみんなが思えるような場をつくる必要があるというコメントがありました。この園では、初年度と二年目はアーティストを選ぶこと、ワークショップの運営、園内の広報など

保護者の立会い⑥反省会、アンケート等
の実施の調整

さくら保育園

出演者・講師・アーティスト：（展覧会・コンサート）亀田奈美子（フルート）、安川友美（ピアノ）

プログラム名：アートフルプロジェクト
家族で楽しむみんなの手

実施期間…

制作ワークショップ…二〇一六年一月二五日、一六日

展覧会兼コンサート…二〇一六年一月三〇日

内容…

制作ワークショップ…手形を用いた共同制作と家族での自由画展覧会兼コンサート…制作ワークショップの作品展示と、フルート奏者、ピアノ奏者によるコンサート

会場…さくら保育園ホール

入場者数…六四家庭（制作ワークショップ）

展覧会兼コンサート参加…三〇家庭＋土曜保育の園児一〇人

実施体制…保護者、園の担当者

●運営主体と役割

保護者会＋園

①企画②スケジュール、プログラムを決める③広報④当日の運営⑥反省会

二〇一六年



を園長、卒園のイベントの係、保護者ボランティア、NPOが実行委員会として活動しました。その後、園の恒例事業として実行委員会の主導で徐々にNPOの関わりが減り園の実情にあった活動となって行きました。

けやき保育園の活動に参加した保護者は、その後、音楽で震災のボランティア活動を行った他園での活動に参加しました。けやき祭に組織されたパババンドが翌年のけやき祭に演奏をするといった動きも生まれています。これらのスピノフは他の園でも生まれているでしょう。

イベントから日常へ

忙しい保護者、園の関係者が時間を割き知恵を注ぎ、活動を行いました。企画から実施に時間をかけ一園ごとに複数回のワークショップを行うこともありましたが、「イベント」を超え、保育の日常に自然に入り込み園の生活の底上げにつながることはなかなか難しいことでした。

ある程度のパッケージ化された選択肢や目標をはっきり提示すべきだという意見は数園で聞かれましたが、できるだけ園独自の活動がそれぞれの園から生まれるような働きかけを継続しました。その振る舞いは「本プロジェクトの趣旨が余程理解されない限り、たたき台を出すのは市やNPO側の役割との認識。そうでないというのであれば、うまくプロジェクトの目的や趣旨を整理して伝えないと、父母側も混乱しかねない」といった意見となってあらわれました。

一過性のイベントであれば、NPOとアーティストがゲストとして訪問するだけでも実現できませんが、「造形などを通じた子どもたちの自発的なコミュニケーションの実現」は、保護者、園、アーティストの参加なしにはありえず、そのための理解と共感を深めながら持続性のあるきめの細かい関与と手続が今後重要でです。



母会の会長を引き受けるときに、この年、アートフル・アクション！というイベントが

けやき保育園で行われることが決まっていたので、何かおもしろいことができるという前向きな気持ちと、その一方できちんとした進行の人たちが入るから安心してお任せして私は内部だけを回せばいいのかなというゆるやかな気持ちの両方がありました。楽しそうなことはできそうだけ



酒井桃子

愛の園保育園

出演アーティスト…松村拓海、清水達生、西尾健一

実施期間…

お散歩での「秋探し」…一〇月三十一日
一回

あきまつり…十一月二日 一回（園児、保護者、卒園児対象）

会場…愛の園保育園

実施体制…保育園父母会による恒例行事「あきまつり」におけるホールイベントの一つとして保育園、保護者の係担当
入場者数（参加者数）の実績…六〇名（園児、保護者、および近隣の方々）

●運営主体と役割

保育園父母会による恒例行事「あきまつり」



保護者だけだと限界があるので、プロの方たちに入っていたことで、より大きなものができるかもしれない、私はそこに乗っかって勉強させてもらいたいな、くらいの気持ちで引き受けたのが経緯です。

けやきまつりの反省会でも率直にお話ししましたが、正直アトって何かもわからないし、どうやっていいかわかりませんでした。自分たちでアイデアやプランを出せと言われても非常に難しかった。そのことをお話ししたときも宮下さんが、だから逆に例を与えず、こっちで一から考えてほしかったんだというふうにおっしゃられた。それも一理あるんですけど、正直そこまで私たちには時間がなくて、できれば何パターンか——パレードをしたら作品を一つつくるなど——示して欲しかった。合わせて、これくらいの規模のことをすると大体どれくらい工数が必要で、このくらいの人と時間は必要だよ、というボリュームがわかるものなどを提示してもらい、その中から選択をするといった手続きが欲しかった。その上で、ではこれを実現するならこういうものが必要だけど、保護者のみなさんいかがですか？ というオーダーに応える形でアイデアを出すくらいから携わることができると、負担感だけでなく楽しさがすごく残るのかなというか……。

私たちのアイデアとどうしても限界があるので、アイデアを引き出す——たとえば、初期の段階のプレストのときこそクリエイターの方に来ていただいて、アイデアを膨らませるところを一緒にやってくださったら、保育園のお母さんたちは実行するのは得意なので、楽しくできたかなという気もします。また、衣装づくりのところも、クリエイターの方何人かに来ていただいたと思いますが、その人たちが指導する場面はほとんどなかった。できれば時間を決めて何時からはこの人の講義があるからこの人と一緒に作ってみよう、みたいな感じでも良かったかな。

実際の当日のイベントは音楽もありました。そのために何回か練習の機会を設けたりして、盛り上がるものになったと思うんですけど、たぶん保護者の方は音楽家に指導されたいっていうのが期待値だったと思うんですね。看板やリーフレット作りも、私たちがつくるにしても、アートフル・アクションっていうくらいだから相当素敵なものがあがってくるんだろうなという期待も強かった。一つ一つのツールとか発信方法とかでみんなのモチベーションが全然変わるので。だから作ってもらった看板のように、土台はアートフル側に作ってもらって、保護者や園で追加し更新していきける方法はすごく効果があったと思いますし、一参加者の人が体験できる点はいいと思いました。

保育園のイベントは、面倒臭いと感じる方も多いと思うので、期待させるような仕掛け——たとえば、こんな素敵なもの作れるんだと衣装を展示するとか、YouTubeで事前に音楽を聴いて覚えられるようにしてくれたこともすごくよかったですよね。下準備からの仕掛けが段階ごとに色々あるのは良かったかなと思います。「けやきのうた」は二年経った今でもずっと歌われていますし、卒園アルバム最後のページに譜面と歌詞を載せたりと、受け継がれていくことになったのは嬉しく思います。



- り」におけるホーリイベント担当の保護者+園+NPO
- ①企画②スケジュール、プログラムを決める
- ③アーティスト選定④広報⑤当日の運営⑥反省会



父母には色々な考えの方がいらっちゃって、そこをまとめるのは難しく、あまりエッジが立ったことだけやると、一部の人が楽しめなくなってしまう。そこであの時のけやきまつりの実行委員のメンバーが目指したのは、一人でも多く、少なくとも全体の八割九割の人が安全に楽しめるものでした。幼児も赤ちゃんも大人も楽しかったっていうことが目標でした。当日、終わった後、全然知らないお母さんから「すっごく楽しかったです」と声をかけてもらって、そういうこともとてうれしかったです。

もう一点大事なことは保育園の先生方の力がとても大きかったことですね。先生方が当日も自らすごいコスプレして盛り上げてくださったり。けやき保育園は先生方の楽しもう！みたいな力がすごく強いんです。あとは当時の園長の仁子さんの確かな意見にはとても支えられたなと思います。だめなものだめだけけど、これはいいっていう、はっきりしていることとかもありがたかったです。普段は園長先生とやり取りすることはそんなにないですが、近くでお付き合ひさせていただいて、とても良かったなと思います。

AA◎保育園にはいろんな職能の保護者の方がいらっちゃって、それぞれの場で手をあげてくださった。けやき祭の当日、トランペット吹いてくださった方もその後、別の保育園のプロジェクトにも参加してくださいました。熊本の震災のときに音楽のボランティアでミュージシャンとして熊本にも行ったとおっしゃっていました。けやき保育園であの体験をして、自分でもできるんだって思ってくれたそうです。ご実家が熊本の震災に遭われて、自分ができるのは、けやき保育園での体験を、ということ音楽でボランティアもされたそうです。

保護者から参加したミュージシャンもカメラマンもプロの方でした。在園児の保護者とはいえ、プロの方たちに対して無償で参加してくださいというのをお願いしづらかったんですけど、みんな快く参加してくださいました。それ以外にも、この時はイベントに慣れている人がいたり、実行委員にはとてもいいメンバーが集まって、みんながこっちの役割はこう、あっちの役割はこうってそれぞれ進行してくれたので、ありがたかったです。

*さかい・ももこーけやき保育園には娘が三歳児クラスの二〇一四年から三年間、翌年二〇一五年より二歳下の息子が二歳児クラスに入園し、現在も年長児で二〇一八年現在も在席中。アートフル・アクションが開催された二〇一五年度の父母会会長に推薦され就任し、同プロジェクトの保護者側のリーダーとして進行を行う。

開催記録

いっぽんみちをあるいていたら

本町小学校 六年生 ニクラス
実施期間・回数：二〇一四年一月～三月 WS五回＋発表会
会場：小金井市立本町小学校、校外、小金井市民交流センター
アーティスト：多田淳之介、富田了平（ドキュメント制作）、大木裕之（最終パフォーマンス映像制作）
スタッフ：NPOスタッフ＋市民スタッフ七名＋学生スタッフ二名

森を動かす—— 困難なもの、固いものに向き合う

前原小学校 五年生 ニクラス
実施期間・回数：二〇一四年一月～二月 三回
会場：小金井市立前原小学校、校外、小金井市民交流センター
アーティスト：菅野麻衣子
スタッフ：NPOスタッフ＋市民スタッフ四名＋学生スタッフ六名

本町写し絵劇場

本町小学校 六年生 ニクラス
実施期間・回数：二〇一五年一月～二月 WS四回＋発表会
会場：小金井市立本町小学校図工室、多目的教室
講師：鈴木英雄（秋田マタギ）、木村望（マタギ見習い）、江戸糸あやつり人形結城座（写し絵体験）
スタッフ：NPOスタッフ＋市民スタッフ六名＋学生スタッフ二名

野川フィールドミュージアム

前原小学校 六年生 ニクラス
実施期間：二〇一五年一月～三月
会場：小金井市立前原小学校、野川周辺
スタッフ：NPOスタッフ＋市民スタッフ六名

植物になった白線@本町小学校

本町小学校 六年生
実施期間・回数：二〇一一年二月 WS二回
会場：小金井市立本町小学校
アーティスト：浅井裕介
スタッフ：市民、学生を中心とした南小連携チームで事業をコアとし運営にあたった

植物になった白線@南小学校

南小学校 六年生 ニクラス
実施期間：二〇一二年一月
会場：小金井市立南小学校／校外
アーティスト：浅井裕介
スタッフ：市民、学生を中心とした南小連携チームで事業をコアとし運営にあたった

音の贈りもの

前原小学校＋第四小学校 四年生 ニクラス
実施期間・回数：二〇一五年二月～二〇一六年一月 WS三回＋合同発表会
会場：前原小学校 第四小学校
スタッフ：NPOスタッフ＋市民スタッフ八名

前原たてももの園をつくらう！

前原小学校 六年生 ニクラス
実施期間・回数：二〇一七年二月 三回
会場：前原小学校図工室、校庭
アーティスト：前田幸則、瀧本広子
スタッフ：NPOスタッフ＋市民スタッフ六名

ドキュメンツ／カメラと箒と雑巾と

本町小学校 六年生 ニクラス
実施期間・回数：二〇一二年二月～二〇一三年一月 WS五回
会場：小金井市立本町小学校／校外
アーティスト：岩井優
スタッフ：NPOスタッフ＋市民スタッフ九名

草や布をねじる、組む、そして空間を編む

第四小学校 五年生 ニクラス
実施期間・回数：二〇一七年一月～二月 全三回
会場：第四小学校図工室、三葉公園
アーティスト：下中菜穂
スタッフ：NPOスタッフ＋市民スタッフ五名＋アーティストスタッフ四名

見ないでおぼえましょう

第四小学校 四年生 ニクラス
実施期間・回数：二〇一七年一〇月～十一月 三回
会場：第四小学校
アーティスト：アーサー・ファン
スタッフ：NPOスタッフ＋市民スタッフ七名

森の中に風景をつくる

緑小学校 四年生 ニクラス
実施期間・回数：二〇一七年二月 三回
会場：緑小学校
スタッフ：NPOスタッフ＋市民スタッフ八名＋アーティストスタッフ四名

想起の遠足本町小学校編

本町小学校 六年生 ニクラス
実施期間・回数：二〇一七年二月 三回
会場：本町小学校
アーティスト：アサダワタル
スタッフ：NPOスタッフ＋市民スタッフ三名＋学生スタッフ四名

ドラマチック図工時間

本町小学校 六年生 ニクラス
実施期間・回数：二〇一四年一月～二月 WS四回＋発表会
会場：小金井市立本町小学校（多目的室、図工室）
アーティスト：藤塚陽子、澤和幸、松村拓海
スタッフ：NPOスタッフ＋市民スタッフ四名＋学生スタッフ二名

六年生のわたし 本町小白画像展

本町小学校 六年生 ニクラス
実施期間・回数：二〇一七年二月～三月 WS三回＋発表会
会場：本町小学校多目的室、住宅供給公社本町アパート内の公園
アーティスト：いちむらみさこ
スタッフ：NPOスタッフ＋市民スタッフ二名

街のなかに、外に出て行くこと、 街のなかのきざしをつかむ

振り返りつつ、未来を展望する

街にアーティストを招く アーティスト招聘事業について

アーティスト招聘事業では、2009年から2011年度までの（イミグレーション・ミュージアム・東京は2012年度まで）3年間、2人、1ユニットのアーティストを小金井市に招き、3年間市民のみなさんとともに活動しました。

この事業は、市民とともにアーティストや活動内容を決めることから始まりました。2009年は準備事業として、工藤安代氏、三ツ木紀英氏、大澤寅雄氏の3名の専門委員を招き、公募により参加した市民にむけて二回の講座を開催しました。その後、講座に参加した市民による市民委員会や、行政、専門委員の委員会で、どのようなアーティストにどのような活動をしてほしいか、意見を出し合いました。

アーティスト招聘準備委員会での主な意見には次のようなものがありました。

①多様性：

さまざまな人々が参加できること、多くの人が巻きこまれるような魅力を感じる活動
身近な環境で楽しめるようなもの

何かが起こるような予感を感じさせるようなもの

さまざまなところで行われる同時多発的なもの

②持続性：次へつながっていくこと

人と人がつながっていく仕掛けがあるもの

場（企画）に関わることで触発されるものがあること

作品制作におけるパートナー（地域のネットワーク）づくり

いろいろなことを相談したり、パートナーとして活動できる市民が生まれるもの

企画運営におけるパートナーとして、市民が活動できること

アーティストのサポートをする市民 1人のアーティストへ1-2人の担当スタッフ

参加する市民の方々と調整し、マネジメントをするようなスタッフが育ち、次の活動の軸となっていくイメージ

市民が内発的に続け、発展させていける仕掛けを提示（作家の作品の同じようなものを再生産するのではない）

③独自性：小金井だから、できること

人・モノ・場所の三つがあること

アーティストを街に招くことは地域文化として有効に機能するのではないか？

自分たちも気づかない小金井の面白さを再発見できるという

小金井の新しいライフスタイルが見えてくるようなもの？

コミュニティを見直すきっかけとして期待したい

●アーティスト選定の考え方

1. 運営から制作まで市民とのコラボレーションにより作品の創作・発表を行う
2. これまでの芸術や地域へのまなざしを変化させるような作品制作を行う
3. 誰もが表現者として存在できるような、市民を巻き込む作品の制作を目指す

●活動する期間と内容

期間：3年間（2009-11）の段階的なプログラム

1年目 招聘準備事業 アーティスト決定

2年目 作品制作・試演

3年目 作品制作と発表

●招聘されたアーティストと活動

ほうほう堂@小金井の窓 ダンスユニットほうほう堂

ほうほう堂はトンネルやエレベーターなど、劇場空間を飛び出し、さまざまな場所でパフォーマンスを繰り広げる「ほうほう堂@***」シリーズを展開してきました。このシリーズの小金井版として「ほうほう堂@小金井のあちこち」が始まり、2010年度より小金井市内で定期的によりサーチやパフォーマンスを実施しました。ほうほう堂@小金井あちこちの窓は、ほうほう堂が小金井市内の各所で展開するパフォーマンス企画として開始し舞台は個人宅、お店、学校、病院、会社など小金井のあちこちの「窓」から見える風景の中、まるで周囲の風景と会話をするように踊り、二人のダンスは見慣れた日常風景の新たな魅力を発見させてくれます。小金井でもたくさんの人やもの、場所、風景に出会い、一緒に踊れる空間や時間を探しました。

植物になった白線@小金井 浅井裕介

マスキングテープや泥絵などの身の回りの素材で作品制作を行って来た浅井さんは横浜、大阪、など国内さまざまな都市で発表して来た道路用の白線を用いた作品、「植物になった白線」を小金井でも制作しました。「植物になった白線」は、浅井さん一人ではできない絵、ながい期間そこに残るとというのが最大の特徴です。小金井で浅井さんと白線隊は、個人宅やお店の軒先、小学校など、そこに生活する人々と直にコミュニケーションしながら一緒に制作を行いました。その白線は小金井の人たちとこれからも生活を共にしていきます。

イミグレーション・ミュージアム・東京 岩井成昭

イミグレーション・ミュージアム・東京では、海外に存在するイミグレーション・ミュージアムの概念を参照しつつ、日本独自のイミグレーション・ミュージアム設立を構想するプロジェクトとして始まりました。小金井市とその周辺に暮らす外国人の生活に根ざした異文化を同じ地域に暮らす市民がアートを通して知る機会を提供することを目指したものです。各家庭とのコミュニケーションを重ね、日常的かつ新しい視点で異文化に触れながら共同作品を制作し、国内にはまだない「イミグレーション・ミュージアム・東京」を小金井で開始し、異文化の紹介と地域における相互交流を進めて行きました。市民によるコミュニケーションプロジェクトは、基本的な出会いと人付き合いを大切にしながらすすめられ、作品はアーカイブ化されています。

街ってなんだろう？

そして、街は誰のもの？

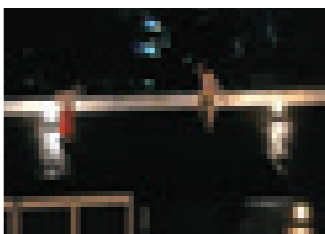
ほうほう堂@小金井のあちこちの窓ができるまで

ほうほう堂@小金井あちこちの窓は、ほうほう堂が小金井市内の各所で展開するパフォーマンス企画でした。個人宅、お店、学校、病院、会社など小金井のあちこちの「窓」から見える風景の中、まるで周囲の風景と会話をするように踊る、二人のダンスは見慣れた日常風景の新たな魅力を見せてくれました。小金井でもたくさんの人やもの、場所、風景に会い、一緒に踊れる空間や時間を探しました。

最終回はその集大成として、市内数カ所の建物の窓から見える景色の中で踊るほうほう堂を参加者がツアー形式で巡りながら見るといふダンス公演。日常のそばにほうほう堂のダンスや小金井という町の魅力、普段と違った町の風景を見つめることのできるパフォーマンスを展開しました。

ほうほう堂とアートフルアクション、学芸大などの学生さんによるスタッフは、二年間、月に一度のリサーチに参加し、ブログ (<http://hoohochikochi.blogspot.com>) にその様子をアップしました。何気ない表現ばかりですが、アーティストとスタッフが街中でリサーチ、パフォーマンスのアイデアづくり、最終回の公演に至るプロセスがわかります。

踊れるおもしろい場所を小金井の中で探すことは、石ころを拾うようなものといったつぶやきとも諦めともみえるような言葉も出てきます。窓を提供してくれる家を探す中での出会いや、小金井の猫は他の場所の猫よりおっとりしているみたい、といった気づきは、そのままパフォーマンスに反映されていたことと思います。



二〇一〇年八月二四日火曜日

ほうほう堂@真夏の小金井ツアー

夏真っ盛りな日に行ってきました！

ほうほう堂@真夏の小金井ツアー。当日の気温について正確な記憶はありませんが……、三〇度は軽く越えていたと思います。市役所で自転車を借りて朝の〇時集合で出発です。メンバーは、ほうほう堂のお二人プラス小金井アートフル・アクション！スタッフ、平林さん、鈴木さん、佐藤さんです。まずは三案の森へ……と行きたいところでしたが、今日は火曜日！ 休園日でした。仕方なく扉の隙間



から中の様子を撮りました。気を取り直して、次の目的地、貫井神社へ。神社にお休みはありません！ ここは湧水が出ていて、昔は神社の前にプールもあったそうです。中には池があつて人が近寄ると鯉がたくさん寄ってきます。そして次は小金井神社へ。中はとても広くて、奥にいくと石臼供養のための臼塚という



ものがありました。形はなんともアートの的です。

そして次は世界の前掛け専門店「Amamiya」さんへお邪魔させていただきました。前掛けの素材でTシャツやバッグまで制作しており、オーダーメイドでの注文も受け付けているそうです。

社長の西村さんから小金井のおすすめスポットも教えて

いただき、さっそくそこへ向かいます。Anthingのみさんありがとうございました！ 西村さんおすすすめ「はげの森緑地」は残念ながら、扉が閉まっていた入れませんでした。残念。気を取り直して午後の部スタートです。まずは「はげの森美術館」へ。はげの森美術館は画家の中村研一さんがもともと住まっていた家で、今回は特別に学芸員の方に、二階のお部屋まで案内していただきました。

そして美術館で、庭で鉄道模型を走らせているという、富永さんと落ち合い、お宅へお邪魔させていただきました。この日はあいにく模様はありませんでしたが、日曜日に走らせているそうです。小金井の話もお聞かせくださったり、暑いので飲み物まで用意いただきました。庭の木からお正月のはねつきで使われる実が落ちてきたり、蚊の数が半端でなかったりと自然の過酷さを知りました(笑)。その富永さんの案内で、野川沿いから小金井公園、武蔵野公園をずっと進んでいきました。どこまでも続く自然に、ここが本当に東京だということを忘れそうです。



公園出口で富永さんとお別れをして(富永さん、どうもありがとうございました!!) 今度は急な坂を上って、今日の最終目的地、小金井公園を目指します。と、途中のコンビニで休憩。

走ること数十分、ついに小金井公園到着。しかしやはり暑いということで、しばし休憩タイム、公園内のグリーンテラス「さくら」へ。やはり真夏のかき氷は最高です(鈴木さん、ごちそうさまでした!) そして本当の最終目的地、「江戸東京たてもの園」へ。江戸東京たてもの園は、価値の高い歴史的建造物を移築し展示している野外博物館です。まずは、前川園男邸へ。緑側がすばらしいので、みんな自分家のようにくつろいでいま

す(笑) ということ、本日の小金井ツアーも無事終了！ ほうほう堂のお二人もお疲れ気味です。やはり真夏に自転車を外に出るのは危険ですね。次回は九月中旬を予定、少しは涼しくなっているといいですね。



二〇一〇年九月二三日日曜日

ほうほう堂@まだまだ暑い小金井ツアー二

残暑きびしい中行ってきましたー!!

先月の一回目のあと、あまりの暑さに今回は涼しくなっ

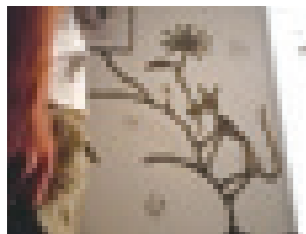
てからと言っていたのに、今年の夏の暑さは半端ないです。唯一昼から集合だったので救われました。今回も小金井市役所で自転車を借りて出発です。今日のメンバーは、ほうほう堂のお二人十美術家・浅井裕介さん(小金井市内で絵を書ける場所を探すため) + 小金井の歩く地図・平林さん + 十事務局・佐藤李青さん、インターン・福田さんです。

まずは東京学芸大学を目指します。やはり大学は広い！ 軽く横一列で走行できます。目的はツリーハウス。中には入れないようです。水車もあります。ほうほう堂のお二人はプールに興味をもたれていました。たしかにプールでのダンスはおもしろそう。ぜひ実現してほしいです。しかし中には入れず、フェンス越しにみんなで隙間からのぞきます。

その後インターンで学芸大生の佐々木さんに案内を頼み、休める場所を探します。しかし夏休み中のため食堂は開いておらず、仕方なく外で休憩。途中小金井に唯一ある銭湯、ぬくい湯を外から見学。そして団地へ。取り壊しが決まっていますが、今は人が誰も住んでいません。すこく広い場所なのにもったいない。その後小金井市文化財センター(旧浴恩館)へ。ここも中へは入れませんが、相当雰囲気がある建物です。その後帰途、道に迷いながらも、中央線を頼りに、無事見慣れた農工大通り商店街へ出ることができました。



自転車を返却し、シャトーへ戻ると、浅井さんが一階の壁に絵を描いてくださったいました！ これからシャトーへ来るたびごとに、描いて増やしていけるそうです。



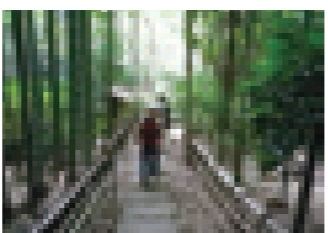
今日の活動メンバー！ 新舗美佳、福留麻里(ほうほう堂、浅井裕介、絵描き) 佐藤李青、平林秀夫、大

川直志、福田未度加(アートフルアクション)

二〇一〇年一〇月八日金曜日

ほうほう堂@小金井ツアー三

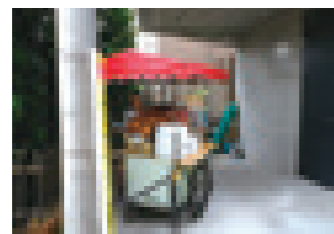
さすがに涼しくなってきました。そして今回は自転車でなく、徒歩。まずははげの森美術館のカフェ「オープンミトン」を目指します。今回は徒歩ということで気になるまわりの風景もじっくり見ながら移動できます。



はげの森美術館に到着。意外に徒歩でもそんなに遠く感じませんでした。竹林の中を進んでいきます。オープンミトンに到着です。しかし平日にも関わらずお店は人がいっぱいでも入ることができずには

えなく退散。さすが有名なオープンミトンです。シュークリーム食べたかったなあ。仕方なく庭の湧水を見学。次に美術館横のムジナ坂へ移動。そして八月も来ましたが、武蔵野公園に行きました。夏と違い涼しくなって公園も快適です。こちらは野川。今日はさすがに誰も泳いでいません。おっとカモがいました。お昼を食べようと「Brook & Bloom」へ。しかし、また人がいっぱい入れず。今日は店には入れない日みたい

です。夏でなくてよかった。気を取り直して周辺のお店を探します。つと裏にとんかつ屋を発見。ランチもやっているということでここに決定。そのあととんかつ屋の入っているマンションを見学。シャトー同様こちらも興味深い場所です。今日のツアーはこま

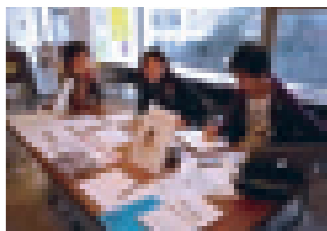


これからも小金井で踊れる場所・踊ってほしい場所を募集中です!!

二〇一〇年一二月一日水曜日

ほうほう堂@ミーツイング

八月から月一回行ってきた小金井ツアーですが、ほうほう堂@留守番のためお休み。詳細はすべての公演が終わればレポートします。その代わりといつてはなんです、これまでの小金井ツアーの振り返りとこれからの動き方につ



いての話し合いをシャトー2Fで行いました。とりあえずざっくり決まったことは、二週間後にプールを見学に行く。(前回行ったときは中に入れませんでした)そして来年一月から月一で小金井で踊り、それを映像に収める。六月に何かが起る……。二〇二二年三月に集大成公演を行うという流れです。今年三月の公演のようにまた小金井に伝説を作りたいたいです。その後これまでの小金井ツアアの振り返りをしました。ブログを見つつ思い出を振り返っていたのですが、いつも場所を見に行っても中に入れていない！という衝撃的な事実を発見しました。理由は定休日だったり、人がいっぱいだったり色々ありますが……。これからはもう少し計画的に行きたいですね。こんな感じで本日のミーティングは終了。まだまだこれからもほうほう堂@小金井のあちこちは続きますよ。ご期待ください。

今日のミーティングメンバー：新舗美佳、福留麻里(ほうほう堂)、佐藤李青、大川直志(アートフルスタッフ)

二〇二〇年二月一日木曜日

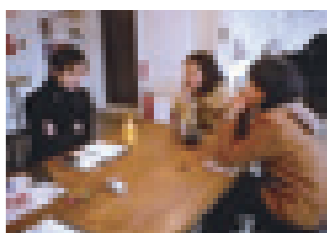
ほうほう堂@ねこむつち

年末二月一日に行ったプール見学とミーティングの報告です。まずは、例によって昼、シャトー集合で自転車をお借りしてプール見学へと出発です。あの暑すぎた真夏の小金井ツアーが四ヶ月前のこととは思えません。みんな完全防備で向かいます。冬のプールを見ることはめったにないです。冬眠中のプールはこんなに濁ってるんですね。ここで大発表です！プールにてほうほう堂の作品がまた一つ生まれました。ぜひ動画をチェックしてください。ほんと逆にジャンプしなくてよかったです。ここでもまたおもしろいことができれば良いですね。

その後シャトーに戻り、ここからの小金井での活動について話し合いました。打ち合わせで話したことは、来年小金井で公演をやるならその資



金や機材をどうするか、もう少し早め早めに考えていかなければならないということでした。



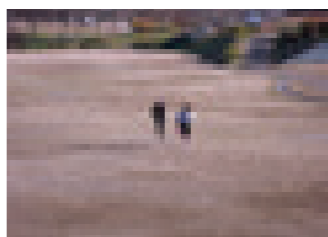
またこれからも小金井でのダンス&撮影は行っていきます。今年一年は、伝説の屋上ダンスがあったり、真夏の小金井ツアーがあったり、また個人的には、吉祥寺や@留守番での公演のお手伝いをさせていただいたりとお金井とほうほう堂尽くしの一年でした。

今日の活動メンバー：新舗美佳、福留麻里(ほうほう堂)、佐藤李青、鈴木雅子、大川直志(アートフルスタッフ)

二〇二一年一月三日木曜日

ほうほう堂@武蔵野公園

一月三日、今年一回目のほうほう堂@小金井のあちこち行ってきました！今回は武蔵野公園へ。今回も例によって自転車をお借りしました。やはり一月も寒いですが、確実に二月より寒くなっている気がします。今回ダンスを踊る場所は前的小金井ツアーでも見学した、入り口の運動場です。実際入ってみると、見ている以上に奥行きが広くて寒すぎるせいか誰もいませんでした。まずはここで撮影を行いました。撮影した映像をチェックします。やはり広すぎて小さすぎたようです。今度は少し手前で撮ってみました。今度はかなり大きめに写っているはず。その次はカメラマンも一緒に移動しながら撮影しました。この広場では三バターン撮影しました、どれがアツプされるかお楽しみに！



そして野川沿いを散策しながら、はげの森美術館のカフェ「オープンミント」を指します。このカフェは真夏の小金井ツアーのときにも行

かせてしまったようですが、見事なダンスを披露してくださいました。改めて周囲の人との関わりの中でダンスが生まれているのだと感じました。お蔵入りになってしまった広場の映像はまたの機会に。

来月は小金井のどこへ踊りにいくのでしょうか。絶賛踊ってほしい場所募集中です。

二〇二一年二月九日水曜日

ほうほう堂@小金井迷子

はやいもので今年もすでに一カ月が終わりました。ますます寒くなってきましたね。今年二回目のほうほう堂@小金井のあちこち！余談ですが、ほうほう堂の新舗さんはおニューな自乗車でシャトーまでやってきたそうです。すべてが緑色で統一されていました。

さて、本日のあちこちは徒歩でスタートです。まずは小金井一見晴らしが良い場所ということで屋上にいきました。どこの屋上かわかるでしょうか。答えはイトヨーカドーの屋上駐車場でした。高い位置から見渡すとまた小金井がちがった印象に見えます。

次に先日浅井裕介さんの公開制作で焼きつけた白線を見に行きました。いつか浅井さんの作品とコラボできるといいですね。そして最近何かと話題になっている北口の商店街を見に行きました。意外にも北口商店街をじっくり見るのはこれが初めてだそうです。と、途中においしそうなカレー屋さんがあったので少し休憩。(お昼がまだでした……)毎回、食を書いています。決めて食べログではないので、ご注意ください……。

さて、気を取り直して@あちこち再開です。いつもは武蔵小金井駅周辺中心で活動していたので、今回は東小金井駅まで足を伸ばすことになりました。バスに乗ろうとした

が、時間が合わずにとりあえず徒歩で目指します。途中住宅街が大半だったので、近頃小金井近辺に引越



しを考えているというしゃとー(佐藤)さんの物件探しにあっていました(笑)

この時期はどくも入居者を募集してはいます。そしてひたすら踊れるおもしろい場所を探し歩きます。途中水がな



きました。残念ながらその日はお客様がいっぱいで入れませんでした。その分期待値も上がっています。しかし、その途中良いベンチを発見！急ぎよこでも撮影を行うことにしました。撮影は一発OK、おもしろい映像が撮れました。

カフェではお正月の過ごし方や映画、そしてなぜか柚子の話で盛り上がりました。ということ、今月のあちこちは終了。結局映像は四バターン撮影しました。どれがアツプされるかはお楽しみに。来月はどこへ踊りに行くのかな。小金井で踊ってほしい場所も募集中です！

今日の活動メンバー：新舗美佳、福留麻里(ほうほう堂)、佐藤李青、大川直志(アートフルスタッフ)

お世話になった方々、お店・ベンチに偶然居合わせたおじさん、念願のオープンミント

二〇二一年一月二十八日金曜日

ほうほう堂@ベンチ

先日の小金井での活動が映像でアップされました！ぜひご覧ください。ちなみに横のおじさんと事前打ち合わせはしていません(笑)少し驚



す。その名も「ほうほう堂@小金井のあちこちの窓」。小金井市内の家やマンション、アパート、学校、会社などの窓から見える景色の中でほうほう堂の二人が出張して踊ります。家族で見えるのもよし、一人で見るのもよし、誰かへのサプライズでもかまいません。見る窓や観客の構成はご応募いただいた方自身が自由に決められます。いつもとはちよつとちがった景色に出会いませんか。ぜひ窓からの景色をみてください！

この窓はどうかしら、という情報をお待ちしております。お待ちしております。

二〇二一年四月二三日水曜日

ほうほう堂@桜ミーティング

毎月一回小金井で活動してきたほうほう堂@小金井のあちこち。前回二月の活動からはや二ヶ月以上がたつてしま



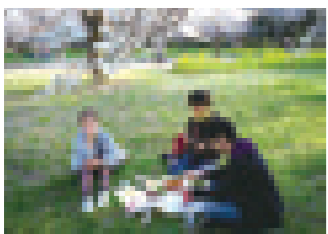
もう半分。すでに二〇二一年度ははじまっています！というところで、前から募集していた@あちこちの窓ですが、残念ながら集まった情報がわずかということでもっと周知活動&告知を念入りに行つていくためのミーティングを今日はシャトー2Fで行いま

した。

そこで決まったことは本腰で窓を募集するべく、見た人がイメージできるようなチラシや市報での広報をし、実際の場所を見に行き、そこで踊るとい流れです。ちなみに今候補にあがっている場所は、はげの森美術館、幼稚園、小学校、大学、商店街、病院、野川沿いのマンションなどで

す。このあたりで踊ってほしいという窓をお持ち、またはご存知の方はぜひ hono.achikoichi@gmail.com までお知らせいただければと思います。ほうほう堂は小金井に窓があるかぎり踊り続けます!!

終わらせ、向かうは小金井公園!! この季節なんといつても花見です！満開のピークは終末で終わったみたくですが、まだまだ桜は咲き誇っています！アーティスト招聘事業は今年が最終年度。もしかするとあの伝説的な公演が

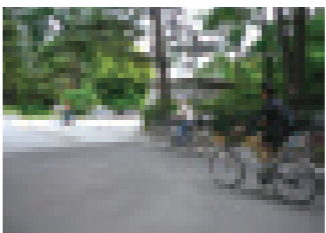


再演されるかも……。今年度も全力でほうほう堂は小金井で活動していきます。ぜひご期待ください！
今日の活動メンバー：新舗美佳、福留麻里（ほうほう堂） 佐藤李青、大川直志（アートフルスタッフ）

二〇二一年五月三十一日火曜日

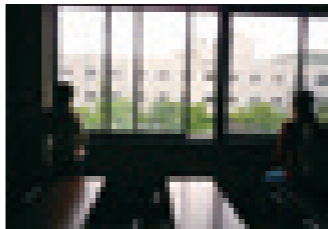
ほうほう堂@さよならは突然に!?

二〇二一年度ほうほう堂@小金井のあちこちの窓」シーズンとして「ほうほう堂@小金井のあちこちの窓」と改め、活動をはじめます。五月三十一日はその初活動として、市内にある東京学芸大学へお邪魔してきました。例によって自転車を調達して出発です。実はこの一週間前に活動を予定していたのですが、あいにくの雨で延期されていました。前日も台風がきていたのですが、この日は晴れてよかったです。



まずは食堂の窓を見学です。最近リニューアルされたらしく、周りはすべてガラス窓で、外はバルコニーになっていいます。大学の敷地内は本当に広くて自転車が助かります。そして次は美術棟へ。正木先生にお勧めの窓をお聞きしました。すると研究室の窓を見せてくださいました。なんでも美術棟はH型になっっているらしく、同じ建物の中の窓から反対側の窓を見ることができそうです。正木先生ありがとうございます。

その次は講義棟へ。この日は平日だったので、授業を終えた学生さんたちで廊下はごったがえしていました。ちょうどあいていた教室を見学することに。すると学生さんから「この教室、次授業で使いますか？」と尋ねられました。尋ねられた新舗さんはうれしそうに「まだ学生でい



次は市内の新舗さんの母校へ。突撃訪問です。今日はいつももなく盛りだくさんです。そして学校へ到着。しかし学生の姿は無く、教室の電気も消えています。まさか……今日は定期テスト前でクラブなどもすべてお休みだったそうです。新舗さんの恩師の先生方はいらっしゃって、とても温かく受け入れていただき、ぜひ窓にも協力していただけたことでした。ほうほう堂@母校も実現できる日は近そうです。そしておすすめめの窓として体育館の窓を案内していただきました。

インド富士には窓募集のチラシも置いていただきました。ありがとうございます。窓を見学させていただいたお家の方々、本当にありがとうございます。ぜひ今後の活動で踊らせていただきたいと思えます。
今日の活動メンバー：新舗美佳、福留麻里（ほうほう堂） 大川直志（写真撮影）

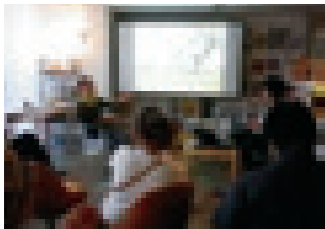
二〇二一年七月二日金曜日

ほうほう堂@一人だけ

今回はシャトー2Fリニューアル&キックオフパーティーの話とシャトーマンション見学の報告です。七月二日（金）にシャトー2Fプチリニューアルに伴い今年度アートフルアクションの主軸になるアーティスト招聘事業三組の活動報告を行いました。あちこち窓チームはトップバッターでほうほう堂のお二人の普段の活動、小金井のあちこちから窓への流れ、これまでの活動や映像をこのブログを見ながら振り返りました。

当日は急遽参加できることとなった福留さんをゲストに（新舗さんは次回公演のため京都に滞在中でした）軽快なトークを繰りひろげました。

シャトー2F入り口にはこれまでの映像とメディアチームによる活動パネルも展示しました。アーティスト写真がとてつもないので、ぜひご覧ください。まだ入り口の右に貼っています。最後はお二人からのビデオメッセージで終わりました。窓募集の参考になるので、これもぜひ一度



ける！」とテンションがあがっていました……（笑。そしてその講義棟から反対側に見える建物へ移動しました。窓から窓という見せ方もおもしろそうです。最後は、学内で一番高い建物へ行きました。九階建てで、天気がいい日には富士山も見えるらしいです。今日見た中でお二人が一番くつときた、講義棟の窓の中で踊り、それを反対側の棟の窓から見ることに決まりました。上の写真にも小さくお二人が写っています。見つかるでしょうか。

今日の活動メンバー：新舗美佳、福留麻里（ほうほう堂）、佐藤李青（映像撮影、明日から移籍） 大川直志（写真撮影、独語落第危機）

二〇二一年六月二十七日月曜日

ほうほう堂@化け猫と枕

ほうほう堂@小金井のあちこちの窓、六月は二十七日に活動しました。まだ六月だというのに三〇度を越える猛暑日が続いていましたが、この日は少し涼しかったです。が、写真からもわかる通り、雨！梅雨の時期は仕方ないですが、今日は窓を見せてもらえるお宅にお邪魔して、踊れそうな窓を探します。



ご覧ください。その後は招聘事業他の二組も活動報告をしました。岩井さんは一緒にプロジェクトを推進してくれるコアスタッフを浅井さんは白線を焼き付けるアスファルトを募集中です。ほうほう堂と合わせると、窓人、焼き付け可能な地面を募集というわけのわからない三つですが、年度末の集大成発表に向けて、それぞれが活動を行っています。ぜひぜひご期待ください。

そして次の日、七月三日（土）は夕方からシャトーマンションにお住まいのKさんのお宅の窓を見学させていただきました。かなり遠くまで見渡すことができます。向こうのビルの上や中で踊ればおもしろそうですね。ぜひ近々実現させたいと思えます。
今日の活動メンバー：福留麻里（ほうほう堂、一人だけ）、大川直志（記録、写真、佐々木梢（メディアチーム）

二〇二一年七月二日月曜日

ほうほう堂@大家族!?

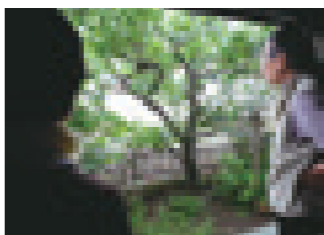
この時期は暑いので、夕方からの活動です。いつものように自転車でお出でです。今日は緑町付近を集中して探索です。まず一軒目のお宅。いつもお世話になっている小金井こらほ石井さんのお家。さっそく窓を拝見。中学が近いということと前の道は通学路になっっているそうです。中学生に紛れて二人が踊ると楽しそうですね。近所のお宅のベランダも気になります。居間でお茶を出していただきました。ありがとうございます！石井さん宅は五人家族で、居間では二台のテレビで違う番組を別々に見るそうです。



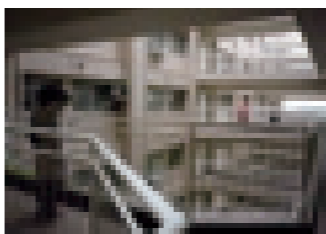
続いて、同じくいつもお世話になっている小金井こらほ水津さん宅に移動。お忙しいところ出迎えていただきました。さっそく窓を拝見します。水津さん宅は六人家族だそうです。窓はというと、お宅の前が駐車場になっていて、木や車の影で踊るとおもしろそうです。

まずは野川を越えて前原町を目指します。と、なぜか橋の上に枕が!! ほうほう堂福留さんいわく、誰か橋の上で昼寝して忘れていったそうです。見事なバランス感覚ですね。

野川は植物が生えすぎていて、水が見えませんが！。すると、川沿いにネコが！。今日はいろんなのや動物と遭遇する気がします……。そして一件目の淀井さん宅へ到着。さっそくお家の窓からの景色を確認させていただきました。なんと淀井さん家は芸術一家！お家の中にはアトリエがあつて絵もたくさん飾られていました。



そして次は二軒目のお宅へ。家の前が遊歩道になっていて、そこで踊るとおもしろいです。しかもお家のご主人は、野川にとっても詳しい方で、野川の祭りやホテルの保護活動もされているそうで、野川沿いの地図を見ながら、説明していただきました。昔、野川で結婚式をあげた夫婦がいらっしやるそうで、式の最後は野川へダイブしたらいいです（笑）。



シャトーへの帰り道、最近完成した窓募集のチラシを市民掲示板へ貼ります。そして次はいつもお世話になっているシャトーマンションの佐野さんにマンションの中を見学させていただきました。窓からの景色は抜群です！マンションの中もそれぞれ部屋への道がついていて、おもしろい場所でした。ほうほう堂の二人もここを気に入り、少し後でアーティスト写真も撮らせていただきました。撮った写真は後日シャトー2F入り口に展示される予定です。

途中住民の方と談笑。ほうほう堂にも興味を持っていただけました。



た新宅さんはラジオ体操の帰りに発見してくれたそうです。どんどん夏真っ盛りになっていきますが、来月も窓を探していきますよ！秋以降は実際に踊り始める予定です、お楽しみに。

今日の活動メンバー：新舗美佳、福留麻里（ほうほう堂、整体はじめました） 大川直志（マネージャー、マッチ棒、鈴木雅子（ついに本領発揮） 佐々木梢（メディアチーム、最近いろいろ気味）

二〇二一年八月三日火曜日

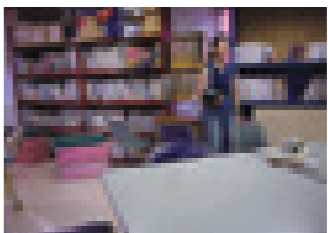
ほうほう堂@おこげの逆襲

夏休みもあとわずかか、な……二〇二一年八月三日（火）ほうほう堂@小金井のあちこちの窓にはお休みはありません。残暑厳しい中、今月も活動をおこないました。今日も自転車爆走です。目指すは中町の陣内さん宅。お住まいのマンション横は公園になっており、窓からは庭とその奥には緑が生い茂った敷地が広がっています。ほうほう堂の二人もとても気に入ったようで、笑顔がこぼれます。すぐに自分たちでも撮影をはじめました。

ご主人がマンションや公園について詳しく説明してくださいました。そして太極拳（？）が趣味の奥様には特製のゼリーとジュースを出していただきました。とても美味しかったです。ありがとうございます。帰り際にお隣の公園も見学させていただきました。



す。遊具は入り口にしかなく、奥は芝生が広がっています。一番端は武蔵野公園入り口につながつている坂です。そういえばちょうど一年前この坂を上ったての園へ向かったことを思い出しました。あのときはもつと暑かった気がします。そして次の窓は貫井南町児童館です。ひたすら野川沿いを西へにしへに。



児童館ではメディアアチームの佐々木さんと合流。彼女はここで子どもたちとキャンパスをした経験があるそうです。さっそく窓を拝見。しかし現在建物の改修中で本来の風景が見られなのです。残念、残念。気を取り直して、図書室にいた子どもたちと触れ合います。みんな将棋やDSをやったり漫画を読んだりしていました。この時期に遊んでいるということは、もう夏休みなのかな……



そして今日最後の窓は児童館近くの「NPO また明日」。この施設は、高齢者の方や小さな子どもたちの寄り合い場です。さっそく窓を拝見。が、中はまだよちよち歩きの子もたちやスタッフの方々、そして犬四匹がひしめくカオス状態。中でも犬の「おこげ」は相手をしてもらうのがよほどうれいのかすごい勢いで暴れまわります。この状況でダンスを観てもらえるとこそぞおもろい記録になると思います。楽しみです、秋以降の実現を目指します。

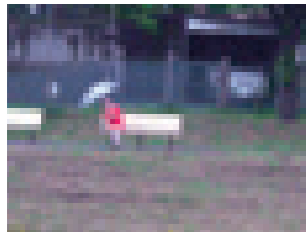
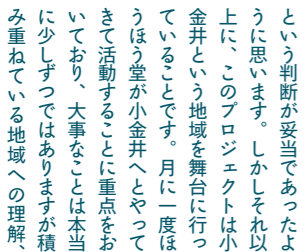
二〇一一年九月二十九日木曜日 ほうほう堂@小金井ねこ巨大化説

散歩日和なこの時期に、今月のあちこち窓探しの活動を行いました。今日も自転車で快走です。するといきなり坂

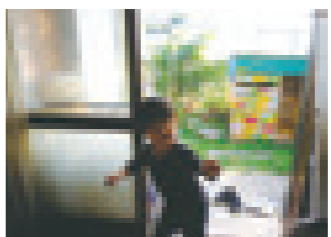


は当日の早朝、雨の中決めました。傘を小道具にしています、いい感じ。途中化け猫(こ)も登場。空気が読めるやつです。最終目的地は最後まで秘密にしていたはけの森美術館へ。美術館の中庭で踊らせていただきました。

たしかに撮影やダンスのコンディションを考えると延期という判断が妥当であったように思います。しかしそれ以上に、このプロジェクトは小金井という地域を舞台に行っていることです。月に一度ほうほう堂が小金井へとやってきて活動することに重点をおいており、大事なことは本当に少しづつではありますが積み重ねている地域への理解、



です。小金井は南へいくには坂を下らなければいけないのです。なので色々な坂があります。質屋坂、なすい坂、念仏坂、平坂などなど(地図をちらっと見ながら書いてます……)すべの坂をコンプリートしたいですね。そして坂を下ったところで今日一軒目の窓見学へ。



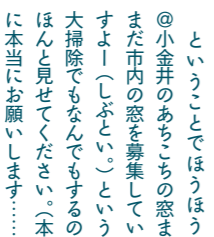
お宅の前が畑になっており、ビニールハウスも見えています。とても小金井らしい景色でグッドです。たかさんの子どもたちが家の中で遊んでおり、写真を撮っているとポーズを決めてくれました。こともちととの出会いは先月のまた明日からの流れみたいですが窓にはゴーヤカーテンがつるされています。玄関にあったさつまいも三兄弟プラスゴーヤ振りたてだそうです。そして外で近所のおすすめ窓をご紹介します。山田民族さんちようど先週シャトーでライブをしていた、市内在住の音楽家の方です。お近くだとは書いていましたが、こんな近所だとは驚きです。というよりお隣さんですね。しかも自転車で登場。民族さん宅のお風呂場の窓がおすすめたそうなので、そこからダンスを見てもらうことにします(笑)湯船につかりながらダンスを見るといなんとも斬新かつ新しい形ですね。

そして二軒目は自転車こぎきぎ貫井南町へ。先月もこの付近へやってきましたが、今月はもう少し南へと移動です。ここまでくると府中市との境目近くです。ちょうどお隣のお宅は外壁の工事がはじまったところとか。作業中に横の庭でほうほう堂が踊っていると工事のおじさんもびっくりするでしょうね。帰り際お宅の前でまたもやねこに遭遇。あまりにも急ぎで撮影はできませんでした……。福留さんいわく、小金

人とのつながり、そして何よりそこから生まれてくる二人のダンスという表現です。そう考えると窓を見せてくださったお宅の方々との約束を果たすことができたと感じました。今日の活動メンバー…新鋪美佳、福留麻里(ほうほう堂)、大川直志(プロジェクトマネージャー) 吉次史成(写真撮影)、マップデザイン…永山もも

二〇一一年一月二十八日月曜日 ほうほう堂@まつりのあと……

そして今日も元気に窓見学へと向かおうと思ったのですが、一〇月のお散歩公演でやりきってしまったので窓情報がない……。ということで年度末の集大成公演にむけて話し合いをすることになりました。とりあえず決まったことは今年中にコアとなる踊れる場所を決めることがまず優先。そしてそれを決めてツアーを組むということです。ツアー移動にはあんなものやこんなものを使えばいいんじゃないかというアイデアが出たのでそれを今絶賛手配中です。最後はおまけとして市役所の屋上を見学させていただきました。が、窓から見えるところが少なかったのは少し残念……。

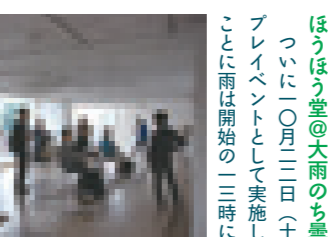


今日の活動メンバー…新鋪美佳(ほうほう堂)、福留麻里(ほうほう堂)、大川直志(マネージャー)、鈴木雅子(たぶん数人とつっての小金井の母)

二〇一一年二月二日木曜日 ほうほう堂@小金井おさめ

今年最後の活動を行いました。今日も寒い中自転車で市内を暴走しまくったほうほう堂。まずは一件目の見学場所

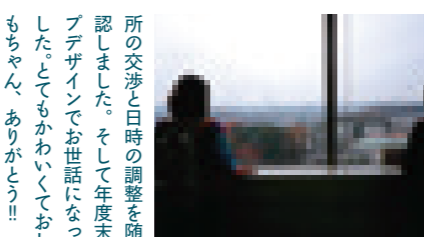
井にいるねこは大きい(ふくよか?)な体型をしたものが多いとか。たしかに野川近くのネコといいたいものが多い気がします。ねこにとっても小金井はのんびりゆったりした地域なんですよ。この空気を活かした小金井ダンスが生まれることを目指します。



今日の活動メンバー…新鋪美佳、福留麻里(ほうほう堂)、大川直志(プロジェクトマネージャー)

井にいたねこは大きい(ふくよか?)な体型をしたものが多いとか。たしかに野川近くのネコといいたいものが多い気がします。ねこにとっても小金井はのんびりゆったりした地域なんですよ。この空気を活かした小金井ダンスが生まれることを目指します。

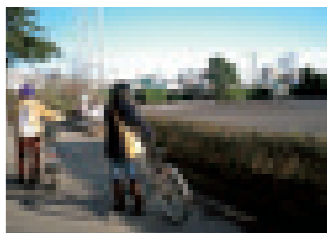
へ。横が公園になっていて施設の中ではたしかエアロビの教室が開催されていました。みなさん、すごいパワーでしたね。あやうく参加希望者とまちがわれるところでした。次は小金井の北。小金井公園へ。公園内にある総合体育館が見学場所です。小金井公園も落ち葉がとても味わい深い感じになっています。こういうところでダンスをするのも良さそうです。そして最後の見学場所はここ(一)年度末はここから見える景色のどこかでほうほう堂が踊るかもしれませんよ。今日の見学はこれにて終了。その後シャトーへ戻り年度末の打ち合わせへ。



今日の活動メンバー…新鋪美佳、福留麻里(ほうほう堂)、大川直志(プロジェクトマネージャー)、鈴木雅子

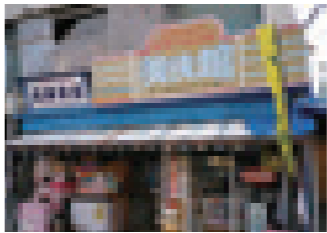
二〇一一年一月二十五日水曜日 ほうほう堂@小金井ローラー大作戦!

今年度も残り数か月ですが、ほうほう堂@小金井のあちこちの窓はりきって最後までいきますよー。なんと前日は雪が大量に降り、まだあちらこちらに残る中今日も自転車



で爆走です。しかし、今日に限っていつもの爆走を軽走に変えずべらないように気をつけ、滑りそうなところは歩みで慎重に移動しました。というのもこの前に下見の段階でプロジェクトマネージャーは時間がないのに焦り、二回も自転車ごと滑るという失態をおかしていたのです。しかもその内の一回は、派手にやらかしてしまい、近所のおじさんに助けられましたとさ……)

そんなこんなでまずは二つ目の見学場所へ。本町の上之原公園へ。やはり寒いせいかなはほほいません。公園横には上之原会館という公共施設があります。その窓からとったのですが、中からも見る事ができずに断念。と、次に移動で稲穂神社へ寄り道。そして二つ目の見学場所の上水公園へ。



そして今日の見学場所は少なかつたのであちこちはじまって以来の市内を手分けしていい窓を探することに。野川沿い、雪がまだたくさん残っています。途中気になるお店を発見、しかし窓はなし。しかもその後、美洗館の分館に遭遇しました。(どちらが本館かは謎ですが、最後は幼稚園やら中学校を発見しましたが、いい窓は確認できず……シャトーへ戻りました。悶々と三月のツアーはどこへいこうか悩んだのでした。そして熟考の末たどり着いたのはツアー形式を諦め、当日は市内各所で踊るほうほう堂をユー



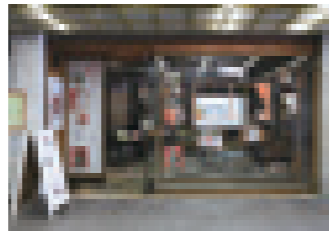
ストリームで中継する映像メインのものにしよう、というものでした。それにたどり着くにもほんと紆余曲折ありまして、(いきなり機材代が九六%オフになったりいろいろ)この苦労はまたの機会に。今日の活動メンバー…新舗美佳 福留麻里(ほうほう堂、大川直志(ぶるまね、奇跡的に無傷で生還))

二〇二二年三月二〇日火曜日

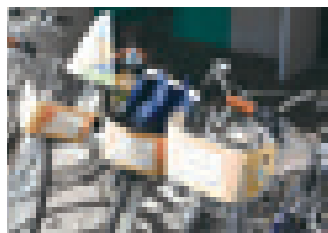
ほうほう堂@小金井のあちこちの窓

ほうほう堂@小金井のあちこちの窓、遅くなりましたが、集大成イベントレポートです。

二〇二二年三月二〇日火曜日・祝日。二日間紆余曲折を経て、ついについにこの日を晴れで迎えることができました。当日はシャトー一階に生中継映像のタブレットビューイングスペースも作りました。この日のために窓枠の写真やバナー旗などをメディアチームに作ってもらい、前日にみんなで飾り付けました。自転車への装飾も完璧。窓枠にはねこも登場。そして、あつと言っ間にスタート時間の一四時になり、まずはシャトー小金井地下のジムスペースからスタート。ほうほう堂が二年前に小金井ではじめて踊った場所もここでした。途中、プール教室前にトランポリンで遊ぶこともと遭遇、一緒に飛び跳ねました。そして、地上一階のパブリックビューイングスポットへ。お手製の窓枠と共演。そうそう、書き忘れていましたが、この日の中継レポーター、お馴染み鈴木さん。窓枠を持つての登場です、キャラクターもでき、ほうほう堂影の三人目。的確なレポートが好評でした。そして次の踊りポイント、平代坂へ小走り移動。お散歩途中のことも何事かと興味津々です。途中は走つての移動。次は一〇月の際にもお邪魔したお宅へ。またまた例のねこたちがいい動きをしてくれました。とても人懐っこいやつにやんです。



そして前掛屋エニシングさんへ。ほうほう堂特製前掛をつけて踊ります。そこから踊りながら住宅街へと移動窓から見てくださった方もいらっしやいました。



はけの小道を通りオープンミトンカフェへ。室内なので音楽を流し、がんがん踊りまわす。お邪魔させていただきました。とても有名ですが、シネクリームが絶品ですよ。次も一〇月にも踊りに行った某マンション横の公園へ。前日から

二〇二二年三月一日木曜日

活動集大成イベント

お待たせしました！ついに情報解禁。あなたの近くの「窓」からは、何が見えますか？何が聞こえますか？家の窓、教室の窓、バスの窓、どこにもあるけれど、普段あまり意識することのない「窓」。内と外をむすび、日常を切り取る「窓」。空、雲、庭の木、鳥の鳴き声、車の音……あらためてじつと「窓」に切り取られた日常を眺めてみると、家の向かいの木が少しだけ伸びていたり、空き地に家が建ち始めていたり、隣のお宅のベランダで洗濯物がリズムよくなびいていたり……。

『ほうほう堂@小金井のあちこちの窓』では、身長一五五センチダンスデュオ「ほうほう堂」が小金井市内のあちこちの「窓」から見える景色の中へ踊りにいきます。三年間、こつこつと小金井のリサーチや映像撮影を積み重ねてきた活動の集大成イベントとして、小金井の街を、窓を、踊り巡ります。そして、その生中継映像をリアルタイムでインターネット配信します。

ぜひ「画面」という「窓」から、お近くの「窓」から、ほうほう堂のダンスと小金井の日常が重なる瞬間を、ご覧ください。

さい。生中継映像中に、見覚えのある道や景色でほうほう堂が踊っていたら、窓の外へ飛び出して会いに来てくださーいね。お待ちしております。

日時：二〇二二年三月二〇日(火・祝) 一四：〇〇中継スタート

少雨決行、荒天の場合内容に一部変更あり/当日は市内数ヶ所で中継映像を上映予定、またほうほう堂が出没するエリアを地図やツイッター等で発信します。ぜひ、ほうほう堂の二人を探しに小金井へきてください。

二〇二二年三月一七日土曜日

ダンス公演&生中継

『ほうほう堂@小金井のあちこちの窓』

小金井十日常×ダンスII?身長一五五センチのダンスユニット「ほうほう堂」が小金井の街を駆け巡ります。ダンス公演&生中継企画「ほうほう堂@小金井のあちこちの窓」は三月二〇日(火・祝)一四時スタート。

あなたの近くの「窓」からは、何が見えますか？何が聞こえますか？家の窓、教室の窓、バスの窓、どこにもあるけれど、普段あまり意識することのない「窓」。内と外をむすび、日常を切り取る「窓」。空、雲、庭の木、鳥の鳴き声、車の音……。あらためてじつと「窓」に切り取られた日常を眺めてみると、家の向かいの木が少しだけ伸びていたり、空き地に家が建ち始めていたり、隣のお宅のベランダで洗濯物がリズムよくなびいていたり……。

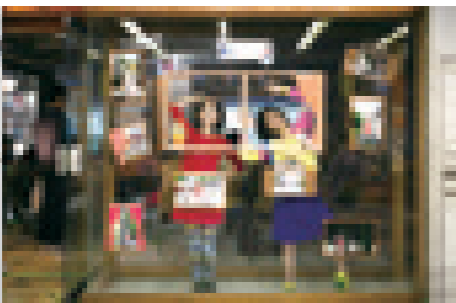
『ほうほう堂@小金井のあちこちの窓』では、身長一五五センチダンスデュオ「ほうほう堂」が小金井市内のあちこちの「窓」から見える景色の中へ踊りにいきます。

三年間、こつこつと小金井のリサーチや映像撮影を積み重ねてきた活動の集大成イベントとして、小金井の街を、窓を、踊り、巡ります。リアルタイムでインターネット中継を配信します。画面という「窓」から、お近くの「窓」から、ほうほう堂のダンスと小金井の日常が重なる瞬間を、ご覧ください。見覚えのある道や景色でほうほう堂が踊っていたら、窓の外へ飛び出して会いに来てくださーいね。お待ちしております。

日時：二〇二二年三月二〇日(火・祝) 一四：〇〇中継スタート

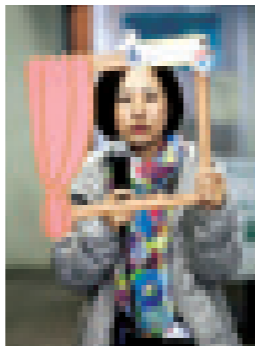
少雨決行、荒天の場合内容に一部変更あり/当日は市内数ヶ所で中継映像を上映予定。ほうほう堂が出没するエリアはツイッター等で発信します。

映像中継上映会場：シャトー小金井一階(瀧田水産前、地図本町小学校教室) ぜび、ほうほう堂の二人を探しに小金井へきてください。



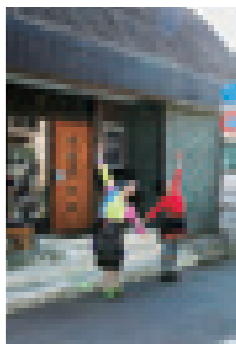
◆ ほ うほう堂にしても浅井さんにしても、私は一参加者として楽しんでいただけだった。

鈴木雅子



彼らに出会って、自分とアート、ダンスみたいなことをとても身近にとらえられるようになったの。小金井でダンスをつくる、踊る、そこに人々が一緒にぞろぞろ歩いたり、その場で出会ったりってことは、自分が今生きているということや、私を感じる「時」「場」であったなと思う。ダンスって、振り付けられてそれを美しく舞うということではなく、今ある私というもののものだ。生きていることそのもので、この場があって私というものがあるというような、それが「表現」でいいということを感じさせてもらった。

今私がこうしていられるのは、やっぱりダンスのおかげ。ダンスだけに限らずアートがあるからこそ、今居る私、みたいに思う。そう考えると、このことが私だけではなくすべての人に共通して言えることになったらいいな。それは動物である私、動物である動物とか植物である植



訪れた野川へここで特別ゲスト、野川遊び人の堀井さん。野川についてのお話を聞かせていただきました。

と、右へ振り向くとほうほう堂が例のベンチで踊っています。この後、隣のベンチに座っていたカッパルへ突撃！しかし、まったく反応してもしらえず、愛の力に完敗です……そしていそいで、いそいで、野川沿いを自転車移動！いい感じで旗もなびいています。



途中一瞬、トンネルで自転車を止め、踊ります。ここから自転車で坂を一気にかけあげ、新小金井駅前商店街へ。前の靴屋さんへお邪魔しました。靴を持っての動きが新鮮でいいですね。古着屋さんへ電気屋さんへ、お肉屋さん、パン屋さんなどにお邪魔させていただきました。最後は一緒に踊ってくださいました。派手さはありませんが、とてもいい商店街です。とくに中華屋境軒さんの豚まんがおススメ。次はこの日の中で一番の長距離移動、たても園へほうほう堂の二人ヘインタビューをしつつ、タクシードモかいました。

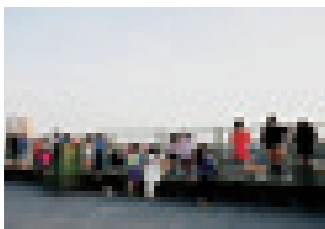
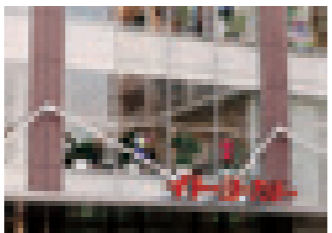


西川邸で踊っています。ここでは機材トラブルで音楽が大変なことになっていましたが、電波が悪かったという事になっ

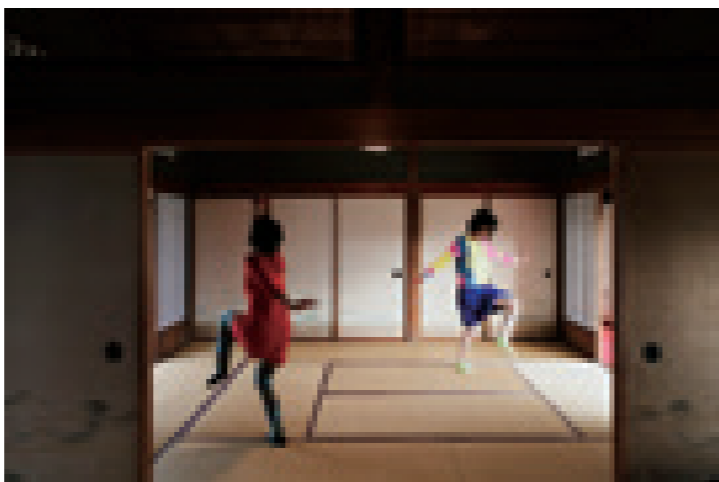


校の屋上へ移動。みんなで小金井の風景へ。手を振って終了です。最後にみんなで集合写真を撮りました。

あつという間の三時間でしたが、いかがだったでしょうか。この中継を実施すると決めて、本番まで色々なことがあり、たくさんの方々に世話になりました。本当にありがとうございました。また映像でご覧頂いた方、実際に会いにいらしてくださいました方もありがとうございます。当日の映像は後日アーカイブを公開する予定なので楽しみに。ツイッターのまとめはこちら→<https://twitter.com/275785> (さん、ありがとうございます)。



仲良くなつたことも大切に見守られながらの共演です。マンションの窓からも見てくれたかな。次はリサーチで何度も



物とか命あるものすべてにとつて「ある」ということ自体がダンスだなんて。そういう意味では彼女たちのダンスに出会えたことは私にとつてはとても大切なことだなと思うんですね。ぼろぼろぼろぼろ落したり落ちていたりしている。今、というのがもうちょっと落ちて、それで何かに出会って新たなものを発見し、どう変わっていくのかなってという感じなので、出会えたということのタイミングの良さみたいな。

彼女たちは、踊るまでに三年くらい小金井に通って小金井のまちを見て感じて、自分と街に住む人々との関りをどう表していくかみたいなことを考えながら作っていったから、畑の中だったり人の家の中だったりするけれども、どこにいても「私がある」ということを意識づける。名所ではなくて「あ、小金井ってこうだったのか」というのを言葉ではなく感じさせる。日常と非日常、生活と特別な場というものが区別できるものではない、一緒のものなんだということをとて感じさせてもらえた。多くの人は皆、仕事に行くという役割を果たしているけれど、そうではないすべてを削ぎ落とした今の私があることをこの人たちはあの時点で作っていて、発信していたのかな。本当にね、生き方というか感じ方を変えるダンスだよ。

よね。

スタジオとか舞台とかで見たものって、よっぽどのことじゃないと忘れちゃう。彼女たちと一緒に回って、まあ主催者側の一人という意識があったからかもしれないけれど、彼女たちのダンスと小金井の地というもの巡ったということで、それから一〇年二〇年経つ私にこれほど大きなものをもらえたということの素晴らしさはあるよね。だからステージで、ただあのNTTの屋上で踊っただけだったら、たしかにすぐおもしろいし美しい感動もしたけれども、映像は今でもまさまざと覚えているんですけど、まちの中で踊ったのはそんなに覚えていない。でもそういうことと違うんだよね。視覚的に美しいとかそういうことではなくて、やはりその場において彼女たちを通して私の体を感じるということのダンスであつた気がする。彼女たちのダンスっていうのは、「私がいること自体がもうダンスなんです」ってことを言っていた。

私の職業人としての最後にこの業務の担当になつたの。それまで三〇年ぐらいはとにかく逃げ出したい、でも生活があるから逃げ出せず、最後に辿り着いたのがこの仕事だった。もう、感謝しかないよね。この人たちに会わせてもらえてなんて幸せだったんだらうって。感謝感謝。彼女たちはその場をどういう風に表現するかということだと思ふ。それがきつかけで、今、私は考え、在り続けていますってことなのかもしれないけど。

*すずき・まさこ——三〇数年の公務員生活の中で、業務と市民との関係に戸惑い、悩み、刺激を受け、最後にたどりついたのが長年希望していた文化行政でした。そこで出会った市民、アーティスト、専門家、そしてその他アートの関わる様々によって、より小金井を知ることになり、小金井が好きになりました。その「様々」を誰かと、あるいは何かと共有することを考え続けた日々でした。そして退職した今でも、私はそんな中で漂い続けています。

誰もが表現者として存在できるよりな、
市民を巻き込む作品の制作を目指す

——植物になった白線@小金井

植物になった白線@小金井は、小金井アートフル・アクション！事業の中のアーティスト招聘事業として二〇一〇年から二年に行われました。招聘に応じてくださった浅井裕介さんと、事業をスタッフとして担う白線隊（※白線隊とは、植物になった白線プロジェクトを支えるボランティアスタッフです）、それに呼応するたくさんの方の市民のみならず、道路に白線で植物を描きました。白線は最後に森になりました。この事業は市内の小学校や市政施行五五周年事業に引き継がれ、さらに大きな森となって花ひらきました。個人のお宅、東京学芸大学をはじめ市内の商店街に今も白線は生き続けています。

さまざまな素材を使い、色々な場所で制作をする浅井裕介の作品の中でも「植物になった白線」シリーズは、「浅井一人では描けない絵」、「長い期間その場所に残る」、「公共の場に作られる」というのが最大の特徴です。これまで浅井裕介と白線隊は約二年間をとおして小金井の個人宅やお店の軒先、小学校など少しずつですが場所を探し、了承を得て、そこに生活する人々とコミュニケーションしながら一緒に制作してきました。そしてその白線は、小金井の人たちとこれからも生活を共にしていきます。

浅井さんを招いた人は——

小金井の街と浅井裕介——三ツ木紀英（アートプランナー／アーティスト招聘専門委員）

浅井さんはいつも絵を描いている。打合せで話をしている時もそこにある喫茶店の紙ナプキンに絵を描き出す。鞆やPCなどの持ち物やその手にも絵が描いてある。彼といるとなんだかこちらまで絵を描きたくなってくる。自分もなんだか描けるような気がしてくるのだ。壁や床、道路、空間のあらゆる場所に浅井さんの作品は増殖していくが、そばにいる私たちの心にも浸食してくるようだ。

「小金井」と聞いて、まず思い浮かぶのは遮るものがない広い空の下に、大きな公園や緑などの自然。駅前以外には高い建物がほとんどなく、ちょっと懐かしいような落ち着いた街並み。このアーティスト招聘事業は「小金井アートフル・アクション！」の最初の大きなプロジェクトである。選ばれたアーティストは街の持つ空気感と親和性があり、街の中に様々に展開することで人の目に触れ、周りの人を巻き込んでいく求心力があることが大事だと考えた。マスキングテープとペンで、太陽の光を求めて育つ草木のように壁や床を伸びる「マスキングプラント」や、その土地の土を使って描く壁画「泥絵」。

ワークショップで参加者と道路の白線を植物の形に切り取って焼き付けていく「植物になった白線」。浅井さんの作品は、どれも小金井という街にリンクする……。二〇〇九年夏、浅井さんを含む三人の候補アーティストを公開プレゼンの場で推薦させて頂いた。

西武多摩川線の新小金井駅周辺の昭和な商店街には、おしゃれなこだわりコーヒー屋や若い人がはじめた雑貨屋もみられる。曜日によって街のあちらこちらに出茶屋さんが現れたり、普通の住宅内に隠れたケーキ屋さんがあったり。自分の好きなことでビジネスを興し、丁寧に生きること、生活することを大事にしている人たちがやんわりと集まっていく街。それは浅井さん自身が描くことに正直に生きていく姿勢や、暮らしになんだか重なる。小金井という街を少しずつ知る度に浅井さんの作品や人柄が、よりしっくりと街になじんできた。

公開プレゼンの会場や、市民委員からも、「浅井さんの作品に惹かれる」「緑の多い小金井のイメージと合っている」「〇〇に浅井さんの作品があったら嬉しい」など、素直に浅井さんに抱いた好感を表現する言葉が聞かれた。三人の専門委員と三人の市民委員で、その後数回の議論を重ね九人の候補アーティストの中から、三人に絞り込むことになった。六人の選考委員の意見は自然と一致した。

選考委員の手からはなれて、約二年。その間浅井さんは小金井の街に二〇〇本の「植物になった白線」を制作するプランを立てた。街のあちらこちらでワークショップを展開した。白線隊というプロジェクトを支えるボランティア隊ができた。そして本事業も終わりに近づいた二〇一二年一二月の暮れの寒い日に浅井さんに誘われ、本町小学校の広場の焼き付け作業を手伝いにいった。こんな寒い日に屋外作業に人が集まるのかしら、という心配をよそに、親子連れや子ども同士、学生など何十人も人が集まって、焼き付けを行っていた。事前のワークショップで小学生が作った形を白線隊と呼ばれる学生が地面に配置をする。さらにその植物の形を浅井さんがちよつと手を入れると、急に生命力を帯びる。ぽつぽつ。と配置する手の動きを周りで見守る人たち。地面だけでなく、参加した人の心の中にも浅井さんの植物は育っているようだった。

途中散歩で通りかかった夫婦が入ってきて、「やあー、ありがとね。」と、浅井さんに声をかける。焼き付けが終わったところには、展示場所の交渉役らしき街のおじさんが、報告と作戦会議のためにやってくる。街の外の人と中の人を、子どもから大人まで、多様な人を巻き込み、植物になった白線は実現していった。浅井さんがまいた種が小金井でこのあとどう芽を出すか、楽しみだ。

白線隊の隊長は？

植物になった白線@小金井——齋藤末度加（白線隊隊長）

「小金井はなにもない街である」と、いうのが小金井に小中学生時代住んでいた私の印象であった。格別用事も娯楽もないのでわざわざ足を運ぶことのない街だ。しかし、私個人にとっては、幼少期の思い出がたくさんある、いとoshii街だ。

——幼少期。



※本稿は、事業の報告書「森になった白線@小金井」から抜粋、再掲しました。この冊子は二〇一〇年二月から二〇一二年まで、小金井市の個人宅から市立美術館、小学校で行った「植物になった白線@小金井」の様子を紹介しており、活動に関わった市民や学生の手によってつくられました。

浅井裕介さんは「子どものころ、道路工事の白線を目撃したときどうみても絵を描いているようにしか見えなくてうらやましかった。大人になったらあれで絵を描きたいと思っていた」と語っていた。浅井さんは少年時代の夢（目標）を、大阪・横浜・代々木公園・青森・そして小金井で見事に実現させたわけである。

浅井少年の夢・白線プロジェクト。プロジェクトに関わって小金井へ赴くたびに、幼い頃の自分がスクランブル交差点の横断歩道の向こう側——アスファルトと白黒白黒のコントラストの向こう側に——陽炎めいて立っている姿をみつける。私はあの頃何を夢に見ていたろうか。今それを実現し得るだろうか。等々思考。

白線の焼き付けは、小金井各所で行ってきたが、そこには必ずといっていいほどお子さんがいた。彼らはこれから、焼き付けた白線と一緒に過ごし、大きくなっていく。街と、白線と一緒に。彼らは大きくなったとき、白線を見て、焼き付けをした当時のことを振り返るだろうか。あの頃何を夢に見て、それを今実現してだろうか、と思っだろうか。

ところで、小金井は何もないなどと失礼なことをのたまわったので、訂正したい。プロジェクトに関わっている間に、小金井の魅力な風景を沢山みつけた。坂がある。川がある。原っぱがある。立派な木もある。昔からある狭い道もある。坂の上からの眺め。個性的なお店。

「てやんでい、そんなの俺の街にもあらあ」とはおっしゃいますな。小金井と貴方の街の地べたはつながっているのです。アスファルトの道路は日本中に木の根っここのように走っている。小金井とどこかは、根っこでつながっている。今の自分の足元の地面も、どこかにつながっている。

「植物になった白線」は「ここ」と「どこか」の場所と時間は、つながっているのだとイメージさせてくれる。

小金井のスクランブル交差点。横断歩道の白い線を渡った先にいる幼い自分がゆらゆらしながら此方をみている。

「どちらへ渡るか」信号はどうやら青だ。横断歩道の線は気がつくとき形を変えて、植物の絵になっていた。

市役所の人はどう思っていたんだろう？

「植物になった白線@小金井」に思うこと
——吉川まほろ（小金井市役所コミュニティ文化課文化推進係）

「道路に横断歩道などを書く白線を使って、駐車場とかに絵を描くプロジェクトを始めようと思うのですが……」と、一年前、当時のアートフル・アクション！の事務局長に言われた時は、ほぼ鳩豆状態で、「なんのことうらら？」と思いました。既に作品とあって、横浜市新羽のプロジェクトの内容や、小金井でこれからやろうとしている企画の詳細を聞くほどに、「これは、おもしろいことができそうだな」と、素材と発想の面白さにわくわくしてきたのでした。

しかし、この自由な発想を、組織の中に取り入れていくことの難しさの壁は厚く、それはすなわち、小金井という土地柄にアートという発想をどう取り入れていくのかという課題でもありました。私自身、現代アートってなんだかわかんないなあと思っている人ですから、胡散臭げに斜めに見ている人の気持ちもよくわかります。でもこの白線作品は、素材の意外性と、見る人に、「ほんわかのほん」とした柔らかい気持ちを持たせ、とんがったアートではない分「あ、私もやってみたい。やれるかも！」という気持ちを引き立たせるので、小金井におけるアート作品の第一歩としては最適なプロジェクトだったと思います。

とはいえ、小金井市内での第一号作品

植物になった白線 年表

年
月・日 動き

具体的内容

二〇〇九

アーティスト招聘事業開始
アーティスト決定

二〇一〇

- 小金井下見1
- 焼き付けのできる場所を探す
- 小金井下見2
- オープンイベント『空き地 vol.1』
- オープンイベント『こんにちは、小金井』
- 招聘アーティストお披露目パーティ
- 公開制作／WS植物になった白線 vol.1
- 二二・九 白線隊、小金井散歩
- 白線を焼き付けられる場所をさがしてうろうろ
- 白線隊、小金井散歩二
- 白線を焼き付けられる場所をさがしてうろうろ2
- 公開制作／WS植物になった白線 vol.2

二〇一一

- 一・一五 公開制作／WS植物になった白線 vol.3
- あけましてのワークショップと公開制作。いよいよ焼付け開始！

二・五

公開制作／WS植物になった白線 vol.4
駅前駐車場に大掛かりな焼付けを公開制作しました

三・五

公開制作／WS植物になった白線 vol.5
ピクニックしながら小金井市内の個人宅、中村文具店での公開制作

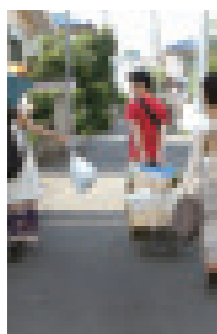
・八

公開制作／WS植物になった白線 vol.6
続・小金井市内公開制作

・一一

（東日本大震災）

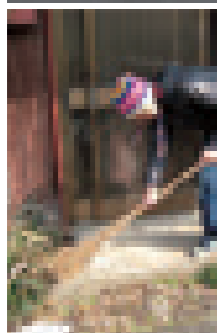
白線が植物になるまで



①出発
小金井の遊歩道やはけの森緑地を通ったりして、焼き付け場所へ向かいます。



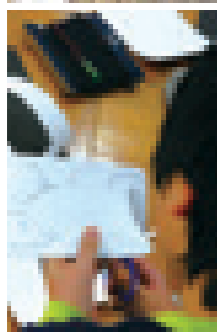
鳥や虫もアクセントになる大事な素材です。



②掃除
素材がよく定着するよう砂や土をきれいにはらいます。



④並べる
切り出した素材を組み合わせて植物をはやしていきます。



③切る
はさみで白線ロールを切り出します。



余った素材も、「モザイク」や「まる」として生かされます。

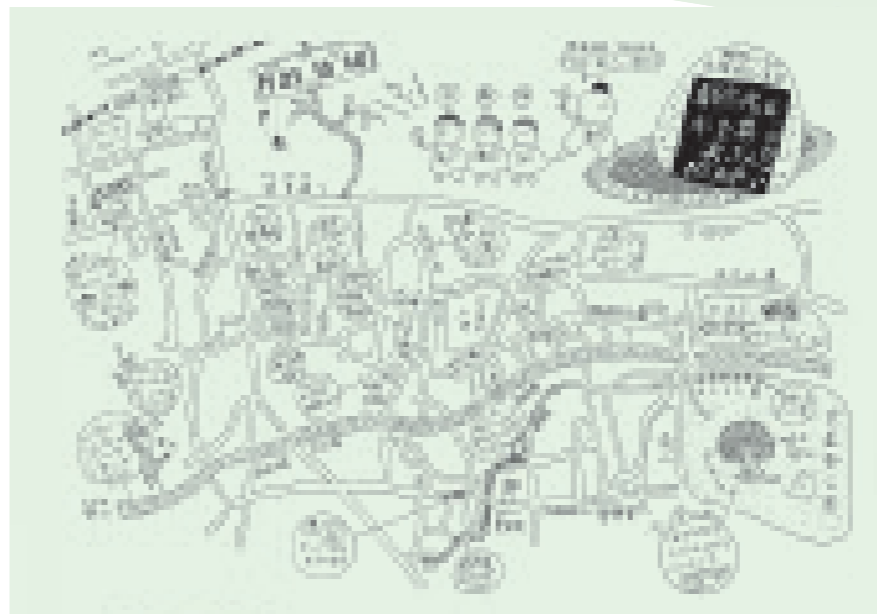
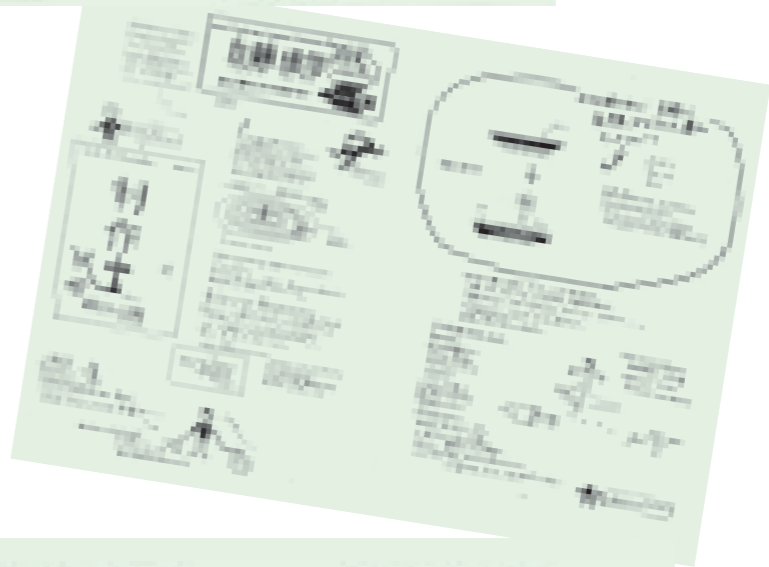
を、公共の施設に焼き付けをしたい、という希望は、諸々の事情があつてかなわず、それならばまず、この作品が好きだという協力者を多く作ろうという作戦に変更し、市報でワークショップの参加者や、焼き付けの場所提供の協力者を募集したところ、徐々に手を上げてくれる人が増え、個人のお宅や、民間の駐車場などにポツリポツリと白線植物の芽が開始しました。

そのような状況の中、市立本町小学校の全面協力は、本当に奇跡のような話でした。「芝生の校庭を白線の植物がふちどったら夢のような学校が完成します」とおっしゃってくれ

四・二六

【公開制作／WS】植物になった白線 vol.1
雨の日ピクニック。素材制作と「聞き耳」（浅井裕介×齋藤祐平）が突然公開制作

白線パンフレット、白線通信制作開始
（※白線通信とは、二〇一一年より制作しはじめた手書きの新聞。焼き付けイベントなどを行う度に、白線隊、参加者、焼き付け宅などかわつた人が、その場でみんなで書く寄せ書き形式。ブログは基本的に一人の人によるレポートだが、関わりのある人みんなで何か記録を残せないかと思い、考案しました）



た校長先生、副校長先生をはじめ、奔走してくださった園工の日下先生、六年生の担任の先生方、学校を上げて協力をしていたいただいた皆様に心より感謝しております。ちょうど、市長選とぶつかったせいか、プレスリリースの成果がなにもなかったのが本当に残念ですが、いつかTVの「空から日本を見てみよう」で紹介してくれないかしらと思っております。

残った課題は、そうしてぜひ自宅にもと手を上げてくださった方々の中で、雨天の中止などで焼き付けができなかった方々。その後はどうなるのか、などの連絡不足からご不満

六・二六

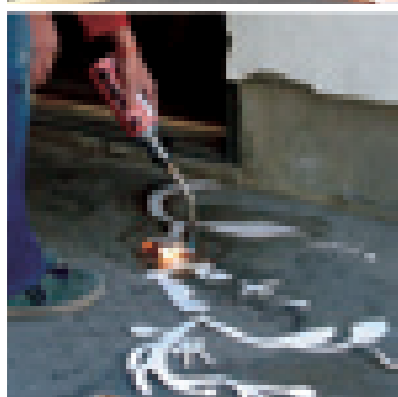
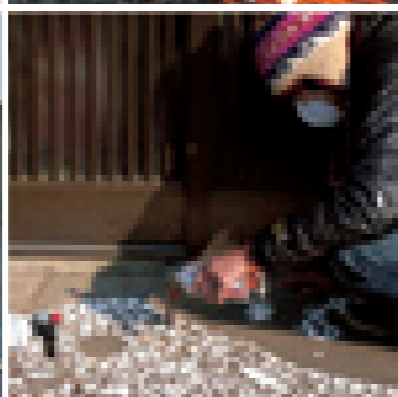
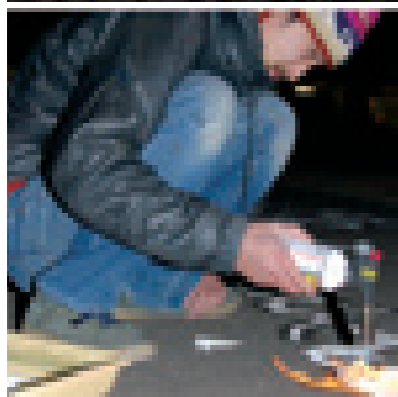
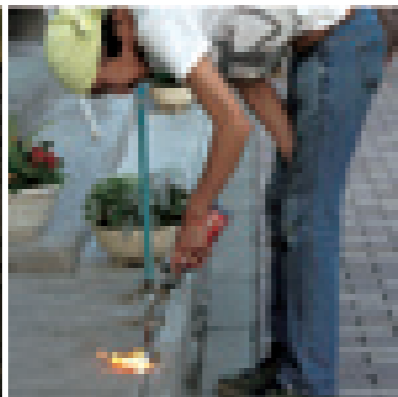
【公開制作／WS】植物になった白線 vol.9
個人宅白線の焼き付けと、ウォールアートフェスティバル 2011 報告会

七・二二

【公開制作／WS】植物になった白線 vol.10
個人宅へ焼付けと公開制作、武蔵野公園でピクニック
シャトー2Fリニエール&キックオフパーティー
各招聘プロジェクトのマネージャーが中間報告トークと展示を行う

八・六

【公開制作／WS】植物になった白線 vol.11
個人宅へ焼付けついに No.30



を持った方が少なからずいらっしやるということですが。せっかくこのプロジェクトを支持して下さっている方たちなので、確かに、確実に網羅して手を抜かず、丁寧な連絡、対応をしないといけない、次に続かないと思います。

社会全般の情勢は厳しく、直接生死にかかわりのない文化に対する世間の風は冷たいです。また、小金井市自身の課題、問題は多々あります。でもそれらは、いつか必ず解決しなくてはならないものです。解決ができたその時に、文化の香りのなにもない砂漠のような小金井市にはならないように、少しずつ、少しずつでも種をまいて、小さな芽を出してという努力を続けていかなくてはならないと思っています。

白線の花々がそっと増えていくように。

市民と一緒に活動した浅井さん

——あながきから——浅井裕介

二〇一〇年の春に小金井市を訪れてからまる二年、小金井市内をくまなくとまでは行かないけれど、ひと月に何度も通い、個人宅から小学校の校庭まで、横断歩道用の白線素材で町の中に作品を——〇〇本つくるとという挑戦に僕たちは取り組みました。この本は絵描きである浅井裕介と本プロジェクトチーム通称「白線隊」による小金井での全活動記録を中心に、この企画にかかわったすべての人と場所との共同制作である作品「植物になった白線@小金井」の図録でもあります。作品写真を見てもらうと一見一人の作家の作った作品のようですが、それぞれの場所のもつ特性、かかわったメンバーや、人数などで違いが見て取れると思います。白線隊メインスタッフのほとんどは学生か平日別の仕事をしている人々で、おそらく今回がこういったプロジェクトの初心者ばかりです。そんな弱小とも言っているいいチームで



九・六 白線隊、湖畔の原始感覚美術祭を見に行く

・二六 白線隊、代々木公園白線へ参加

一〇・二 【公開制作/W.S】植物になった白線@本町小
学芸大デモンストレーション！

・一〇 白線隊・小金井散策三

白線マップをつくるために、小金井を散歩。

・三〇 白線隊があんない！ 秋の小金井おむすび散歩

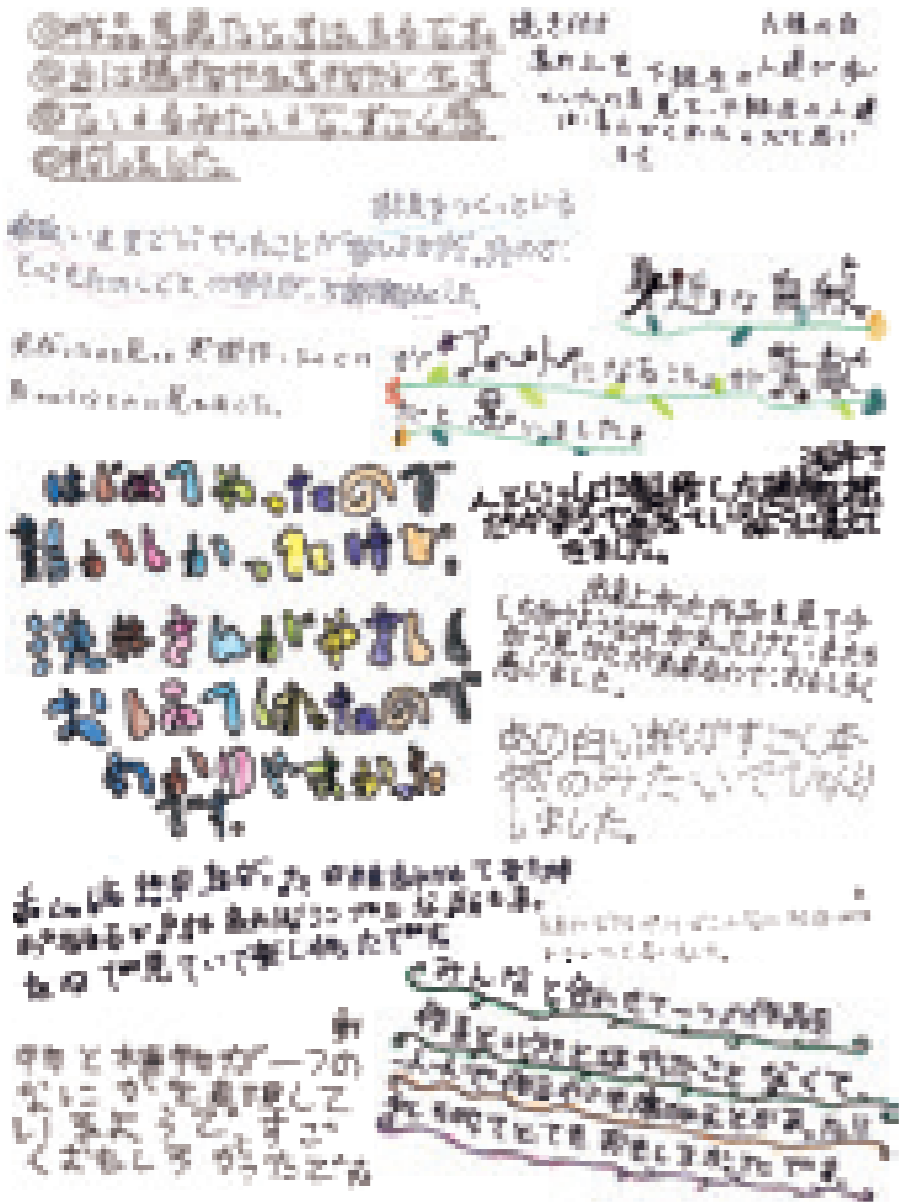
浅井とともにプロジェクトを進める「白線隊」が小金井のまちの案内人となって、秋のお散歩ツアーを行う。

一一・五 【公開制作/W.S】植物になった白線 vol.13

普段からアート関係の仕事をしている人でも大変な街中のアートプロジェクトという大仕事を（ちょっととおおげさかな）僕と二人三脚でやってくれています。

多くは簡単ではない連絡と確認の積み重ねです。こちらからオファーして断られるなんてしょっちゅうで、今思えばお願いすること自体がまともに取り合ってもらえないところからのスタートでした。その中で時々ご褒美のようにひゆるひゆるっと、作品が生まれてきます。それは本当に嬉しいことです。自由奔放に振舞う作家と、それに振り回されるスタッフや、アートフル・アクションの面々、残る作品であるにもかかわらず受け入れてくださった個人宅のみなさんや小学校、そして惜しくもつくることのできなかった場所、その一つ一つの出来事は日常化されていく完成後も含めて到底書ききれません。

それでもこの本を通して僕らが感じていたみたいに、絵（植物）が生まれる瞬間の喜びや、ちょっとでも今現在の小金井の雰囲気を感じてもらったり、実際に小金井市内に点在している作品を探しに行ったり、あるいはありもしない場所にある作品を想像してしまったり、そんな風に観てもらえたら嬉しいですね。最後になりましたが、この企画にかかわってくれたすべての人に至らない点をお詫びするとともに心から感謝します。



小金井市立はげの森美術館への焼付け

一二・一四 本町小学校・六年生全員へレクチャー

・一五 【W.S】植物になった白線@本町小

ワークショップ1 六年三組

・一六 【W.S】植物になった白線@本町小

ワークショップ2 六年一組と二組

・一七 【W.S】植物になった白線@本町小

焼き付け一日目

・二八 【公開制作/W.S】植物になった白線@本町小

焼き付け二日目

「植物になった白線」のあれこれ? — 佐藤李青(東京アートポイント計画プログラムオフィサー、元小金井アートフル・アクション!実行委員会事務局長)

なぜ、道路に勝手に白線を引いてはいけないのか?

こんなことを真顔で聞いてしまったら、きっと、めんどうくさい奴に思われてしまいうに違いない。横断歩道は人が道路を横断するために描かれた白線であって、車道の白線は車の走行ルールを表現している。「公道」の白線は「誰か」の表現として描かれたものでもなく、あくまでも「みんな」に共有されたルールの標識として機能している。それが、個人の判断で乱されてしまうと、混乱が生まれて事故も起きかねない。これは、誰もがあたりまえに思っているのではないだろうか。

ということから考えてみると、「植物になった白線@小金井」は、どこまでも「わたし(たち)」を追い求めた活動ではないかと思う。そういえば、誰かの意思を感じさせない、きっちりとした直線や直角で引かれた公道の白線と、曲線ばかりの、個人の趣向がたっぷり込められた素材で出来た「植物になった白線」は対極的だ。

大中小の葉っぱと茎。木の実。虫や動物。○△□。ワークショップや公開制作、ピクニックに出かけた緑地や公園で、さまざまな人の手でつくられた白線の素材。この多種多様な素材たちは、浅井さんの手によって植物としてつなげられ、小金井市内の個人のお宅やお店に焼きつけら

れることになる。その作業を、少し振り返ってみよう。

おおまかに分類された白線の素材、ハンドバーナーとガスボンベ、未使用のシートとハサミ、「制作中」の看板、そして白線の家主に渡す「認定証」など道具一式をシャトル2Fでカートとダンボールに詰め込み、現場へ出発する。荷物を抱えながら、スタッフチームの白線隊が小金井の住宅街を歩く姿は、行き交う人には少し奇妙に映ったかもしれない。

現場に到着したら、家主にごあいさつ。その日の作業の説明と植物の配置を相談し、素材や道具を広げて、仕事に取りかかる。新たな素材の切り出し、素材の配置と焼き付けの二つが主な仕事。素材の切り出しは、白線隊だけでなく、焼き付けをお願いする家主さんにもお願いをする。お店が文具屋さんならば、文房具。不動産屋さんならば、家。犬の飼っているお宅では、犬を。そうして、焼きつける白線へその場所にしかない「わたし」の表現が混ざりこんでいく。ときには、噂を聞きつけた近所さんも一緒に始める。白線隊、焼きつけ場所の家主や家族、友達や通りがかりの人まで、焼きつけの現場には素材づくりを通して不思議なコミュニケーションの場が生まれる。そこには、いつも小さな居心地のよい「わたしたち」のコミュニティが出来ていた。

「植物になった白線」は、こうした制作のプロセスに関わる多様な「わたし」との関係性が結ばれた作品だ。「ひとりではつくれないもの」、「消えずに残っていくもの」という特徴は、言い換えれば、「わたしたちのつくったもの」、「焼きつけを行ったお宅(お店)の日常生活に埋めこまれていくもの」という関係性を示すものなのかもしれない。それだけに、関係性が上手くつくれなかったものは、悲しい結末を迎えることになってしまふ。公道の白線は、たとえ消えてしまっても「みんな」にとって必要とされる機能をもつがゆえに引き直される。しかし、「わたし(たち)」の白線はその関係性が失われてしまえば、いとも簡単に消えてしまうことだってある(実際にそういう結末を迎えたものもあった)。そういう意味では、時間の経過とともに、その真価が見えてくるのかもしれない。

そもそも、「小金井の100カ所に道路用の白線の植物をつくる」というアイデアは、小金井ア



- 一・一九 【公開制作/WS】植物になった白線@小金井 vol.14 雨天のため中止
- 一・二〇 【公開制作/WS】植物になった白線@学芸の森保育園 雨天のため中止
- 三 森になった白線@小金井
- 一R 武蔵小金井、東小金井駅、シャトル2Fで成果展

トフル・アクション！アーティスト招聘事業の最初の一步、小金井の散歩リサーチから生まれた。小金井の街を見て変わった印象から、すでに日本各地で実施されていた「植物になった白線」を、道路一本を使いより大きなものではなく、マンホールの大きさと程度のもを市内に点在させるという方法で進めていくことになった。

とくに外から見ると目立つ何かがある訳ではない。地理的な起伏も少なく、駅前以外にそれほど高いビルもない。大きな公園が南北に二つ、住宅が多く、日常生活を営む場所としての特性をもっている。そんな小金井の街を見たときに、この方法が選ばれていた。

こうして始まった「植物になった白線」には、当初、「ひそやかなる氾濫」という、ちょっと挑戦的な副題がついていた。これは、たしか白線のアイディアが出てきた最初の頃に浅井さんがつぶやいた言葉だったと思う。無数の小さな変化を市内各所で巻き起こすことで、じわじわと変化を起こしていく。とても魅力的な言葉だと思った。

けっきょく、副題としては採用されなかったけれど、「植物になった白線」の活動は、この幻の副題に沿った活動として進んだのではないだろうか。その方法は、はじめから共有できる「みんな」へアプローチするのでなく、もっと小さな「わたし」へ目を向け、その関係をつむぎ、地域内に無数の「わたしたち」のコミュニティをつくっていくものだった。あたりまえの「みんな」を前提にするのではなく、「わたしたち」から「みんな」を再構築していく。そもそも、小金井市の公の事業として実施された「植物になった白線」は、これからの社会のありようを考えるうえでも先駆的な手法だったといえるのかもしれない。

越境すること、

アートにしかできないこと、

アートにできること

その後のイミグレーション・ミュージアム・東京

—— 岩井成昭

イミグレーション・ミュージアム・東京とは、市民が現代アートの手法を使い、地域に居住する外国人と交流し、そのプロセスを作品にまとめます。それぞれの作品はアーカイブ化されてミュージアムの母体となるほか、多文化環境をアートで支えていく方法を開発・試行して行きます。小金井ではアーティスト招聘事業の一環として始まり、市民のみなさんと三回の展示を作り上げました。

「イミグレーション・ミュージアム・東京」は二〇一〇年に小金井で始まりまし。小金井市に外国の方々に住んでいます。とくに集住地区というわけではありません。生活が安定した層の人々が比較的多く、街もかなり落ち着いた印象でした。しかし、とりたてて外国人が集まっているわけでもないごく普通のまちで、I M Mの展覧会を開催できたことの意味は大きかった。なぜなら、全国のどこにでも在るような町が、潜在的に持つ課題を示していたからです。しかも最初に開催したのは「二」東日本大震災のわずか二週間後でした。福島第一原子力発電所事故の影響で都内でも計画停電が行われ、展示に必要なビデオも機能せず、場合によっては東京都民も避難しなければならぬというような状況でした。

私はあの時のことをよく覚えています。自分たちも流浪の民になるかもしれない、という慄きもありました。そんな現実の中でI M Mを始めたことが、とても象徴的だと感じました。そのリアリティを、ずっともち続けたいと思っています。そんなふうに自分たちの足元がぐらついて、どこか別の場所に移

住せざるを得ない状況はいつでも起こり得るのです。だとすれば、今同様の状態で日本にきている在留外国人と私たちの間にどのような違いがあるのでしょうか。

小金井市でIMMを開催したことで、私自身も色々なことが学べました。異なる国籍や民族性(エスニシティ)をもつ人たちが東京で暮らす場合、さまざまな情報を必要としているだろうな、というのがIMMを始めるときに思いました。在留外国人でも、同じ国籍や出身地同士のコミュニティは既に存在し、SNS等で固く結びついています。IMMではそれは別に国籍や民族を超えて日本にいる外国人同士としてつながれるような、プラットフォームが必要だと信じて疑いませんでした。しかし小金井市での活動で、それが独りよがりの夢想であることが分かりました。

小金井市のうちに足立区の千住でIMMを継続していますが、私はできれば、出身の国籍も民族も超えた人たちが、日本人も交えて、レインボーラーのように隣り合って存在しながら、その境界線を溶かすことが理想的だと考えていました。そういう混在のあり方(マッピング)を探すということも、IMMの目標に置いていたわけです。けれども東京でも国や民族ごとの境界は強く存在していて、私たち日本人にとって彼らとの接触はまだ日常的ではありません。しかし一方で、移民の増加は確かに眼前の問題であるわけです。

私は個人的に外国人移住者が人口の一割近くを占める岐阜県可児市の、多文化共生センターが進めているプロジェクトに参加しました。可児市には日系ブラジル人の大きなコミュニティがあり、今はフィリピンやイスラム圏の人たちも増えていきます。隣接する美濃加茂市にも外国人移住者のコミュニティが多く、こうした外国人移住者が集住している地域で、実際に起こっている近隣住民との摩擦や共存の成功例から学ぶことが大切だと考えています。

また私が、二〇一三年に秋田公立美術大学に着任し、秋田に住み始めて分かったのは、ここが全国で一番外国人移住者が少ない県だということでした。過去には外国から農村花嫁を迎えた歴史もありましたが、保守的な土地柄であるために、継続に至らなかったようです。ところが、本年秋田県内の幾つかの行政区が、農業従事者として多数の外国人を受け入れる国家戦略特区となるような流れもあります。

最初は小規模な技能研修かもしれませんが、その先には多くの外国人が流入して行く可能性がある。そうなる前にやるべきことがあるはずですよ。法律的な受け皿も整備されておらず、行政も民間も彼らにどう対応しているのか

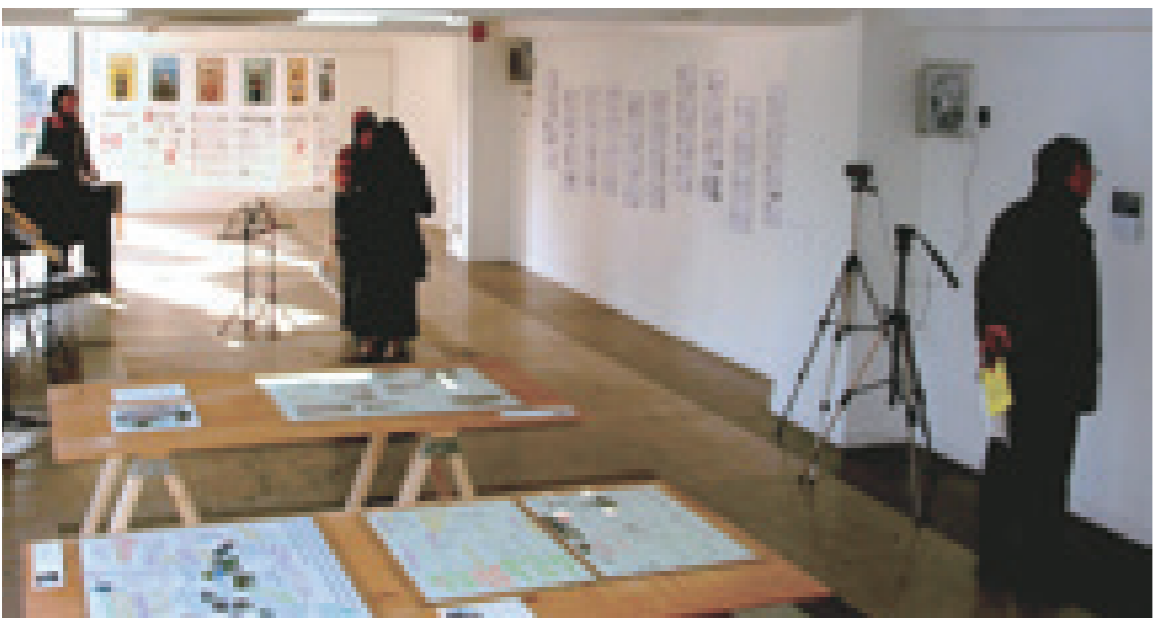
これに対して私たちも危機感というか、リアリティをもつべきだし、その意味でIMMの経験は意義を増してくると思っています。こうした急激な変化は日本中どこでも、明日にでも起こり得るのです。

もわからない。本来は適切な理念と基準(法制度)を基にして進めるしかない。何よりも法律の整備が重要ですが、生活が始まる中で日常に立ち上がる対立項を緩和し、ポジティブにとらえることも重要ですよ。この点にはアートが関与できるように思います。

アートの可能性

国籍や民族性を超えて、外国人移住者も日本人も含めた人間関係のレインボーをつくるために効果的なものの一つは語りまでもなく、文化の交換だと思いません。

ご存じかもしれませんが、IMMを立ち上げる時にインスパイアされたオーストラリア・メルボルンの「イミグレション・ミュージアム」が、IMMに興味をもってくれて、交流が始まっています。相互のリサーチやシンポジウムを通して、島国であり民族の出入りが比較的少なかった日本と、国家が移民で成立しているオーストラリアとの違いがますますわかってきました。



活動の記録

ニューカマーズ・ヴェー2011

第一回の二〇一〇年度は、以下の四つのプロジェクトを行った。各プランでは「異国の生活の中で自身の文化をどう保持・適応させながら日常の中に融合させているか?」という問いを、食/言語/郷愁/違和感という切り口によって提示した。

期間:二〇一一年三月二十六日(土)ー四月九日(土)

○ゲスト企画「WE ARE SAME TOWNS(我々は同郷!)」も同時開催。

○市民によるコミュニケーション・プロジェクト

岸真理子「Somewhat out of our country's / これは母国のものではない。」

富永京子「ミステリー? cooking!」

牧美和子「Map of Nostalgia」

大川直志「日本語不便図鑑」

○会期中イベント

トークイベント「アフリカのステレオタイプとリアル」

日時:二〇一一年三月二十六日(土)一九:三〇ー

ゲスト:黒木皇(アートディレクター/プロデューサー/美術家/旅人聞き手:岩井成昭(美術家)

トークイベント「日本流多文化化+アート」

日時:二〇一一年四月一日(金)一九:三〇ー

語り手:蔭山ツル(KRILABOVA主宰)

聞き手:岩井成昭(美術家)



ニューカマーズ・ヴェー2012

第二回目の二〇一二年度は、五名の小金井市在住者及び市内への通学者が、IMMのメンバーとして参加。市民自らの関心からテーマを導き出し、外国人の方々へのコンタクト、コミュニケーション、作品制作、展示を行った。テーマは、季節感/遊び歌/心象風景/生活の違和感/路上観察など多岐にわたり、多様な人々の視点や価値観、世界観のズレ等をさまざまな方法で感じられるように展示された。

期間:二〇一二年三月十七日(土)ー三月三十一日(土)

○市民によるコミュニケーション・プロジェクト

宮下美穂「tell me your inner landscape」

大久保藍乃「あそびうたとあそび」

平田栄美「常識ー日本人の場合ー」

山中元「世界風物詩巻」

北川麻衣子「新小金井路上観察」

○会期中イベント

ライブ・パフォーマンス:「wasurenade」

日時:三月二〇日(火・祝)一六:〇〇ー

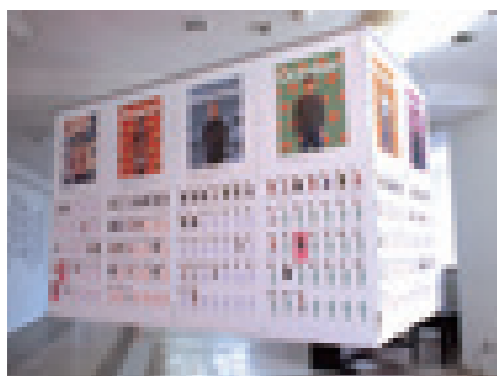
出演:リサ・ガーシュテン/Lisa (Gab) Gersten (童謡歌手)

トークイベント:「多文化共生シアター/可児市における実践」

日時:三月二十四日(土)一八:〇〇ー二〇:〇〇

ゲスト:田室寿見子(演出家/Sin Tindo代表)

聞き手:岩井成昭(美術家)



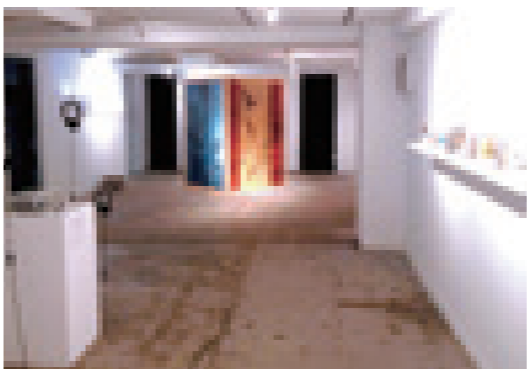
I MMは今、特定の場所をもたない「プロジェクト」として展開しています。けれどもオーストラリアの「イミグレーション・ミュージアム」は権威あるビクトリア州立の美術館です。それは多民族、多文化を認め合いながらも一つの共同体創造の理想に向かうための、揺るぎない基準値を示す存在だと思います。例えば、仮に移民の権利が脅かされた時には「駆け込み寺」のように飛び込んで、自分自身を取り戻す場所。オーストラリアの人々にとって「イミグレーション・ミュージアム」はそういう場所でもあります。

これは日本の状況とはだいぶ違うところです。ですから「イミグレーション・ミュージアム」をお手本にはしませんが、これからI MMをどんなふうに変えていくかは、私たちの課題だと思っています。例えば、難民申請の実質的なサポートが必要なのかもしれません。あるいはそうした実質的援助とは違う、何か一緒に考えたりつくったりすることを通して、互いに理解を深めていくというの方が大切かもしれない。難しい問題ですよ。私たちが良かれと思ってやっていることが、外国人移住者に本当に良いことなのか、彼らの本音は検証しづらく、それが一番の問題かもしれません。プログラムには楽しそうに参加してくれていた方が、予告も無く突然コミュニケーションを停止するよりなことがしばしば起こります。

ある日本人の大学生は、フィリピンコミュニティの人たちが多く集まる足立区の梅田教会に三年以上通って、彼らの生活に入り込み、一緒に泣き笑い、パーティーを企画するような親密な関係をつくりました。このように場所を固定し、時間を費やした活動と比較すると、プロジェクトベースのI MMの方向性が本当に有効かどうかはわかりません。でも、だからこそやれることもあると思います。今考えているのは、多文化共生とアートを結びつけて活動し始めている全国各地のグループに呼びかけて、私たちがそのハブとなつて、それぞれの仕事を紹介したり交流を行うことです。二カ年計画で、初年度はリサーチに充てて、来年二〇一九年には、一堂に会する展覧会を開催したいと考えています。多文化の共生に対するアートの機能についての意見交換にもなるし、それぞれの地域問題の共有にもつながるのではないのでしょうか。

アートに何ができるかについて確信はないのですが、可能性は感じています。アートはいろんな要素を内包して、今日まで拡張し続けてきました。異ジャンルと共存する汎用性の高さというか、柔軟性はアートの可能性です。I MMも時々アートから逸脱してしまい、「それはソーシャルワークとどう違うの?」と言われることもありですが、そうしたらまたアートの方に戻ればいい。その境界を意識しながら活動する意義は大きいのです。なぜなら、アートが拡張していく現場に身を置けるから。

一方で、近年社会に連携するアートについて、さまざまな問題が顕在化しているように、アートが社会的な目的に偏向し過ぎてつまらなくなっていく可能性もある。色々なものと結びつくからといって、むやみに拡張していいわけでもない。それでも、誤解を恐れずに言えば、I MMのやっていることは美術史的には正しいと思っています。異なる国や民族の文化背景から私たちの琴線に触れる表現をすくい上げて、それを作品化するわけですから、これまでアーティストたちが多様な文化をハイブリッドしてきた歴史と見事に符合



ニューカマーズ・ヴェー2013

本年三回目を迎える「ニューカマーズ・ヴェー2013」展では、市民による外国籍の方々のコミュニケーションを作品化する恒例のプログラムに加えて、中国、英国、イラン国籍で首都圏に在住する三人のゲスト・アーティストを招聘した。それぞれが日本で生活する中で、いかにしてこの社会に向き合うか、という根本的な問いを前提に、さまざまな視点から作品で回答いただいた。

期間：二〇一三年三月三日(日) - 三月三日(土)
場所：小金井アートスポットシャトー2F (小金井市本町六一五-1)

○市民によるコミュニケーション・プロジェクト

北川麻衣子 [Mind the Sound Gap]

古田裕美 [「笑」を考える]

富田陽香 [各国・各家・各目の「お手洗」事情]

○ゲストアーティストによる展示

ジェイミ・ハンフリーズ Jaime Humphreys

[Drawing with a video camera] (2013年)

[The World of Kurukawa] (ドローイング、2013年)

リュウ・ルーシヤン Liu Lushan

オープニングのパフォーマンス『私と佐川義臣先生』(2013)

「ポーターランド・パースデー」(2007)

ゴルマリヤム・マスワード・アンサリ Goharyam Masood Ansari

Our time, time of contradiction, time of amazement 私達の時代、矛盾の時代、驚きの時代 一四 (ミクストメディア、2008) [Another

Chance] (コンピュータ・プリント、板、2013)

○会期中イベント

ライブ・パフォーマンス『私と佐川義臣先生』

日時：三月三日(日) 一八：〇〇 - 一九：〇〇

出演：リュウ・ルーシヤン

オープニング・レセプション

日時：三月三日(日) 一九：〇〇 - 二〇：〇〇

ペゴパオパーティースペシャル ver.1

三月一六日(土) 一七：〇〇 -

ゲスト料理人：ゴルマリヤム・マスワード・アンサリ

ペゴパオパーティースペシャル ver.2

三月二〇日(水・祝) 一六：〇〇 -

ゲスト料理人：ジェイミ・ハンフリーズ

宮下美穂



一年目のI MMに参加して制作をしました。作品のタイトルは「me:your.innerlandscape」。

インタビュウを受ける外国人の前に白い紙を置き、その上に大切な写真を配置、あるいは描写してもらい、なぜその画像がたいせつなの? といった質問を投げかける。問いと応えの対話を繰り返すことで、その人の暮らした土地の風景、家族の様子、本人も忘れていた小さな大切な思い出が明らかになってくる。国籍は違えども、人の心の奥底には大切な風景があり、その思い出を共有することは聞き手である制作者自身への励ましにもなった。思えば不思議な交流。イギリス、イタリヤ、アメリカ、香港から来て日本に暮らす人に話を聞いた。何度も拙い取材に伝えてくれた。

アメリカから来た人は、ベトナム戦争の時に夜中にお父さんの漁船に乗ってベトナムを後にした。船の中で泣く生後三ヶ月の弟の声をお母さんが必死で隠そうとしたこと、オーストラリアを経てアメリカの南端にたどり着き、家族でトレーラーで暮らし始めたこと。当然写真は無い。明け方から働きに行くお母さんに代わってお姉さんが朝食の支度をした。シリアル。そんな話を一枚の紙をはさんで、手を動かして聞いた。時々英語はわからないけれど、懸命に生きて来たこと、時々記憶に残る嬉しかったこと苦しかったことの前に話しながら立ち止まる。おじいさんがシリアからの移民だったイタリヤから来た人。シリアとイタリヤがこんなに近いとは知らなかった。そして、彼は大西洋を渡って日本に暮らしている。時々、飛行機の中でここはどこなのかと思うと話してくれた。

話を聞きに行くたびに、不思議な感覚がありました。それぞれの人が食べるもの、好きだった場所、家族のこと。そうそう、香港の人は高台から見た香港の写真と構想の集合住宅に囲まれた広場で、お年寄りが屋台でご飯を食べること、体操すること、オウムがいたことも話してくれた。音の話もあったね。

夜のベトナムの海も香港の高台もシリアも、もしかしたら生涯行くことはないかもしれないけれど、名前しか知らなかった遠いところが少し像を結んだ気もするし、鼻に抜ける空気の違いみたいなものも感じたな。

*みやした・みほ | NPO法人アートフル・アクションスタッフ

するわけです。その意味で私たちはIMMを、非常にアーティストィックな活動だととらえています。

可能性に向けて、イメージネーションの翼を広げたい

くり返しになりますが、私たちがIMMを展開するにあたっては、「日本人はこうですよ」とか、「日本の生活ではこんなふうに振る舞ってください」という上から目線の押し付けはやめにして、ひたすら学ぶ姿勢を心がけています。作品化には制作者の色々な意図が働きますから、材料を提供してくれた外国人移住者たちにとっては、想定外の暴力的なレスポンスにもなりかねない。とにかく「僕たちはあなたたちの文化に学びたい」、「あなた方がどのように工夫して自身の文化を日本の環境に適応させてきたのかを知りたい」と、そこに徹するようにしています。その時いちばん理想的なのは、彼らの文化を私たちの前で披露することが彼らの誇りにも結びつくような、そんなあり方だと思っています。日本人が彼らの文化を尊重していることを、皮膚感覚で伝えられるといいですね。

国際交流イベントで日本舞踊や華道、茶道を披露すること。これは、やる側も見るとも意義を共有しているなら、それは素晴らしいと思います。でもIMMがやることじゃないですよ。

一方、近年の欧米のイメージネーション・ミュージアムのトレンドは「オーラルヒストリー」であり、ある市民が移民となった経緯や、受けた迫害、現在の課題を本人の言葉で語ったビデオを展示する形式です。移民が持ち込んだ異国のアイテムやグッズを並べる、従来のモノ中心の展示とは一八〇度変わってきている。じゃあ、私たちが外国の方を連れてきて、カメラに向かって何か話してもらえば良いのかというと、そういうものでもない。もっとインタラクティブに地域の人たちと外国人移住者が共同作業を行うことで、化学反応を起こしていく方が私たちの社会には必要な気がする。可見市や浜松市のように、現実として隣人に外国人移住者がいるとすれば、日常生活の中でそのような活動が自然に始まるわけです。可見市は全国でも移住者に関する行政の対応が進んでいて、多文化共生のノウハウもしっかり持っている。これらの事実を学びながらIMMの未来を考えていきたい。

オーラルヒストリーのビデオの前に座るよりも、もう少し彼らに近づきたい。でも、私たちはそこから感じたり学んだりできるけれど、彼らは果たして、本当にそれを欲しているのか、これはなかなか検証できないことです。結局、私たちは自分良かれと思うことしかできないのですが、そういった危ういリスクの意識も含めて表現することが必要だと思います。その責任を担う必要がある。だからこそ、イメージネーションの翼はなるべく大きくいっばいに広げていきたい。これはややもすると、ある「スタイル」に身を置くことで、楽になるうとして自身の自身に自戒を込めて、いつもそう考えています。

Hi-Blood Pressure

ハイブラッド・プレッシャー展

同展は、二〇一七年七月一日から一九日に小金井アートスポットシャトー2Fで開催されました。キュレーションには、日本在住のポーランド人アーティスト、カロール・カチョロフスキさんをお招きしました。企画の段階から、スタジオで出来上がった作品をホワイトキューブに移設する作品ではなく、制作の過程でアーティストと市民が協働することを条件としていました。これは、小金井におけるアーティスト招聘の元となる以下の三点によるものです。

- 一 運営から制作まで市民とのコラボレーションにより作品の創作・発表を行う
- 二 これまでの芸術や地域へのまなざしを変化させるような作品制作を行う
- 三 誰もが表現者として存在できるような市民を巻き込む作品の制作を目指す

ポーランドと日本にはもちろん共通する点もたくさんありますが、異なる点もたくさんあります。ポーランドの芸術表現は、日本と比較して歴史的文化的な影響が表現の表層や結果にとどまらず、その過程に強く作用している点が挙げられます。特に、芸術表現における身体性と社会と芸術の関係のあり方、特に社会に向けられた眼差しに内在するアイロニーとシニスムは日本のそれと大きく異なっているように感じます。

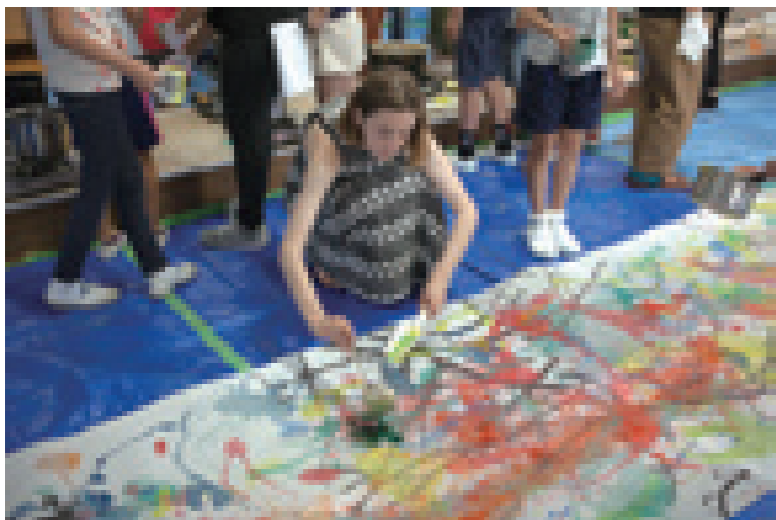
未知のもの、非日常の出来事を日常に投入することが、先に挙げた三点、とくに「芸術や地域へのまなざしを変化させること」をより有効に機能させることにつながると思えました。また、従来型の技術習得や体験を重視したワークショップではなく、他国の文化的歴史的特色もふまえ、アーティストと対面し、対話しながらの制作は参加した市民にとっても意義のある経験になったことでしょう。

会期：二〇一七年七月一日から一九日

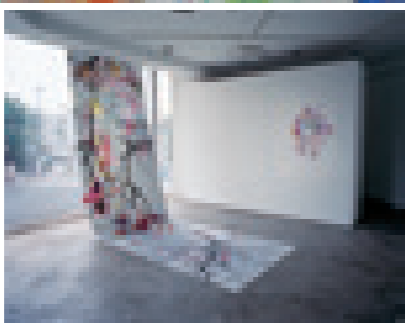
イベント：公開ミーティング 七月一七日

参加作家およびワークショップタイトル

キュレーター：Karol Kaczorowski (カロール・カチョロフスキ)



1. waxwork/
蠟細工のワークショップ



ズム建築が持つ「線」というアイデアから展開した様々な要素を元に、人間のバイタリティー（生命力、活力）をパフォーマンスにて表現しました。当日のパフォーマンスは映像作品として展示されました。

キュレーター

Hi-Blood Pressure: ハイブラッド・プレッシャー

—— カロル・カチョロフスキ

ハイブラッド・プレッシャー展は、ひとつの実験でした。東京で行われたワークショップでは、アーティストではない地元の人々の方々が参加して作品を作りました。この参加者にとっては、自分の作ったものが展示されるという初めての経験をした、ということになります。それぞれのワークショップは、教育や文化交流の分野を専門としない六人のポーランド人アーティストたちによって企画されました。彼らにとってこのようなプロジェクトに参加するのは初めてであり、私自身も、自分の専門ではないキュレーターとしての企画、運営は初めての経験でした。ギャラリイとしてもポーランド人アーティストを扱うのは初めてで、ポーランド人アーティストたちも日本に来るのは初めてでした。

すべてのワークショップはこの展覧会のためだけに考えられたものです。たった一回のミーティングがあるのみで、アーティストとしての経験がない参加者の人々に、展示する作品を作ってもらわなければならぬという状況の中で、それをどんな作品にするかを考えることはアーティストたちにとっては実はとても難しいことでした。

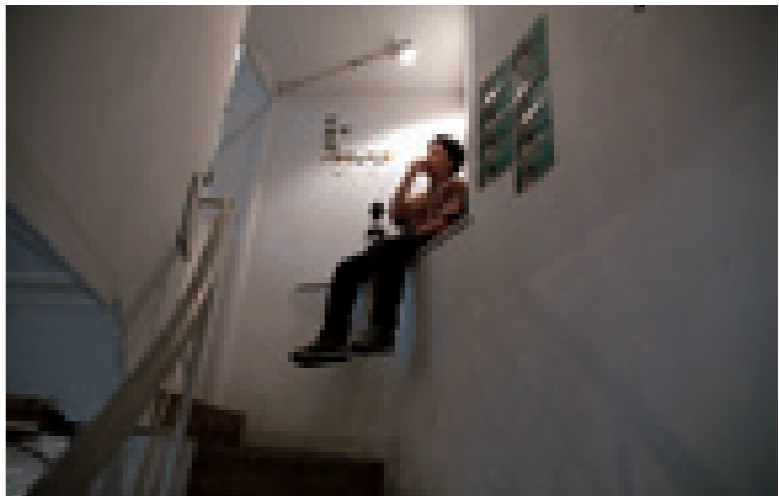
「ワークショップ」という呼び方は、それ以外にじっくりく言い方がないので使っているにすぎません。一般的にアーティストによるワークショップのねらいは、技術的な側面について教える、などとても明らかです。しかしここでは、そうではありませんでした。ここで行われた「ワークショップ」は、さまざまなグループからなる参加者たちと、ポーランド人アーティストたちとの「出会い」と言った方がふさわしいように思います。参加者と来日した三人のアーティストとは個人的な実際の出会いがあり、ポーランドに残った三人とは、インターネットを通しての出会いがありました。企画を成し遂げるための具体的なスキルは特に必要とはされておらず、「出会い」の後には、アーティストと参加者の両者にとって得るものがありました。しかしながら、実のところアーティストと参加者のどちらが実際により多くを得たのかはわかりません。このワークショップは、事前に想定された仮定の結果を得るとい目的のない、公開実験のようなものだったと言えるでしょう。

では、このプロジェクトの全体の背後には何があった、どうしてそのような事が行われたのでしょうか？

ポーランド人のアーティストたち（特に今回のプロジェクトに参加した六人）は、日本のアーティストたちとは異なる視点で作品を制作、発表しています。彼らは視覚的な側面に重点を置くのではなく、作品を受け取る側の人々（鑑賞者）とのさまざまなレベルでのつながりを意識しています。彼らにとって、日常性が非常に重要な要素となっています。この日常性は、実際に展覧会が行われた場所——小金井アートスポットシャトー2F——も、重要なものとしてとらえられているように見えます。商業用のギャラリイとしてではなく、地域の人々やさまざまな背景を持つ人々とアーティストが集まるコミュニケーションの場ということに重点がおかれており、人々の日常にアートを近づける役割を重要視しているギャラリイであるからです。

このような方法でのアートに関する考え方、批判的で、ユーモアがあり、伝統的な美術の技法を崇拜しないという態度は、ポーランドの現代美術の持つ性格の特徴であり、また、この態度は今から約五〇年前の一九六〇年代後半から一九七〇年代を通して、「反芸術」という芸術運動として日本でもみられました。その中のグループの一つであり、特に人々との近距離的な関係や日常性を土台にしたパフォーマンス活動などを行っていたのが、かの有名なハイレッド・センターです。今回の展覧会のタイトルである「ハイブラッド・プレッシャー」は、このグループ名からヒントを得たものであり、また日本のアーティストたちが力強く、アクティブに批判精神を持って活動していた時代に対するトリビュートであり、オマージュでもあります。

ハイブラッド・プレッシャー＝高血圧は、同時に、ポーランドの大きな特徴でもあります。この心臓疾患は、多くのポーランド人が患っている病気で、高血圧は熱くなる（情熱的になる）ことも関連があり、人が何かに熱中して熱くなっていく時、血圧も上昇します。それぞれが企画したワークショップは、来日した日から日本を去る日まで、二四時間ノンストップで考え、行い続けなければいけない、「情熱的」なものとなりました。また一方で、ハイブラッドの「ハイ」は気さくでフレンドリーな印象を与える挨拶の一つであり、



6. Re- vitality. Performative workshop/ 活力のパフォーマンスワークショップ



瀧本多加志

二〇一七年七月二七日 公開ミーティングの発言から
cavalc for man / 男性のための運動をめぐって



◆ 一 つあるんですけど、一つは、集まった四人がまったく初対面で何をしている人か職業とかまったくわからなくて……。だから社会的役割みたいなのと関係ないところでの共同作業で、しかも、あんまりコミュニケーションを取らなかった。ところが、なぜか作品がまとまってしまったんです。たぶん、それが造形の力なのかなくて感じがする。それに、別にクリエイターを集めたわけではない、たぶん私も含めて粘土で何かつくるといようなことを日常的にやったことのない人たちがばかりだったと思うんですね。なぜ作品ができたのか理由はよくわからないけれども、考えられるのは、粘土でものをつくるといのはすごく初源的な、プリミティブな行為だったせいかなと思います。

もう一つは、モデルになったというか、そもそもこのワークショップを発案したドミニカさん。僕はドミニカさんをまったく知りませんが、当然のことながら。だいたい、僕はポーランド人に会ったことは今までに一度もありません。ポーランド語はひとつも喋れないし、ポーランドに行ったこともないし——だからその意味ではドミニカさんに対する文化的な感覚はゼロですね。

だけれども三時間も彼女の顔だけを見つめ続けて、彼女の顔に似せようと手を動かしながら、ものすごい距離があるにもかかわらず、何かがそこに生まれたような気がするんですね。その何かがついているのは「絆」じゃないんですね。しょうがないから、仮にそれを「交通」と名付けると、これが英語で適切な意味かどうかかわからないけど、一種のインターコースみたいなものができたような気がするんだけども——。

でもそれって、ものすごく一方的で双方向的じゃないからインタラクティブなものではないですね。さらに、言葉を媒介にしないからノンバーバルなんですよ。相手が目の前にいないから、エモーショナルなものでもない。だから

今回のような文化交流の場では必要不可欠な態度と言えるでしょう。実際、アーティストたちが受けたのは素晴らしい暖かいおもてなしであり、今回の中で最も意味のある経験となったことでしょう。彼らにとっては、それぞれが企画したワークショップは、来日した日から日本を去る日まで、二四時間ノンストップで考え、行い続けなければいけないものとなりました。

各作品は一人のアーティストによって作られたものという位置付けではなく、作品は異なる人々によるさまざまな層を成すものとなりました。自由に制作してよいという美術的な側面はありながら、参加者たちはアーティストによって出された説明もしくはタスクに従って作品を制作しました。各アーティストはキュレーターとアイデアを話し合い、それぞれのワークショップの意図に沿った参加者がグループとして選出され、すべてのアイデアはギャラリーのディレクターとも共有されました。グループ展として、作家によってアトリエなどですでに制作された作品を搬入し展示するのみというような形態を取らなかった今回のプロジェクトは、より複雑な行程を経て開催されました。

美術的な思考と、作品が作られる中で下される様々な決断は、職人的な技術よりも大切なものです。ワークショップのためのタスクは、アーティストたちにとって重要なアイデアをより際立たせる知的な枠組みに参加者に与えることとなりました。作品に使われている材料であるパラフィンワックスやマニキュアなどは、視覚的な理由だけでなく、それらの背後にあるさまざまな「意味」から選ばれた素材です。例えば、小学校のワークショップで用いられた蠟は、ポーランドでは古い手法に使われるものです。また、昔は蠟を、傷を保護するためのバンドエイドとしても使った歴史もあります。また、マニキュアはとても私的なものであり、不特定の人から集められたマニキュアは、前の所有者であるポーランドと日本の女性の存在をそのまま作品の一部として表現するものとして用いられました。二カ国のお年寄りを対象に行われた写真のワークショップも、彼らの存在そのものを展覧会会場に感じさせるものとなっています。それらは二カ国間の国民性による違いを分析するために出されたアイデアでしたが、実際には大きな違いなどない、という結果をもたらすこととなりました。プロジェクトの全体は、お互いをよく知るきっかけとしても開かれており、展覧会の前に公開されたウェブサイトは、アーティストの頭の中を覗き見ることでできる場としての役割を果たしました。参加者を男性に限ったワークショップでは、男性によってアーティスト（女性）の頭部が作られる過程で、個人的で私的な感情が芽生えました。参加者の一人は後にこのワークショップに基づく印象を文章にし、それはこのプロジェクト全体の背後にあるアイデアつまり、考えること―が実践された痕跡となりました。

オープニングの日には、一つのイベントが行われました。アーティストのうちの一人によって監修された、パフォーマンスイベントが多摩美術大学の学生たちによって行われました。美術的なアイデアに基づいた行動が公共の場で開催され、アートが街の通りに運び出されたという形態を取りました。これはまさしく、一九六四年に行われたハイレッド・センターによる街中のクリーニングイベントの景色を呼び起こすものです。

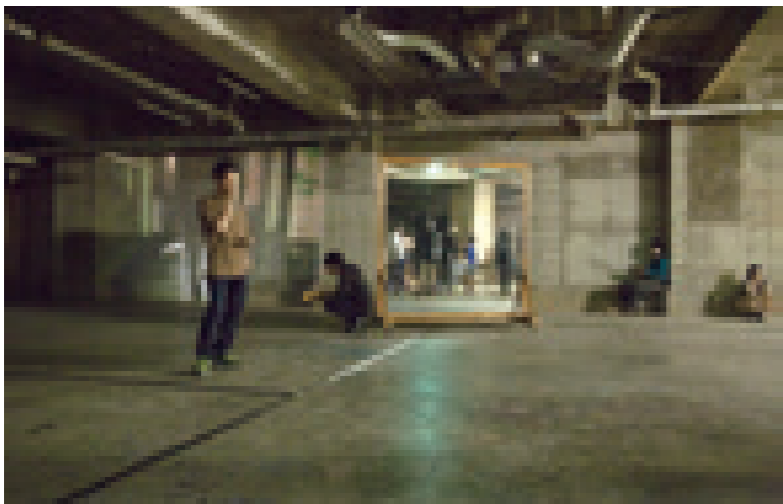
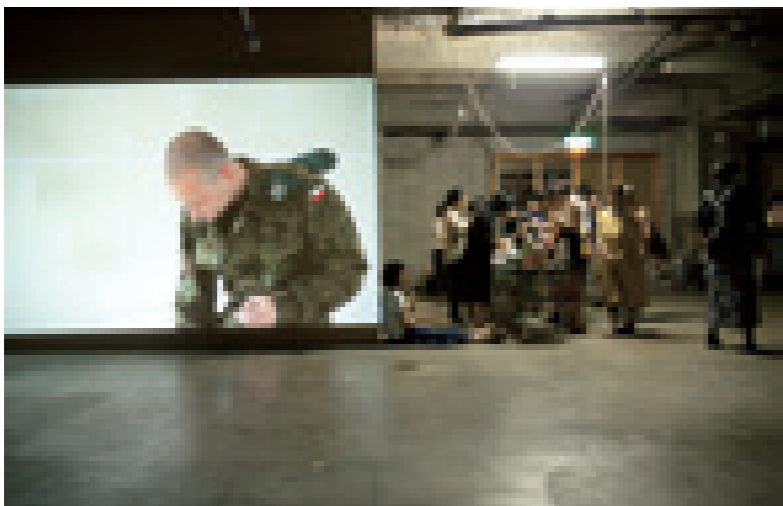
オープニングでのイベントの後、展覧会は一七日間開催されました。この実験は、展覧会の終了と同時に終了してしまいう性質のものではありません。

このプロジェクト全体は、たくさんの人々にさまざまな、異なるレベルでの影響を与えました。単純

に一言で言い表せることができるような一つの結果はなく、それぞれのイベントに関わったそれぞれ一人ひとりが異なる感情を引き起こされたことでしょう。The Blood Pressure 展は、ポーランドの現代美術アーティストたちの考え方を日本で紹介するとても良い機会であっただけでなく、日常でアートに触れる機会のない人々へ、アートを基にした経験を作り出すことを達成できたと考えています。

(日本語訳：吉田典世)

* Karol KUCZOROWSKI (カロール・カチョロフスキ) ― 一九八八年、ポーランド・ワルシャワ生まれ。ワルシャワ芸術大学空間活動スタジオ専攻修士号取得。科学的見解を伴う批判的思考からの美術理論についての研究で多摩美術大学博士後期課程を修了。色についての研究を行う傍ら、美術制作では様々なメディアを用いたインスタレーション作品を発表。



ら、こういうネガティブな否定形でしか語れないんだけど、なにか関係性が生まれたっていう感触は、これまた否定できない。ある種の関係性、リレーションシップとしか言いようがないものが生まれた気がするんです。それでも一度ひっくり返すようなことを言いますけれども、僕らが作ったものが人間の顔じゃなかったらこういう気持ちにはならないと思う。

だから、ノンバーバルで、ノンコミュニケーションで……というふうに否定していくわけなんだけれども、本当は否定しきれぬのかどうかっていうのはちょっと怪しい。やっぱりそこには微かな、通い合うものではないんだけど、一方的かもしれないけれど、何かが込められている感じがありました。これをどなたか明確な言葉で定義していただければ私はすっきりします。以上です。ありがとうございます。

* たきもと・たかし ― 一九六一年、京都市に生まれる。幼小の頃から病的に本が好きで、病が嵩じて本の編集を職業に選ぶ。とはいえず、本を読めば読むほど自分が世界について何も知らないことを思い知らされ、「見るべきほどのことは見つ」という境地が遠のいてゆくばかり。少年の頃は絵を描くのが大好きだったが、長じてからはほとんど描いていない。好きな作家はたくさんいるが、尋ねられると、宮沢賢治とウィリアム・フォークナーと答えることになっている。

まちに暮らす人と出会うこと、 街そのものと出会うこと

小金井と私 秘かな表現

「小金井と私 秘かな表現」は、文化活動家・アーティストのアサダワタルさんをゲストディレクターとして、二〇一五年度から始まった三年間のプロジェクトである。

参加者が多様な文化芸術に出会い、自分たちが暮らすまちや日々の生活を異なった視点でもう一度見つめ、その日常の延長で自分なりの「秘かな表現」を見出すことをめざした「ワークショップ」(二〇一五年度)、参加者が初年度の気づきをもとにまちに練り出し、声かけに応じてくれた市民の「記憶」をテーマに展覧会を作り上げる市民生活展「想起のボタ」(二〇一六年度)、展覧会の経験をもとにより深めた参加者一人ひとりの「秘かな表現」と市民の「記憶」群をもとに、小金井のまちに飛び出すことを目指したツアープログラム「想起の遠足」(二〇一七年度)。これら三つのプログラムを通して、私たちの表現はすこしずつまちの風景の中に染み出していった。

市民メディアーターはこう振り返る

須藤正樹

——三年間を通して家族で参加。プロジェクト終了後、新たな「遠足」を歩み始める。

(二〇一五年に開催された「小金井と私 秘かな表現」の最初のワークショップは)能と現代アートという組み合わせが



ヘンで、何を話すのか、最後はどんなふうにとまるのかと、ドキドキしてました。こんなドキドキ感、近年なかった。前半と後半とではゲストの顔ぶれや組み合わせも変わって面白かったし、途中から、まとまらないでほしいな、と思うようになってました。だから最終回でとっちらかって、ちょっとほっとしました(笑)。

参加者には女性や子どもが多くて、最初は居心地悪くて、僕はなんとなく固まって冷や汗をかいてました。なので、後で男性陣が参加してくれて助かりました。おもしろかったのは「記憶」をテーマにした三年目の展覧会でですね。アサダさんの脳みその中って、どうなってるんだろうと思いました。ちゃんとしたステップを踏むというよりは、みんなでオセロをしたり、じゃあ次はこうやってみようか……みたいな流れが良かった。その時も「失敗したっていいじゃないか」と言いましたが、成功をめざすより、イチローの打率なみに三割当たればいいのかくらいでやった方が、おもしろいムーブメントになるような気がします。まあ僕自身も、最初から結論をつくって動くことのできない性格なんですけどね。

五〇歳になって、僕は全体が見えない、視野が狭いと思いがちです。とりあえず走り出して、途中で、何か言われてもすぐに反応できなくて、二・三日後に「ああ、そうか」と、その言葉を拾ってくる。「この人とはもうやりたくない」と思うこともあるけれど、そう思う自分を反省もするし、結局悩まながら人と一緒に仕事をしているわけですね。なので、仕事でもワークショップでも、なんとなく徐々に固まってく感じがいい。小さな仕事でも何人かでやる、かえって四年も五年もかかってしまうことってありますよね。仕事でそれじゃあいかんのかもしれません。

今回「想起の遠足」で企画した「小金井サファリパーク」で面白かったのは、アサダさんの思い描く内容と僕が考える内容の「遠さ」でした。それでいくつか点を打っていった、最後にはそれがなんとなくつながっていったのが楽しかった。全部が整理されたというか……。他の人の企画はちゃんと論理的でまとまって、大人だなと思いました。僕は使ったこともないFacebookで何かしたいなと思って、それがイベントの企画になるとは思わずに始めていた。とりあえず動きながらしかできないし、動き始めないと何も思いつかないですね。動きながら考える。まあ僕は一〇年後には定年を迎えますから、そのためにも



活動の記録

小金井と私 秘かな表現

ゲストディレクター：アサダワタル
(文化活動家・アーティスト)

二〇一五年度

小金井と私 秘かな表現

実施期間：二〇一五年一〇月～三月 全六回 ワークショップ

ゲスト：津村禮次郎(能楽師、第一回から第三回)
ゲストアーティスト：EAT & ART(TAKO)、鈴木一郎太
参加者：一八名(小金井市内在住・在勤)

二〇一六年度

「私」の「記憶」が編みなおされる、市民ひとりひとりの生活展

想起のボタ

実施期間：二〇一六年八月三日(火)～六日(金)
開催場所：小金井宮地楽器ホール地下1F 市民ギャラリー

ゲスト：「あなたが住む小金井で、今はないけれど大切な場所やものについての記憶を教えてください。」という問いかけに応じてくれた市民のみなさん、個別インタビューに応じてくれたみなさん。会期中イベント参加のみなさん、SamElla、小金井街道プロジェクト、阿部裕太郎(アートフル・アクシオンカフェマネージャー)
トークゲスト：松本篤(ANAN)
市民メディアーター：柴山潤子、柴山日香、須藤正樹、須藤みどり、須藤菜々子、田中ロナ、長澤麻紀、林美貴

二〇一七年度

想起の遠足——このまちの「記憶」から

あのまちの「記憶」を手練りよせる日常ツアー

プレトーク&プレ遠足「想起の夜遠足」

日時：一月十七日(金) 一九時～二二時
トーク&夜遠足ゲスト：高橋伸行(アーティスト、



何かやっていたいとは思っていません。そういう意味では、「小金井と私」と出会ったタイミングはとてもよかったです。小金井という場所は、自分の中では二パーセントとか五パーセントくらいの感覚でしたが、娘がここで育っていくにつれてどんどんパーセンテージが上がってきています。このプロジェクトに参加したことで、考えることをやめて立ち止まったままだった自分に気づかされました。とくにギャラリを飛び出して、町中で何かやるのはいいですね。「想起の遠足」では完全に外へ出て、「ああ、すごいな」と思いました。ギャラリーという場所もぜんぜん気にならない。一〇年、二〇年前の僕では、とても想像もできなかったことです。

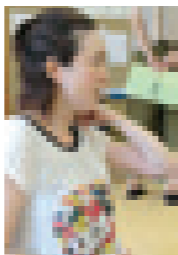
僕はインプットばかりで、アウトプットできないでしまいました。二〇年くらい前から、アウトプットするなら、くらし前から、「じゃあ何を？」という答えが出まぜ現のオリジナリティやスタイルにこだわりすぎている。「二次加工」がいいと思っています。それはたとえは、子どもが自分の見えてきたものを親に話すくらいな感じかな、と。オリジナリティやスタイルよりも、その人自身が出ていけばすごくいい。まあ、そんなあたりで、考えも制作もグルグルと回っています。でも、何か変わった自分を見てみたいという想いも確かにある。アサダさんがディレクションしてくれるなら、そうしてグルグル回っているうちに、ワンステップ上げれるような気がしています。

「サファリパーク」のようにみんなで何かをつくる時は、誰もが楽しいばかりじゃないですよ。行く先が見えなかったり、自分のルールが通用しなかったり……。でも人が入り乱れるのは面白くて、同じことをもう一度やったら、またぜんぜん違ったものになるんじゃないか。

アサダさんのワークショップに行くと、女の人が一生懸命サポートしているのを、見かけます。参加者もサポートもほぼほぼ女の人のなので、ちょっと居心地悪いです。アサダさんは、アートフル・アクションの人と打ち合わせをするとき、どんな感じだろうと考えます。囲まれて、プレッシャーを与えられているのか？ そんな想像をしながら、ワークショップに参加していました。仕事で、女の人は怖い、というイメージがあったので、警戒をしています。最近、やっとなんか自由になっても緩やかに許される環境なんだと思うようになりました。

長澤麻紀

—— 三年間を通して参加。「想起のボタン」「想起の遠足」では家族の思い出と家族の日々をめぐる。

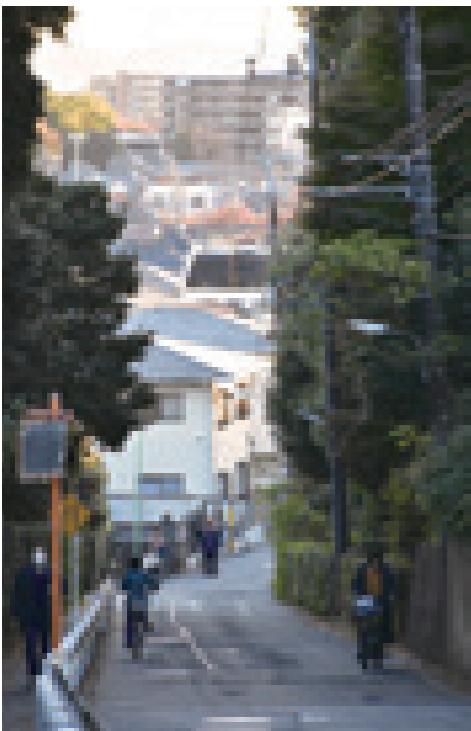


小金井市在住一八年目。中学高校と神戸の学校に通っていて、「もう坂嫌や……」と思いつつ、坂が無さそうな大学を選んで東京芸芸大学へ。大学生活のメインは中央線より北側。最近になって、「あれ、小金井ってめっちゃ坂あるやん」と気づいた。子どもが五歳の時に、「野川っておもしろいよ」と教えてもらい坂下デビュー。うん、なかなか悪くないやん」と上から目線で、たまに坂下に遊びに行く今日この頃。七歳、〇歳のかわいい子どもたちと、三七歳のお気楽旦那と四人暮らし中。

このプロジェクトに関わったきっかけは、お義母さんの影響かなと思います。早期退職して海外へ行ったり、シナリオクラブに通って朗読や演劇をやったり、毎日とても楽しそうでした。その途中で病気になったんですけど、病気を置いておいても、(とても前向きに楽しんで生きていました。その姿を見て)、これは私も何かやりたいな。そのタイミングでこのプロジェクトを見つけたんです。なんか動いたらおもしろいかなあと思いました。

二年目から自分で街に出て行くみたいになくなったとき、人数がぐっと減ったじゃないですか。あれは私にとってはすごくよかったです。着地点は分からないにしても、数人で机一個囲んで、ごちゃごちゃ人の意見を聞くっていう会は楽しかった。今まで知らなかった人たちとしゃべってらっしゃるおもしろいなあと思いましたね。

街に出て取材することになったとき、タカハシさんのお話を聞こうと思ったのは、私の長男が保育園に行っている五十六年の間に知り合いが増えたことで、子どもができる暮らしが変わるなあと思ったことがきっかけです。私、



名古屋造形大学教授、阿部裕太郎(アートフル・アクションカフェマネージャー)
会場：想起のインフォメーションセンター

○会期中イベント

想起の大遠足
— 思い出すために歩く小金井市内000マイル —
日時：十一月八日(土) 一〇時〜夕暮れ時
会場：スタート地点 イトーヨーカドーフェスティバルコート、市内各所
想起の遠足コレクション

日時：十一月九日(日) 九時三〇分〜一九時
会場：想起のインフォメーションセンター、フェスティバルコート、上水会館、ぬくい湯、上芝原会館、(有)アン、美術の森、くじら山、はげの森カフェ、等

出演者：

(想起の大遠足) 野口由紀子、瀧本広子
(遠足案内人) 安達優哉、石川明代、伊藤由実、河村宏、シマダカズヒロ、須藤正樹、須藤みどり、須藤菜々子、田中ロナ、環笑子、長澤麻紀、久田浩司、平田絵美子、宮内真希

主催：東京都、小金井市、アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)、NPO法人アートフル・アクション

共催：小金井市民交流センター指定管理者がねいし共同事業体
助成：一般財団法人地域創造、平成二八年度文化庁文化芸術による地域活性化・国際発信推進事業



運営スタッフはこう振り返る

荒田詩乃

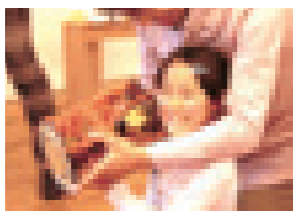
—— 三年間を通じて「小金井と私 秘かな表現」アートマネジメント担当。アートフル・アクションスタッフ。

時にとまどいながら、共にいる「ワークショップ」

「何をやっているのかわからなくて、何だろうと思ってた」

二〇一五年度の全六回のワークショップを振り返って、メンバーの一人が言った感想である。

市内在住の市民一八名が参加したワークショップは全部で六回。「学習・体験編」と題した前半三回は、能楽師 津村禮次郎さんを講師に、能の所作、身体の使い方法などに触れた。年が明けて行われた「解体・応用編」と題した後半三回は、能の所作をもとに、自分自身やそれぞれが暮らすまちを違った視点で見つめなおす多様なワークを行った。たとえば、能の曲(くせ)の語源である癖にふれて、二人一組になり相手の癖を演じるワークショップ。アーティストのEAT & ART TAROさんをゲストに迎えた回では世阿弥の「秘すれば花」という言葉をもとに、「思い出の食べ物」「嫌いな食べ物」について参加者で





保育園以外の子育てしている人たちとまったく接点がなく、児童館なども行く間もなく仕事復帰しちゃったから、よく聞く、児童館で悩みを打ち明けるママがいるっていうのが、あまり実感がなかったんです。タカハシさんがそういう人たちから相談を受けてたことが集まりの始まりだということを知って、別に時代に関係なく同じことを同じように悩んでいる人がいて、集まるところが緩和されることが、なんかよからんけど、おもしろいなあと思って。それを、私たち仕事しながらやっている人と専業主婦とを分けてしまうのも、なんかおもしろくないなと。向こうがこっちに対して思うことを考えるきっかけになりました。

たぶん、子どもと暮らす街というところはずっと興味があって、そこは三年間全然ぶれなかった。もともと地図が好きで、昔NHKの『たんけんぼくのまち』っていう番組があって、ああいうのっておもしろそうだなってずっと思ってたんです。想起のボタンでは自転車に乗り、遠足(?)では仙川を子どもたちと歩き、子ども目線でものを見たときすごく楽しかった。ランドセル背負って途中で止まって草引っ張ったり、なんか拾ったりして歩く小学生たちが一緒だったのがよかったって参加者の方から言われました。「あの子たちがしているのを見て、そういえば私、寄り道して蝶追いかけてたなって思い出した」って言って。「思い出したら、私、意外と小学校のとき楽しかったかもしれないと思えたんです、それが今日すごい収穫だった」と。企画として本当に成功するかな? って、当日もずっと思っていたんですけど、最後にそういう言葉をもらって、楽しくなかった思いが楽しくなるような企画ができたのかあ、と思って。

想起の遠足では三年目にしてやっと自分がやっているのを見に来てほしいと思いました。「子ども道をゆく」は展示のとき、長男が通っていた小金井保育園の園長にも声をかけて、見に来てくれたんですよ。そういうこともあって、自分が保育園と関係ない活動をじゃべりたくなったのは、ここに来て初めてでした。それで今度小金井保育園の園長を自宅に呼んで話してもらおう機会をつくりました。

三年間続けた結果、よかったかなあ。でも、私は常に受け身なんで、一年目、二年目が終わっただと思っても来る連絡に乗っかっているだけなんですけど。私、仕事のときも「なんでもやります」って、あまり選ばない。結果色々来た中で、やりたいたことがでてくるんです。今回の「まあ、なんかよく分かんないけど、行ってみようかな」という感じの入り方。結果、自分の好きなことを企画や作品にできているなあっていう感覚はあるので、間違っていないかなって思います。

河村宏
——(下写真右端)「想起の遠足」に参加。市外から通学していた思い出を同窓生と市民の方と辿った。

生まれて初めて「アートプロジェクト」なるものに直接関わらせて頂いた。芸術・美術・アートなる言葉の明確な違いも分からない中で「アートプロジェクト」に関わった感想とは、一言で申し上げるならば「体験価値」というビジネス(サラリーマン)用語が適切であろう。

では、「小金井市」をどう捉えるべきか? は極めてシンプルに「地域」であり、要約すれば私は「小金井デザイナーランド」で存分に楽しませて頂いたことになる、まさに入場料無料。

いきなりの他所者(埼玉県川口市在住)である私如きを快く受け入れて頂き、尚且つ無料で存分に「小金井市」という地域・街を舞台に楽しませて頂いたのはこれまでアートフル・アクション様が築き上げてきた長年の信頼・歴史によるものであり、ある意味そこを原点に考えればアートフル・アクション様の活動こそが「小金井の文化」と言うべきものなのかもしれない。今回のアートプロジェクト参加前からなんとなく、ふわっとしたイメージで「地域」という用語・単位に今後の日本の抱える様々な構造的な社会問題解決の糸口を見出そうとしていた私にとっては、まさに「体験価値」を通じてその糸口は明確な解となった。

話は大きくなってしまいが、今後はまさにアートフル・アクション様の活動が、「地域」単位であらゆる問題解決を図るべきなのであろう。分り易い例でいうのであれば、認知症患者の受け入れがまさにそれである。今回のアートプロジェクトの内容だけを取ってみても、中央大学附属高等学校・東京学芸大学様が舞台となり学校をオープンに地域に開けた場所として提供してくださった。これが日常生活における普通の景色となれば、幼・小・中・高・大の抱え

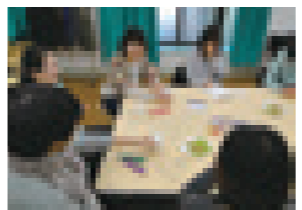


紹介し合い、まつわる記憶を話しあった。株式会社大と小とレフの鈴木一郎太さんがゲストの最終回では、「見ること/見られること」をテーマに、参加者同士で高速でお互いのスケッチを繰り返すワークを行い、その行為を手始めに会場からまちに飛び出すことにも挑戦した。

能という、長い歴史の中で体系化されてきた芸能の持つコミュニケーション・視点の「型」を知ることを、それをその表現に対する「習い事」に留めるのではなく、より広く日常生活の中で「活かす直す」という意識を持つこと、あるいは一見交わらなそうな伝統芸能と現代アートの融合的なプログラムは、参加者にとのような体験をもたらすのだろうか。それはおそろく、わかりやすい正解のない、一見難しい不思議な時間だったと思う。前半三回が終了したあと、様々な要因があったと思うが、年明けを挟んで後半のワークショップには来なくなってしまったメンバーも半数ほどいた。けれど、それでも毎回参加してくれた人たちが和やかな雰囲気の中で語り



あいながら、「これは一体どういうことなんだろう」と、考えながら共にいた時間が、メンバー同士の「言葉にならない絆や雰囲気」を少しずつ醸成してくれた

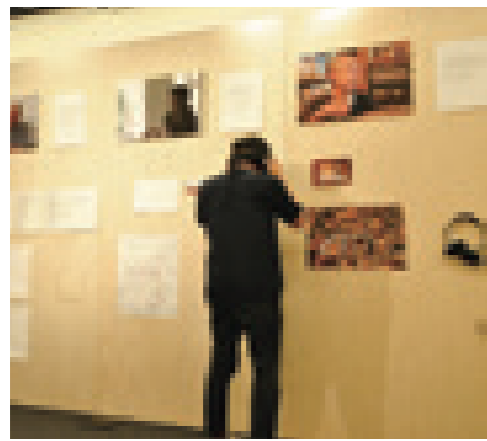


し、それぞれの表現をもってその後まちへと出ていく大切なエンジンになった。のちの「想起のボタン」「想起の遠足」を通して、あのワークはここに繋がっていたと、不思議と実感できる瞬間もあった。

わたしのまちともう一度出会う

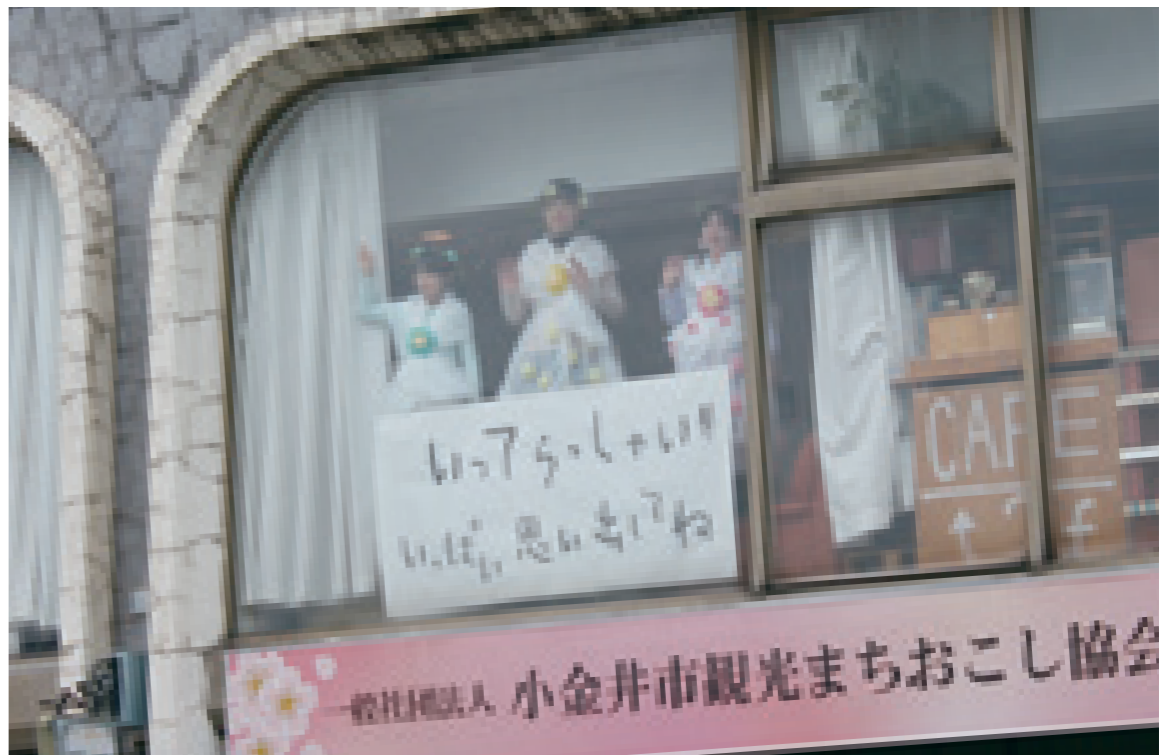
「想起のボタン」

「あなたが住む小金井で、今はないけれど大切な場所やものについての記憶を教えてください。」二〇一五年度のワークショップに参加してくれたメンバーに声をかけ、「市民メディアエーター(以下メディアエーター)」として、展示と一緒に作りあげた。メディアエーターは、自分が暮らすまちで、気になる人や「記憶」のインタビューをして、その記憶によりそいながら展示作品という形をとった「表現」



様々な問題は一気に解決に至る。グラウンドがなく活動拠点に困っているスポーツ団体などいくらでも存在するであろう。それであれば東京学芸大学の広大なグラウンドを借わせてあげれば良いのではないか？アートプロジェクトを考えるうえにおいては、もはや日本の縦割的な従来の枠組みでは、その開催意義・効果を計ることは不可能だと考える。小金井市役所様で考えるのであれば、全課を横断的に展開したものの象徴がまさにアートフル・アクション様のアートプロジェクトであり、シンブルに言えば街の活性化ともいえる。

他者の私が言えた立場ではないが、アートフル・アクション様の活動を半永久的に継続させることが元々ある「小金井市」の文化を全国・世界に発信することにつながり、逆説的に聞こえはするがそのようなアートフル・アクション様の活動こそがあらたな「小金井市」の文化たり得るのではないだろうか？ 文化をアートで発信する、それが新たな日本文化になり得る。そんな活動集団こそが現代社会で崩壊した「中間共同体」「中間組織」にとって代わる「ソーシャルキャピタル」＝全員（様々な社会的弱者をも）参加可能な地域コミュニティと言えぬのではないだろうか？ そんな地域コミュニティは極めて緩いチカラで結ばれており、また縛りのない自由な集団組織であり、極端な言い方をすれば都合の良い時だけ参加可能なコミュニティ・場・空間である。一つの縦割の省庁・課・私立学校・国立大学ではなく、



横展開される『地域』という舞台で、同じく縦割では理解・説明しきれない『ソーシャルキャピタル』なるものの形成が既に形成されている『小金井市』の魅力はそのまま今後の観光資源という形にまで姿を変え、言葉が汚いが『お金』を呼び込みながらも『地域』住民の心を豊かに満たす『地域コミュニティ集団』の形成にまで至る。私は今回のアートプロジェクトなるまさに無限の可能性を秘めた一石百超の解を、母校である中央大学に何とか理解して頂き、小さく小さく中央大学内でスタートさせていただくことを切に願ってやまない。

環笑子

——二年目の後半から参加。とにかく小金井に詳しい。市外からの参加者を小金井とつないだ。『想起の遠足』では、「いつかの通学路」を、まささんと一緒につくった。



二〇一七年十一月一九日夕方の「想起の閉会式」。足の裏には水ぶくれがいくつもできて痛かったけれど、ハイテンションだと平気だから不思議だ。想起の

遠足コレクションのうち参加できたのは「チャルメラちゃん♪」と、まささんと自分で企画した「いつかの通学路」だけだったので、行きたかった他の遠足の写真や映像を見たり報告を聞くのは楽しい。

終了後「いつかの通学路」に参加してくれた方がまささんと私のところに来て、とても楽しかった、と言ってくれた。彼女はずっとランドセルを背負って歩いてくれて、ゴールの上水会館の和室に着いた時、畳にランドセルをドンと置く感じが、あそろだったと思った、と言ってくれた方だ。

彼女の子どもの頃の思い出はあまり良いものではなかったそうだ。でも今日歩いたことで、辛いことや悲しいことがばかりではなかったと気づいたと言います。「明日からも、今日のこの私のままですよね」って。

彼女とさよならした後、まささんがつぶやいた。「人の人生変えちゃったよ」

この起こりは二〇一六年二月、初めて参加



を立ち上げていく、「記憶の変換者」だ。展示は、三つのセッションに分かれ、「The 1st Button」では、一般公募した小金井市民八二名の方々の不在の記憶にまつわるエピソードを、いただいたテキストほぼそのままに展示した。「The 2nd Button」では、プロジェクトスタッフが個別にお願いした小金井市民一〇名の方々の記憶をインタビューし、聞き手との対話を通じて想起された記憶を冊子と展示物を通じて再構成し、「The 3rd Button」では、自



らも小金井市民であり、本展の制作に携わった六組のメディアーターが、各々の手法で取材した市民の記憶を「表現（展示作品）」へと変換した。そこには記憶の語り部と聞き手の共同創作の姿があり、聞き手による語り部に対するリスペクトと誠実さと妄想と誤解とがない交ぜになった不思議な表現が立ち現れることとなった。



セッションを重ねるに連れて、記憶の「編集の度合い」が強くなるように構成された。また、会期中には参加者がさまざまな記憶を交換できる機会としての

出来事、がいつでも起きていくように、「メディアーターによるギャラリートーク」「想起の試食会」「八ミリフィルム上映会」、松本篤（TAKESHI）をゲストに招いた「座談会」など想起にまつわる様々なイベントを開催した。それらのイベントは、「記憶」というテーマを手掛かりに、手探りで、時に戸惑いながら、それぞれのやり方やスピードで、少しずつ各々の実感を手には、「なにか」に出会っていった。



未来に思い出すために、いま歩く

「想起の遠足」

ワークショップ、展示を経て、三年目は「まちに飛び出してみよう」をテーマに、メンバーとワークショップやミーティングを重ね、昨年度同様「記憶」をテーマに「遠足」プログラムを開催した。二年目のワークショップから参加したメンバー、



さらに子育てをしていると、子どもの成長とともに自分の記憶も上書きされ、誰の記憶なのかも定かでなくなっていく。人は自分の未来も、過去も選択できるのだ。

当日、集合場所の。ランドセルを背負って出発。角を曲がったらまずはジャンケン。負けたら次の電柱までランドセルを三つ持ってもらう。

現役の小学生たちが参加してくれたのが何よりありがたかった。彼らは確かに、いつかの私であり私の子どもたちでもあった。さらに前日の雨模様の大遠足とは違ってかわった綺麗な秋晴。見事な紅葉と美しい夕暮れ。その中を、お喋りしたり写真を撮ったりしながら小学生たちを追いかけついでいく。

ゴールは上水会館の和室。写真を共有し、地図にさらに書き足して、解散。そして、閉会式へ向かったのだった。



した「小金井と私・秘かな表現」サードシーゾンの顔合わせの時、イトーヨーカドーを一緒に並んで歩いたり、駅の切符売場で皆で一斉に小銭を落としたりした。

楽しく嬉しくて仕方がなかった。何が嬉しいって、好きだけど、でも本の中の世界だと思っていたハイレッドセンターのようなくことをしているのだ。まさか自分でできるとは思っていなかったことをやっていた。

記憶——恐らく日本に住むどんな人にも、ある程度共通した記憶があると思われる「通学路」。まささんが既に提案していたので、一緒にやろうと持ちかけた。

いろんな方の記憶をたずね話しをしていると、キャッチボールのようにどんどん連想してお互いに想起していくのはおもしろい。だが、もちろん記憶は良いものだけではない。想起のボタンが押されればなしなので、辛いことや悲しいことも次々に思い出す。

石川明代

——「想起の遠足」に参加。遠足当日、新たな出会いの中で新婚時代の蜜月に思いをはせた。



以前からアートに関わるのが好きだったけれど、子どもが産まれてからは遠ざかっていた。二度目の育児中、たぶんこれが最後の育児だろうから、とにかく色々なことをやってみようと思っていた所、想起の遠足の企画募集のことを市報で知り、ちょっと説明会をのぞいてみよう、と思っただけだった。

説明会は夜で、子どもと離れて夜に一人で出かけるなんていつぶりだろう。母親という立場を離れて、知らない人と話し合ってるなんていつぶりだろう。それは久しぶりの非日常感だった。

私は結婚と同時に小金井市に移り住んでおり、「小金井での記憶」をキーワードにまず連想したのは、新婚時代のことだった。新婚時代よりも、その後の子育て時代の方が期間も長いしインパクトも強いのに、と少し不思議に思っただけれど、きっと子育てはまだ現在進行形で、記憶と呼ぶにはまだ近すぎる過去だから。

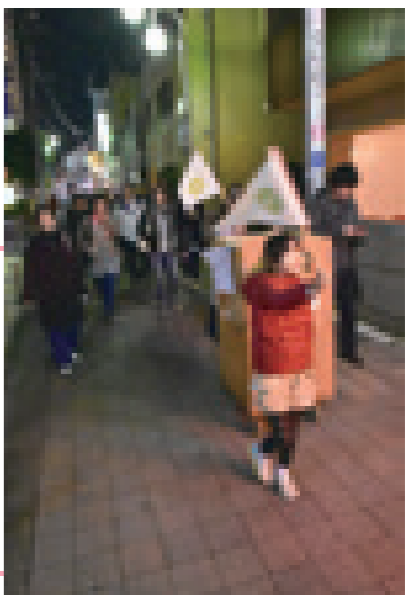
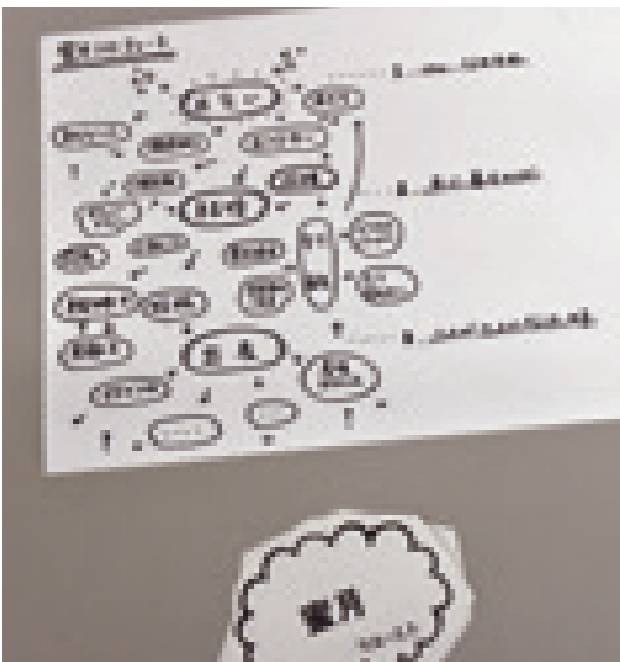
新婚時代というのは、たぶん誰しも少しは甘い記憶があるんじゃないか。

普段住んでいるこの街の、何でもない風景の中に個人的な愛の記憶が息づいている。それをみんなで共有してみたら、それはそれは壮大な愛の物語になるんじゃないか!?……とまではいかなくても、ある人にとっては変哲もない風景だけれど、ある人にとっては大切な記憶の場所。小さな愛の記憶があちこちにあるのって、なんだか愛しいなと思った。

そんなことを考えていたら、ふと自身の新婚時代の記憶が蘇ってきて、それは温かな記憶だったので、少し切ないような甘やかな気持ちになった。

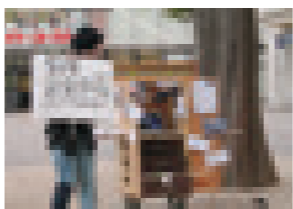
子どもが産まれてからは私も夫も子育てに必死で、小さな喧嘩ばかり繰り返している。でもこの時は「あの頃も今も、幸せだな」とふっと力が抜けたような感じがした。こういう感覚を、同じような立場の人たちと共有したいと思った。

当初は「子育て世代の夫婦で、新婚時代の記憶を語り合う」という内容で企画していたが、結果的に、参加者全員が市



年目の「想起のボタン」を観て、その後のワークショップに参加し企画チームに入ったメンバー、市民公募で参加したメンバーなど様々な出会い方を経て生まれた新たな企画チームで対話を繰り返しながら、それぞれの生活の実感や大切な「記憶」がたかさんつまった「五の遠足プログラムを企画した。イベントは三日間開催し、初日は高橋伸行（アーティスト）や美しい美術プロジェクターデザイナー・名古屋造形大学教授）を招いたトークと夜遠足、二日目はデザイナーがそれぞれの生活の実感や思い出をもとに、作り上げた。

二児の母、当時育児中だった石川さんは、ある日、いつものように小金井公園で子どもと遊んでいる時、ふと夫との記憶が蘇り「あの頃も今も、幸せだな」と思ったことをきっかけに「蜜月」を企画し、参加者とともに家族のはじまりの物



語を語り合った。また、おすすめのちいさいお店を集めた小さなお店巡りは小学五年生の企画だ。遠足企画は「五プログラム」のぼった。

これらのどのプログラムも、小金井の街のリサーチ、自身の記憶の巡り直し、当日参加者が歩くことをプランニングするなど試行（錯誤）を繰り返した。企画の途中では、メンバー同士がそれぞれのアイデアを具体化するために助け合う機会が多く生まれた。リサーチの過程では、メンバー自身が銭湯や農家、駄菓子屋などと交渉しプロジェクトが成就していった。

プロジェクトに関わりながら、ずっと考えていたことがある。想起の遠足は一



外在住、半数が独身ということ、想定していたテーマはあまり意味を持たなかった。

参加者の属性は当日しか分からないとはいえ、完全に私の準備不足だったのだけれど、参加者の方々に積極的に関わって頂き、無事企画を終えることができた。

振り返ってみて、企画に参加することで「子育て中だけれど自分の好きなことに関わってみること」、「子育て中だからこそ地域の活動に関わってみること」ができたというのが自分の中で大きいと感じる。子どもの行事や体調などで事前のミーティングにもあまり参加できず、当日も子どもを連れての参加でバタバタし、想起の遠足に充分に関われたかという点決してそうではないけれど、チャレンジしてきたという事実は今後の自信になると思う。

また、企画ということ自体新しい経験だった。自分の頭の中にあつたことが形になって他人を巻き込んでいくというのはおもしろいことだと思った。こういうことは苦手だと勝手に思っていたので、新しい発見だった。

平田絵美子

——（下写真左端）「想起の遠足」に参加。校舎脇の大貧民、歌いながら帰った道を新しい出会いの中で辿った。

「想起の遠足」に参加した感想として、担当した二つの企画の概要と、企画を終えての気づきや変化、今後の活動について述べたい。

企画の一つめは、「銭湯de音楽」。企画のきっかけは、遠足の説明会があつた頃に、ちょうど大学院での研究テーマとして音楽を考えていたこともあり、幼少期に風呂場で姉とよく歌を歌っていた記憶を強く想起したことだった。ちょっと大きめのお風呂ということで、小金井市に唯一残る「ぬくい湯」さんと、合唱したり、風呂桶でリズムをとったりしたら楽しいのではないかと考え、そのような企画となった。

二つめは、「大貧民」。企画の理由は、小学六年の頃、放課後に女子で集まって毎日大貧民をやっていたことが、小学校時代の一番ワクワクした思い出として想起されたからだ。遠足当日は、小金井市内にある東京学芸大学のウッドデッキで、大貧民をした。

企画を通しての気づきは、私が企画した遠足のテーマが「ボーダーレス」だったのではないかとということだ。まず、銭湯という場所は、男女で分かれはするが浴場に入れば誰もが裸になる。そこではどんなバックグラウンドがあろうとも、みんなが、ただの裸の人間だ。こんな場



とは言いきれないのかもしれない。だが、それもまた一つの集団における興味深い現象には違いない。そう思えたことも、企画を通じた大切な気づきの一つとなった。

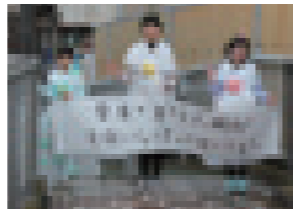
企画に参加した後の変化は大きいと感じている。これまで、私自身が誰かと「共感」するという経験が少なかったという自覚があつたが、もっといろんな人と共感したい、と思うようになった。他者と共感するには、時には裸になったり、声を出したり、主張をしたりと、自分をさらけ出す行為がそのプロセスの中にある。それを、もっとやっていこうと、思うようになった。

今後の活動としては、個人的なことになってしまいが、私なりの方法で自分をさらけだして、多くの人たちと共感したい。現在すでにやっていることとしては、絵をかくことだ。そしてそれを他人に見せていこうと思っている。絵をとおしての共感というのは、未知なのでどんな感覚かわからない。国内外に絵を観に行きたいと考えていて、もしかしたら絵をかけた人と、もしかしたら故人と、絵を介して共感できるのかもしれない。音楽も作曲者と共感できるものと思うが、絵という視覚的なものではまた別の感覚を得られるのではないかと、いう予感がある。

所は他にはない。音楽も、誰でも生み出すことができる自由なもの、かつそれを歌や楽器によって他者と共有できる。企画に参加してくださった方とは世代が異なっていたが、一つの曲を合唱した時の強い共感の感覚は今もはっきりと覚えている。また、大貧民も、ルールさえ知れば誰でもできるトランプゲームだ。しかしそのルールでおもしろいのは、そもそもゲーム名が地域などによって違う（例えば大富豪、富豪、貴族、ことば、ルールの多様性、いわゆるローカルルールが存在することだ。参加メンバーによってゲームのルールが大きく変わるが、どのルールを採用するかについては、多少お互いの関係性が影響するだろう。そういう意味では、大貧民というゲームは、必ずしもボーダーレス

みだかつた風景を、記憶を手掛かりにしながら、まちをキャンパスにそつと描いていたのだと思う。それはささやかな表現であった。けれどそのささやかな表現が、まちの風景と混ざりあつて、これはプロジェクトなのか、まちの風景なのか、なのとも言えない不思議な瞬間を生み出したのではないと思う。それはきっとまぎれもなく、とびきりステキな「秘かな表現」だったのでないか。

プロジェクト終了後、メンバーがそれぞれ独自の遠足プロジェクトを展開しはじめた。保育園の園長を招き子どもが育つ街について語り合う場をつくったり、遠足の当



の遠足の中で、私は忘れられない風景にたくさん出会えた、という確かな感動だ。大遠足で、雨が降るか降らないかハラハラしながら、たどり着いたくじら山の山頂で小雨の中、大きな白旗を振っているスタッフの姿を見つけたとき、「母校の輪郭をめぐる」という企画をたてたKさんの企画に参加した彼の友人たちが「何をやって、いるのかわからない」と言いながら嬉しそうにみんなを歩いていた背中が陽がさつとさしていたこと。当日のトラブルに、「私が行きます」と対応してくれたメンバーの心強い言葉。企画が終わった後に、「楽しかった」とメンバーが照れくさそうに笑っている姿。家族で参加していたSファミリーが、透明のトンネルをくぐっているとき、参加者なのか企画者なのか、それとも通りがかった人なのか、混ざりあつていた、あのなんとも言えない幸せな風景。

ダイレクターのサダさんは、「未来に思い出すために今歩く」と言っていた。今思い出してみると、みんな、いつか思い出すための大切な風景を、見て



ディレクターはこう振り返る

「インタビュー」アサダワタル「そう遠くへは行かない地点からリアルに「生活をしていかなきゃいけない」という様々な出来事に遭遇する三〇代後半というこのタイミングで、このプロジェクトを三年間やらせてもらったことは、ある「自由さ」を失わざるをえないような状況の中から、また違ったタイプの「自由さ」を求めようかと、考えることでもありましたね。

たとえばどこに誰と暮らしていて、どういう仕事をしていて、何を食べてといった、自分を成り立たせる環境要素。それは同時に自分を縛っている要素でもあり、それらに対して、遠くに離れてみて新しいことをころころやっていうより、その場所に身を置きながらその縛っている要素の模様替えをする。部屋から出て「遠くに行こう」というよりは、自分を取り囲んでいるものを、ほんの少し「配置を変えてみる」っていう感じのことをやってきた気がします。風通しが良くなったり、物を置きすぎて隠れてしまってた窓が開くようになったりとか、なんかそういう感じに結構近い体験。

それは僕自身もそうだし、他の参加してくれたメンバーも多分それぞれ普段の自分の「配置」みたいなものに対してどこかで窮屈さを感じていて、埋もれていて気づかなかったものを探したり、本が山積みになっているところの後ろに実は花瓶があって、ちょっとそれを取り出すみたいな作業を、表現を通じて淡々と秘かにやってきたんじゃないかな。それは、場を企画演出したディレクターとしても思うけど、それ以前にもっと「私」として僕もタイミング的にそういうことをやる必要があったんだと思います。

僕は、「とどまる」とことと「とどまらない」ってこととのバランス感覚っていうのは、常に推し量ってる。僕よりもメディアーターとして参加してくれた仲間たちの方が、基本、（物理的な意味でも生活スタイルにおいても）とどまっていること（それほど変化させないこと）を前提にしながら、プロジェクトを通じてちょっと「窓」を開けるってことをやっていったと思うので、僕よりも「秘かな表現」に対するリアリティは意識／無意識を問わず持ち得たかもしれない。僕の方は「窓」を意識し開けることができるという状況・枠組みをつくるという参加の仕方をしていたので、変な言い方だけど、やっぱり、理屈から入っていたし、理屈として入ってもいいような彼女らの日常に対する「外部性」を担保していた。

要は、自分とはどまってる人間くせに、とどまってるようなタイプの表現を、とどまらざるを得ないその日常の中から生み出す表現としてわざと設定するということをやりますが、逆に僕の方が、この街での日常生活を模範的に体験させてもらっていたのだとも言える。そういう意味では、ディレクターでありながら、むしろこの街での日常の実践者としての参加者・仲間たちから学んだことはやっぱりすごく大きい。だからこそ、いろいろ思うことあってこっちに引越してきた。

世の中に様々な「課題」ってあるじゃないですか。僕は音楽とか言葉とか、そういう表現を使って社会で何ができるんだろってことを考えながら、自分なりに見えた景色はあるんだけど、でも一方でほんとと無力を感じるんですよ。とにかく。感じると同時に、このあいだこのプロジェクトのメンバーで「三年間お疲れ様」を兼ねてくじら山でお花見したとき、とてもいい風景が出来上がっていて、本当にディレクションなんてしなくたってもうそこには様々な「秘かな表現」が自律的に立ち現れていて、でも、またそうして「こういう小さな積み重ね、大切だな」って思うことが、やはりそのまま「無力」に対する答えにわかりやすくはつながらない。その一方で参加者たちがプロジェクトを進めるにあたってそれぞれの抱えている個人的な物語の周囲には、いろんな世の中の問題が透けて見えてくることも実感した。つまり「私」の問題と、「社会」の問題は、やはりつながっている。

このアートプロジェクト的なものから立ち上がるオルタナティブな市民表現のつながりと、いわゆる「課題解決」的なアクティビティとの間に、もう少し架橋する言葉や実践があるのだからと思う。そしてそれは、ちょっと泥臭いものになる、一見クリエイティブそうなものとはまた違った何かだと思ふ。僕は来年四〇歳を迎えます。きつこの時期が関係あると思うけれど、どっかでも「カッコつけたくない」っていう思いがある。「アート」や「表現」だから、このあたりの落ちどころでいいよね」ってことは言いたくないというか。「課題は課題で面白く、できれば解決した方がやっぱりいいって思う。もう一歩踏み込んで。こういうプロジェクトって、お互い暗黙知でやっているの、暗黙知で共有した景色で「何となくわかっているよね」って感じてやってることに、ちょっととした危機感がある。そこをもう一歩深く行くためには「秘かな表現」でありながら、見た景色について、次にどうやってそれを明確に「言葉」にしていけるか。僕はそのために「旅」に出るってことがいいなあと思ってる。別にそう遠くなくていい。例えばこの街であったとしても、全く知らない、会ったことのないタイプの環境、人たちと出会う中で、きつこの時に出てくる言葉は「秘かな表現」の中にあつた暗黙知を、一回えぐり返すだろうって思ってるから。「他者としての旅」。そんなことを考えてます。



日の様子をメンバー同士が集って振り返る会の開催やこれまで温めていた企画をはじめたメンバーもいる。少しずつ広がっていくのはとても嬉しい。
- その一方でまだ見えてないこともある。遠足を企画した人、参加した人だけでなく、まちで偶然この遠足を見かけた人にとって、この遠足はどんな体験だったのだろうか。まちをゆく一人ひとりがあるのだろうか。その光景を経験としていったのだろうか。その点についてはスタッフの手が足りず、作業に追われていたり、アートプロジェクトという名の下に、極めて個人的なものである記憶に、どのように関わるのかという課題を前に佇み、そこまで手が回らなかった部分もある。企画する人、参加する人、その先にいる誰かにとってこのプロジェクトは一体どんなことだったのか。それを考えていくことが今後の課題なのかもしれない。



「市民企画」 まちはみんなのミュージアム かがわ工房編

同展は、二〇一八年一月一六日(火)―二〇一八年一月二二日(日)、小金井アーツスポットシャトー2Fギャラリーにて開催しました。

人が造形をしたり絵を描く、身体や言葉を使って表現する喜びや楽しさに、障害の有無はもちろん、年齢も性別も関係ないのかもしれない。このことを市民のみなさんとともに考えてみることを目的に、市内の生活介護事業所「かがわ工房」のメンバーが作成した作品を、同じまちで暮らす市民が企画展示しました。

本展示では、かがわ工房で定期的に行っているアート活動での作品の展示とともに、展示の会期の初日にかがわ工房のメンバーが描いた「まち」の絵に、来場者が自由に「私のまち」の絵を描き加えることができる「アツプデートミュージアム かがわ工房のみんなとまちをつくらう」を設置しました。また、一月二〇日には、「日々」の暮らしの中で一人ひとりにより楽しく表現することが、もっと当たり前になったらいいな!」ということテーマに、座談会を行いました。

展示を進める最中には、アール・ブリュットをめぐる昨今の動きや障害と社会の関係について、あるいは、展示という形態で人にものを伝えることの可能性と課題について、参加した市民からも戸惑いや発見の声が聞かれました。

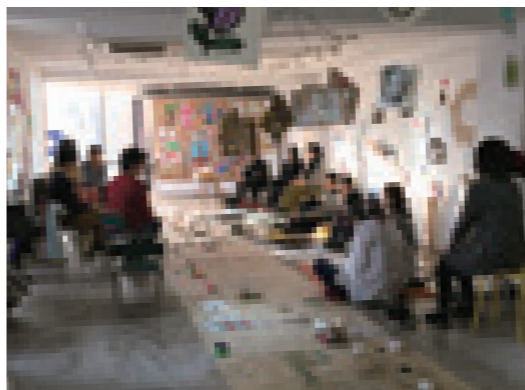
会期中にはゲストを招き、市民のみなさんに開いたトーク(ゲスト:渡邊知樹(芸術家)、進行役:正木賢一(東京学芸大学))、展示企画に参加した市民と久保田翠さん(NPO法人クリエイティブサポートレッツ)とのディスカッションの機会を設け(次項参照)、「社会的包摂」をめぐる、あるいは「当事者」をめぐる議論の場を設けました。

かがわ工房とは、小金井市の西、保健センターの裏手にある、自閉症や知的発達に障害のある方たちが健康で自立した生活ができるよう、日常生活上の支援を行い、生産活動や創作活動を提供するとともに、各家庭やグループホームと連携して生活全般について必要な援助を行っている生活介護事業所です。

開催日:二〇一八年一月一七日―一月二二日 一二:〇〇―一八:〇〇
会場:シャトー2Fギャラリー

出演者:講師・アーティスト:渡邊知樹(ゲスト、芸術家)、正木賢一(進行役、東京学芸大学)

共催:社会福祉法人雲柱社かがわ工房



「座談」展示から窓に――「かがわ工房展」から生まれるもの

久保田翠(NPO法人クリエイティブサポートレッツ)

戸館正史(松山ブンカ・ラボディレクター、愛媛大学社会共創学部助教)

伊藤安寿華(NPO法人アートフル・アクションスタッフ)

宮下美穂(NPO法人アートフル・アクションスタッフ)

障害者の居場所をつくるNPO法人レッツの活動

久保田◎現在私は静岡県浜松市で、NPO法人クリエイティブサポートレッツ(以下、レッツ)を主宰しています。レッツは、障害や国籍、性差、年齢などあらゆる「ちがいを」を超えて、人が本来もつ「生きる力」や「表現する力」と出会う場所や機会を提供することで、誰もが共生できる社会づくり、まちづくりをめざす団体です。その文化事業の大きな柱の一つとして、二〇一六年度から「表現未満」というプロジェクトを行っています。

そもそもレッツは、重度の障害のある子どもをもつ、私たち家族の居場所づくりから始まりました。健常で普通に仕事をし、暮らしていた私たちが、障害のある子どもをもつたために突然これまでのコミュニティを失い、社会から周縁化してしまふ。それを補完するために、二〇〇〇年の立ち上げ以来、主に障害をもつ人たちのための場所づくりをこたわって活動を展開してきました。閉ざされた施設ではなく、町の中で開かれたオルタナティブスペースをめざす「表現未満」もそのひとつです。

昨年は「光を観る」と題し、美術や音楽、トークイベントなど、さまざまな形で「観光」を表現するプログラムを展開しました。こうしたアート活動は、特別な人が特別なこととしてやるものだと思うけれど、私たちが「アート活動をしています」というと、「ああ、そうなんですか」とって、そこで「私には関係ないバリア」ができてしまふ。ですから最近「アート活動」とは言わないようにしています。それくらいアートは、一般の人たちにはなじみが薄いんですね。

一方で、アートはアーティストがつくるものと思われていて、特別な人が何か表現するということになってしまふ。とくにそれが障害者であれば、障害者だからこそ「アール・ブリュット(生の芸術)」であるという「読み替え」が、簡単にできてしまふわけです。けれども、表現できる人がすごいとか、その表現に価値があるとかではなくて、誰かが粛々とやっていることや、すっごくくだらなくて、誰からも取るに足らないと思われていても、その人が一生懸命やり続けていることは、すっごく価値があるんじゃないか。それをちゃんと評価したいというのが、「表現未満」なんです。

私の息子は一歳の頃から容器に石を入れて叩き続けていて、今二歳になってもやっているんですが、



それは誰からも評価されません。でも寝る時以外の時間は、ずっと叩いている。学校では問題行動として容器を取り上げられたりしたけれど、絶対に止めないで、むしろ叩き続けたいために他のことをがんばるわけです。ある時私は先生に、「この子には叩き続けることの方が大切なんですよ」と言ってみましたが、先生は最後までわかってくれなかった。そんなエピソードが「表現未満」というプログラムにつながっていました。

本人がどう思っているかはわかりませんが、彼にとって最も大切なモノややりたいコトを、取るに足らないと打ち捨てたままでもいいのか。その扱いを決めるのは先生なのか、社会的規範なのか……。ではないのなら、くると変えてぜんぶ認めたらどうだろう、と。それはきっと人権の問題にもつながるのだと思います。障害のある子たちがびよんびよん跳び続けているとか、ひたすらわーわー騒いでいるとか……。そういうことも彼らの人格の表れだし、もしかしたら文化かもしれない。そのくらい価値観を大きく広げたいと思っています。それは、豊かな社会を築くことにもなるんじゃないか、と。

誰かの「作品」を「展示」するということの意味

久保田◎わざわざ障害のある人を招いて何かをしようというプログラムは、それだけで「特別なコト」になってしまっています。そこでわざわざ絵を描くことも、「特別なコト」ですよ。最近では、文化やアートの特性を生かして、社会的な孤立や困難を抱える人に社会参加の機会を開くような取り組みを社会的包摂と呼ぶようですが、私たちの活動をそんなふうに括られると、めちゃめちゃもやもやしてしまいます(笑)。

伊藤◎今年、二〇一八年一月一六日から二一日まで、私たちNPO法人アートフル・アクションが主催して、小金井市内の生活介護事業所「かがわ工房」のメンバーが制作した作品を展示する「まちはみんなのミュージアムかがわ工房編」を開催しました。私はその企画や、会期中に工房のメンバーと市民が共同でまちの絵を描き加えていく、「かがわ工房のみんなとまちをつくろう!」というイベントを企画しました。

「かがわ工房」は自閉症や知的発達に障害のある人たちを支援する事業所です。私たちは、彼らの活動を、工房の枠の中だけではなく、もっと広く外に向けて表現できないかと考えました。

「まちをつくろう!」のイベントは、工房のメンバーと、まちで暮らす人たちが、間接的にはあるけれど、紙の上で交流できたらいかな、それがひとつの絵として出来上がったら素敵かな、と考えました。ちょうどオープニングが彼らの活動日に重なったこともあり、彼らが工房から出て、「まちの中で」制作する機会になることも意図しました。

久保田◎私はいつも、展示する意味とは何なのか、考えています。展示は、つくることの意味よりも、見せることに意味がある。とすると伊藤さんは、何を見てほしいと思われたのでしょうか？

伊藤◎私は「まちはみんなのミュージアム」というテーマの下に、保育園だったり小学校だったり、事業所だったり、一年を通していろんなところで「アートの時間」として展開しているアートフル・アクションの活動の、その「空気」を

展示したいと考えています。今回の「かがわ工房編」でも、作品を見せるというよりも、彼らの表現したい、表現するのが楽しいという「空気」が伝わるような展示ができればいいな、と。そのためには何か展示するものが必要で、結果的に作品が展示されたということだと思います。

展示した作品は、普段のアートの時間の活動ごとに出されたテーマに沿って制作したものです。一人ひとりの作品を展示するというよりも、テーマに対して全体が一つの作品であるような感じで見せたいと考えて、ああでもない、こうでもない、ぎりぎりまで試行錯誤していました。作品に付けるキャプションにもずいぶん苦心しました。

キャプションづくりでは、制作の時のやりとりとか、起こった出来事などを思い出して、彼らが楽しんでいる様子や、その場の「空気」、生きている感じが少しでも伝われば、と思っただけです。なかなかそこまで伝わりませんけれど、ね。でも少なくとも、彼らが何かしら「特別」に見えないよう、また作品も、「アール・ブリュット」として制作されたものではないことなどは、観る人にはちゃんと伝えたいと思いました。

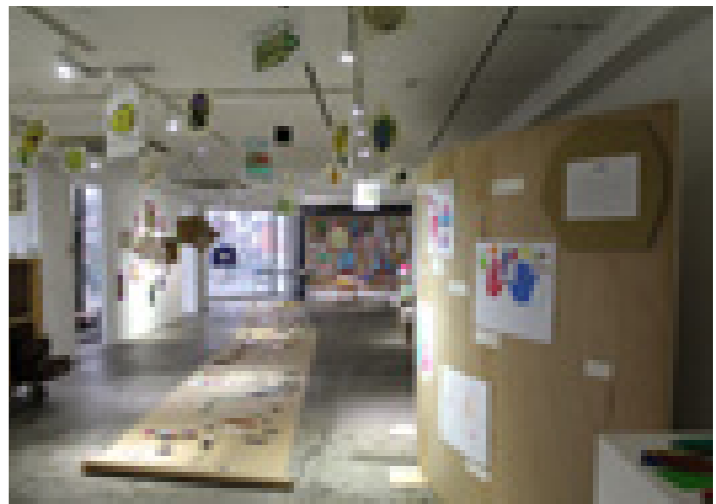
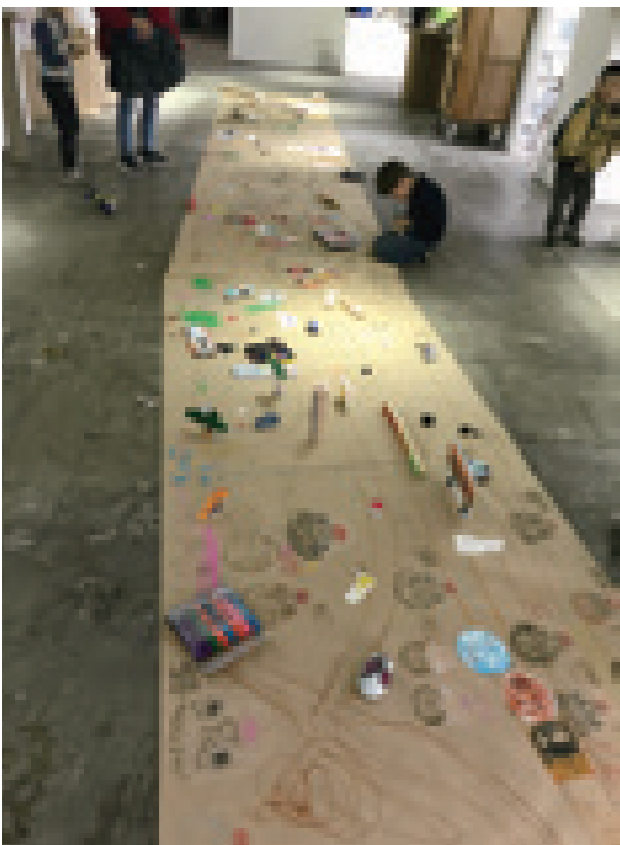
久保田◎私はそこは本当に難しいと思っただけで、「作品」や「展示」と言ってしまうと、「それは誰がつくったものか」が問題になるけれども、とくに障害者の場合はその「主体」が見えにくいんですね。障害者自身が「つくりたい」、「展示したい」と言うことはまれなケースだと思います。とすると、いったい誰が展示しようとしているのか、それをしっかりさせないと、「ああ、楽しそうだね」以上のことが伝わらないんじゃないでしょうか。まあ、それだけでも伝わればいいのかもしませんが……。

「主語」がしっかり見える展示会をめざす

久保田◎今回の展示会では、伊藤さんが「かがわ工房」を見て、「ああ、この空気、すごく良いな」って思ったわけですから、それを伊藤さん自身がしっかりと伝えてくれればいいと思う。それを「彼らのため……」なんて言ってしまったり、ぼやけてしまったり。展示したいと考えたのが工房のスタッフなら、そのスタッフが、自分がぐっときたこと、感動したことをしっかりと見せてほしい。そうじゃないと御為ごかしの、気持ちの悪いものになってしまうんです。

障害者が参加するプログラムの多くは、「一緒にやりました」、「素敵でした」で終わってしまったり。そこには、健常者が障害者に接する時に普通に感じる「とまどい」すら、まったく出てきません。けれどもたとえ展示の場合だったら、企画者が責任をもって「私はこう感じた」ということをバンバン出していた方が、むしろ障害者を理解しているんじゃないかと考えています。

レッツでは、あまり展示はしません。めちゃめちゃおもしろいモノをつくる子がいますが、それを展示しても、何を見ているのか(見



ているのか)わからないですね。その子自身にも、つくったモノを見せたいとか売りたいという意思も見られないし、何の思い入れもなく毎日二つ、三つとつくっていく。で、思い通りにならないとイライラしたり暴れ出したり、かと思うとニコニコしたり……。それに私たちがはぐつときちやう(笑)。

私は彼らのつくるモノは排泄物だと考えています。ですから、そんなものがありがたがられてもしょうがない。障害があるからといって、普通に友達を理解するのと同じで、いいことばかりではありませぬ。暴れられたり、殴られたり、それも人間だから起こること、それも含めて人と向き合うということであければ、「社会包摂」という気持ちの悪い言葉にどんどん回収されてしまう。良いことをしている気分が文化やアートをやっても、何にもならない。と、私は考えています。この、私、という主語が大切なんです。

レッツでは、二〇一二年に「佐藤は見た三」という展覧会を開催しました。二〇一〇年に開設した障害福祉サービス事業所「アルス・ノヴァ」の利用者さんの行動を、スタッフである佐藤が、そのぐつときたところをドキュメントするというもので、ですから主語は「佐藤」で、責任は私たちスタッフにあります。わりと反響が大きかったのですが、とくに知的障害をもつ人たちを対象とする場合には、そんなふうに、すごく気を遣う必要があると思います。

宮下◎私も「作品」と呼んだり「展示」をするときには、ずっと違和感もち続けてきました。かがわ工房は、同じ町と一緒に暮らしていて、私も工房に二年間通って知り合って、散歩中に会ったりすると手を振ってくれたりして、それが結構楽しかったりするんですね。そんなふうに彼らと出会うインタビューフェイスがこの町に生まれたらいいなと考えて、伊藤さんにこの企画をもちかけた経緯があります。

「障害者」の「作品」の「展示」と、いちいち括弧に括って展示するのではなくて、そんなふうに町の中で手を振り合うように出会えればいい。それが障害者であるか健常者であるかということとはあまり関係ないと考えています。一人で生きてて寂しいときに、誰かと会えたいです。それと同じかになって。そんな感じで始まったアートフル・アクションの活動ではありましたが、今、久保田さんのお話をうかがって、私たちの「伝え方」をもう一度見直してみたいと思いました。

「展示」よりも、「窓」をつくる感覚で……

久保田◎アートフル・アクションは、「シャッター」という場所をもっているのが良いですね。カフェがあって、私が行った時には、ご飯を食べている人もいれば、奥では子どもを遊ばせているお母さんがいて、親御さん同士で「なんかやろう」って、すごく楽しそうな話をしてて、おもしろい場所だと思いま

した。それも作品だと思っただけです。ここで起こることをドキュメントして展示することもアリだけど、それによって「特別感」も出てしまう。私たちがその「特別感」を警戒するけれども、「特別」な障害者だからやるといふプログラムは、世の中に多いですよ。

宮下◎「展示」という形式になると、「特別感」があたりまえになって、そこに對する慎重さがすっぱり抜け落ちてしまう危険性があると思います。今回の「みんなとまちをつくらう！」のイベントでは、白い四角い紙にまちの絵を描き始めましたが、白い四角い紙にはとても違和感を覚えました。深夜に伊藤さんに、世界に四角はないんじゃないの、とメールしたり。そこに象徴されることを丁寧に考えたいと思いました。

久保田◎ギャラリーという空間もそうですよね。展示するための空間なので、「展示しなきゃ」という気持ちになってしまふ。そういう空間と障害は本当にならなくて、考えれば考えるほど、展示ができなくなってしまう。これはちょっと「特別」だから見せたいんです、という気持ちは捨てた方がいい。そ



れよりは、障害者の方たちとずっと過ごす中で、たとえば伊藤さんが、ぐっときたところだけを写真に撮るとか、言葉にするとか……、その方がずっと伝わると思う。

宮下◎それを伝える伊藤さんの人格も、一緒にすごくりアルに出てくるとおもしろい。

久保田◎やり方っていろいろある。ギャラリーや展示にこだわると自由になれないし、むしろ福祉施設の中で展示するのもいいんじゃないかな、って思います。それにかこつけて、普段あまり入れない場所に行きに行くことができるのもいいですね。暴れたり騒いだり、ケンカしてるところも含めて見てもらえばいい。そうすると、「なんだ、普通の人と同じじゃん」って、思ってもらえそうで、その方がうれしいですね。

宮下◎今回の「かがわ工房編」は、彼らの暮らしを枠はめて箱に入れて、テーブルの上に乗せて、「エ」展示」というふうに切り出しちゃったかもしれませんね。

久保田◎でも、そうなりません。健常者としては、障害者だからちゃんと扱わなきゃとか、否定的なことが言えない気持ちもどこかにある。それが障害者を対象としたプログラムの難しい点です。ですから、むしろ自分に責任があるという形で、「ここが楽しい」、「ここがおもしろい」と、独断的に切り取る方が自由になれると思います。

戸館◎それって、つまり「窓」をつくる、ということですね。レッツの福祉施設は、中の活動や生活が外から見えるようにしたいと考えてつくられていますね。それと同じでレッツの展示は、空間をそのまま持って来て、ほんと置く。そこに「窓」をつくるというか、「窓」ごと移動してきたというか……。展示をどんなふうに設えるかを考えるより、見るための「窓」をつくることを考えればいい。

その点アートフル・アクションの「かがわ工房編」はオー

ソドックスを展示だし、色々な制約もあって、工房の生活が今ひとつ見えてこなくて、「窓」にはなっていない。方法がトライアル・アンド・エラーを重ねて探っていくしかありませんが、向き合い方のマインドは、レッツに学ぶことも大きいと思います。

日常と地続きの文化・アートをめざして

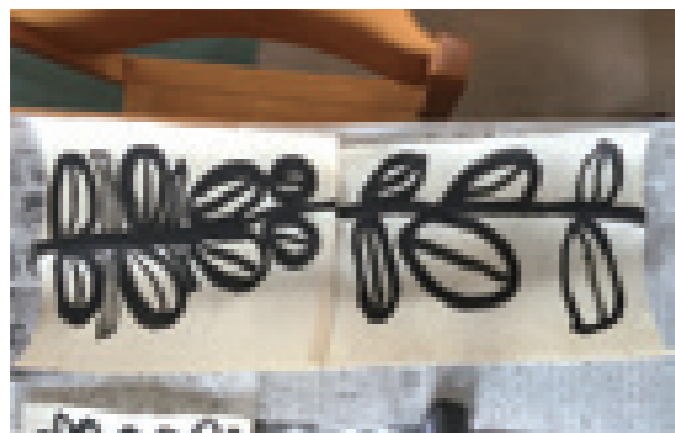
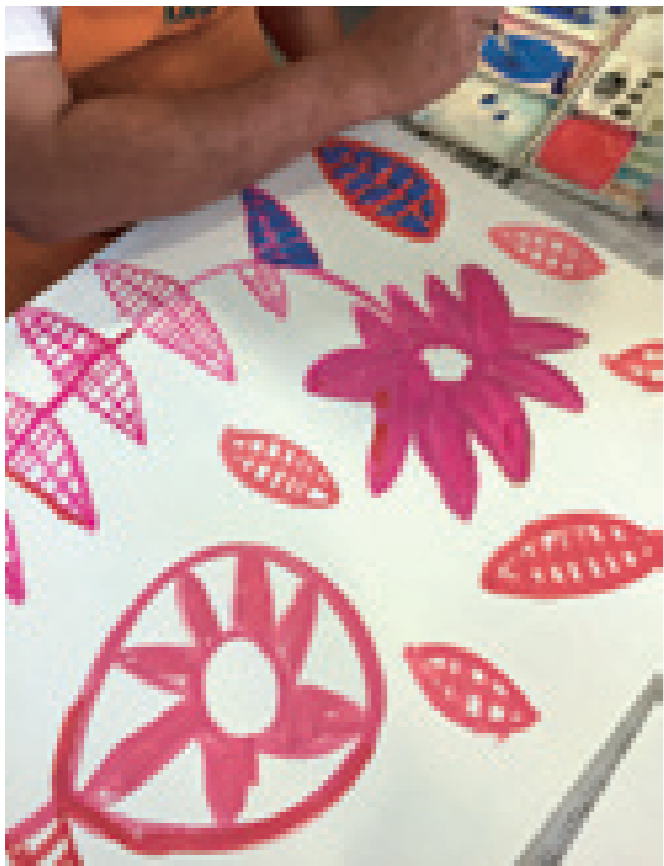
伊藤◎余談ですが、私たちが三年間担当してきた「かがわ工房」の「アート」の時間、で描いた大きな絵を、年に一度のバザーの時、休憩室に貼り出してくれました。アートの時間として、切り取られたままにしておくのではなく、こんなふうに日常と地続きの場所に使われるのは素敵ですね。今回は展示として彼らの日常を「切り取って」しまいましたが、彼らの日常の一部として地続きになるような形をめざせばよかったかな、と思います。

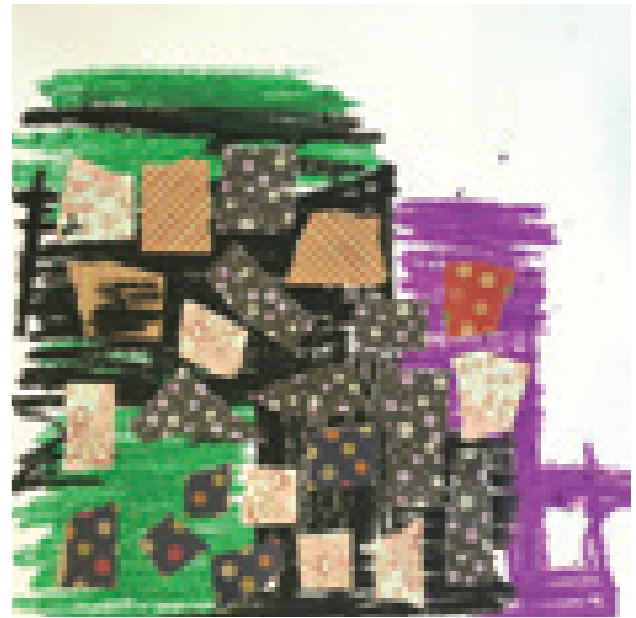
戸館◎「切り取る」ことに価値判断と選択が含まれるので、「かがわ工房編」では、その作爲性と無作爲性の間の伊藤さんのゆらぎが垣間見ええました。工房のメンバーだけではなく市民の方たちも含めて、関わった人たちのみんなのメンタリティが、もっと一緒にって見えてくるいいと思います。

宮下◎「特別」な工房のメンバーたち、じゃなくて、みんなと一緒にやっている生々しさが、もっと漏れ出してきてもいいですね。でも、工房のスタッフにとっては「特別」な利用者さんが、外に向けて「特別」なことをする、という感覚でスタートしたプロジェクトでしたから、彼らにとってはその感覚を見直す大きな経験になったと思います。

久保田◎それは大切なことですよ。展示がうまくいくことより、そこに参加した工房のスタッフがアートと出会って、考え方や見方が変わったり、「こんなこともやってみよう」と思えることはとても大きな成果だと思います。

戸館◎伊藤さんの言うよう





に、アートの時間が、特別な時間じゃなくて、普段の日常や作業の時間と地続きなんだと、スタッフがそういうマインドになるといいですね。

宮下◎少なくとも絵を描かせる、工作をさせるというマインドではなくすれば、アートの時間だけじゃなく、普段の日常や作業のあり方ももっとおもしろい方へ変わっていくでしょうね。

久保田◎今の文化やアートは、特別な人たちの特別活動になってしまっていて、日常や作業にも文化やアートがあることを考えたこともない人が多い。「私には関係ない」って。だからびっくりされようが嫌がられようが、文化やアートがそういう人たちのテリトリーにもどんどん入って行くべきだと思います。アートにはあたりまえに多様性がありますから、アートの触れることでスタッフのマインドが変われば、障害者ももっと自由になれると思います。

伊藤◎もうひとつ、今回の「かがわ工房編」を実現して良かったのは、工房のメンバーみんなに、初日の会場に来てもら



えたことでした。みんな食い入るように作品の一つひとつを見て、手を当ててみたり、つくった時の話をしたり……、みんなとでもうれしそうだったのが印象的でした。その喜びを共有できたのは、私にもうれしいことでした。

久保田◎それはね、ギャラリーに行ったり、映画に行ったり、どこかへ遊びに行ったりと、普通の人ならあたりまえのことでも、障害者にはなかなかできないことが多いです。つまり、そんなこともできないくらい、社会的に閉じこめられている現実もあるんです。今回の展示が、彼らの足をギャラリーに運ばせるきっかけになったということは良かったと思います。むしろ絵を描いたり展示しなくても、一緒に電車に乗って遊びに出かけるだけでもいいかもしれません。

工房のスタッフだって、いつもすごく緊張してメンバーたちと接しているはずですよ。ですから「かがわ工房編」ではスタッフも解放され、メンバーと一緒に楽しむことができた、貴重な機会だったに違いありません。アートがそういう体験を提供できたのは、素晴らしいと思います。今後、工房のスタッフがアートフル・アクションに遊びに来るとか、そのついでに絵でも描いて帰るようなことが起こったら、大成功だと思います。(丁)



「インタビュー」大川直志「ヒエラルキーはなくて、可能性があった

——大川さんは、大学二年生の時から三年ちかく、小金井アートフル・アクション！の事業の立ち上げ時に関わってこられました。インターンでしたが、いくつかの活動ではメインの役割を果たしてくださった。特にアーティスト招聘事業には三つのプログラムすべてに関わって、アーティストがまちにやって来る、ということをお考えですか。今、劇場、いわば箱で働いていらっしゃることも比べていかがですか？

今、僕は劇場に勤めています。当時は今とは真逆ですね。

僕は、ほうほう堂とか浅井さんが初めて直接接するアーティストだったので、アーティストって面白い感じなのかと思っていました。劇場で働いてみると、やっぱりアーティストってそういう人たちが好きじゃないですね。自分の作品を自分のコントロールのできる場所でやるっていう人たちがわりと多いですね。どちらが悪いとか良いとかではないですけど、小金井に来てくれて外に出て行って訳のわからないことをやっていく方が少ないと市民の人たちとの接点は多い。いろんな人を巻き込めるといいうのは浅井さんとかほうほう堂のやり方だし、そちらの方が作品の広がりみたいなものはある気がします。地域でやるとか市民の方に向けてやるということなら、そういうやり方が最適だと思います。

同時に不確定要素もあるので、だから、やる方は劇場の中でやった方がやりやすいですけどね（笑）。

僕は小金井に来たのはあの時が初めてでした。地域のことを知らないし活動に還元できないので、いろいろなことを見たり、いろいろな話を聞くということがすごく大変でした。「小金井の110人」のプロジェクトもありました。市内の110人の方にお話を聞くものです。10人くらいで止まってしまいました。でも、このプログラムで話を聞きに行くとかゲストで来てもらった人が、アーティスト招聘事業の方で関わってくれるということもあったので、あの企画自体が他のプロジェクトに反映できたりということもありました。エンディング、前掛け屋さんとか、和

菓子屋の三陽さんとか。

——三陽さんは、「小金井と私 秘かな表現」でも、参加してくださいました。そういう意味では、時間を経てもつながっているという、面的な広がりに対して時間的な積み重ねもありますね。

アーティスト招聘事業が二本走っている他にも複数のプロジェクトが動いていて、その相乗効果がありましたね。初年度は助成金が取れたけれど次の年は予算がなかった。それでもあんまりへこんだ感じがしなかった。二年目にシャトー2F、スペースができた。

シャトー2Fができて、別にイベントや企画をやらないういけなくなりました。場所があるとアーティストの出入りが生まれるので、そこでまたいろいろ企画やイベントができました。場所があることとか、浅井さんみたいに一回について長く滞在することとか、月一のほうほう堂とか。IMMの岩井先生も月一とか定期的にやっていましたね。そういう意味で違う指向性をもったアーティストが月一だとかそういうスパンで活動して、そのベースとなる場所があったり、人の出入りがあるっていうことは、ストラクチャーとしてはいい感じがしますよ。いろいろなレイヤーがありました。

何かいろいろなものも動いていた。カフェもそうだし、子どもいっぱい来たりして、その横をアーティストが行き来したりして。誰も全体像がつかめていないけれど、いろんな動きはしているんだなっていうのは見える場所でした。

——組織としてはすごくおもしろい、ことだと思えます。ヒエラルキーもなくて。みな、とても若かったし、仕事も今ほどできるわけではなかった。だから、誰かが何かをやるうとしたときに、トップダウンで何かをしようと思ってもあまり機能しないけど、細胞がちくちく自分で動いて勝手にできていくみたいな状況で、アクティビティが高いとかか活況だったっていうのはあるでしょうね。Organicの小川さんも関わっていて、李青さんを、李青さんは大川さんのことすごく大事にしているなという感じはしたんです。そういう信頼関係みたいなものは生まれて、そういうことが水平関係が成り立っていく基本としてはあるのかもしれない。



れない。

いろんな人が関わっていたので、僕や他の方々も学生の方が多かったですが、平林さんとか周りの大人のの方は指導するっていう感じじゃなくて一緒に考えてくださるというか一緒にあれきこうした方がいいんじゃないかとか、じゃあこれならできるよとか、見守ってくださいなタイプの方が多かった。直接かかわるといいうことはあまりなかったのですが、そういう人たちが周りにいらっしやったということとほけつこう大きかったと思います。安心感があつた気がします。

——誰も見ていないようで、誰がいてもいい感じという感じというのはいくつ感じだよね。やっぱり、強いリーダーがいなくていいことは大事なことですね。他に何かあります。強いリーダーがいなくていいこと、ほかにヒント、なぜそれが成り立っていたのかっていう。

インターンでいちばん初め入らせていただいて、アートフルジャックというイベントがあった。村上裕さんもいたし、ほうほう堂のNTTの屋上での公演もありましたし、神村恵さんもいて、あと岩井優さんも。あのとき参加して、もつともつとやってみたいなとか、アーティストの人たちとおもしろいことしたいなと思ったのが始めたかったのだ。

——私、覚えているのは、最初の頃にさまざまな市民団体とアーティストと学芸大の先生方と展示したことがあった。大川さんがみんなが帰っちゃっても最後までやってくれたのを覚えています。

それは、インターンとして入りたての頃ですね。僕はネットTAM何かをみてきました。大学は一年生

の時点でほとんど行っていないなかつたので、あのときもう一年は決まっていたんです。一年のときは学校に馴染めなかつたんですね。和歌山の田舎から出てきて、そんなにやりたいことも具体的にはなかつたので。親に単位が足りていないというのがバレて大学じゃなくて大学の外に出ていろいろやった方がいいんじゃないかってことを言われ。もともとアートマネジメントに興味があつたので、何かないかなって調べたのがきっかけでしたね。もちろん佐藤李青さんとか鈴木雅子さんとかいらっしやってほうほう堂だけじゃなくて周りのスタッフの方も熱意をもって取り組まれているので、一緒におもしろいことができないかなと思つたのが本当に大きかったですね。交通費も、初年度は気ついたら精算が終わっていたような。でも、そんなことも考えず、とりあえず何かおもしろそうに思つて来ていましたね。

今、思うと、いろいろ事務的なこととか広報活動とか、まずはプロジェクトをやっていくことが優先されちゃうので、もつといろんな人にこういふことやっているんだよっていうことを伝えることがもつとできたらよかつたなと思います。ほうほう堂は、次の年のあいちトリエンナーレで同じような形でやつたんですね。それ自体は評価されたっていうことだったのでよかつたんですが、視聴者数とか集まった人の数とか桁違いだったので、小金井でももつといろんな人に見てもらえるようにできたらいいかなと今から思えば、そう思います。

ほうほう堂の小金井の窓の最終日に、自転車でも市民の人が追いかけてきてくれて、みたかつたんだ、と言つてくれたことがとても印象に残っています。



*おおかわ・ただし——事業の発足当時にインターンとして参加し、アーティスト招聘事業すべてをスタッフとしてサポートしました。目標もスケジュールも、ひいては誰が参加者かも曖昧ななか、一つひとつ丁寧なことにあたり、アーティストの意見を聞き市民の人に働きかけをし、道を探していた姿がとても印象に残っています。（宮下）



iii

コを育む人、
場が生まれて
コが生まれる、こと



「インタビュー」 鉄矢悦朗 ―揺れながら、つづけていく

●「入りにくい」は「入りたい」の裏返し

私が結構どっぷり関わった小金井市の市制施行五五周年を記念して行われた「(未来の小金井へ!) コガネイの地上絵制作プロジェクト」は、二〇一三年八月から一四年三月にかけてでした。アーティストの浅井裕介さんの地上絵づくりに、意欲のある人たちが集まって、素敵なパワーが生まれて本当に良かった、よい経験をさせていただきました。そしてそのパワーが、いまだアートフル・アクションを通じて小金井のまちに存在しているような気がしています。プロジェクトではみんなが浅井裕介という遊牧民の「まち」のような場に集まって、アーティストと一緒に制作して、刺激を受け、普段の自分の置かれている居心地との差を感じるような経験をした人は、浅井さんとは違った「まち」でもチャレンジできると思っていますよ。そして、そのような人や活動がうまく、小金井という「まち」に返ってくるという。

こうした集まりや活動は人と人との関係で成り立っていますから、回を重ねるごとにコミュニケーションが濃密になってきて、密になればなるほど、特別な言葉や共通理解などが生まれ、ちよつと違ったコミュニティがある意味出来るようになります。そのコミュニティに後から新しい人が入るとき、「入りづらい」と感じるということは、当たり前のことだと思えます。そもそもそのコミュニティに入りたくもない人は、「入りづらい」とは感じませんよね。つまり「入りづらい」と感じる裏には「入りたい」という気持ちがあるから存在するからだと思います。アートフル・アクションに寄せられるコメントに、「あんたたち、入りづらいよ」というメッセージが増えているということは、それだけこの集まりや活動が存在感を増し、興味をもつ人も増えてきたということなんじゃないですか。

アートフル・アクションはこの一〇年間で、そういうある個性をもったコミュニティとなってきたわけですね。そうした個性やコミュニティ観を外部に持たれていることを認識して、じゃあ次は何をするのか、を考えるととつとおもしろがられる活動につながりそうですね。

●塗ったバターのようにしみ込んでゆく文化

その個性ってことで一つ言いたいのは、アートフル・アクションはコミュニティをつくってきたわけですね。そうした個性やコミュニティ観を外部に持たれていることを認識して、じゃあ次は何をするのか、を考えるととつとおもしろがられる活動につながりそうですね。

ただだけではなく、一方で、学芸大学の学生や、地域の学校と子どもたちを巻き込んで交流する「ガッコラボ」[※]のような活動も展開してきたということです。「ガッコラボ」は、アートフル・アクションの活動の中から生まれただけでも、スピンアウトして自由な活動を展開している。そういう活動もアートフル・アクションの活動の一環として、積極的に認識していく必要があると思えます。そこで生まれている別のコミュニティは、将来的に芸術文化に関わる人を増やしていくのだと思えます。彼らは「いざ、鎌倉」のとき、小金井で何かムーブメントが起これば、「いざ」と集まって来てくれる。そういうネットワークができていくように思います。

まちづくり活動を全国で見聞していると、同じ人が地域のコミュニティにいくつか参加している、別の集まりなのにも同じ顔ぶれだなんてことをよく聞きます。でも「ガッコラボ」のように、大学生と連携して出前授業に出かけて行ったりすれば、「内向的」なコミュニティの殻は常に更新され、そのコミュニティを構成する人の層を厚くすることが出来る。アートフル・アクションが直接の主宰者でなくても、連携しているのだから、「実はこれもアートフル・アクションの一環ですとか、派生した活動です」と言っちゃっていいんじゃないか、と……。

このような活動の展開を最近「スプレッド方式」と名付けたんです。まるで、トースト(まち)にバターを塗って浸み込ませていくような感じです。これは、みんながそれぞれに自主性や主体性をもって活動することに信頼をもたないといけないことです。プロジェクトを重ねていくことで、そうした関係性が少しずつ浸み込んでいく。「砂に水をまく」というようなことも言われますが、文化って簡単にできるわけがないんですよ。そもそも「文化をつくる」なんて言葉がおかしいのではないのでしょうか。文化づくりを目的に活動をするなんて、笑えます。ある活動を懸命にやっつて、幾重にも工夫や痕跡を積み重ねたあと、振り返って見たときに、初めて「あ、これ文化かも」と感じるものではないかと思えます。だからアートフル・アクションの活動も続けること、積み重ねることが大切なんだと思います。もちろん参加者の中には、活動してみても肌に合わないという人もいます。その人は、どこか他のコミュニティに参加すればいい。でも、たとえ肌が合わなくても、アートフル・アクションの考え方や活動に触れたことのある人となんか違うところがある、やっぱり芸術や文化への考え方が、どこか違ってるとも思います。「影響を及ぼす」ってそういうことですよ。教育の成果は「影」と「響」に現れる。流行っているのかもしれませんが、簡単に「成果をエビデンスで」って言いますが、表すことは難しいですね……。

とはいえ、アートフル・アクション自身も小金井という場所の影響を強く受けている。育てられているとも言えるかも。この事務局のある同じビルには小金井市の観光協会などもあって、そういう機関と連携できたこともよい影響なんじゃないかな。場所の力というのもあるんですね。そんなふうには本当にいろんな要素が――それこそ把握できないようなものまで含めて――たくさん積み重ねてきた文化の個性でもあるし、わくわく感を持ち合わせていると思えます。

*てつや・えつろう――大学卒業後建築事務所勤務を経て一九九四年から鉄矢悦朗建築事務所を主宰、二〇〇二年東京学芸大学着任で前出事務所休職、現在に至る。モノづくり、コトづくり、バづくりをキーワードに、建築・空間デザイン/デザイン教育の研究と実践を行っている。産学連携や異分野連携、市民協働などつなかりを活かした実践的研究や、ワークショップ手法を使つての子ども理解やデザイン感覚の育成に奮闘している。NPO東京学芸大こども未来研究所理事。一級建築士。



須藤みどり



加した最初のきっかけはFacebookでした。私が「

「〇」の創業スクールに通い始めた時、そこでは「Facebook」に入る必要がありました。ここでの話題で、自分のやりたいことにつなげるというテーマのとき、考えて出したのが、子どもに好きなように絵を描かせるみたいなもの。ただ仕事にどうつながるかまでは考えつかず、やってみなければ、うーんという感じ。その時、自分の

仕事とは別にやったらいいかなと思ひ、何かきっかけになることを探していたとき、「小金井と私 秘かな表現」が目にとまりました。もともとアートやグラフィックなどに興味があり、そういう関連を見ていた時でした。「秘かな表現」というタイトルもなんとなく気になったんです。

一年目の印象は、津村禮次郎先生のお人柄が魅力的だったということもあり、ワークショップ自体はすごくおもしろかったのですが、ここから「秘かな表現」にどうつながるの? と興味を持つたんです。その後、癖のワークショップになったとき、「あ、そういうところに行くんだ。ふーん」と感じた。その後のスケッチでは外の人を観察したりとか、初対面ではあまり話さないような、自分の癖についてをお互いさらけ出すようなワークショップはすごくおもしろかった。

二〇一七年になって「想起のボタン」で小金井の街で何かすることに、実際に関わってみた感想は、期限があったので形にしなればというのと、自分でやらないと何もしないというのと、そしてこのことで街との関わり方が少し変わるかもしれないなと思いました。ただ私は誰かと一気に親しくなっていく感じでもないの、一回踏み出したけど揺り戻しもあり、参加したりしなかったり、その繰り返しだった。でもそれを他の参加者やアサダワタルさんがいい距離で放つておいてくれたのがすごく心地よかったです。

やってみてやっぱり小金井自体の見え方が変わった。それまでははけの方へも全然行かなかったの、おもしろかったな。

●「アートって何?」「文化って何?」を問いつける

アートフル・アクションでは、一貫して日常の中にアートや表現を持ち込もうというプロジェクトを進めてきたわけですが、そのときにどんなアートを、あるいはどんなアーティストを、どんなふうに紹介するかは、なかなか難しいですね。先日、大学のセミナーで十文字学園女子大学名誉教授の平田智久先生が「人間が生きていることのすべてが、造形である」って言ったことを思い出しました。

心が豊かになると心地よくなるとか、どちらかというところとアートのヒーリング効果ばかりが受け入れられやすい傾向がありますが、アートには、心をガサつかせる、という力もある。生きている感情すべてに、関われるものだと思います。日本の現代アートの多くは、意表を突いて観衆をびっくりさせたり、不思議な作品で「へえ〜!」と言わせたりするものが目立っている。まあそれも悪くはないんですが、アートの持つ力は、それだけではないですよ。たとえばロビンギャに対する迫害など、今世界的な問題になっていることを問うこともアートになりうると思っています。そのためには、その問題にどれだけリアリティーを持つことができるか、根源的なところまで寄っていきけるかも課題ですが。アートフル・アクションでは日常生活の中で「えっ?」と心がガサガサするような問題や、「なんで?」という問いに向き合う展覧会や語る場を作っていますよね。何とかしたいと思うけれども、でも何もできないと思うのではなく、それをみんな考えてみようっていうような行動にまでつなげている。こういうこともアートだと言っていると思います。

これは、現在の公共文化振興計画の枠組みではなかなか理解されないかもしれませんが、たとえば美術系の大学で「アートって何?」とまじめに考えてきたような人とか、ガッコラボやアートフル・アクションに参加した人などには、そうした考え方は少しずつ浸透しているのではないかと思います。一方で主義主張に近づくと、アートに政治色を付けるようなイメージを見て、敬遠する人がいるのも事実です。(政治と私たちの暮らしとが分離しているような教育が問題なのかもしれません)ですから、アートの「窓口」を変えていくことは重要だと思います。アートって、絵を描いたり、色を塗ったりすることだけじゃないんだよ、と……。そのうえで、描く方法や意味をあれこれ模索しながら懸命に絵を描いてみたり、新聞の切り抜きや廃棄物を集めて作品をつくりたり、それを今までのアートという常識を疑ってみるといったような体験を積み重ねていくことで、「アートって何?」「芸術文化って何?」と、考え続けていくしかない。

ただ、行政的には予算を分けて、それぞれの名目なるべく公平に充てたいと考えるでしょうから、「すべてがアートです」といわれると困ってしまう(笑)。ましてや政治批判のようなアートに公的予算は充てられないでしょうし。そうすると、一般的な解釈による「いわゆるアート」の名目に対して予算が充てられることになって、そこにアートフル・アクションさんもジレンマが生じているんじゃないかな。アーティスト自身も実は同じような問題を抱えていて、浅井裕介と

最近の学生も求めるのですが、一定の集まりでの活動は、ゴールを目指して一直線っていう道筋、それでは大切なものが生まれな思っています。あまり性急に結論を求めるのではなくて、たとえば一〇回の活動があった時に、話がうまく進まなかったり、気に入らないことがあるのは当たり前、一〇回の一回でも二回でもおもしろいと感じられたなら、やったね!って進み続けてみてほしいですね。誰かのぼつと出た発言から、思わぬおもしろい話や大きな話が展開することも。そういういい経験を、みなさんにはぜひ積み重ねてほしいと思います。

●曲がりくねりながら、みんなを巻き込んでいきたいー入り口はどこでもいい

このカフェ(シャトー2F)は、まちの中のリビングルームのようにつくられています。しかし、だからといって知らない人同士が話すきっかけはなかなかつかめません。ある程度顔見知りとなれば、話すことができます。さらに遊びでもイベントづくりでも、同じテーマに向かって動き始めれば、そこにもっと濃密な会話が生まれるでしょう。そのような会話の中からもいろいろな化学反応が生まれ、アクションにつながるような形で、まちが持っていることが大切です。そしてその中身は完成形ではなく、常に建設中であつた方がいい。建設中だからこそ、気付いた人が指摘できるし、それを受けて一緒に考えて前に動かそうと思ったり、改善しようとする人も出てくる。まちづくりのムーブメントには、完成形というものはないはずなんです。

常にじたばたじたばたやって、うねっていることが大切で、そのうねっている時にほとぼるいろんなものが、まちな体を大きく揺らすこともあるし、また小さく揺り返すこともある。いずれにしても揺れ続けた痕跡が、後で見ると文化だと感じられればいいんじゃないでしょうか。この揺れ方は理解できないからダメだとして押しつけてしまうと、揺れが小さくなって、なくなってしまふ。せつかくみんなを動かした始めた揺れなので、それが止まらないようにみんなをサポートしていければ素敵な小金井のさらに先に行けると思っています。

先ほど「スプレッド方式」と言ったのは、表面に乗っただけだとすぐ払われてしまうから、ちゃんと浸み込ませてどんだんいい味にして、揺すったり、表面を拭いたくらいじゃあ取れないくらいになってほしいということなんです。まちづくりをはじめとするいろんなプロジェクトの進め方を、こ最近、「プラススパイラルをつくる」という視点から考えています。つまり、まっすぐ上に上がろうと思わなくてもいい、回りまわって元の位置に戻りそうでもいいから、ちよつと上に上がる方向に進み続けること、そしてみんなを巻き込んでいく、そういうふうに考えたかどうか、と……。「やったらええんちゃう(徳島県神山町にあるNPOグリーンバレーが使う魔法の言葉)」という姿勢が大切だと思いますね。それがずっと続くとい。それが、次のチャンスと出会う最良の方法だと考えています。

やっつけていくうちに、自分でもうちよつと動けばいいんだなという感覚は生まれました。それを菜々子にも見てもらえるのもいいなと思います。

今年の「想起の遠足」になった時、前は年がギャラリーや駅で展示物があつてそれなりになつたけれど、今回はまったく実態がなく、本当に実現できるの? とすごく不安に思っていた。結果、すごく濃密な時間でおもしろかつたんですけどね。ただ、せつかく参加者のみんなで時間を積み重ねてきたのに、他の人たちのところに行けないのはちよつと残念だったかな。でもあれは本当にすごい一日でしたよね。

三年間やってきて何がよかったかというか、自分の中で変化したことは、学校でのワークショップなどに声をかけてもらったこと。だんだんとシャトーが身近になってきました。こういう場所もあるんだなと思つて、すごく気持ち的に楽になった。どこへ行つてもいつも隅っこでふーんと聞いているタイプなのですが、そうしていてもまったく大丈夫なところがいい。

あと去年は子どもたちにとつても学童が終つた初めての夏で、参加できる場所を探していました。だから子どもたちの居場所としてもちよつと活用させてもらったのがよかった。菜々子に親ではない外の大人と関わりたいなとずつと思つていたの、それができたというのがすごくよかつたかなと思います。

ただ、「遠足」が終つたあととそれきりなので、全体で振り返り的なことはやるべきじゃないかなと思つました。

今後やりたいなと思つたことは、宮下さん

から前に声をかけてもらった小学校のワークショップをまたお手伝いしてみたい。子どもが来て何かを作ったりするのが気軽にできるような場所を作れたらいいなと思つているので。ちよつとずついろいろと動いてみて、何かに関わられたらと思います。

*すとう・みどりー「小金井と私 秘かな表現」に出会つたのは、たまたまpachodaで見かけて。家族で何かワークショップが受けられれば、と私の独断で(笑)申し込みました。始まつてから早三年……。子ども私も、家族以外、学校以外の色々な人と関わる機会が少しずつ増えました。

【※1】NPO…東小金井事業総合センター。シェアオフィス、コワーキングスペースとして、一日から利用可能な公共施設。起業家、個人事業主、NPO、コミュニティビジネスの創業を支援している。

【※2】ガッコラボ…アートフル・アクションの学校連携事業として始まつた。近隣小学校で実施される図工の授業などにゲストティーチャーとして造形遊びの指導を行っている。

「インタビュー」小川希「わがままであることを厭わずに

*おがわ・のぞむ——Art Center Ongoing 代表。一九七六年東京生まれ。二〇〇一年武蔵野美術大学卒。二〇〇四年東京大学大学院学際情報学府修士課程修了。二〇〇二年から二〇〇六年に亘り、大規模な公募展覧会「ongoing」を、年一回のペースで企画、開催。その独自の公募展システムにより形成したアーティストネットワークを基盤に、二〇〇八年に吉祥寺に芸術複合施設 Art Center Ongoing を設立。現在、同施設代表。また、JR 中央線高円寺駅〜国分寺駅区間をメインとしたアートプロジェクト「PERATORERA (テラトテラ)」のチーフディレクターも務める。

●アートフル・アクションに関わったきっかけ

小金井アートフル・アクション！事業が始まってすぐ、行政、大学、市民の三者で委員会として運営した頃に関わりが始まりました。東京大学教授の小林真理先生に声をかけられたと記憶しています。当時はスペースもないし、委員の人たちも地元 NPO の人もいれば、大学の先生もいて、誰がやるという方針もなくて、責任の所在がとてあやふやでした。小林先生の学生さんもいて、とりあえず場を持たないと何に對しても責任感もなくなったらだとやるだけで、助成金だけ使って終わりになるから、場所を確保したらよいのではないかと話していました。シャトーが使えることになった後、色々できる場所にしたらいいとなって、アーティストに頼んで壁を建てたり、床を剥がしたり壁を白く塗ったりといった改装をやったんだよね、みんなで。

●どうしているようで「閉じている」コミュニティ

市民ベースのアートのプロジェクトは日本中でたくさんやっていますよね。表面的にはさも市民が参加してアートの力というストーリーで、報告書って作りやすいんだけど、実際はすごく限られた人しか参加してないものも多いのではないかと思います。実情はともあれ、感じのよいように報告書とかビジュアルは作れるけど、実際は、街の人みんなが関わっていい、村の人が大切にしたりなんてのは、なかなか難しいのじゃないかな。助成金などのお金に對しては、みんなが参加してアートの力で活性化してみたいなパンフレットは作りやすいけど、どれもこれもうさんくさいものが多いと感じたりもする。一部のコミュニティが楽しんでるんだから、それでもいいのかもしれないけど、それで地域活性しているんじゃないのは、どうなんだろうと思う。

コミュニティの概念は、小さきまあるのだろうけど、さもアートは全体を網羅しているように見えやすいっていうのがあるよね。公的な事業を進めてる様子を見ると、プロジェクトをやっていく中で開いているようで内実は仲いい人たちのコミュニティができあがっている、内向性みたいなものが結構あるんじゃないかって思います。

コミュニティベースとうたっているところがちと違うか、そこに自分の居場所があるんだって思う人たちって、依存したり、固執したり、私たちの空間ですってなってるから、それはうたわえない方がいい、むしろいろんな人たちが出入りしていいと思う。NPO としてのアートフル・アクションはその悪い方の典型的な感じかなと僕には思えてしまうこともある。

だから、一生懸命やっていけばいくほど、内側を向いてしまうことに対して、常にどこかで批評的というか相対的な視

点みたいなのを強く持ちつづけていくことは大切だと思う。コミュニティとか市民ってうさんくさいというか、あやふやな言葉だからね。

●アートフル・アクションの「色」をつくっていく

でも人それぞれやり方があって、アートフル・アクションがこれまでやってきたような子どもたちと一緒に何かを作り上げていくのはすごくよいなと思うけどね。実際にその子どもたちの記憶に残っていくしね。なんていうか「すごくよかった」じゃないことも記憶に残っていくとか、そういうのがいいと思うけどね。「なんかわかんないし、全然つまんなかった」とか。

市民っていう言葉を使うと、色がなくなっていく。もっと色を持ったらいいと思うけどね。例えばアートフル・アクションは子どもを中心にやっていくというのを明言するとか。Ongoing はわけわかんないアーティストが集まってくる場所っていう色があるけど、そういう感覚で、アートフル・アクション特有の色をもっと強くだして、わがままになっがいいと思う。建築ベースとか、都市計画ベースとか、フェミニズムとか、あの場所に参加している人のバックボーンにフォーカスして、特定の領域に強いアートセンターとかアートスペースとか、やりたいことがもっと見えたほうが断然いい。そしたらそういう問題を考えたいって人たちがわざわざ行くと思うし、とりたてて市民（だけ）が行く場所じゃなく、あそこはあれに特化した場所なんだみたいだね。妙にみんなの意見を聞いてすすめてると、あんまりまくいかなくなるのじゃないかな。三人なら三人のわがままが同時並行で走ったらよりおもしろい場所になると思いますよ。

そういう意味でもっと（方向性を）明確に出してやっていいと思う。行政じゃないからね。行政だとだめだろうけど、行政の金だけでやってるわけじゃないでしょう。二枚舌というか、助成金もらってるんだったら、そういう顔はしつつ内実違うというのはいけるんじゃないかな。

●嘘のない場をつくる

日本におけるアートを好きな人たちは超マイノリティだからね。そういう中で、自分はずいマイノリティで、（そこから生まれるものは）ある一部の人しか取り扱えないっていうのを自覚しながらやっていけばいいけど、そうじゃなくて、私たちは開いていますと言いつづけて、さもよい事やってみたいな感じだと誰のためにもよくない。そもそもマイノリティであって、そもそも大した力もないけど、それでもアートのできることはなんだろう、ということを自問しながら、それをやり続けるとかだったら健康的だと思っけど。よい事をやっている私たち感というのはやはりすごく気持ち悪い。

今、僕がやっている Ongoing はよい事やっているつもりはまったくないし、社会不適合なアーティストたちが、ここにあることで続けられることっていうのはたくさんあると思う。実際アーティストの社会の中の存在価値は、コミュニティベースの作家でない限り、自分の興味を追求していく人たちがばかりだからあってないようなもの。ただ、そういう人たちが他にもいて、作品のクオリティとは何かみたいなことを自分だけじゃなく他の作家のつくるものを見て、もっと上があるとか、こいつおもしろいな、という感じを文化として、一人ひとりの作品のクオリティを上げていく場所という

のだけでも十分意味はあると思う。Ongoingのコミュニティというのは、地域住民（や市民）じゃないんだよね。東京で作品を作っている作家たちがここに集うというコミュニティだから、そこにはあんまり嘘が無い。誰かのためとか、地域のために作品を作ってるわけじゃないし、制作をしているわけではない。自分のために作品を作って、一人だと続けられなくなるから、同じ時代に東京というすごく生きづらい場所で、それでも自分の作品を追求している作家が、作品や自分が生きている社会について話したり、そういう意味ではその作家のコミュニティみたいなものを支えている場所だと思

う。だからみんな嘘がないし、恰好つける必要はない。そういう意味でここが作家と社会とのつなごりのハブみたいになってる。外の展覧会に紹介することもできるし、いろんな人がここに見に来たりするから。僕もなんの嘘もつくつもりないし、地域のためにこの場所をやっているつもりないし、周りの人たちが来るか来ないかはその人たち次第で、その人たちベースのプロジェクトもやるつもりはない。ある意味普通ですよ、普通にやってる。作家やアートを見たい人がくるという場所。いろんな場所からね。それこそ海外からも来るし、誰が来てもいい。

TERATOMERA^{〔※3〕}はたくさんのボランティアといろんな人が関わりながら、問題提起というか、みんなが目を見せたいものをむしる見ないといけなくさせるプロジェクトをめざしてやっています。いわゆるハッピーに、みんなが幸せになるアートとかは、他でやってくれて感じてだから、劇薬としてのアートの持っている力、今まで考えなくてよかったのに、考えなきゃいけなくなっちゃったりアートをやっています。優しいモノだけがアートじゃないから。

●これから考えていきたいこと

自分が今やっていることが完成されたと思っていないし、ひたすらこういう場をやり続けていくだろうなと思うけど、ただ最近では自分のやり方とか考え方を他の人とシェアしていきたいと思ってる。なんか寿命縮めて、むちゃくちゃ感でやり続けているから、僕がいなくなったらすべてどういのが終わるのかもしれないなって思うようにはなってききました。次の世代の人たちが、助成金をつかった公共的なアートとかコミュニティベースとかだけじゃない、もう少し自分のやりたいことを考えてわがままにやるために、そのやり方とか考え方をシェアをできたらいいなって思うんです。助成金の申請の書き方とか、行政の付き合い方もテクニクだけど、こういう場所を運営するのはテクニクじゃなくてもっと精神的なことだったりする。「絶対やめない」とかね。大切にしているもの、根本的な、なぜ自分がそこをやるのか、ってことに立ち返るのはテクニクじゃなかったりする。そういうの根本的なアートに向き合う態度みたいなものをシェアしていきたいなって思います。Ongoingがこれまで実践してきた10年間はそんなに短くない時間だし、次の世代にそうした考え方みたいなのを伝えることは少しはできるかなと思っています。

自分たちのやりたいと思うことがあったら、それを既存のやり方ではなくて、自分たち独自のやり方を模索しながら少しずつ掘んでいくのが、なんだかんだ立ち返ってみて一番民主的なものかもしれないと最近では思ったりもします。

〔※3〕TERATOMERA（テラトテラ）は、東京都とアートカウンシル東京と、小川がディレクターを務める一般社団法人Ongoingが協働して、平成二年度よりJR中央線高円寺駅／吉祥寺／国分寺駅区間をメインとした東京・杉並及び武蔵野、多摩地域を舞台に展開する、地域密着型アートプロジェクトおよびその発信機関の総称。

「インタビュー」長島確―日常とのつきあい方

*ながしま・かく―ドラマトウルク。日本におけるドラマトウルクの草分けとして、さまざまな演出家・振付家の作品に参加。近年は演劇の発想やノウハウを劇場外へ持ち出すことに興味をもち、アートプロジェクトにも積極的に関わる。主なプロジェクトに「アトレウス家」シリーズ、「つくりかた研究所」（ともに東京アートポイント計画）、「↑（やじるし）」（さいたまトリエンナーレ二〇一六）など。二〇一八年よりフェスティバル「トーキョーのディレクター」に就任。

長島確さんはこれまで地域と向き合いさまざまなプロジェクトに携わっています。演劇作品の創作に関わるリサーチや理念的な下支えをするドラマトウルクという立場で、まちや暮らしを舞台にしたプロジェクトにおいて大切にしていることは何だったのか？「公共性」が求められる事業の枠組みの中で、何を担保してきたのか？アートフル・アクションが抱えるモヤモヤと長島さんの問題意識を重ねていった対話と考察の時間です。

——アートフル・アクションは、これまでさまざまな市民参画のプログラムを行ってきました。拠点である「シャトー2F」にはカフェもあり、そこでのコミュニティが市民参画のベースともなっています。しかし市民は、お金の出所をあまり意識していませんし、メンバーの興味や嗜好性が偏って、プロジェクトが閉じていってしまいう傾向も出てきているかもしれません。多様なコミュニティがモザイクのように重なりつつ活動していけたらいいと思うのですが……。

●あえて、「すべての人のために」とは考えない

アートフル・アクションもそうだと思いますが、僕自身も、税金を使ってプロジェクトを展開する場合、いろんな人たちにバランスよく公開するにはどうしたらいいのか、興味をもってくれる人の多様性をどう確保するかについては、ずっと考えてきました。

二〇一〇年に都の文化事業として墨田区で始めた「アトレウス家」のシリーズは、ギリシャ悲劇に登場する一家が日本のまちの、ある建物に住んでいるという突拍子もない設定の演劇プロジェクトです。観客にはこの建物に来てもらい、現実の世界と演じられるフィクションを行き来する体験を通して、まちや住まい、暮らしについて考えてもらうプログラムでしたが、この時は税金を使うことに過剰なプレッシャーを感じ、誰のために、誰に向けて、何をするのか、ずいぶん真剣に考えました。

そして、たとえ都の税金を使っても、都民全員のためというふうにはできない、税金を使うからといって、誰にでも開かれ、誰にでも楽しんでもらえるようなプロジェクトではダメだと思った。というのも、何かをつくる場合、尖っていたり、偏っていたり、歪んでいることがおもしろい。アートは偏ってなんぼ。それを広く薄くのはしてしまったり、それはもうやる意味もなくなってしまうのではないか。ですから無際限に開くのではなく、適切な閉じ方や狭さをつくることを考える必要があると考えたわけです。

「霞が関文学」とか「官僚の作文」という言い方がありますが、一見正しいことを言っているんだけど何を言っているのかわからないし、じつは誰にも届いていない。公共の文化事業として行いアートプロジェクトが、「官僚の作文」ならぬ「官僚のアートプロジェクト」にはなっていない。自分も文章の推敲をしなから感じたのは、誰からも突っ込まれないように、揚げ足を取られないようにシェイプアップしていくと、誰にも文句は言われなければならないけれども、誰の胸にも刺さらない文章になってしまふ。文章でもイベントでも、そういう丸め方をしちゃダメだと考えたんですね。

問題は開くか開かないかではなくて、どの方向にどのくらい開くかであり、それをどんなふうに伝えていくのか、ということ。興味をもって来てくれた人たちが、ああ、やっぱり来た意味があったねと言ってくれることが、本当に意味のあることじゃないかなと思います。

●いろいろな偏り方が集まれば、いろいろな人に開かれる

その点、通年でプロジェクトを展開した経験はとても新鮮でした。チャンスが複数回あれば、一つくらい大失敗してもいいかなって思える。チャレンジに伴うリスクが分散できるんですね。複数年のプロジェクトなら、もっと可能性が大きくなる。そのつど偏り方を変えることで、来てくれる人たちの偏り方も分散させられるでしょう。

そう考えると、都とアーツカウンシル東京が二〇〇九年から始めた「東京アートポイント計画」は、まさにそういうフレームをつくるものだと、遅まきながら気がつきました。「千のまぢ見世（みせ）」という発想から始まったそうですが、都内で活動するさまざまなNPOと「共催」して数多くのプロジェクトを展開することで、都内に無数のアートの拠点をつくらうというこのころみは、まさに小さな「偏り」を分散させることになるんですね。それは、大きな火花を一発上げるよりも大切だと、僕も二〇一三年でわかってきました。先ほど、尖っていたり、偏っていたり、歪んでいる方がおもしろいと言いましたが、尖り方、偏り方、歪み方は人それぞれです。「東京アートポイント計画」に参加するいろんなNPOがいろんな偏り方をしていれば、見に来てくれる人も、じっくりくる偏り方がきつと見つけられると思う。僕はこの理念にすごく共感しています。

「東京アートポイント計画」がうまく機能すれば、NPOは相互にゆるく連携しながら、それぞれのアートプロジェクトを思いきり、ぎゅっと偏らせることができる。一つひとつはそんなふうに偏っていても、いろんな偏り方がちりばめられていることで、全体としては広く開かれている。そのためにも、一つひとつはちゃんと偏るべきだし、さまざま偏り方に積極的にトライしてみるべきなんです。

そこで大切なのは、常に全体を見渡せるようにしておくことと、ちゃんと言語化して伝え合うこと、そして「失敗してもいいからチャレンジする」というフレームをしっかり確保することです。みんなが同じ火花を打ち上げるなんてつまらない、そのための分散であるわけですから……。

●良いコンセプトを発明することが大事

誰にでも受け入れられようとするアートプロジェクトでは、誰にでもわかるアートしかできません。でも、「このプロジェクトでは、あえてこういうことをやります」と提示すれば、賛同する人はちゃんと受け取ってくれると思うんですね。僕はコンセプト——つまり考え、方、問いの組み立て方をはっきりと表明し、それを出発点にしてプロジェクトを展開していくことが、とても大切だと考えています。コンセプトは目標ではなく出発点です。練りに練ったおもしろい出発点を設定できれば、いくらでもおもしろいことが起こります。

またコンセプトがしっかりしていれば、何かあった時にも軌道修正というか、元の筋道に立ち戻りやすい。終わった後も、その成功不成功はコンセプトに基づいて検証することができます。コンセプトがないと、お客さんの動員数というような数字でしか評価できなくなつて、自分たちの首を絞めることになってしまふ。

——やはりコンセプトは大切で、そこに到達する目的志向というよりも、熟慮したよいコンセプトなら、やりながら考えるよりむしろ自由になれる。勇ましいスローガンではなく、よいコンセプトが必要かもしれません。

たとえば、もっと考えるための考え方や枠組みも、ある種のコンセプトだと言えます。以前の僕はアートを、どちらかという日常そのものをどうおもしろがるか、そのためのツールとして使おうと考えていたのですが、最近少し飽きたというか、アートは、やはり日常ではできないことをやった方がいいという気がしています。つまり、あえて日常と違うことをするためのフィクションのフレームとして、アートを使うということ。そうでないと、いろんなものが入ってきてしまって、結局は日常と同じことになってしまふ。

とくに政治や経済とは、しっかりと分離しておきたい。そのためにもちゃんとしたコンセプトを立てて、それをちゃんと言語化して考える必要がある。僕にとってアートは、現実的にすぐに何か社会の役に立つとか、お金が儲かるとか、そういうこととは違うことをやるための場所であつて、あえて孤立したり、あえて非常識なことができるフレームであつてほしいと考えています。そのためにもアートと日常は、分けて考えておく必要がある。

●自分の意見がちゃんと伝える、つくり方から考える

「東京アートポイント計画」のプログラムとして二〇一三年にスタートした「つくりかた研究所」では、プロジェクトのつくり方から考えることにしました。フレームを使い回して、コンテンツを入れ替えているだけでは、自分たちが飽きて疲弊してしまふ。だからおも



鈴木祐輔

◆と にかく様々な活動をしているのはわかるけれど、具体的に何をしているのか少々わかりにくいかなあ。家庭内で特に説明を求めていますので。その中では市政施行五五周年の記念事業の小金井の地上絵はわかりやすかったですよね、印象に残っています。僕の場合は、まだ小金井とアートが結びつくことはないですね。

学校連携事業では、学校で授業の手伝いをしてというのも側で聞いている分にはよくわかります。子どもたちがこんな様子だった、あんな様子だったというのは伝え聞いている。学校に外部の人が入つて行う授業と学校の先生がする授業とは子どもたちの印象も違う、子どもたちへの刺激も違うと思います。ですから、子どもたちも今までの図工の授業とは違う気持ちで取り組んでいるんだらうな、ということは話を聞いて思ったことを覚えていきます。

地上絵はJ-R中央線の「中央線が好きだ」に載つたので多くの人が知つてて、宣伝効果は大きかったと思います。たまたま友人がいたので、うちの妻、これやってるんだよ、なんて言つたことはあります。そしたら「へー」って。

地上絵は学校にもあるので、子どもたちは日常的にみている。そこでアートフル・アクションが事業としてやったということがわかって、AAは美術的なことをやっているところなんだね、とイメージされますよね。あんまり遠い存在ということではなく、近い存在として感じますね。保護者もいろいろな機会に目に止めると思います。昔こんなものはなかった、素敵だわと意識にのぼると思います。何かモノとして形が残っていると人が認知し易いと思います。NPOの活動もわかりやすいところとわかりにくいところがあるので、地上絵をやっているところだと説明すると「ああ、あそこなのだ」と、わかつてもらえるところもある。

一市民としてみると、活動を通じてメッセージを発したり、しようとしているところなのだなとふと身近に感じるようになります。好意的に見られますよね。目にはみえないところではいろいろやっている、芸術的なことで貢献しようとしているのだな、と想像はつく。

それから、少し古い話になりますが、「タマのカーニヴァル」もわかりやすかったですね。タマカは妻から誘われて行きました。パレードはよかったです。あれは小さい子にとっては楽しいイベントでしたね。息子も、本人は何をしているかわかっていなかったと思いますが、あれは相当大々的でしたね。タマのカーニヴァルと地上絵なんですね、僕にとつてのアートフル・アクション。

妻がAAに関わるようになってから、精神的にバランスがとれるようになって、本来の自分を取り戻しつつあるように感じています。子どもを産んでから精神的に不安定な時期があつて、他の仕事で忙しいのになぜ続けようとするのか疑問に感じていた時期もあつたけれど、今

しろいことをやるために、つくり方そのものから考え直してみようと思っただんです。

しかしこの問題意識は、研究所を運営する自分たち自身に、真っ先に向かってきました。研究所をどう運営しプロジェクトをどう進めていくのか、その決め方を決め、打ち合わせの仕方を打ち合わせるという具合に、いちいちぜんぶを手前から考え直さないと、自分たちのコンセプトと矛盾してしまいうんですね。そこで組織図から書き替えてトップダウンを一切なくし、公募で集まった一五人の若い研究員の自治に任せることにしました。その途端、彼らの中で気づかいや優しさからくるいろんな同調圧力が起こって、プロジェクトはびっくりするくらい進まなくなった。この時トップである僕が介入した方がいいのか、結構悩んだんですが、結局放置することにしたんです。そんなことを一年ほど続けると、もうみんなその状況に耐えられなくなって（笑）、今度は逆にどんだん動き出したんです。

「ちょっと違う話ですが、ここ数年とくに海外からの観光客が増えてきて、僕にとって通勤電車の居心地がマシになったんです。以前はラッシュ時の駅や車内にはビジネス人間たちの作法があつて、それにちょっとでも違反すると、舌打ち攻撃の猛烈な同調圧力がかかってきました。ただでさえ地獄の通勤列車を、もつと効率的に地獄にしていくな同調圧力です。でも海外の観光客は、そこに大きなスーツケースを引っ張ってきたり、家族みんなで乗ってきて、風穴を空けてくれたので、ビジネスの人たちもあきらめ始めて、その結果だいが居心地がよくなった。

社会では、誰もが同調への圧力の中で生きているのだとしたら、せめてプロジェクトの中でだけは、そうじゃない空間にしようということで、そこからいろんな考え方が広がった。それは、こういうプロセスを経たからこそ得られたことかもしれません。

●「自分」だけではなく、多くの人を巻き込んでみる

——この三年間、アーティストのアサダワタルさんと「日常」というキーワードでプロジェクトを展開してきて、日常をどう考えるかは難しいと感じています。とくに市の文化振興計画の事業としては、「日常を切り離す」とはなかなか言えません。日常との切斷や社会との連続性はどうしたら両立できるのでしょうか。

アートと日常は分離して考える必要があると言いましたが、日常と別のものになるというより、実社会と別のレイヤーになると言った方がいいかもしれません。実社会と違うレイヤーを日常の中に持ち込む、という感じかな。その時に、興味を持ってくれた人たちが参加しやすくなるように、参加の仕方を考えたり、明快なテーマを設定するといったような、ハードルを下げるフレームも必要だと思います。

「『さいたまトリエンナーレ2016』では、矢印をテーマにしたプロジェクトを行いました。参加者にはトリエンナーレ会場の方向を示す「矢印」をつくってもらい、市内の自宅や職場に飾ってもらいます。決めすぎると窮屈になるので、矢印でありさえすれば、色も、素材も、形も、大きさも自由としました。そうすると「それならできる」という人が結構いて、大人から子どもまで、ふだん留守の人も家から出られない人も、たくさんの人に参加してもらえました。「つくりかた研究所」は自由すぎて逆にハードルが高かったのですが、自由度の高いワンテーマが用意してあれば、「自分ならこゝろする」と考えやすくなり、参加もしやすくなります。

——小金井市の計画は、どこからも突っ込まれないコンセプトになっていきます。この設定をもう少し自由に運用して、突っ込まれるプロトタイプをつくって、そこから新たに発想することが必要かもしれません。

僕はいつも、これから「つくり手」になろうとする若い人たちには、「自分の中から何かが出てくるのを待つのはやめよう」と言っています。それはとてもしんどいことだし、待っても意外に出てこないものなんです。それよりはもつといろんなものを見て、経験して、自分の中にインプットしていった方がいい。何ができるかはそのあと考えればいい。「自己表現」ということに幻想がつきまといすぎていて、それがアートやアートプロジェクトを窮屈にしているんじゃないかと思うんですね。

●何のため？ どのように？ を、考え続ける

二〇一一年三月一日以降、危機や破局が描かれる作品が多くなっています。大ヒットした新海誠監督の『君の名は。』を観て思ったのですが、最後くらいは無理にでもファンタジーやハッピーに落とし込まないともうやってられないくらいに、とくに今の若い人たちには絶望感が広がっているような気がしました。われわれが思っている以上にそれは深刻で、現実には未来がない、という感じなのかな、と。

震災直後に、「これからつくられる作品は、希望を語らないといけない」と言った演出家がありました。それは同感です。そのうえで、問題は、希望を語るにはどんなやり方があるのか、ということなんです。とってつけたような希望じゃダメだろうし、でもだからって、絶望ばかり振りまいてもどうにもならない。自分も含めた上の世代が、今はよくない、これからはもつとよくないとはかり言ひすぎるのは、次の世代に大変悪い影響を与えているんじゃないかと思います。よくないのは確かだとして、どうしたら少しでもよくなるのかを語れないと、無責任なグチでしかない。

——どうしたら俯瞰する立場に立てるかが大切ですね。引いて見ることにまずごい技術が必要で、その技術を体得するために市民のアートプロジェクトがあるんじゃないかと思います。

紀元前のギリシャの哲学者アリストテレスは、劇中の人物に感情移入して一緒に泣いたり怒ったりする「同化」によって、精神が浄化されることが、とても重要な演劇の効用だと書いています。それに対して二〇世紀のドイツの劇作家ベルトルト・ブレヒトは、「それ、危ないから止めようよ」と言った。というのも、感情移入による一体化がナチズムを生み、ホロコーストを生んだと考えたからです。そして、ちょっと引いて、客観的、批判的に見ることを観客に促すために、見慣れたものを奇異なものに見せるような「異化」ということを言い出しました。

一緒に仕事をしていた演出家が以前ブログに書いていたことですが、同化による精神の浄化は、実は観客だけではなく、作り手の側にも作用しています。アートプロジェクトに代表される参加の楽しみや、やる側の充実感も、間違いなくこのことと関係しているはずなんです。同化がすべて悪いわけじゃない。異化の効用とどんなバランスで使っていくかがポイントです。これほどいろんな場所で、いろんな形でアートプロジェクトが行われる今だからこそ、アートプロジェクトは何のために、どのようにありうるかを、常に考え続ける必要があると思っています。

思えば、自分を取り戻していくのに必要だったのでしょうね。

*すずき・ゆうすけ——市民スタッフ鈴木佳子さんのお連れ合い。塾講師。小金井生まれ小金井育ち。

「わたしたち」という主体の問題——戸館正史

*とだて・まさふみ——松山ブンカ・ラボディレクター、愛媛大学社会共創学部助教。静岡県袋井市月見の里学遊館・企画スタッフ（二〇〇七―二〇一二）、アーツカウンシル東京・調査員（二〇二二―二〇二四）、群馬県前橋市アーツ前橋・教育普及担当学芸員（二〇二二―二〇二五）、一般財団法人地域創造・芸術環境部専門職（二〇一五―二〇一八）、二〇一八年六月より現職。自治体の文化事業評価員、助成選定委員などを務める。日本文化政策学友会、演劇人会議各会員。共著に『芸術と環境』（論創社、二〇二二）。専門は文化政策、アートマネジメント、教育普及（芸術）、公立文化施設運営、労音研究など。

●危機感がない街で

「じゃあ、失業率が高くて経済も衰退している自治体だったらよいというわけ？」とある人に言われた。「経済的にも豊かで、全国幸福度ランキングなどで上位にのぼるような自治体は危機感がないから芸術文化による社会へのアプローチがしにくい」という話をしていた時だ。この発言をした彼女の働く自治体はかつて栄華を極めた工業都市で、アートマネジメント業界では名の知られている公共劇場を擁しているところだ。業界の評価や知名度は高いが、地元の人たちの認知度は低いことをいつも嘆いている。しかしいわば右肩下がりの地域経済とそれに伴う人口流出や失業率の高さなどの危機感から、この自治体は文化政策には比較的力量を入れているとされる。確かに世界的に見ても危機的状況におかれた自治体が芸術文化政策を都市再生のための政策として活用し成功をおさめたところはいくつもある。とりわけエネルギー政策の転換や主幹産業の閉鎖などによって大量の失業者を生んだ都市、例えばイギリスのグラスゴー市やフランスのナント市などがそうだ。藁にもすがるかのように文化に都市再生を託し投資したケースをここで挙げるのは極端かもしれないが、切羽詰まった都市の課題と芸術文化自体の動機が重なったとき、政策的にも芸術的にも秀でた成果を上げられる証左がそこにはある。冒頭の発言をした彼女の自治体もこれらの事例に範をとったはずだ。いささかスケールダウンした話ではあるけれども、例えば日本での芸術祭、トリエンナーレ等の隆盛もまた地域活性や観光と結び付けた経済効果を期待している背景が必ずあるもので、それはそれで危機感から派生した芸術文化政策である。ここではアーティストは社会課題と向き合うことによって骨太な作品や表現が生む芸術的成果も得られることもある。要するに危機感によって芸術文化の花が開くという非常に皮肉に満ちた現実がある。翻って東京都小金井市はどうだろうか？

●担い手＝市民への信託

まずはこの街の恵まれている条件から市民主体の芸術文化振興を考えてみたい。東京都二三区外の西部、新宿からJR中央線で三〇分の人口一二万の街。大学がいくつもある文京地域でもあり、緑豊かな大きな公園もある街。市民団体の活動も盛ん。共稼ぎでそこそこ裕福な家庭がマイホームを建てることも可能な街。この街で今から一〇年と少し前、小金井市芸術文化振興条例と小金井市芸術文化振興計画が策定された。条例に基づく計画では地域の特性を踏まえたりえ、さらに市民アンケートなどを参考にして芸術文化についての課題を三つ挙げている。「一 芸術文化振興の範囲が限られている」「二 芸術文化活動に関する情報が不足している」「三 芸術文化活動に参加できる場が不足している」。芸術文化振興を目的としているわけだから、当然ながら芸術文化についての課題整理になっている。計画で謳われている

お題目はこうだ。「誰もが芸術文化を楽しめるまちへ 芸術文化の振興で人とまちを豊かに——市民主体の芸術文化振興に向けて——」。これはこの地域での既存の市民活動、文化活動が盛んな土壌を前提としている計画と違ってよいだろう。そしてここには芸術文化が地域社会になくしてはならないものであり、市民生活を豊かにするものだという強い確信がある。そして何よりも市民に対する強い信頼がある。さらに、この計画の推進事業として掲げられている三つの柱を見ると、芸術文化と市民に対するリスベクトは具体的にわかってくる。「市民とアーティストが協働した作品の制作」「芸術と市民をつなぐ機会の整備」「市民参加のきっかけとなる講座の運営」。いずれもイベント的に消化される事態を慎重に避けるかのような地に足の着いたミッションと言ってよいと思う。そして何より市民の既存の活動に配慮し、あるいは新たな文化が生まれるための担い手を作っていくことによって、地域の中の文化的ネットワークを活かしていくとする推進事業計画だ。担い手＝市民への信託がこの計画の大前提にあるわけだ。

しかし、本来そうやすやすと担い手＝市民への信託はできるものではない。そもそも市民が活動や運動という言葉と結びつくと、拭いきれないイメージがある。無論それは体制や権力に抗う存在としての市民だ。しかし一九九八年にNPO法が施行され、とりわけ現在は行政が市民参画や市民協働を積極的に謳うようになっていく。すなわち市民活動がネガティブなイメージを脱したのと同時に、かつてある程度限定できた市民のイメージは再構築されてより広範な最大公約的な市民を指す言葉になっていった。小金井市芸術文化振興計画における担い手＝市民への信託はこうした状況を踏まえたものであることは言うまでもない。

一方で、小金井市のケースで考えると、既存の市民活動や市民運動の盛んな土壌というのは、モノ言いう市民が多いということでもある（記憶に新しいところだと東京都の都市計画道路の整備方針が小金井市内の自然環境の破壊や地域コミュニティの分断を招くとして反対する運動はメディアにも取り上げられて広く知られている）。一般的に行政がパブリックコメントや公聴会などで市民の声に耳を傾けるときは、往々にしてガス抜きであることが多いものだ。市民参画や市民協働にしても同じようなロジックによってモノ言いう市民のガス抜きとして使われる場合もある。しかし、小金井市の条例と計画の場合は必ずしもそうでもない。小金井市芸術文化振興条例と計画は、東京大学（小林真理教授）との共同研究によって策定されたもので、公募市民の委員会での議論などを踏まえてかなり丁寧な過程を経ている。よって行政にガス抜きのようなケチな思惑はなく、むしろ当時の役所の担当部署（コミュニティ文化課）の意識と感度の高さゆえに実現した条例と計画である。そう考えると小金井市の場合は、その策定過程からも市民活動や文化活動の土壌の豊かさと担い手＝市民への信託という観点からも、市民による芸術文化

◆事 務局の一員として「想起の遠足」に参加し

て、表現したい人がこんなに多くいることが発見でした。僕自身は自由に発想することは苦手なので、「想起の遠足」のように、何かしらの枠組みやとっかかりがあった方が発想しやすいし、その一人ひとりと時間をかけて丁寧に企画をつくれるのは、NPOだからこそ、できることだと思いました。それぞれが表現したいものを事務局も一緒になって引き出し、企画していったことは、僕自身の幅を広げる経験となりました。でも、今後僕が、社会の中の芸術文化活動としてやっていきたい方向性とは、少し違つかもしれません。

芸術文化にはアートの発想とデザインの発想があって、デザインはメッセージや意図をどうしたら人に伝えられるかというふうに発想するので、ビジネスやプロジェクトとは相性がいいのですが、アートはどちらかという個人的な営みで、組織でやるとか、みんなに同じように伝えることが難しい。でも、新しいフェーズを切り拓くことは、デザインよりもアートのほうが、可能性としては大きいと考えています。僕自身としては、「こういう表現をしないとイケない！」という思い込みはないので、いろんな創造性に対応する柔軟性を大切にしたいと考えていま



鈴木幹雄

活動を展開するにあたって非常なアドバンテージを持っていると言っている。一方で、市民による芸術文化活動に対して行政が大いに理解を示している条例と計画ゆえに、その庇護のもと事業を展開するアートフル・アクションの活動が陥っている問題や課題もあることは否めない。

●市民はみんななのか？

まずは市民とは誰で、どこにいるのか？ という点から考えてみたい。無論、それは小金井に暮らす市民みんなのことを指しているに違いない。アートフル・アクションに関わっている市民たちだって「市民とはみんなだ」ときつと言いはずだ。公園で、文化施設で、学校で、保育園で、あちらこちらを移動しながらアートフル・アクションは地域と市民を巻き込むプロジェクトをこころみてきた。しかしいつでも私たちの脳裏をよぎるのは「どこにいる市民はみんななのだろうか？」という不安である。そもそも市民とはどこにいるのか？ あるいは「市民はみんな」でなければならぬのだろうか？ とすると私たちは「わたしたち市民」というような言い回しをしがちだ。自分たちの活動や考え方がいかに少数の立場であっても、マス社会と向き合っていくために「わたしたち市民」と言い張ってしまっていることがある。

ひとつエピソードを紹介したい。あるアートプロジェクトで担当者アーティストの間でわかりやすさについての議論があったそうだ。担当者はその事業が市民には理解されにくい、もっと広く市民に理解してほしいという希望があった。つまり小金井の多くの市民は理解できないという前提はそこにはある。このときのアーティストの応答は仔細に知らないのだけれど、市民が理解できるかできないかということ自体が判断できるものではないという立場にアーティストはあったのではないか。だから議論がかみ合わない。もっと言うと、そこには市民というよりも他者はわからないという前提があったのではないだろうか。例えば演出家・劇作家の平田オリザ氏が好んで用いる「他者とは分かり合えないということを理解する」という視点は、多様性を担保することで成立している芸術表現においては不可欠なもので、それは社会においても当てはまるものだ。当然ながら小金井市芸術文化振興計画では多様性への理解が触れられているけれども、多様性を帯びた「市民はみんな」としてしまふことは市民という価値をみんなという一つの価値に統合するような、多様性ならぬ画一性に手を貸すことになりかねない。

本来、市民という存在は複数形ではなく、単数形のそれであり、単数の市民が寄り集まり共存しているのが社会である。仮にこのような単数の市民を前提としたならば、果たして行政は担い手としての市民に対して全幅の信頼を寄せるだろうか？ 計画にそれを謳うことはできるだろうか？ つまり、たった一人のための政策になる覚悟を行政は持っているのだろうか？ きつとそうすることは行政のロジックでは難しいだろう。本来的には、行政は単数の市民にも寄り添うことが

求められるはずだ。要するに単数の市民とは、最大多数の最大幸福を前提とした多数派の市民ではない。市民とは属性を離れたひとりの人間であると考えたならば、これまでのような「市民はみんな」という考え方を踏み止まらせてくれる権利が思い浮かぶ。すなわち、生まれながらに持っている基本的な権利だ。日本国憲法第一条を引くまでもなく、人間が人間であることの固有性、権力に侵されない不可侵性、属性と関係なく誰もが保障される普遍性を、国家や制度から与えられるまでもない自然権として「わたしたち市民」は持っている。自然権として単数の市民であることを保障される社会に「わたしたち市民」は生きているのだ。

●複数性の市民

単数の市民とは基本的な権利を有する存在であることを踏まえ、ハンナ・アーレントの知見を借りて、複数性の市民という存在を捉えなおすことを考えてみたい。彼女の代表的な著作『人間の条件』では人間の複数性の問題が重要なトピックであることはよく知られている。アーレントの言う複数性とは、実は前述した市民の複数形とは異なる意味で用いられている。根本的な人間という存在を市民とした場合、アーレントに倣って整理するならば、前述した市民の複数形とは多数の市民ということになる。アーレントによる人間の複数性とは、根本的に自分という人間が他者との出会いを絶えず繰り返しながら生きていく状態を指すと云ってよいだろう。つまり、個である（単数である）市民が異なる市民との関わりを不断に持つていくことだ。この考え方には、行政が担保したい画一的な「市民はみんな」とする考え方と文化の担い手が寄り添うべき単数の市民を折り合わせるヒントがある。それは多様性を意味する複数形概念ではなく、アーレントのように他者との関わりの中に複数性を見出していく点だ。シンプルに言うならば、芸術文化活動の過程において、個として市民が連なりながら関わりを持つことによって「市民はみんな」となっていく考え方だ。最初から「市民はみんな」ではないという考え方だ。統合された画一的な状態ではなく、絶対的に異なる他者同士が互いの存在を認め合う状態になってはじめて「市民はみんな」となるということだ。たった一人のための政策であっても、その政策が動き出すことによって、他者との関係性の連鎖の中で、みんなの政策になっていくことと云ってもよいだろう。

す。

アートフル・アクションは、創造の形にとらわれることなく、参加者一人ひとりの人間としての可能性を信じて展開していて、その底流には、「その人のあるがままを受け止める」という想いがあるように思えます。どんな企業や組織や、そこで行うプロジェクトでも、人間に対する愛情のないものは長続きしないと思えます。けれども、その「愛」を実践する方法や組織のつくり方は、一般的な企業とNPOとでは異なるのでしようね。参加者一人ひとりと丁寧につき合うことは、他方では間口を狭くしてしまいがちで、それゆえに入りづらさを感じる人も出てくるでしょう。付き合いの深さと間口の広さを両立させることは、アートフル・アクションの今後にとっても、とても重要なと感じます。

芸術文化というところ、何かをつくったり、世の中にメッセージしていこうとしたりする傾向があるように感じています。僕自身は、何かを表現したい人ばかりではなく、何かの表現を受けて自分の考えを深めていくようなタイプの人も巻き込んでいけるような、新しい文化のムーブメントができないかと考えています。

*すずき・みきお——一九六一年生まれ。二〇一〇年から二〇一四年までJ-R 東日本から出向で株式会社J-R 中央ラインモーター (nowwata) の社長を務め、小金井との縁が生まれる。二〇一七年にJ-R 東日本企業の仕事を最後にJ-R 東日本を退職。現在は、楽しく活気ある地域を作っていききたいと模索中。アートフル・アクションの活動では、淺井裕介さんの企画を駆り展開することが関わりのきっかけ。昨年、退職後の時間で想起の遠足の事務局業務をお手伝いしました。

はちょうどバブルの最後に就職した世代で、



僕の年までは、だいたいみんな好きな会社に正社員で就職できた。でも次の年からは、ほとんど新人も入らなくなつた。「この先どうなっていくの？」と。自分より若い人はみんな非



マスター（村松真文）

正規の派遣になっていて、生きにくい、息苦しい会社になっていくわけですよ。僕と同世代かその上の世代で『会社が社会である』という価値観を持っている人にとっては生きにくい、息苦しい社会になってしまった。その時僕なりに、同じ思いを持った人が生きやすい社会や場所をつくりたいと思いました。

その後、「イミグレーション・ミュージアム・東京」というプロジェクトに関わつて、僕はそこで運営する人とぶつかってしまったのです。なぜかというところ、事務局の男の子がもう死にそうなる顔をしながらヘトヘトになって走り回っているのを見て、それは段取りがちゃんと組んでいないからであつて、プロジェクトは段取り通りやるべきだと僕は言った。一方、プロジェクトのディレクターの岩井さんは段取りに通りに行くといひものができる。最後の火事場の馬鹿力みたいなところでいいものができるのだから、あえて段取りは気にしなくいいんだ、というところで決裂してしまつたんです。

同じ時期に二〇一四年にアートフルアクションで行った「多文化アートプラットフォーム」にも参加しました。そこでもプロジェクトのディレク

●「わたしたち」が立ち上がる

具体例から考えてみよう。例えば、アートフル・アクションの係わる事業としては大規模なプロジェクトとなった「タマのカーニヴァル」(主催：五市共同事業実行委員会武蔵野市、三鷹市、小金井市、国分寺市、国立市)は、一〇〇名近くの子どもたちと保護者、ミュージシャン、ダンサー、市民スタッフ、学生インターンなどが関わり、半年の間、隔週のワークショップを行い、最後に街中を練り歩くパレードをした。ここでの主体となるわたしたちはどこにあったのだろうか？アートフル・アクションの市民スタッフなのか？子どもたちなのか？アーティストなのか？保護者なのか？おそらく、はじめはアートフル・アクションのコアな数名の市民スタッフとアーティストにしか主体は宿っていなかったかもしれない。なんだかフワッとしていたのである。限られた人間たちが机上で編み出した枠組みの中で、どのように子どもたちや市民を巻き込み、ムーブメントしていくのかということ、数名の市民スタッフとアーティストたちが「わたしたち」を代弁するかのようにして主体となろうとしていた。そして経験の少ない市民スタッフにとっては枠組みが設定されていることによって、かえって主体性が殺がれる状況にあったかもしれない。しかし、プロジェクトがいったん動き出すと、関わっている市民や子どもたちの主体性もまたおぼろげと動き出していったという印象だ。つまり、大人数のコミュニティの中で、他者同士が意見をすり合わせ、あるいは付度しながら「わたし」の考え方が複数共存している状態が出来上がっていくことによって、このプロジェクトの主体は「わたしたち」という複数性を帯びてきたのである。設定した枠組みといえは、時間と場所、そしてアーティストや物好きな市民を配置することくらいであったが、自ずと、自分たちで秩序や規範を探るモチベーションが芽生え、主体性が喚起されていったことだろう(この事業の記録やフィードバックは『はじまるようではじまらない、でもはじまっている——タマのカーニヴァルの言葉』に詳しい)。

●出会わない他者がいるということ

市民主体は小金井市の条例と計画の中で最も大切なキーワードだ。セレクトショップのように流行りのアートを陳列するような文化振興ではなく、市民の手で芸術文化を創造する環境を立ち上げていくという方向性を否定する理由はない。

行政と市民が協働するアートフル・アクションは、市民主体の芸術文化振興として理想的な状態にある。しかし、関わる市民が「わたし」と「わたしたち」の関係を解きほぐしていく思考の作業がなければ、独りよがりの市民主体となってしまうかねない。一人ひとりの個の価値をきちんと担保しながらも、「わたし」同士、他者同士の関わりの中から「わたしたち」が立ち上がることによって、そこには無数の価値を内包した主体が生まれてくる。一方で、そうやって立ち上がった「わたしたち」という主体が、「わたしたち」の輪を作っていくためだけの芸術文化振興でよいのだろうかという疑問を持たないでもない。そこには「わたしたち」には、絶対出会いことのない他者がこの街にもいるという問題があるからだ。恵まれた環境であるとされる小金井市のイメージの陰に、出会わない市民が必ずいるという自覚を「わたしたち」は持たねばならない。どんなに市民主体の芸術文化振興を展開しても、主体として参加しなかったり、できなかつたりする市民がいるという前提に立ち、他者との出会いの中で「わたしたち」という主体を形成しているという現実を受け容れなければならぬ。そんなに芸術文化は、アートは、万能ではない。危機感のない街では、出会わなければならぬ他者は、いつも視界にはいない。

ターであるリュウ・ルーシャンとぶつかるのですが、その中で自分が今まで持っていた価値観がいい意味で崩れ、新しい価値観なり行動パターンが生まれてきました。さらに小学校のプロジェクトなどにも参加していく中で、もちろん段取りはちゃんとするべきだと、僕は今でも思うのですが、段取り通りにいかなかった時に、どのようにしていくか考えるのが確かにおもしろいし、いいものが、いや、いいものができるという言い方は、僕は好きじゃないな、それが予想しなかったものを生み出すというのを受け入れられるようになったってことはありますね。

アートプロジェクトに参加する中で、具体的に言えることは、会社員だった僕がたぶんプロジェクトマネージメント的な、段取りを組むことを仕事にしていた人間からして、その段取りを無視したところ、段取りが崩れたときに、では、どうする？というおもしろさを感じる、それをおもしろいと思えるようになったというのが一番言葉としてはしつくりくるのですけど。

*むらまつ・まさふみ——電機メーカーで製造業エンジニア。正社員として二〇年間働いていたが、ある日いきなり、サラリーマン人生からドロップアウトすることを決断する。一年間のトランジション期間を経て、接客業アルバイトをしながら様々な生き方や働き方をリサーチするようになる。アーツ千代田3331のサポートスタッフになったことから、アートプロジェクトに参加するようになり、二〇一四年に「多文化アートプラットフォーム」に参加することがきっかけで、NPO法人アートフル・アクションの小学校プロジェクトなどにも関わるようになる。アートプロジェクトなど多種多様な人が関わり合う機会を増やすことが、閉塞感に苦しむ社会をシフトチェンジできるのではと期待している。

本報告書で取りあげた活動に参加したアーティスト

主な記事での登場順で掲載、*は、ホームページなどから転載しました。

多田淳之介「ただ・じゅんのすけ」
一九七六年千葉県出身。演出家、俳優。東京テアトロック主宰。富士見市民文化会館キラリふじみ芸術監督。二〇一三年、日韓共同製作作品『カゴメ! カルメギ』で、韓国の演劇賞「第五〇回東亜演劇賞」を受賞。（財）地域創造リージョナルシアター派遣アーティスト。四国学院大学非常勤講師。ADAFアジア舞台芸術人材育成部門「ディレクター」。

菅野麻依子「すがの・まいこ」
一九七四年東京都生まれ。東京藝術大学美術学部デザイン科卒業後、パルコアーバナー ト#6優秀賞受賞。二〇〇四年、カルフォルニア・カレッジ・オブ・アート修士課程修了。二〇〇六年、東京芸術大学先端芸術表現科教育研究助手就任。二〇〇九年、文化庁新進芸術家海外研修制度研修員。ドイツ MAREHEIM 美術館にて客員研究員。東京藝術大学木工芸研究室在籍を経て、博士号取得。ドメスティックな場所で行うアートとコミュニケーションについて制作を続ける。

下中菜穂「しもなか・なほ」
造形作家。もんきり研究家。江戸時代の切り紙「紋切りあそび」を通して「かたち」に込められた祖先の暮らしや文化、自然観などを紹介。国内外で切り紙の文化をフィールドワーク。文様を暮らしの中で使い楽しむ生活を現代にゆみがえらせるべく活動中。著書に「ことも文様ずかん」（平凡社）など。映像の百科事典「エンサイクロペディア・シネマトグラフィカ」の活用チームとして、アーカイブ映像の実験的な上映会やワークショップを展開。どちらの活動でも、歩いて、出会って、観て、聞いて、感じて、やってみる。手や身体を通して「過去からの贈り物」を受け取り、手渡して行くことがモットー。

Arthur HUNG「アーサー・ファン」
一九七二年USA・ワイオミング州生まれ。コンセプトチュアルアーティスト。ロード・アイランド・スクール・オブ・デザインにて絵画・版画専攻、美術修士号取得。二〇〇九年に来日し、理化学研究所脳科学総合研究センター研究員として東京に在住し活動中。主な展示に、中之条ビエンナーレ2017（沢渡温泉）、ギャラリーカメリア（東京・銀座）、ジルドールギャラリー（名古屋）、hasu no hana（東京・鶴の木）、HAGISO（東京・谷中）、「SICF15（東京・表参道）、瀬戸内国際芸術祭2013など。

「ちむらみさこーいちむら・みさこ」
二〇〇三年から東京の公園のブルーテント村に住み始め、国内外で、資本主義の問題や反ジェントリフィケーション、フェミニズムなどに関連する作品やエッセイを発表して

二〇一五年）、「This sentence makes no sense」（秋山画廊・東京、二〇一六年）。主なグループ展：「my your precious pieces」（gallery 坂巻・東京、二〇一二年）、「show」（秋山画廊・東京、二〇一二年）、「From the nothing with loveー虚無より愛をこめてー」（シヤトー2 F・東京、二〇一四年）、「In passage」（静岡県熱海市内、二〇一五年）、「渚町五丁目四番地 4 F・5 F・9 F」（静岡県熱海市内、二〇一六年）、「ダムの底」（awaracenter・長野、二〇一七年）、「[ny]house」（Arai Associates・東京、二〇一八年）。

亀田奈美子「かめだ・なみこ」

香川県生まれ。一二歳よりフルートを始める。東京学芸大学教育学部特別教科教育音楽科フルート専攻卒業。オーストリア・インスブルック市コロル州立音楽院に留学。第一一回日本クラシック音楽コンクール一般部門三位入賞。ソロのほかオーケストラや室内楽のメンバーとして活動。アンサンブルマタンメンバー。「一生楽しめる音楽を」をテーマに、小金井カメダフルート教室を主宰している。

松村拓海「まつむら・たくみ

フルーティスト。TV、CM音楽の演奏、制作ジャンルを問わずさまざまなバンドやアーティスト作品に参加。演奏活動の他レッスンや連載執筆、ワークショップも行い二〇一五年頃からアートフルアクションの活動として小金井市内の小学校や保育園での制作・ワークショップなどに参加している。二〇一七年一〇月号から雑誌「THE FLUTE」で「マキナーだっぺJAZZは吹ける」を連載執筆。二〇一五年八月「Album『Duologue』二〇一七年五月2nd Album『8』」をリリース。

アサダワタル

一九七九年大阪生まれ、東京在住。アーティスト、文筆家、大阪市立大都市研究プラザ特別研究員、博士（学術）。音楽や言葉を手立てに、人々の生活「コミュニティ」ときわめて近接した共創的表現活動の実践と研究に取り組む。『住み開き』（筑摩書房）、『コミュニティ 難民のススメ』（木楽舎）、『表現のたね』（モ*クシユラ）、『想起の音楽表現・記憶・コミュニティ』（水曜社）など多数。また、サウンドプロジェクト「SOUL SIGN+」のドフマーとして、アルス・エレクトロニカ2013デジタル音楽部門準グランプリ受賞。

ほうほう堂「ほうほうどう*」

二〇〇一年、新舗美佳と福留麻里により結成された身長155cmダンスデュオ。ふたりという関係性を軸に、様々なやりとりを往復させながら、日常的な身体の衝動や微細な発見の実感をともに、独自のダンスを更新している。二〇〇四年「東京コンペ1」にてケラリノ・サンドロヴィッチ賞、二〇〇五年「TOYOTA CHOREOGRAPHY AWARDS」次代を担う振付家の発掘1」にてオーディエンス賞受賞。近年は劇場での発表に加え、美術館や船上といった舞台空間ではない場所での作品上演もさかんに行なっている。また、デュオという形態で追求され続けているその関係性は、人と人の間に横たわるさまざまな事柄をもリンクし、踊ることのつねにこぼれまわす、KERA・MAPやテレビドラマでの振付、ワークショップや学校での授業を行なうなど、年齢や環境をこえ新たなつながりを広げている。

いる。著書に『De キクチさん、ブルーテント村とチョコレート』（二〇〇六年）。主な展覧会：「Wolferen Artist in Residency Program (III) Misko Ichimura」（二〇一一年）、「Inter-local Project 2011：North East Asia, Our Public Future」（二〇一一年）など。

藤塚陽子「ふじつか・ようこ」
演出家。小金井市在住。日本大学芸術学部文芸学科卒業。在学時より演出・演劇に携わる。近文研にて演出・出演。近代文学を再構築し舞台化をしている。近年では小金井市を拠点に、子どもたちと一緒に演劇を通じた身体表現を共につくり上げる活動をしている。演出に際して、音響は生音にこだわり、過剰な装置などは使わない空間づくりを行う。

RIE「りえ*」

一九八二年大阪府堺市生まれ。現在、神奈川県湘南在住。二〇〇二年、京都嵯峨芸術短期大学陶芸学科卒業。二〇〇五年にマレーシアのボルネオ島のある村を訪れ一人の少女に出会う。貧しくても感謝の気持ちと笑顔を忘れない少女との触れ合いを通して「きつと豊かさは彼女の心の中にあるのだろう。」と感じる。帰国後、ボルネオ島滞在で気づかせてもらった「心の豊かさ・人の温かさ」を日本中に、そして世界中に広げたいという想いを込めて絵を描き続けている。

中島崇「なかじま・たかし*」

一九七二年東京都生まれ。一九九四年、桑沢デザイン研究所写真研究科卒業。東京在住。二〇〇一年、ドイツ・ベルリンに居住。二〇一四・二〇一六年摘水軒記念文化振興財団助成。

井上ヤスミチ「いのうえ・やすみち*」

画家・イラストレーター。一九七九年静岡生まれ。東京都豊島区在住。人が矛盾を抱えながらも生きるたくましさや絵に描きたいと、小さな挿絵から大きな壁画まで、毎日絵を描いています。絵画制作やイラスト挿絵のみならず、子どもたち対象のワークショップや、描いて描かれる相互型フェイスペイント、野外フェスでの顔はめパネル制作ライブイベントなど、絵を介してそこに居合わせた人を巻き込むような企画もあれこれ展開中。助産師の妻と、三人の子どもたちとの五人暮らし。日々の育児が、絵の活動にとでも影響しています。趣味はくす玉を作ること、くす玉を開くこと。

武政朋子「たけまさ・とみこ」

一九八四年埼玉県生まれ。二〇〇七年武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒業。主な個展：「6.37」ナリワイ・東京都、二〇〇八年）、「shadow play」（秋山画廊・東京、二〇〇九年）「Her eyes can't catch anything」（秋山画廊・東京、二〇一一年）「Anonymous days」（秋山画廊・東京、二〇一四年）「It's more guesswork」（mabushi works・群馬、

浅井裕介「あさい・ゆうすけ*」

一九八一年東京生まれ個人のアトリエでの絵画制作と並行して、マスキングテープに耐水性マーカーで植物を描く「マスキングプラント」また土と水を使用し、動物や植物を壁面いっばいに描く「泥絵」、アスファルトの道路で使用される白線素材を地面に焼き付けて制作する「植物になった白線」シリーズなど、条件の異なったいかなる場所においても奔放に作品を展開する。近年は立て続けに一〇メートルをゆうに超える泥絵の大作を発表して注目を集め国内外のアートプロジェクトに多数参加している。

岩井優「いわい・まさる」

一九七五年京都府生まれ。東京芸術大学美術研究科後期博士課程修了博士（美術）。洗浄・浄化をテーマに映像作品からインスタレーション、ドローイングまで多岐にわたるメディアウムを用いた作品を発表。主な展覧会に、「reborn art festival 2017」、「通りすぎたところ、通りすぎたもの」（二〇一五年）、ホイットニー美術館 SP プログラム「メンテナンス・リクワイアード」（二〇一三年）、「ニードレス・クリンアップ」（二〇一三年）

岩井成昭「いわい・しげあき」

東京のど真ん中千代田区に生まれ、映画監督志望としてまずは絵画を志すが、芸大でバンド活動に明け暮れ挫折。気を取り直し一九九〇年代から特定地域の調査を基に複合的メディアによる視覚表現を展開。二〇〇〇年代にはハバナ・ビエンナーレ、横浜トリエンナーレ等、国内外の国際展に多数参加。近年は、移民受入による地域の多文化化をテーマに欧州、豪州、東南アジアの調査を踏まえ二〇一一年から「イミグレーション ミュージアム東京・パイロットプロジェクト」を始動させ現在に至る。その一方で、二〇一三年より課題先進地域・秋田に新設された美大を拠点に「辺境芸術」を標榜し発信を続ける。著書に『路傍の光斑——小津安二郎の時代と現代』等、共著に『辺境芸術最前線』。

小金井市芸術文化振興計画事業にかかる 補助・助成・共催事業委託一覧

年度	名称	補助・助成・共催・事業委託元
平成二二年度	文化芸術による創造のまち支援事業 東京都ふるさと雇用再生特別基金事業	文化庁 東京都産業労働局
平成二二年度	小金井市芸術文化振興計画推進事業共同研究委託 東京都ふるさと雇用再生特別基金事業	小金井市 東京都産業労働局
平成二二年度	東京都市町村総合交付金まちづくり振興割地域特選事業枠 東京都市町村総合交付金まちづくり振興割地域特選事業枠（一押し）	東京都総務局行政部 東京都総務局行政部
平成二四年度	東京アートポイント計画事業共催 小金井市芸術文化振興計画推進事業運営委託 震災等緊急雇用対応事業	公益財団法人東京都歴史文化財団 小金井市 東京都産業労働局
平成二五年度	東京アートポイント計画事業共催 小金井市芸術文化振興計画推進事業運営委託 起業支援型地域雇用創造事業	公益財団法人東京都歴史文化財団 小金井市 東京都産業労働局
平成二六年度	東京アートポイント計画事業共催 小金井市芸術文化振興計画推進事業運営委託 緊急雇用創出事業地域人づくり事業（如遇改善）	公益財団法人東京都歴史文化財団 小金井市 東京都産業労働局
平成二七年度	東京アートポイント計画事業共催 小金井市芸術文化振興計画推進事業運営委託 文化芸術振興費補助金（文化芸術による地域活性化・国際発信推進事業） 地域の文化・芸術活動助成事業創造プログラム（一般分）	公益財団法人東京都歴史文化財団 小金井市 文化庁 一般財団法人地域創造
平成二八年度	東京アートポイント計画事業共催 小金井市芸術文化振興計画推進事業運営委託 文化芸術振興費補助金（文化芸術による地域活性化・国際発信推進事業） 地域の文化・芸術活動助成事業創造プログラム（一般分）	公益財団法人東京都歴史文化財団 小金井市 文化庁 一般財団法人地域創造
平成二九年度	東京アートポイント計画事業共催 小金井市芸術文化振興計画推進事業運営委託 文化芸術振興費補助金（文化芸術創造活用プラットフォーム形成事業） 地域の文化・芸術活動助成事業創造プログラム（一般分）	公益財団法人東京都歴史文化財団 小金井市 文化庁 一般財団法人地域創造

やってみる、
たちどまる、
そしてまたはじめる

小金井アートフル・アクション！
（小金井市芸術文化振興計画推進事業）
2009-2017活動記録

制作 特定非営利活動法人アートフル・アクション

発行 二〇一八年六月一五日
発行者 アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）
東京都千代田区九段北四丁目一―二八
九段ファーストプレイス八階
電話：03-6256-8435
FAX：03-6256-8829
www.artscouncil-tokyo.jp

図書設計 松田洋一

本書は無断複写、複製、転載を禁じます。
©2018 npo artfullaction

本書に関するお問い合わせ先
特定非営利活動法人アートフル・アクション
東京都小金井市本町六一―五―三シャトー小金井二階
電話：050-3627-9531
mail@artfullaction.net
http://artfullaction.net/

■特定非営利活動法人アートフル・アクションとは
アートと出会った人が自分自身の新しい可能性を発見し、より豊かな生き方を獲得していくきっかけをつくることを目指し、市民、自治体、学校、他のNPO、企業などと連携しながら地域におけるアートの可能性を追求しています。二〇一一年発足。

■小金井アートフル・アクション！
（小金井市芸術文化振興計画推進事業）とは
「誰もが芸術文化を楽しめるまち（芸術文化の振興で人とまちを豊かに）」という理念の実現を目指し、二〇〇九年四月から市内各所で事業を進めています。二〇一一年度から、東京都、小金井市、アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）、NPO法人アートフル・アクションの四者共催により「東京アートポイント計画」の一環として実施されています。

《小金井市芸術文化振興計画についてのお問い合わせ》
小金井市コミュニティ文化課文化推進係 電話：042-387-9923
主催：東京都―小金井市―アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）―NPO法人アートフル・アクション

